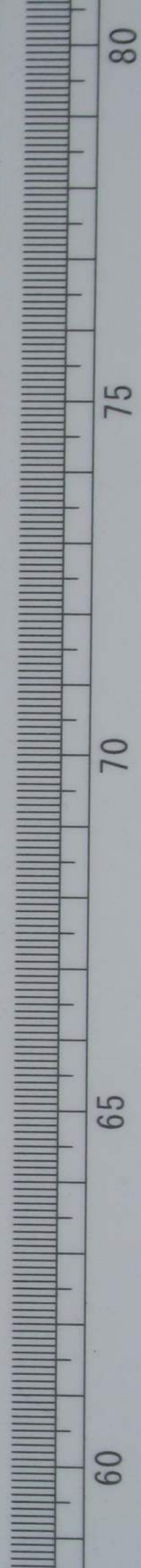
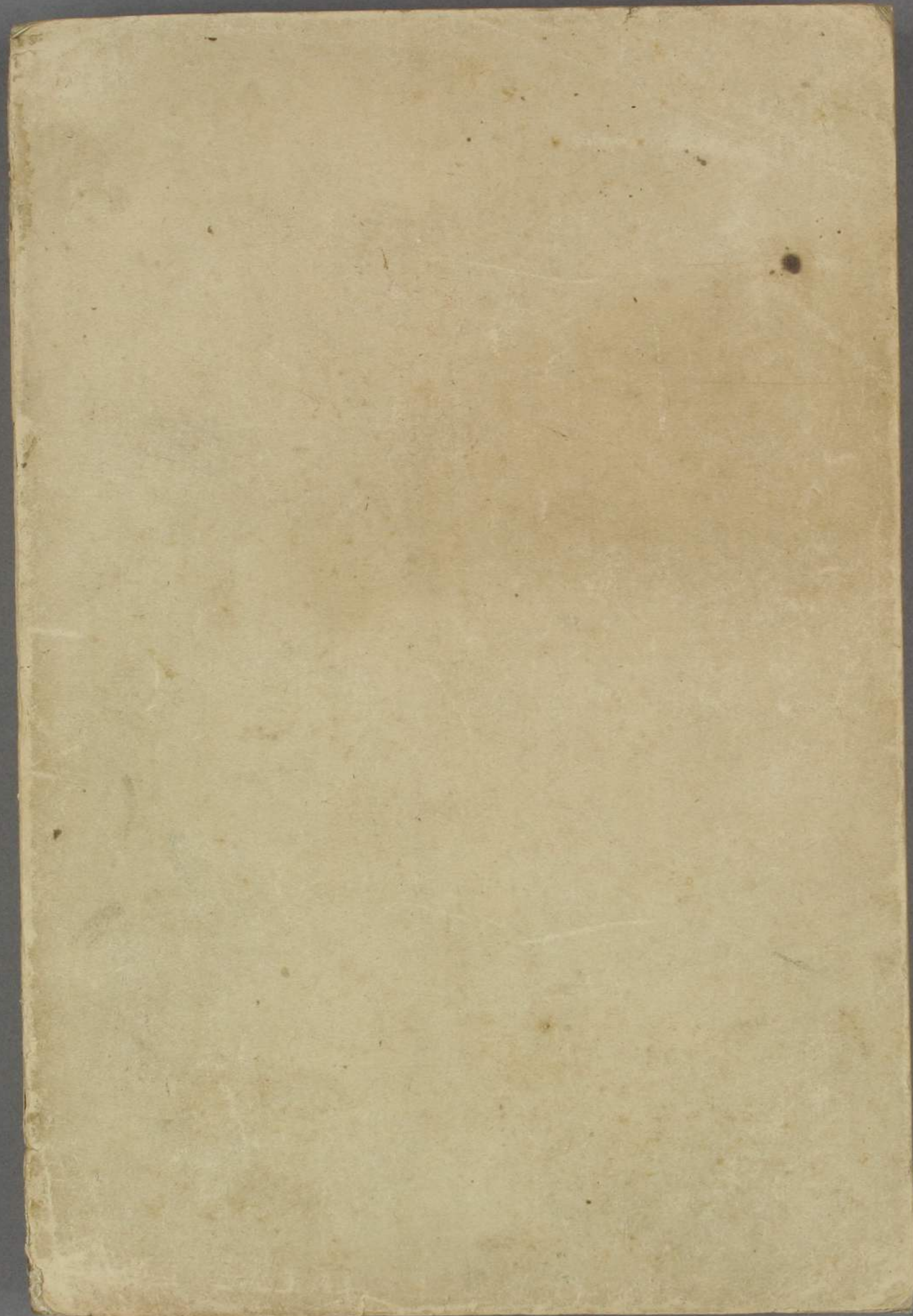


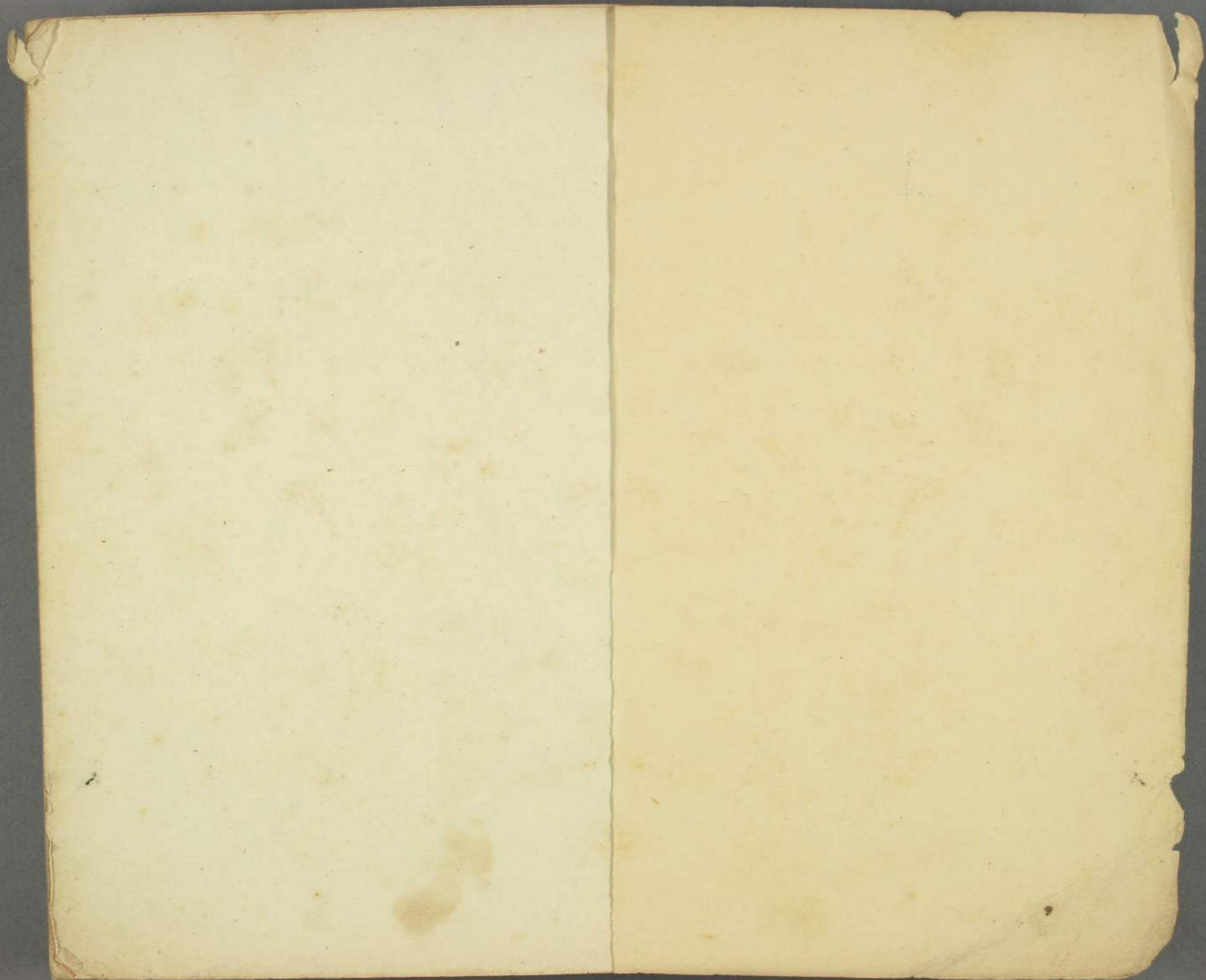


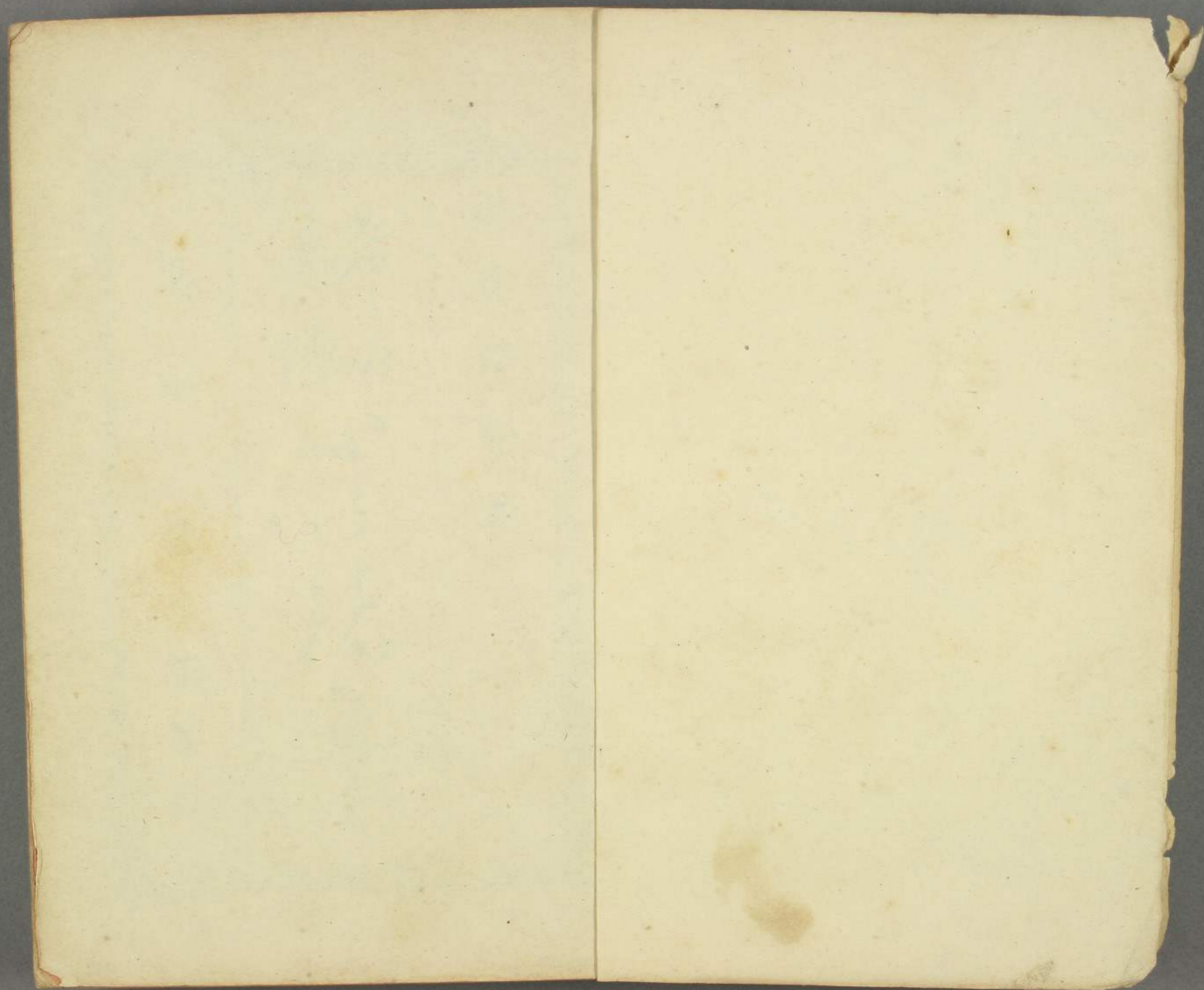
朱希
詩伯
心法集











湯谷紫苑著

希伯來詩心法

東京 教文館發行

志心のりなほ

しよのほ

しよ (あ) 一

ことなきわがれ

あはれ

あはれ

序

靈性の銀線、神の恩威に接觸して、至清至高の歡喜を生じ、發して絶妙の歌となれるものは希伯來詩なり。神と人との間に、疑ひの雲霧朦々として、望み失せ、膽落ち、宛ら生きて奈落の底に沈めるを覺ゆるが如き悲況を叙し、其の消息を洩らすものも、希伯來詩なり。靈性の音調、一つとして詩篇に備はらざるものなく、信仰の悲喜哀歡、遺す所なく、皆其の間に著はる。神人愛慕交感するの微を穿ち、罪を悔い、惡を慚つるの道念を發し、弱を憫れみ、苦を救ふの人道を獎勵し、義勇奉公の精神を鼓舞す

序

るもの、天下また希伯來詩に若くものあらんや。心を養ひ信を増すの書、アウガスチンの如き、トマス、アケムピスの如き。又パスカルの如きものありといへども、其の圓滿玲瓏、最も完備せるものに至りては、ひとり希伯來詩あるのみ。古へより基督教徒が、其の公私の禮拜に、之を藉りて其の所懐を歌ひ、其の信念を誘掖せるもの、また宜なりと謂ふべし。社友湯谷紫苑は、日本基督教徒の詩人なり。頃日希伯來詩五十二篇を撰み、之を釋して、信仰的生活の糧食に充てんと欲す。此れ詩人詩人を解釋せるものに非ずや。詩篇は今よりのち一層温かなる關

二

係を以て、日本基督教徒の靈性に繋がるべし。日夕此心の緒琴を撫して、神に接し徳に進むの益頗る大なるものあらん。

明治二十九年七月中浣

植村正久

緒言

一余が本書を起稿せしは、一昨年仲春の頃なりき。五月
圖らずも、阿母の喪に走りて、但馬出石の里に歸り、五
月雨のふるき軒端に垂れこめつ、血に啼くてふ山時
鳥を、唯わび人の友として、入佐山の麓に去ばし日を
過し、が夏のなかば、都に歸り來て、いとまゝに再
びさきの稿をつぎぬ。年あけて此わざのやゝはてし
ころ、初めてのみどり兒は、産れ來し間もなく、二月ば
かりありて、五月の朔日天に召されぬ。今や本書を梓
にのほさんとするにあたり、つぎのみどり兒は、呱呱

として側にあり。顧れば二とせの間、人事の茫々として常なきは、宛かも走馬燈にことならず。然れども此間猶ほつねに余が爲めに、雲の柱ども、火の柱どもなりしものは、乃ち此の詩篇なりき。これより後も猶ほ志かあらん。されば今之れを公にするも、徒らに浮きたる心にはあらずかし。

一 詩百五十篇、元是れ悉く金玉、さるをえり出て、五十
二 篇とせしものは、年の五十二週にあて、片山里や、
離れ小島の友なき人々の、毎週道にすゝまんに、便り
せんとてなり。

一 本書の據りどころとせし書ども、五六あり。志かして
註釋はむねとして、デーリッ、チユ、ピローン二氏に據
れり。蓋し斬新にして確實、公平にして敬虔なりと思
へばなり。

一 参考書の爲めには、植村正久、久保田富次郎二氏の好
意を深く謝する所なかるべからず。茲に之を特筆す。

七月一日今日なん梅雨は霽るといふに、

まことにはれたりければ、思ふ心を 紫苑

五月雨はまことにはれて大そらの

みどりはふかくましてけるかな

希伯來詩心の緒琴
上卷目錄

希伯來詩の由來	一頁
詩篇の編輯	一三
詩篇の名稱	一七
詩篇の端書	一八
詩篇の翻譯	一八
詩篇の價值	二〇
樂器及音樂	二五
第一篇	二七
第二篇	三七
第三篇	四六
目錄	一

第四篇	五五
第六篇	六四
第八篇	七五
第九篇	八四
第十四篇	九七
第十五篇	一〇七
第十六篇	一一六
第十九篇	一二八
第廿三篇	一四四
第廿四篇	一五三
第廿七篇	一六三
第三十三篇	一七六

第三十七篇	一八五
第三十九篇	二〇〇
第四十二篇	二一三
第四十五篇	二二七
第四十六篇	二四二
第四十九篇	二五五

下卷目錄

第五十一篇	一頁
第五十六篇	三〇
第六十二篇	四一
第六十五篇	四九
第八十二篇	六一

第八十四篇	七一
第九十篇	八五
第九十一篇	一〇一
第九十三篇	一一〇
第九十六篇	一一五
第一百四篇	一二四
第一百八篇	一四二
第一百十篇	一四九
第一百十五篇	一五九
第一百十六篇	一六五
第一百十九篇	一七三
同	一七六
サイン	

同	一八〇
同	一八四
同	一八八
第一百廿一篇	一九六
第一百廿二篇	二〇三
第一百廿五篇	二〇九
第一百廿七篇	二一四
第一百廿八篇	二一九
第一百三十三篇	二二八
第一百三十七篇	二三九
第一百三十九篇	二五一
第一百四十四篇	二六〇
第一百四十七篇	

第四百四十八篇……………二六九
 第四百四十九篇……………二七六

目録

全能の神	第三百三十三篇	第三百三十九篇
全知の神	第三百三十九篇	
神の徧在	第三百三十九篇	
神の審判	第八十二篇	第九十六篇
神の守護	第十六篇	第一百廿一篇
神の能力	第四百四十四篇	
神の稜威	第九十三篇	第九十六篇
神の王國	第九十六篇	
神の言葉	第一百十九篇	同
神の律法	第一百十九篇	ハ
神は避所	第四十六篇	第九十一篇

神は牧者	第廿三篇	
クリスマス	第十九篇	
王なる基督	第一百十篇	
讚美	第九十六篇	
	第百八篇	第百四十七篇
感謝	第百四十九篇	第百四十八篇
	第百四十七篇	
悔改	第五十一篇	
榮を神に歸す	第百十五篇	
聖徒の資格	第十五篇	
神を慕ふ	第四十二篇	第八十四篇
聖所を慕ふ	第廿七篇	第六十五篇
聖會の歡喜	第百廿二篇	

義者と不義者	第一篇	
正邪の應報	第三十七篇	
義者の慰藉	第四十九篇	
信仰の勝利	第九篇	第廿七篇
	第六十三篇	第百八篇
信任	第三十七篇	第五十六篇
	第廿七篇	第六十二篇
迫害と確信	第六十二篇	第八十四篇
祈福	第百四十四篇	
求助	第六篇	第六十二篇
哀歌	第三十九篇	
人生嘆	第三十九篇	第九十篇

目錄

富恃むに足らず	第四十九篇	
嬰兒の讚美	第八篇	第一百四篇
青年	第一百十九篇	ベテ
家庭	第一百廿七篇	第一百廿八篇
婚姻	第一百廿八篇	
王者の大婚	第四十五篇	
挽歌	第九十篇	第一百十六篇
友愛	第一百三十三篇	第一百四十七篇
懷舊	第一百三十七篇	
流離	第一百三十七篇	
旅行	第一百十九篇	ザイン
國家	第一百廿七篇	

愛國	第一百三十七篇	第一百四十九篇
收穫の歌	第六十五篇	
自然界の讚美	第八篇	第一百四篇
自然界の讚美	第一百四十八篇	第一百四十七篇
自然界の光榮	第十九篇	
社會の腐敗	第十四篇	
神殿の移轉	第十五篇	第廿四篇
疫病	第九十一篇	
朝	第三篇	
夕	第四篇	

希伯來詩心の緒琴(上卷)

希伯來詠詩の由來

朱子

朱熹曰く、人生れて而して靜かなるは天の性也。物に感じて而して動くは性の欲也。夫れ既に欲あり矣、則ち思ひ無き能はず。既に思ひ有り矣、則ち言無き能はず。既に言有り矣、則ち言の盡す能はざる所にして而して咨嗟咏嘆の餘に發する者、必ず自然の音響節奏有り、而して止む能はず焉。此れ詩の以て作る所也。

貫之

貫之曰く、大和歌は一つ心をたねとして、萬の言の葉とぞなれりける。世の中に在る人事わざまげきものなれば、心に思ふ事を見るもの、きく物につけて言ひ出だせるなり。花になく鶯、水にすむかはづの聲をきけば、生きどしいける者、いづれか歌をよまざりける力をもいれずして天地

希伯來詠詩の由來

を動かし、めに見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、をどこ女の中をも和
 げ、たけきもののふの心をも慰むるは歌也。此の歌天地のひらけはじま
 りける時より出で來にけり。
 頓阿曰く、歌は人物未だ定まらざる先きより其の旨存せりと雖も、二儀
 相分れ六義復た起れり。情中に動きて言外に現はる。然れば花に鳴く鶯、
 水に棲む蛙の聲までも歌謠にあらざといふとなし。物に觸れて性情を
 吟咏する外に別に事ある可らず。

エメルソ曰く、人各皆自然の此等の魔術を感受する點に於ては、詩人
 なりと云ふ可し。蓋し萬人皆な夫の萬有は讚美なりとの思想を有すれ
 ば也。余は發見す、夫の迷ひなる者は、乃ち表號に永住する者なるを誰か
 自然を愛する者ぞ、誰か之を愛せざる者ぞ。是れ唯だ詩人なるか、將た自
 然と共に棲息する閑散優遊なる者、教化ある者のみなるか。否、獵夫も野

人も、馬丁も、屠者も、皆な悉く然らざるはなし。然りと雖も、彼等は其の生
 涯の選擇に於て、其の感情に説明するも、唯だ其の言詞の選擇に於てせ
 ざる耳。

カーライル曰く、詩の脈管は萬人の心に存す。又曰く、吾人若し其れ能く
 詩を讀めば、則ち凡て詩人なり。ダンテの地獄に寒戦する想像は、即ちダ
 ンテ自身より、其の度に於ては薄弱なりとするも、猶ほ同一なる才能
 にはあらざるなきか。

希伯來の詩人は歌つて曰く、我が心は美はしき事にてあふる。我は王の
 爲めに詠みたるものを言ひ出でん。我が舌は速けく寫字人の筆なり。
 夫れ源泉あり、混々として流れざるを得ず。香膏あり、芳芬として馨しか
 らざるを得ず。思情あり、諄々として發せざるを得ず。蓋し勢の自然なり。
 殊に希伯來人が俯仰此の天地を觀るや、大に他國民に等しからざる者

あり彼等の歌ふや固より天地の美にあらざるは無し然れども希伯來人は美の美たるが爲めに音だに其の美を歌ふには非る也故に其の自然を矚目して之を歌ふや音だに其性質を描寫するに止らず常に其の間に無限永久なる大能者の性質の顯現せることを歌ふなり夫れ此自然は萬物を以て萬物を満たしむる者の満つる所なり彼の榮光の演技場なり既に此のインスピレーションあり而して此天地を歌ふ必ずや其能力能く天地を撼搖する者なくして可ならんや此の心絃は彈發せられて彼の天地無絃の琴瑟と相觸れ相和し鏗々たり琅々たり鳳凰爲めに舞ひ魚鼈爲めに躍り山川や江海や日月や星辰や萬籟一時に和し一大唱歌者となり一大舞者となる是に於てか肅然として襟を正し怡然として晏天を頌歌す是れ實に希伯來詩人の特質にあらざるや抑もモーセの時代は乃ち希伯來人が國民として始めて世に誕生せし

時にして亦國民的叙情詩の始めて世に誕生せし時也是より以前は逸として知る可らず當時イスラエルの子孫モーセに従つて隸屬せし埃及の地を出づるやパロ王は乃ち之を追はしめて紅海の濱に及べり然れどもイスラエルの子孫は幸に其危禍より免かれて安然紅海を渡るを得たり是に於いて乃ち彼等はエホバを讃頌し且つ其洪恩の優渥なるを謝せり歌は乃ち載せて出埃及記第十五章に在り是れ乃ち希伯來詩の最古なる者也是の時アロンの子孫ミリアム、箏を手に操り婦等皆な彼に従ひて出で箏をとり且つ踊れり按ずるに詩歌音樂等は全く埃及文明の餘澤を蒙りたる者にして樂器の如きも亦た共に提携して旅程に上りしと明か也今此の反響として左の諸所を對照せよ乃ち詩百十八篇二と十四廿四篇三と八十四篇四と百三十六篇十五七十八篇八と十三七十七篇十一と十四八十六篇八八十九篇七十八篇

十三、十七、若し其れ之に加ふるに九十篇及申命記三十二章を以てせば
 則ち希伯來詩歌、哀歌及び豫言的教訓の典型を知る可し。又民數記廿一
 章十四節に『エホバの戦争の記』なる者あり、恐らくは短歌の類なる可
 し。又同章十六節以下に水の歌あり。想ふに希伯來の處女等が旭日漸く
 東天に紅を吐き、白露團々として珠璣の如く、芳草に滴るの時、新月正さ
 に西の山の端に現はれ、羝羊遅々として相伴ひ、角笛の許に集まるの際、
 此の歌を謠歌ひつゝ、水瓶を頭に戴きて、井邊に群がり來れる様、鬚宛
 然として、目前に見ゆるが如し。蓋し是等の詩歌、或は形態に於いては、尙
 ほ未だ圓滿ならざる處あらん、然れども夫のデボラが勝利の歌、士師記
 五章の如きビンダル(ギリシヤ、ピラシヤの人にして紀元前五百二十二
 年生、四百四十一年死、ドリツク樂詩人中最も高貴なりといふ)に先だつ
 八世紀、而かも是に陵駕せりと云ふは如何に驚嘆す可きにあらずや。此

くの如く希伯來の詩歌が、古昔より發達完成せるは、實に意想外の感な
 くんばあらず。然れども怪むを休めよ、彼等は單に詩想のみならず、其の
 歴史全體すら實に奇蹟的に發育せし者なれば也。殊に記應せよ、舊約中
 に在りて大唱歌者なるハンナは、夫の希伯來の最も卓越堪能なる唱歌
 者たる耳ならず、或る意味に於いては、世界に獨歩せる大詩人にして、其
 の舌は實に主の言なりし其者を、王者として其頭に膏を沃ぎし者の慈
 母なりしを、若し其の關係の皮肉を刮き來れば、則ち妙趣の存するや、知
 る可き也。

大王ダビデの代に至りて神聖なる叙情詩は、各般の事物と共に其の黃
 金時代となれり。而して其の基礎を安置せし者は、豫言者サムエルなる
 を忘却す可からず。彼は改革者也、百事を革新すると共に、豫言者の學校
 を設立したりと見ゆ。撒母耳前書十章五、十九章十九以下參照。而して豫

言の天恵を啓發警醒せんが爲めに、音樂及び唱歌をも教授せしなり。夫れダビデは音樂者として、又詩人として世に生れたり。少年牧者として其故郷ベツレヘムに在るや、天資に巧妙なる琴を操り、其の宗教的情感と相融和し、ヤハの靈は天より降下して其の頭の上にとまりぬ。撒母耳書に據りて彼の品性を觀察し來れば、則ち忠僕を殺戮し、其の妻を奪ひ、實に言ふに忍びざる罪人なり。然れども彼は亦た其罪惡を心の底より全く懺悔し、痛く天に向つて其赦免を切望せり。或人曰く、彼が大人たる所以の者は、唯だ能く其の罪惡を悔改せしに在りと實に然り、眞に自ら其罪惡と戦ひ、之に勝つ者は君子也。豪傑也。吾人がダビデに許す所亦此に在り。故に彼が一生を觀察するに、半面は悲歌なり、涙なり、他の半面は讚美なり、感謝なり、喜びの杯なり、殊に其の膏を沃がれて王となるや、よく百般の患難を排して、其生涯を榮光の地に置けり。是に於てか神

は彼を以て約束の王の基礎と爲し、後に來る可き基督の豫表となし給へり。亦た人生の多福光榮にあらずとせんや、彼は斯く大能者の攝理の下に在り、其の言ふ所常に豫言的なる、固より當然のことなり。其の自ら愛翫せし琴をして、サウル王の前より逃れ去りし時の伴侶として、又大王の最愛なる侍臣として、夙夜其側に侍せしめしのみならず、利未人の四分一なる四千人を指定して、シオンの山及びモイセの造りしギベオン、の兩神殿に分派し、唱歌者、奏樂者となせり。歴代志略上廿五章、同十五章參照。又自ら案出せし樂器をも増加せり。歴代志略上廿三章、五、尼希米

亞十二章三十六。其子ソロモン王に至りて詩篇とす可き者は衰頽せり。彼が著作は詩人の本色なる直覺よりも、寧ろ思想的なり。彼は詩人と稱せんよりは、寧ろ哲學者也。故に國民的中心は移動せり。其治世に至りて箴言の如き、又

十
 戯曲の標本の如き者起り來れり而して彼自ら其の堪能者なりき。彼が作れる詩歌凡そ千五百首ありき(列王記上四章卅二)。然れども詩篇の卷に入りし者は唯だ第七十篇と第百二十七篇の二首に過ぎざる也。是れ乃ち恐らくは香柏樹の如き、ヒソプの如き其の歌ふ所は神の國にあらざして、寧ろ地上の物に在りし故なるなからん乎。斯くて王宮殿裏ダビデが琴の反響を再び喚起す可き手はあらざりき。
 然れども一度投げられたる天火、豈徒に再び燃え上らずして止まんや。十六世紀の宗教改革は獨逸の讚美を産み出だし、三十年戦争の若し是れあらざりしならば、恐らくは一のバウル、ゲルハルトも有らざりしならん。之に新生命を與へしが如く、ダビデ時代に産れし聖詩は、ヨシヤバテ王(紀元前凡そ九百年)及びヒゼキヤ王(紀元前凡そ七百二十年)の代に至りて復活せり。夫れ外患なければ則國危し、然れども邦若し事な

れば、則ち敵愾の精神鬱乎として興り、全國の士氣凜然として奮ふは、自然の勢也。ヨシヤバテの時に方りてモアブ、アンモン、マオニ等來り攻む、(歴代志畧下廿章)又ヒゼキヤの時にはアツスリアの王セナケリア來り戰へり(歴代志畧下三十二章)是の時豫言者イザアあり、神の命を奉じ、ヒゼキヤを助く。當時愛國の精神振作すると共に敬虔の信念勃興し、從つて聖詩復興の時となれり。又ヒゼキヤは(歴代志畧下十七章七)九箴言廿五章一)ダビデ及びアサフの詩を編纂し、且つ音樂をも再興せり(歴代志畧下廿九章廿五)縱令ひ其の作は擬古的なりしかども、彼自ら亦た詩人なりき。前二王の時代よりアサフ、コラの如き少からざる詩有るに至れり。然れども枕中春夢不多時一旦復活せる聖詩も再び昏睡し、豫言も遂に啞となれり。後豫言者其の喇叭を高く吹き上げて、約拿二章以賽亞七章、哈巴谷三章の如きあれども、創作といふ可らず、眞の創作は放逐時

著作時代の異論

代の後に至る迄之れあらざりき。此の時嘗つてバビロンの河の畔の柳梢にかけられたりし琴も再び喜悅の笑ひを放ち、感謝の歌も高く響くに至れり、百二篇の如きは正しく俘虜七十年の終りの作にして、七十四篇七十九篇の如きは放逐時代のものなりと見ゆ。近者ヒッチヒは後世マッカビイス時代の著作多しとなし、一篇二篇の如き其の著者はマッカビイスの皇子アレキサンドル、ヤンテウスなりといふ。また七十三篇以下には則ち「マッカビイス」以前の著作あらずとす。レンゲルケイ及びテルスハウゼンは之に左袒し、且つ此二人はヨハテ、ヒルカヌイスの世（紀元前百三十五年―百七年）を以て詩篇著作の最終の時代となし、現今の詩篇は當時編成せられしなりと云ふ。

然れども亦た一方にはヘンクステンベルヒ、ヘーフエルニツク、カイル、ゲゼニウス、ハッスレル、エワルド、ベッチエル、ディルマン諸家の反對あり。而して

當時は神性よりも寧ろ人性にして、神政的に國民主義にあらざりて、寧ろ國民的に愛國主義なりき。但以理の書は其の當時を豫言的に代表し、而して世の神に踵を上ぐる者に對して争ふ所の神の民の事を表彰せり。

第九十篇

九十篇は曠野四十年旅行後の作なる可し。作者は身既に聖約の地に接近しつゝ、も之に入るとを得ず。然れども之が爲めに怨嗟するの心なし、其の二節の「永遠より永遠まで爾は神也」とは實に其の雲の柱、火の柱として彼を夙夜指南せし所の者たりし也。

詩篇の編輯

希伯來詩の分類

今日吾人の有する詩篇は希伯來の原書にて、五部に分たる、乃ち（第一）一

詩篇の編輯

篇四十一篇(第二)四十二篇(第三)七十三篇(第四)八十九篇(第五)九十篇(第六)百六(第七)百七篇(第八)百五十篇(第九)是れ也(第十)第一部より四部は皆な終結にアトメンを反覆せり是れ乃ち第二神殿(バビロン)俘虜より救免せられて後神殿を改築せりの禮拜式の語に肖たり尼希米亞八章六を参照す可し然れども普通の説に據れば第一部は之れを編纂して神殿の集會に用ゐしと見ゆ第二部は早くともヨシヤバテ王の時代なる可しといふ當時ソロモンの箴言も亦編纂せられたる可し然れども本部はヒゼキア王の時代と想考す可き憑證あり乃ち此の詩の或る者はヨシヤバテ對隣國民よりは寧ろヒゼキアのアッスリアに勝ちし時の如きのみならず箴言二十五章一に據ればソロモン第二集の箴言なる廿五章以下は彼に屬せる人々之を編輯せりと見ゆ又歴代志略下廿九章三十を見れば又「ヒゼキア王及び牧伯等利未人に命じダビデと先見者アサ

アの詞を以てエホバを讚美せしむと有り此のダビデ及びアサの詩は第三部に多し是に由つて之を觀れば則ち第二部第三部を第二集としてソロモンの第一集と合せしと疑ふ可らずヒゼキアはソロモンを去ると凡そ三百年也又第二部の終篇なる七十二篇の二十節に「エッサイの子ダビデの祈りはをはりぬ」とあり是は疑ひもなく其次集に先ちたる最舊の編纂に際して記入せし者也
エヅラ及び子ヘミア紀元前凡そ四百四十年(は七十年間)バビロンの俘虜となりし間及び其後に成りし詩を編纂し又古詩をも拾遺せり乃ち第三集にして前に掲げし第四部及び第五部是也而して開卷第一にモ一七の詩なる第九十篇を選びしは神の人の當年を追懐し彼の如く永遠無窮不變至愛なる大能者の救済を求めんが爲めなる可し抑もダビデの詩は最初の第一二兩集に五十六詩あり最後の第三集に至り更に

十七詩を増加せり。是等恐らくは悉くダビデの自作にはあらざる可し、然れども其の思想と境遇は相似たり。是等古詩の大數は放逐前歴代史的又豫言的の性質を帶べり。第五部百四十二篇の如き、ダビデの詩に歴史的注意の端書あるは、蓋し此の故也。而して全部に於ては、井然秩序あり。吾人はエワルドと共に言はん、詩篇一篇より十篇迄は乃ちダビデの正確なる自作にして、古詩也。十三篇より八十九篇迄は中世の作にして、九十篇より百五十篇迄は後世及び最後世の者大數を占む。アイヒホルン曰く、概言せばダビデの時代、ヒゼキアの時代及びバビロンより歸國の時代と大別するを得べし。然れども精細に觀來れば、則ち夫の以賽亞、耶利米、以西結、諸豫言書の如く錯雜せるは明白也。

詩篇の名稱

希伯來の聖書にては詩篇を稱して讚美又讚美歌と云ふ。然れども本書中讚美の歌と端書せる者は唯一の百四十五篇ある而已。其の他過半は強言せば讚美歌にあらざして、寧ろ其の罪惡より救はれんとを祈る者、或は教訓の歌、或は悲歌也。然りと雖も、造次頓沛常に事々物々につきて、榮光を神に歸する點より觀察し來れば、則ち讚美歌と命名するも決して不當にはならざる也。八十六篇、九十篇、百二篇及び百四十二篇の如きは正しく祈禱也。然れども若し祈禱を以て、心情の眼を神に向けたるの義なりとせば、則ち每篇悉く祈禱なりといふ可し。何事をも思ひ煩らふ勿れ、唯毎事に祈禱をし、懇求をし、且つ感謝して己が求むる所を神に告げよ。腓立比四章六又撒母耳前書二章ハンナの禱りを參照す可し。

詩篇の端書

詩篇の端書は凡そ三種の性質あり即ち(一)音楽及び禮拜式の性質を記する者(二)著作者の名を記する者(三)著作せられたる特別の事情を記する者は也然して或は單獨に或は二者を併記する者あり畫一に論ず可らず亦今茲に之を詳記するを要せざる可し。

詩篇の翻譯

世間未だ荷馬の詩を知らざるの人種あらん未だ釋氏の書を緇かざるの種族あらん然りと雖も今や太陽の照らす所雨露の潤ほす所日々熱天焦地の間に在る者も四時氷山凍海の間に在る者も此聖書を知らざ

詩篇の普

希伯來詩
翻譯の種

るの民種恐らくは之れ無らん現在聖書は三百種の方言語に翻譯せられたり之と同時に此の詩篇も亦た彼等世界萬民の間に紹介せられたり。
古代に在りて其有名なるを略言せば紀元前二世紀に七十人譯なる者あり埃及のアレキサンドリアにて希臘語に翻譯せし者也カルデア譯ありスリア譯あり(スリア教會最古の者にして紀元二世紀より下らず)新希臘譯あり(二世紀の者にして後六七回も之を反覆翻譯せり)アキイラ譯ありテチドチヲン譯ありシンマクス譯ありルシアン譯あり又ゼロームの羅甸譯あり正確なりとの評あり又希臘譯の中にチリヂンありカイザリアのユーセビウスありヘラクリアのテチドレーありスキトポリスのアステリウスありラチデキアのアポリナリスありアレキサンドリアのディデムスあり又羅甸譯の中にもポイクチールスのヒ

詩篇の端書 詩篇の翻譯

ラリあり、ヴェルセリーのユーセピウスあり、アムブロイスあり、殆ど枚舉に勝ゆ可らず。

詩篇の價值

詩篇の中には基督教徒の希望する所、懺悔する所、恐怖する所、悲哀する所、喜悅する所、感謝する所、百般の情感を以て充滿せり。一言以て之を蔽へば、則ち人の靈魂と神との相交通する者にして、苟も敬神畏天の徒、其猶太人たるも、クリスチアンたるも、等しく彼等の祈禱文と稱するも可なり。而して又吾人は何を爲す可き歟、又如何なる者たる可き歟を教ふるよりは、寧ろ祈禱によりて吾人は何を爲す可き歟、又如何なる者たる可き歟を教ふる者也。

祈禱文

ルイテルの評

ルイテル之を論じて曰く「是れ即ち詩篇の大に他書に卓然として超越する所也。他書は聖徒の事業に關して實に多く語れども、彼等の言詞に至りては寥々として甚だ少し、是れ亦た詩篇の優る所以也。而して聖徒の事業のみならず、又其の神に語り且つ祈りし所、及び今尙ほ語り且つ祈る所の言葉を語る者にして、其餘香は馥郁として擲す可き也。」
ルイテル復た曰く、人心は宛かも猶ほ悲哀と歡喜の風に由りて、渺茫たる蒼海に追ひ遣らるゝ舟の如し。而して夫の詩篇は何者ぞ、是れ唯だ是等の風によりて追はるゝ人の眞面目なる言語に外ならざる也。讚美と感謝の詩篇に勝りて、尙ほ更に歡喜の美しき言葉何處にありや。彼處に爾は凡ての聖徒の心の裏を見ること、猶ほ美しくして、樂しき花園の如く、又天其の者の如し、而して爾は神及び其の仁慈に發生する所の福にして、且つ樂しき思想、即ち心より喜ばしき百花の間に逍遙する也。而して

詩篇の價值

メラノク
トンの評

て復た懺悔の詩篇に於けるより、更に深奥にして、更に感動すべき悲哀の言葉を爾は何處に於て發見するや。彼處に爾は復た死及び陰府其者に於けるが如く、凡ての聖徒の心の裏を観察する也。神若し其の顔を蔽ひ玉は、則ち其の處は如何に暗黒して且つ悒鬱しきぞ。而して彼等若し恐怖と希望とを語らば、則ち一の畫工も着色し得ざる、又一のシセロも黙々一語なき程の言葉に於てするなり。

メラノク トン(ルーテル)と共に宗教改革に従事せし人曰く、本書は全世界中最も純美なる者なり。

カルヴァ
イの評

カルヴァイン(一千五百九年佛蘭西に生る改革時代の神學者曰く、吾が物せし本書の註解を讀むこと、若し余が其の文中にて得たるが如く、神の教會に等しき福恵を齎らすとせば、余は其の著作を悔いざるべきなり。余は實に本書を稱して、心靈各部の解剖と名づくべし、蓋は何人たりと

サルマシ
アスの評

も此の龜鑑に映射せざる所の靈の舉動を感じ得ざればなり。人々の心の爲めに撼揺せらるゝ所の諸般の悲哀、煩悶、恐怖、疑惑、希望、苦痛、混亂等、聖靈によりて是處に眞正の生命にまで説明せられたり。

ミルトンの大反對家にして、當時の大學者の一人なりし、サルマシアス其の死に臨みて云へらく、余は時の世界を失へり、若し尙ほ一年を有せば、則ち余はダビデの詩篇と、パウロの書簡を閱讀せんがために之を費すべし。

アムプロ
イスの評

アムプロイスは四世紀ミランの監督にして、有名の人なり、ダビデの詩十二篇を摘抜して、是れが解釋を加ふるに方り、之れに序して曰へらく、「凡ての聖書は固より神の仁恵を呼吸する者也、然れ共詩篇の卷は他書に卓越して秀美也。……歴史は諭し、律法は教へ、豫言は報じ、譴責は潔め、道徳は勸むる者なり、吾人は詩篇に於て是等の凡ての結果及び人の

詩篇の價值

救ひの爲めに藥劑を有す。……詩篇に勝りて尙ほ喜ぶ者は何者ぞ、是れ人民の祝禱也、神の讚美也、多數人の感謝也、……教會の聲なり、吾人が信仰の調和せる告白也』

ヘルデルの評

近世有名なる獨逸の詩人ヘルデル亦曰く『嘗だに目次に關して耳ならず、其の詩の形態に關しても亦詩篇の用は、人の心靈性情に必要なりとす。希臘羅馬の一の叙情詩に於て、斯く多くの訓戒慰藉教導を發見せざるが如く、亦た歌の各種の性質に於ける調子の變化斯くの如く富瞻なる者殆ど何處にも存せざる也。二千年以前に此等の古詩は數次種々の仕方に譯せられ、又摸擬せられ、而かも多くの新奇なる適用に堪ゆると、尙ほかく豊かにして且つ廣し。彼等は各の時候及び土地に従つて變じ、生氣活潑々として常に生存する花也。本書は最も多種なる感情の説明に向つて、最も單純なる叙情詩の調子を含むを以つて、凡ての時代に向

つての讚美歌集なり。
是等諸家の評語を引證し來らんには實に勝けて數ふ可らず。人若し親しく之を翫味せば、則ち大半の滋熊掌の美猶ほ之れ及ばざる者あるを識る可し。

樂器及音樂

希伯來にて元と銀の喇叭あり、祭司之を吹けり(民數紀畧二章)。其の他禮拜式の音樂はダビデの創設せる所、或は整理せる所なり。歷代志略上廿五章一を看る可し。而してアサフ、ヘーマン、及びエタン等、其の師範たり、乃ち同書十五章十七を參照す可し。其樂器は瑟あり、琴あり、鏡鈸あり(詩百五十篇四、五)鈴あり、鼗あり(撒母耳後六章五)。又絃器を用ゐしと、詩四篇

音樂の師範

樂器

六篇五十四篇六十七篇七十六篇に見ゆ。
喇叭は特に祭司の用ゐし物にして、祭司は歌はざりしと見ゆ。角も恐らくは祭司の用ゐし物なる可し。詩八十一篇四、九十八篇六。歴代志略下五章十二に據れば、利未人の奏樂唱歌するに方り、祭司は喇叭を以て之に和せり。

例證

ソロモン王獻堂式を執行するに方り、利未人は唱歌し且つ奏樂し、祭司は喇叭を吹けり。歴代志略下七章六。又ヒゼキヤ王殿潔めの禮を擧ぐるに方りて、利未人はダビデの樂器を操り、祭司は喇叭を操りて立てり。歴代志略下廿九章廿六。然れども後世多少の異同ありしなる可し。

第一篇

緒言

作者及び時代

正義の壓迫せられ、不義の專恣なるを恨むは、希伯來詩人の常套也。然れども本篇は卒然義人の福祉を歌へり。元來普通の書なれば、開卷第一には端書する者なれども、是は全く異なれり。第一第二兩篇は元と一篇なりとの説あり、然れども其の主意の性質二者同一ならず。作者に付いては古來諸説あり。師父の中ダビデに歸する者もあれども、敢て證據あるにあらざる也。茲に考察す可き數點あり。乃ち(一)兔に角耶利米亞よりは先きなる者也。元來エレミヤは前代の他書より引用するの癖あり。須らく此三節を以て彼の書の十七章五、八に對照す可し。

エレミヤ書と對照

五エホバ斯く言ひ給ふ、凡そ人を恃み肉を其の臂とし心にエホバを離るゝ人は誣はる可し。

ソロモン

ソロモン時代

シヨージ、グロニアの説

六彼は荒野に棄てられたる者の如くならん。彼は善事の來るをみず、荒野の燥きたる處、
ある處人の住まざる地に居らん。七凡そエホバをたのみ、エホバを其恃むとする人は福也。
八彼は水の傍に植はたる樹の如くならん。其の根を河にのべ、炎熱來るも恐るゝ所なし。其
の葉は青く、亢旱の年にも憂ひずして、絶えず果を結ぶ可し。

(二) 嘲る者(一節に見ゆ) 全書中外に用ゐざる語也。然れども箴言の初部に
多く散見する所也。而して自己を賤侮し、又宗教を蔑視する者を指定し
て言へり。而して又全軀を觀るに格言的、箴言的なるは乃ち或はソロモ
ンなるやを疑はしむ。(三) 全篇の教理は更にソロモンの代、國民の宗教的
状態に關して、箴言より輯集せる者なるを疑はしむ。蓋し彼の時代には
智慧外に呼ばはり、衢に其の聲をあげ、義者は尊敬せられたり。(四) シヨ
シ、グロニアの説に據れば、作者は北部パレスタインの住民なるか、若く
は之と親炙せる者ならざる可らずといふ。南部の川は冬期に至れば、水

あれども、夏期直ちに涸るゝ也。然れども北部は水恒に流れて、其河畔に
は樹木四時鬱蒼たり。ソロモン夏の行宮を香柏樹の鬱鬱たるレバノン
の山に建て、其往來の途次之を欄目して詠ぜし者なる可し。(五) 彼若し吾
人が思惟するが如く神を禮拜する爲めに其父の詩を編輯せし者とせ
ば、則ち其の自作を序文となして卷首に加へ、而して自然に其の端書を
省畧せし者とも見ゆる也。
一 悪き者の謀略にあゆまず、罪人の途にたゝず、嘲る者の座にすはらぬ
者は福也。
二 かゝる人はエホバの法をよるこびて、日も夜も之をおもふ。
三 かゝる人は水流のほとりに植ゑし樹の、期にいたりて實をむすび、葉
もまた凋まざる如く、其の作す所皆さかえん。
四 悪き人は然らず、風のふきさる糝糠の如し。

五 然れば悪き者は審判にたへず、罪人は義き者の會にたつたことを得ざるなり。

六 蓋はエホバはたゞしき者の途を去り給ふ、されど悪き者の途はほろびん。

註釋

一節 單に鳴る鐘や響く鏡鉞の如きにあらず事實の承認也。ルーテル曰く、斯る人の世に少きを目撃せる豫言者は卒然叫びて其の人は福也と云ふ。カルヴァイン曰く、悪人と共に雜居せば、則ち吾人彼等より離れ去ると困難也。故に豫言者は其の警戒を強めんが爲めに重複の語を用ゐし也。

ルーテル

カルヴァイン

悪き者 性急に於て心静かならざる者をいふ。悪き者は波立つ海の如し、静かなると能はずして、其の水常に濁りと泥とを出せり。以賽亞五十七章廿、約百三章十七參照。又不義者、詐僞者に同じ。

謀略 彼等はきかず、其耳を傾けず、己の悪き心の謀と、剛愎なるとに從ひて行み、又後を我(神)にむけて、其の面を向けざりき(耶利米亞七章廿四)。罪人の途 常に不正不義を行ふ者の公然たる生涯なり。

二節 前節は消極的に本節は積極的に其の品性を説けり。エホバ嘗てヨシエアに宣はく、此の律法の書を汝の口より離す可らず、夜も晝も之を念ひて、其中に録したる所を悉く守りて行へ。然らば汝の途、福利を得、汝必ず勝利を得可し(約書亞一章八)○念ふとは默想沈思の義なり。
三節 列王上十八章五、詩五十二篇八、九十二篇十二、以西結十九章十、以賽亞四十四章四、耶利米亞十七章八、

四節 詩三十五篇五、約百二十一章十八、何西十三章三、然らず七十人譯及びスリヤ譯には「然らず」と復言せり。風のふきさる（以賽亞十七章十三）賤しく又能力なき義也。五節 然れば價なく乾きて、又果なきが故にの義也。會にたつことを得ざる也。エホバ曰く、我が手は夫の虚浮き事を見虚偽の事をトひ言ふ所の預言者に加へらる可し。彼等は我が民の會に居らずなり、イスラエルの家の籍に録されず云云。以西結十三章九、加之惡き者及び罪人は、善良なる君子義人の座には堪え得ざる者なり。サタンは戦々兢兢として天國に住まんよりは、寧ろ驕慢自ら處して、罪人と共に地獄に在らん事をこそ願ふなれ。六節 途一節の字と等しく其の生涯のと也。○知りたまふ 知て恵むの義あり、乃ち爾我が艱難を顧み、我がたましいの禍害をしり（詩三十一

義、不義の應報

篇七）又エホバよ、人は如何なる者なれば之を知り（百四十四篇三）又我が平生の道は彼知りたまふ（約百廿三章の九）の如き是也。

教訓

義人果して榮達す可き歟、不義者果して利通す可き歟、博愛主義果して眞理なる歟、利己主義果して勝利を得べき歟、是即ち古來多く人の悟れるが如く、悟らざるが如き所なり。吾人は今果して二者孰れの途を選びて、其の歩みを進む可きや。然れども詩人は茲に明々地に二者の應報如何を説き得て餘りあり。夫れ神が現在に於て、直ちに賞罰を實行し給はざる者は、則ち罪人の一人だに亡ぶるを欲み給はず、衆ての人の悔改に至らんとを欲みて、我儕を永く忍びて、寛容の中に置き給ふ也。然れど

も主に於いては、一日は千年の如く、千年は一日の如し。時の遅速、神に於いて何か有らん。抑も疑惑、逡巡は、人生の弱點なり。之を犯す者は、乃ち自ら品性の瘡痕を暴露する者也。吾人は眞理の保護者也。之を保護する須らく勇敢なる可し。是の故に人云へるとあり、正を踏むて懼るゝ勿れど。吾人は義たらんが爲めに義を行ふ者にあらず、不義より復活せし者として己を神に献げ、又肢體を義の器となして、神に事ふる也。儒教は善人たらんが爲めに善を行ひ、仁者たらんが爲めに仁を行はんとを教ふるが如し。是れ乃ち消極的にして、一利を興さんより、むしろ一害を除かんとするが如き者にあらずや。宜べなる哉。儒教に依りて善と仁とを行ふの難きや。否。門戸を張り、帷を下せる夫子其人よりも、寧ろ眞仁者は多く、田夫野人の徒に存する也。然れども、基督の福音は教へて、曰く爾先づ神の靈によりて新に生る可し。聖徒たるに符ふ如く行ふ可し。義の僕とな

る可し。光の子となる可し。此の如く心靈の復活せる者となり、聖徒となり、義人となり、光の子となる安んぞ其行ふ所、計る所、正義、仁愛、公明、正大とならざるを得んや。蓋は光の結ぶ所の果は、諸の仁こと、義こと、誠實の中にあれば也。
孟子曰く、伯夷は其の君に非んば事へず、其の友に非んば友とせず、悪人の朝に立たず、悪人と與に言はず、悪人の朝に立ち、悪人と與に言ふは、朝衣、朝冠を以て途炭に坐するが如し。惡を惡むの心を推し、郷人と立ちて其の冠正しからざれば、望々然として去る。將さに挽されんとするが若し焉と。且つ之を評して曰く、伯夷は隘しと。然り是れ、固より君子國を重んじ、世を経するの途にあらざる可し。然りと雖も、流俗の間に屹然として聳立し、纓を世の濁流にあらはざるは、吾人の取りて以て則りとす可し。况んや、潔き麴醇となりて、社會を新しき團塊となし、又天來の火とな

りて、世界の有ゆる不正不義を焼燼す可きクリスチアンたる吾人に於てをや。起てよ我が法はエホバに在り、日も夜も我之を黙想せん。

第二篇

緒言

著者時

是亦一篇と同じく端書なし、ユダヤのラビ(教師)等は多く本篇を以て一篇と連續せるものとし、ダビデは詩の首尾に同字を使用するの癖ありて、一篇の首節と本篇の終節とは、即ち其の例證なりとせり。又ダビデの作となす者の中に撒母耳後書八章三十二を引證して、アンモン等一度降服して後復た獨立を企て謀反せし時とす。想ふにエルサレムに新王立ちて、位に即きしに方り、敵は其の虚に乗じ、一舉手に唾して直ちに撃ち倒す可しとなし來り攻めし時、其の注進に接して作りし者の如し。エラド、ブルク等は此王を以てソロモンなる可しといふ。デーリッチユの如きはアハズ王治世の初め、スリア王レヂン、イスラエル王ベカ等

詩中の王は誰

性質

合縦して來り攻め(列王下十五章三十七)此の危機に際會して、預言者イザヤ神より遣られたりといふ(以賽亞七章)然れども反對者は云ふ、彼等は臣下にあらざ、又謀反にもあらざと。

今之を地上の王者に徹頭徹尾符合せしめんとするは難し。ダビデ、ソロモン、アハズ其の他如何なる王にもせよ、餘り過大なり。半は理想的にして、半は實際なり。諸國民とは嘗た此の戦争に關係せし者のみに止らずして、凡て神と其の受膏者に反對する者をいふ也。故に要するに預言的の性質を有す、而して猶ほ後に其の來る可き應驗を待つ者也。初代のクリスチアンはヘロデ、ピラト(使徒行傳四章廿五||七)に應ぜし者とせり。然れども是れ亦尙ほ未だ其正鵠を得たりと云ふ可からず。ピラトは王にあらざ、又基督の敵は猶太人にして異教人なる諸國民にはあらず。此の詩人はダビデに爲し給ひし神の契約を想起して、國民の危機に臨

主意

み、其志氣を鼓舞し、毅然として其の敵に突進す可きとを奨勵せり、而して敵の企望の愚かなるを嗤ひ、空しき事を謀る者哉といへり。

本篇はドラマ(戯曲的)にして、人各其の受け持ちの臺言を言ふが如し。分つて四とす。

分段

(一)二||三 謳歌者は諸國民の群集し來りて、其王等のエホバ及び受膏者の軛を脱せんとする様を驚き見ると。(二)十||六 エホバは天の寶座より、彼等の謀り企つる所の虚きと嘲り笑ひて宣ふと。(三)七||九 受膏者たる王は神の命令を宣言し、之に由りて其勝利と永遠の支配とを確定すると。(四)十||十二 詩人は其の目撃せる所の結果によりて、諸王に向つてエホバに服従するの利害を説くと。

一何なれば諸の國人はさわぎたち、諸民はむなしきとを謀るや。

二地のもろくの王はたちかまへ、群伯はどもに議りエホバと其の受

膏者にさからひていふ。
 三 われら其の械をこぼち、其の繩をすてんど。』
 四 天に坐する者笑ひ給はん、主彼等を嘲りたまふ可し。
 五 かくて主は忿恚をもてものいひ、大なる怒りをもて彼等を怖まどはしめて宣給ふ。
 六 志かれども我わが王を、我がきよきシオンシオンの山にたてたりと。』
 七 われ詔命をのべん、エホバわれに宣まへり、爾は我が子なり、今日我爾を生めり。
 八 我に求めよ、さらば爾にもろくの國を嗣業としてあたへ、地の極を爾の有としてあたへん。
 九 汝くろがねの杖をもて彼等をうちやぶり、陶工のうつはものゝ如くに打ち砕かんと。』

一〇 されば汝等もろくの王よさどかれ、地の審士輩をしへをうけよ。
 一一 畏れをもてエホバにつかへ、戦慄をもてよろこべ。
 一二 子にくちつけせよ、恐らくは彼怒りを放ち、爾曹途にほろびん、其の忿恚は速かに燃ゆべければ也、すべて彼に依り頼む者は福也。』

註釋

一節 何なれば、恐れ且つ驚きたる感情あり、されど彼等の騒ぐ光景を其の上より見下して無益徒勞の事を爲す者哉との感あり。
 二節 たちかまへ、如何にも仇敵の如き風態なり、ペリシテ人の四十分の間、サウル王の前にたちかまへたる撒母耳前十七章十六が如し、時

ルーテル

は現在にして、謳歌者は其の目前に見るが如くす。
 ルイテル曰く、迫害する者は到底勝利を得ると能はず、如何となればエ
 ホバと其の受膏者にと逆ふ者なれば也。
 三節 謳歌者は彼等の様を目撃する耳ならず、又敵の聲をも聴きたり。
 四節 詩人は群集せる敵を見つゝも、其の眼を皇天に向けたり。
 笑ひたまはん。先づ物静かにして笑ひ且つ忍び、終に青天霹靂忿怒の
 聲を放ち給ふ。
 五節 ルイテル曰く茲に基督を試むるとについて録さるゝ所は即ち
 一般の信徒に向つての例なり。眞實にクリスチアンたらんとせば、殊に
 一世の師表たらんとせば、彼に向つて騒ぎ立ち群りて虚空きとを謀る
 所の王、群伯、民等を有す可し。人若し此の如く彼を煩はすとなくんば、悪
 魔及び終には彼の良心は彼の將さに瞑せんとする時にも拘らず、之を

煩はす者也。其の時に方りて彼は此の種の神天に在まし、而して此の望
 みに於て確立不動なる慰藉を必要なりとす可し。
 六節 志かれども。本篇中心の眞理也。○我。希伯來語にては強き人
 稱なりといふ(母上十六章一)○シオンの山。エルサレムの聖き山にし
 て、神殿の在る所なり。王の膏を沃がれたる所にあらず、然れども神の律
 法の由て出づる所の中心となし、王國の寶座の在る所となし、神の主權
 の位する所となせる也。(百十篇二)。
 七節 忽ち語る人變化せり。○我が子なり。受膏の王なり。羅一章四約
 一章四十九、太廿六章六十三。今は預言的に言へる也。
 八節 われに求めよ。詩の形容なり、神の受膏者に與へ給ふと也。
 九節 くらがねの杖。審判するの義なり、基督曰く、我審判せん爲めに
 世に臨る(約九章三十九)。

ピラト
キリスト

十節 エホバ及其の受膏者の言を聞き、警醒を促すと。○をしへをうけよ。政治的の義のみにあらず、宗教的に真正の敬神者となる可きと也。十二節 子にくちつけよ。主格は神にして、其の言葉なり。かれに依り頼む者。彼とはエホバなり、本篇は代名詞數次變化するを以て注意す可し。

教訓

ピラト、基督を審問して云へるとあり、「我爾を十字架に釘くるの權威あり、亦爾を釋すの權威あり、此事を知らざるか。」基督答へて曰く、「爾上より權威を賜らずば、我に對ひて權威あるとなし」と。蓋し王公俗世の權威を恃みて、絶對の眞理に違戻し、我惟れ主權、我惟れ眞理とする者、豈其れ少

シオン、
ランベル

しとせんや。然共彼等の爲す所想ふ所實に空の空なる哉。大能者、大主權者上に照鑒して之を嘲り笑ひ給ふと、固より當然のとなり。之を悟り得ざる者は禍なる哉。古來世の所謂志士仁人なる者、當時の百難千艱に遭遇し、終に斷頭臺上の露となり、炮烙柱頭の灰となるに方りても、毅然として其死を見る。と恰も飴の如くなりし所以の者は何ぞや。眞に神を畏れ、基督を愛する者にあらずんば、安んぞ能く此の如くなるを得んや。千五百三十八年ヨシラムベルド顯理八世のために、スミスフィールドに於て焚殺せらるゝ時に方り、本篇の十一、十二兩節を唱し、炎々たる火焰の中に在りて、遙かに天を指し、「基督の外に誰も〜！」と反言しつゝ、終に瞑せりといふ。噫、亦壯ならずや。

第三篇

ダビデ其子アブサロムを避けし時の歌

緒言

本篇及び次篇は共に思想及び感情の聯絡あり、恐らくは同一なる境遇によりて作られし者なる可し。其の境遇は乃ち此の端書によりて知らる可し。同じ日一篇は其の朝に、一篇は其の夕に作られたりと見ゆ。而して後日に至り當年を追懐せるが如し。然れども又説を爲す者あり、篇中アブサロンを指示する者なく、随分其の他の敵に圍繞せられて、作りし者に使用せる同種の語なきに非ず。又作者は左程著名なる人とも見え、殊に王と想はしむる者もあらずといふ。然れども是れ確實なる證據あるにあらず。限りは吾人徒らに古來の傳説を破壊し、排斥するの必要あらず。又少くともアブサロムを明々地に指示せざる所以の者は安

作者の時

んぞ知らん其愛子の謀反の爲めに慈父の温厚なる舐積の情緒其の間に存する者なるを彼は深く神に依頼して確く立ち、患難の中にも強く信じて、自ら處せしなる可し。又た過去の罪過を回想し、今其の罪の實を刈りつゝありと雖も、彼は能く其れが爲めに煩悶の擲どならざりき。其心靈は神の赦免の上に安んじ、而して其の赦免を得たる結果の感情を喚起し來る所の詩は常に平和其心に存すると當然なる可し。又其言葉たるや、數次神に救助を求め、而して之を發見せし者(三篇四、四篇三の如し)又神は其の榮にして、且つ其のうなれたる首を擡げさせ給ふ者なるとを知らる者の用ゆ可き所なり。五節以下は朝の歌也。王の心情も朝の光と與に恢復せり。

當時其の最も信認せし者すら、彼に反對して踵を上げたり(母下十五章) 十七章(加之暫くの間は其の友人も、軍隊も、評議官すらも猶ほ其の敵

どなれり是れ亦一言も本篇中には言及せざる所也敵は森の木葉の如く濱の眞砂の如し然れども彼は永久不變の唯一の友を有せり彼は實に其の楯なりき其能なりき彼とは誰ぞ萬軍のエホバなり今終りにダビデが其子アブサロムの死を哀みしとを記さん

アブサロム兵敗れて遂に殺さる時に視よクシ人來れりクシ人言ひけるは願はくは王音信を受け給へエホバ今日爾をまもりて凡て爾にたち逆らふ者の手を免かれしめたまへり王クシ人にいひけるは少年アブサロムは平安なるヤクシ人曰ひけるは王我が主の敵及び凡て汝に起ち逆らひて害を爲さんとする者は彼の少年の如くなれど王大に感み門の樓にのぼりて哭けり彼行きながら斯く言へり我子アブサロムよ我子我子アブサロムよ嗚呼我汝に代りて死たらん者を母下十八章三十一 || 三十三 尙ほ同十九章一以下王の悲みは遂

に民の悲みとなりしを参照す可し。

一 エホバよ我にあだする者のいかに蔓延れるや我にさからひて起りたつ者多し。

二 我が靈魂をあげつらひてかれは神にすくはるゝとなしといふ者ぞ多きセラ。

三 されどエホバよ爾は我をかこめる楯我が榮我が首をもたげ給ふ者なり。

四 我聲をあげてエホバによばはれば其の聖山より我にこたへ給ふセラ。

五 われ臥していぬまた目さめたりエホバ我を支へたまへば也。

六 われをかこみて立ちかまへたる千萬の人をも我はおそれじ。

七 エホバよ願はくは起きたまへ我が神よ我を救ひたまへ爾曩きに我

がすべての仇の頬骨をうち、悪き者の齒を折りたまへり。
八 救ひはエホバに在り、願くは恩惠爾の民の上に在らんとを。セラ。

註釋

一 二節 現在の危難及び苦勞のと。
一節 いかにかに蔓延れるや。母後十六章十五、十七章一、十一、十三及び

十五章十八對照。
二節 セラ 諸説ありて確かならず、或は永遠の義なりとなす者有り、

乃ち詩六十一篇四、八十九篇三十七の如し。イブン、エズラの如きはア
メンとなし、ゲセニウスは休め、又た静めとなせり、或は句の中間にあり、
或は句の終末にありて定らず、五十五篇十九、哈三章三、九の如し、或は又

聲歎音樂歎を高むるの義とす、エワルドは此説を採れり、或は又聲を止
めて音樂を高むるに用ゆと云ふ、兎に角満足なる解釋は得べからざる
が如し、然れども強ひて穿索するにも及ばざる可し。

三 四節 過去に於て受けたる助けと恵みを回想すると。

三節 盾 敵を防ぐ爲に最も肝要なる物なると、固より論を俟たず、エ

ホバの言嘗て異象の中に、アブラムに臨みて曰く、アブラムよ懼るゝ勿
れ、我は爾の盾也、爾の賚は甚だ大なる可し、(創十五章一) ○首をもたけ
牧羊者より王位に登りしとなりとの説あり、又常に助け給ふ義にして、
即ち敵の上に置き給ふをいふ也と。

四節 聖山 契約の櫃の在る所にして、即ちシオンシオンの山也。

ダビデ出づる時は祭司及び利未人等櫃を持ちて之に従ふ、然れ共彼は
心に深く信ずる人なり、故に目の前に在るを要せず、是れ聖山より答へ

給ふと歌ふ所以なり。乃ち母上四章三六の反對也。
 五二六節 現在の危難辛苦の境遇に處し乍らも平和にして安全に確
 く主に倚頼したる光景宛然見るが如し。パウロ曰く若し神我儕を守ら
 ば誰か我儕に敵せん乎、亦た同義なり。
 七二八節 敵に對して助けを祈り、イスラエルの爲めに福を求む。
 起き給へ 能を現はし給へと也。
 八節 救ひ 勝利の義也。

教訓

泰平を謳ふは易し

昔者帝堯陶唐氏の民は鼓腹擊壤して歌つて曰く日出而作日入而息鑿井而飲畊田而食帝力何有於我乎と固より是れ泰平無事の民其の優遊

自適世を樂むは則ち易々たる事のみ然れども四面皆敵群りて恰も雲の如く我は猶ほ魚の釜中に在るが如きに方り從容自若として其の間に處するは座臥進退一に大能者の擁護あるを確信し其思望は常にエホバの聖山に在る者に非んば則ち安ぞ能く然らん天は高く地は厚しと雖も悪き者は其の身を容るゝの餘地あらず危機我が前を斷ち猛虎我が後に尾するも君子は悠然として敢て迫らず其懼る可きを知らざるにあらざ然れども其の信ずる所深く他物我に於て何をか爲さんと思へば也况んやエホバを以て其の盾となし凡ての事其の攝理と規矩の外に出づると能はざるとを確信する神の聖徒に於てをや。夫れ疑ふ者は風に撼かされて翻へる海の浪の如し斯くの如き人は主より何物をも受くると想ふ勿れ天下の至強なる者は決に在り至弱なる者は疑に在り平家の黄瀬川に於けるは其の疑に在り。ウエルリント

疑と決

テリツ
チユの評
エワルド
の評

五十四
シのウオートルローに於けるは其の決にあり故に曰く勝敗は決疑に
在りて衆寡にあらざ夫の眇たる一少年ダビデが萬人不敵の剛の者ゴ
リアテを一撃の下に刎ねしも亦然り噫天下復た何事か疑はんや殊に
終りに至りて尙其仇を祝するが如き如何に度量の海の廣き哉
テリツチユ最終の八節について曰く其民之を十字架に釘けし所の
他のダビデの「父よ彼等を赦し給へ」と一致する者也
エワルド亦曰く掉尾の一言其の高尙なる靈魂の深さに赫々たる光輝
を與ふ

第四篇

緒言 琴に合せて俗長に歌はしめたるダビデの歌

性質

ダビデの
人さ爲り

前篇は朝の歌にして此は夕の歌也彼は蒙塵患難の間にして此は平靜
慥かに神佑を承認せし後の作なり前には「神に救はるゝとなし」三篇二
と云ひ今は「喜ぶとを我に示せ」(六)といふ前には神の殿より遠く隔たり
しも神よりは近くして聖き山より其の祈りの答へを受けしが如く(四)
今祭司等は櫃を奉じて都に歸りしが其エボデのウリム及びトムミン
よりも勝れるエホバの聖顔の光を望めり
過去の經驗より來れる信仰の平安に立てる所の祈りを以て始め劈頭
先づ我が義を守り給ふ神よと歌へり夫のダビデは疾痛慘憺たる人生
の暗黒裏に在りても猶ほ善く之を照す所の神の光明を確信せり彼は

之れに倚り之れに立ち而して平靜たる信仰の生涯を送るを得たり。
 加之其敵に復讐するの精神なくして彼等の心高尙神聖に進まん
 とを眞面目に祈念せるは注意す可き價値あるを忘る可らず乃ち彼は
 其自ら王者たるを忘却せず其王者たるの心を以つて少くとも個人的
 の忿怒に超然として其上に立ち而して己に反逆を謀りし臣下に對し
 自ら己を制するとなせり。
 一わが義を守り給ふ神よ願くはわが呼ばはる時に答へたまへわがな
 やみたる時なんぢ我をくつろがせたまへりねがはくは我をあはれ
 みわが祈をきゝたまへ。
 二人の子よなんぢらわが榮をはぢしめて幾何時をへんとするかなん
 ぢらむなしき事をこのみ虚偽を去たひて幾何時を経んとするか
 セラ。

三然れどなんぢら知れエホバは神をうやまふ人をわかちて己につか
 しめたまひしことをわれエホバによはらば聽き給はん。
 四なんぢら慎みをのゝきて罪を犯すなかれ臥床にておのが心にかた
 りて黙せセラ。
 五なんぢら義のそなへものを献げてエホバに依頼め。
 六おほくの人はいふたれか嘉事をわれらに見する者あらんやどエホ
 バよねがはくは聖顔の光を我儕の上にほらせ給へ。
 七なんぢの我が心にあたへ給ひし歡樂は彼等の穀物と酒との豊かな
 る時にまさりき。
 八われ安然にして臥しまたねぶらんエホバよわれを獨にて坦然にを
 らしむるものは汝也。

註釋

一節 神に向つて叫ぶ。○我が義を守り給ふ。敵に對して我が義を守るのみならず、我が生涯及び心の義と聖潔とを知り給ふ、又神は我が中に在りて凡ての義の原因たりとの義なり。

二||五節 敵に向つて警戒を加ふると。

二節 人の子。舊約にて地位の高貴なる者をいふ、今はアブサロムに屬する者を指示す。ルイテルは愛する諸君と譯せり。

彼等は遠謀深慮なくして、其の爲す所は實に空の空なり、ソロモン曰く、愚かなる者の知識を惡むは幾時迄ぞやと。

三節 然れど。二篇六、三篇三の如く、一轉宛も龍の一躍して尾を揮ふが如し。○神をうやまふ人。英譯には「神は其の愛する者」と云ひ、ルイ

テルは「其の聖き者」と譯す。○わかちて。牧羊者より王となりしとを想起し、自らの實歴に感ずる也。○己。神をいふ。

四節 賢き且つ愛心ある忠告に移れり。恐れ慄きて半夜衷心に反省し、耿々たる其の良心の教導する所に従ひ、妄りに其口を自由ならしめず、以て罪を犯すこと勿れと也。

五節 義のそなへもの。申命記三十三章十九に義の犠牲の熟字見えたり、今此處に借り來れり。又詩五十一篇十七、八、九節を見る可し。

六||八節 神を信じ、之に頼り、其の心は平和安全なる也。

六節 おほくの人。審だに其の前に在る敵のみに止らず、ダビデに隨從せしも、其の患難の時に方りて、其の心動きたる者及び尙ほ廣き意味にて一般に信仰によらずして、外貌により歩む者也。

後半は禮拜の終りに方りて、祭司長が、人民に向つて祝禱する所の言を

想起し言へる也。

フリープエル
ルドエロ
ルド
ヘンケス
テンベル
ヒ

七節 彼等の穀物と酒 フリープエルドは前節の多くに照應して、目前の地上に於ける多量の榮華なりといふ。エワルド等は六十五篇九の如く、普通一般に言へるとにて、特別に指定するにあらずとなせり。ヘンケステンベルヒ等はダビデ、アブサロムの亂に遭ひし時、メビボセラの僕チバ二頭の驢馬にパン、乾葡萄、酒等多量を積み來りしと、(母後十六章一)及び其のマハナイムに至れる時、アンモン人等亦豊かなる贈物を齎せしと、(母後十七章廿七、九)となせり。兎に角其の心に感受する歡喜の非常なるを表彰せるものとせば足りなん。
八節 如何に平和なる哉、猶ほ幼兒が慈母の懷に抱かれて眠りにつくが如し。○獨にて 古の譯に據れば、雨は我をして獨り安然にをらしめ給ふ也』とせり。耶四十九章三十一の「エホバいひ給ふ、汝ら立ちて穩な

デーリツ
チユの評

る安かに住める民の所に攻め上れ、彼等は門もなく、關もなくして獨り居ふ也』と同じき也。然れども他人は多く我に敵し、又離れ去るとも、エホバのみ獨り我が守護なりとの義とする方可なる可し。乃ちモーセがイスラエルの子孫に語つて「エホバは只獨にて彼を導き給へり、別神は之と共ならざりき」申三十二章十二の如し。
デーリツチユ曰く、此詩を結ぶ所の句法は靜かに死の眠りに就く所の守り歌の如し。ダンテが音樂の秀美及び希伯來詩の調和は、ギリシヤ及びラテンの譯に於て失却せられたりと言へるは、誣言にあらざる也。

教訓

イスラエルより出づる者悉くイスラエルにあらず、亦アブラハムの苗

奇なればとて悉く其の子たるにあらず、唯だイサクより出づる者、なんぢの苗裔と稱へらる可しと録されたり。教會員なればとて悉くクリスチアンにあらず、唯選ばれたる者のみ神の救ひに入る可き也。夫れ召さるゝ者は多くして、救はるゝ者は少し。縱令異端の風吹き荒びて、神の殿は危きが如く見ゆるとも、神の置え給ひし堅基たてり。其の上に印あり、誌していふ、主己に屬ける者を知ると。然りエホバは神を敬ふ者を別ちて己に屬かしめ給ふ也。其の選びたまへる者を己に近かせ給ふ也。然れば則ち吾人は慎み畏れ、小心翼翼として自ら反省し、肅々己を神の意に適ふ、聖き活ける祭物として神に献げん。是れ當然の祭なり。今ダビデは曰く、爾曹義のそなへものを献げて、エホバに依頼めど。クリストン此の義のそなへものといふを解して曰く、「義に従へ、義を献げよ、是れ神に迄最大の禮物にして、其の受け給ふ所の供物なり。義は徳の一部に非ず

クリストン
義を
解く

眞富者

して、其の全躰なり、衆徳を備具する者我之れを義人と謂ふと。蓋し彼は義其の者を供物といへる也。請ひ問ふ、吾人は今何を供物として神に献げつゝありや。萬物一として神より出でざる物あらず、神の爲めに凡ての物を虚うして之を己に屬けざる者は、即ち最も富める人なり。故に己を棄て、後始めて天下は其人の物となる可し。夫れ有てる者は猶ほ與へられ、無有者は有てりと意ふ所の物をも奪る可し。

第六篇

緒言 八音ある琴に合せて俗長に歌はしめたるダビデの歌

懺悔の七詩

是れ即ち三十二篇、三十八篇、五十一篇、百二篇、百三十篇、百四十一篇と共
 に懺悔の七詩として、ナリヂン以來特別の務に用ゐられたる者の一な
 り。敵の爲めに苦惱められ、心の裏に痛く煩悶して、仰いで神の恵みと助
 けを求むる者なり。敵の惡逆不道なる間に在りて、ダビデは自ら己に神
 の懲戒の筈有るを目撃し、而して其救はれんとを祈る。其の煩悶心勞は
 永く續きて、其の痛苦は甚だしく、遂に其の健康を害し、殆ど其の墓の門
 に近けり。然れども人生豈唯だ涙のみならんや。斯くの如く其の衷心大
 に苦惱すれども、平和と光明は遂に彼に來れり。彼は感謝措く能はざる
 に至りぬ。

分段

本篇はダビデの作なりといふ。而して彼の生涯の内、特別に指定す可き
 境遇は、明かに知る可らず。然れども今之を追窮するの必要あらず。
 分つて三とす、(一) 一―三 (二) 四―七 以上共に神の恵みと助けを求め、
 其の痛苦を訴ふ、(三) 八―十 其の祈念は遂に聽かれ、其の敵は滅ぶ可
 きを確信して喜ぶと。

一 エホバよ願くは忿恚を以て我をせめ、烈き怒を以て我をこらしめ給
 ふなかれ。

二 エホバよ我を憐みたまへ、我萎みおどろふるなり、エホバよ我を醫し
 給へ、我が骨わなしくふるふ。

三 我が靈魂さへも甚くふるひわなしく、エホバよかくて幾何時をへた
 まふや。

四 エホバよ歸りたまへ、我がたましひを救ひたまへ、爾の仁慈の故をも

て、我をたすけたまへ。
 五そは死に在りては汝をおもひいづることなし、陰府にありては誰か
 なんぢに感謝せん。
 六われ歎息にてつかれたり、我よなく床をたゞよはせ、涙を以て我が
 衾をひたせり。
 七我が目うれへによりておどろへ、もろくの仇ゆゑに老ぬ。
 八なんぢら邪曲を行ふ者、ことごとく我をはなれよ、エホバは我が泣く
 聲をきゝたまひたり。
 九エホバ我が懇求をきゝたまへり、エホバ我が祈をうけたまはん。
 一〇我がもろくの仇ははちて大におちまどひ、あわたしく耻ぢて
 しりぞきぬ。

註 釋

一節 神の懲戒は決して其の怒りにあらず。神曰く、凡て我が愛する者
 は我之を責め之を懲す、是の故に爾勵みて悔改めよ。黙三章十九、又詩九
 十四篇十二、百十八篇十七、八箴三章十一、二來十二章三、十一、殊にヨブ
 の生涯を視れば明白也。
 二節 衷情より其哀みを訴ふるの状見る可し。
 三節 カルヴァインは其煩悶するにあたりて本節を述懐となせりとい
 ふ。○エホバよかくて幾何時をへたまふや。是れ苦痛悲哀、荏弱の叫聲
 にして、不忍耐及び不信の聲にはあらず。原文は完全に文章を成さず、蓋
 し苦惱の爲めなり。ロイベルト、ロルロックはエデンバラ大學の第一校

ク | ロル
ロ | ロッ

長にして敬神の名藉々たる人なり其の易箚せんとするや其語中に此句及び第七十篇の終節「我は苦み且つともし神よ急ぎて我に來りたまへ汝は我が助け我を救ふ者也エホバよ願くは猶豫ひたまふ勿れ」の語ありしといふ。

四節 エホバよ歸りたまへ 前節の終りに關係す短き中にエホバよの語既に五回反覆せられたり以て恵みの原因は此の聖き名に存するとを知る可し苦み惱む時に方りては神怡も共に在さいるが如き感念なきにあらざ神の外には望みなき也。○なんぢの仁慈云云 三節の終末の如きは何人にも能く言ひ出づ可し然れども此語は主の恵みを親しく心に味ふ者のみ能く言ふとを得べき也。
五節 滅亡を恐るゝとも亦幼兒の如く神の手によりて其の要求を許容れんとを祈るの情相混ざる所大に注意す可し而して此の本節の論

法は疑ひもなく舊約時代の性質を有する者なり神を畏れ之を愛する者は暗き蔭に歩まず然れど尙ほ未だ不死不滅の眞意に全く満たざる所あり故に其の生命に親く留らんとするの情は「パウロが言ひし」若し我が兄弟我が骨肉のためならんには或は基督より離れ沈淪に至らんも亦我が願ひ也」羅九章三とは大に其趣を異にせり又彼等は其の滅亡より寧ろ神の現在の光より離るゝとを恐れたり早死は神の懲戒の如く思へり故にヒゼキアは其の病に罹るや曰へらく「我が齡の全盛の時陰府の門に入り我が餘年を失はんと我云へり我再びエホバを見奉るとあらじ再び生ける者の地にてエホバを見奉るとあらじ我は無き者の中に入りて再び人を見るときは云云」賽三十八章十以下。
六節 此の如き己の弱點はあらゆる者を言ひ顯はして全く神に告白して少しも憚らず。

八節 以下急に調子を一變せり、恰も夜の急に朝となり、太陽の赫々として東天に昇りしが如く、又天使の獄屋の錠を開きて、ペテロを外に出せしに似たり。既に其の祈禱懇求は聽き上げられたり、其の信仰は勝てり、敵は其の愍然たる最後を嘲笑せんとせしに、大に其反對の結果に狼狽せざるを得ざりし也けらし。

教訓

本詩及び百四十二篇は佛蘭西のカザリン、ド、メデシーの選擇に入りし者なり。元來カザリンは非宗教的にして放恣常に野心に驅逐せられし者なり。其子なきために政權を全く失却せんとを恐れ、本詩は其俗世の失望を洩すの歌となりぬ。後遂にフランシス二世(メリー、スチュアルト

の第一頁人)及び查列斯九世の母となれり。此の查列斯は元と暗主なり、故に政權は常に其母の掌握する所たりしなり。維時一千五百七十二年八月廿三日、夜既に闇にして人定まりし比、九重殿裏煌々たる銀燭の下、私に密議を凝しつゝある者あり、是れ即ちカザリン及び其の股肱の侍臣の新教徒殄滅の陰謀なりけり。遂に起つて急に王を誥き、新教徒殄滅の令に應せしめ、正さに二時急に警鐘を鳴さしめ、三日を出でずして殺戮せられし者無慮一萬人、府下聞然として復た人聲なし。尋いで勅令を郡縣に發し、更に虐殺せられし者四萬五千人、是れ即ち有名なるセントバルソロミエの虐殺なり。佛國の史家之を評して曰へらく、彼女の志望は佛蘭西の災禍に向つて實行せられたり、而して其詩篇を樂みし家族は、是等を歌ふが爲めに宗教改革者の數千人を死に定めたりと。同じく佛蘭西の王家のとに屬すれども、猶ほ面白き談あり。エリサベス、

カルロッテはハンノーヴェル選皇夫人ソフィアの姪にして、エリサ
 ベス、スチュアルトの孫なり元來較著なる才能を有せしが、夫の有名な
 碩學ライブニッツの監督の許に、ソフィアによりて教育せられたり。
 其父は之を路易十四世の兄弟なるナルレアンス公に配せしめ、以つて
 佛王と結托せんとの計畫を有し、之を彼女に強迫せり。然共更に路易を
 して異志を養はしめたり。彼女の故里なるライオン、チツカル沿岸の山水
 明媚の地、佛軍のために蹂躪せられ、其市邑は彼等の爲めに燼灰となり、
 其幼時のホームなりしハイデルベルヒ城も破碎せられ、彼女の愛せし
 人民等も朔風肌を裂き、雨雪衣を拂ふの時、居るに家なくして空しく露
 宿せる様を觀て、感慨止むと能はず、輾轉反側して安眠せず、徒らに政界
 の爲めに賣られたるを哀め、後に至りて刊行せられし彼女の書簡
 は、當時の事情及び佛蘭西の朝廷に對して抱懷せし情緒深く感ず可き

者あり。彼女の心情は早時のプロテスタント教信仰及び嘗て叔母と共
 に最も多福なる生涯を送りしナスナブルックの古城に歸れり。其叔母に
 贈りし一書簡の中、偶々本詩と關係する者あり。彼女一日ヴェルサイユ
 の近傍なる橙園に散歩せし時、クレメント、マロットの譯せし本詩を己
 の感情の説明として歌ひけり。時に當時の有名なる一技藝家にして、プ
 ロテスタント教に大に心を結合せし者、偶々屋蓋を着せしつゝありて、
 彼女の歌ふを聞きぬ。彼女書して曰へらく、余は未だ第一節を終らざり
 しに既にエム、ルイソの階子を下りて余が足下に伏するを見たり。余
 は以爲へらく彼は狂者ならんと、而して云へらく、ルイソ、ルイソ、是
 は何事ぞ。彼は答ふらく、貴夫人よ、卿は尙ほ吾等の詩篇を想ひ出だして、
 之を歌ひ玉ふとを得べしや。神は卿を祝福し、且つ此の善意の中に卿を
 保ち給はんとを。彼は其雙眸に涙を浮べたりき云云。

夫の路易十四世晩年に至り、其失敗と失意のために憂悶措く能はざりし時、彼女の價値を承認し、彼女に向て慰藉を求めしを見れば、尙ほ且つ趣味あらん。

又トマス、カールイルの夫人嘗つて痛く心身を勞し、寤寐に安からず、當時(千八百五十五年)日記に録せる所を見れば、則ち其煩悶の状見るが如し、其中に本詩の二節以下四節迄を同じく記入せり。

第八篇

ギアットの琴に合せて俗長に歌はしめたるダビデの歌

緒言

性質

本篇は詩篇中自然界の現象に就きて、神を讚美する詩の第一なり。而して其自然界の觀察の他國民に異なれるとは、總論に於て陳述せしが如し。希伯來人の自然に向つて歌ふ所の驚嘆の情は、正しく神の榮光を承認せんと告白する者也。此の種の心には、神の讚美より離れて別に自然に對するの讚美なし。蓋は萬物は彼より出で、彼に倚り、彼に歸れば也。願くは世々榮神に在れ(羅十一章三十六)日月星辰は神の珠璣なり、光は其の衣なり、雷霆は其の聲也、電光は其の箭なり、彼を離れて萬物は渾々沌々たるに過ぎざる也。然れども神は之に生命と意味とを賦與し給ふ也。

パレスタインは大氣清朗にして、月も星も數層偉大にして、且つ燦爛と
して見ゆる也。故に半夜仰いで渺茫たる蒼天を望みて、之を凝視するや、
敬畏嚴肅而かも之に吸引せられ、啓發せられ、進みて終に皇天を認識讃
嘆するに至る。ダビデが如き天資を有する者に至つては更に太だしき
者なくんばあらず。

由來

詩人は其の蒼天の偉大杳々たるを觀て同時に我が生の微小なるを感
じ勢世の人は如何なる者なれば、之を聖念にとめたまふや、人の子は如
何なる者なれば、之を顧み給ふや、と歌はざるを得ず。然れども是れ僅に
最初の感情たるに過ぎず。人は到底自然の間に呑み込まれる可き者にあ
らず。故に次いで詩人は萬物を其の足下に置き給へり、とは歌ふ也。是れ
眞の意思にして其の偉大なるを示す者なり。故に初句と等しく讚美の
語を以て結了せり。

作者

時

性質

本篇を以てダビデの作となすは、凡ての批評家の一致する所なり。然れ
ども其の時に至つては諸説異同なきにあらず。恐くはダビデ尙未だ晩
年の如く罪の苦き杯を飲まず、心に煩悶の劍なき比の作なる可し。篇中
敵といへるは神に反對して、其の神聖を汚瀆する者なる可し。
又玲瓏たる思想を以て天地を讚美せり。然して其の因つて起る所は創
世記一章に在り。とす。ベツレヘムに在りて羊を牧し、人よりは遠くとも、
神には近く、夜氣靜かなる時、造化主と親しく交はりて作りし者なる可
し。少くとも當時の快活なる生活を追懷せしものなる可し。又ゴリアテ
と戦ひし後の作なりとの説あれども、多くの批評者之を採らず。
本篇はメサイサ(救世主)的の意味を直接に有するものにあらず。然れど
も神人關係の秘義は、神より少く劣り、萬物の上に在りといふインカル
チーシヨン(形)をとりて肉と成るとの義を現す。神の子は人類の性質を

取り給へり。夫れ人は神に近く、天使よりも高き者也、何となれば基督は神にして又人なれば也。是即ち此の詩のメサイアの性質を含有する所の眞理也。此眞理は此註解の鍵なり。

篇中より二度新約中基督に適用せり、一は基督己の爲めに此二節を、太廿一章十六引用し、他はパウロ哥前十五章廿七に此六節の言辭を少しく變更して、萬物の基督に服従するとに適用せり。是等の言は人類にあて、語れるも實は人の首なる基督にのみ全く應ず可き者也。希伯來書の記者は二章六―九節に應用せり。

一 われらの主エホバよ爾の名は地にあまねくして尊きかな、其の榮光を天におきたまへり。

二 爾は嬰兒ちのみごの口により、力の基をおきて敵にそなへ給へり、是は仇人どうらみを報ゆる者とを鎮靜めんが爲めなり。

三 我なんぢの指のわざなる天を觀なんぢの設けたまへる月と星とをみるに、

四 世の人は如何なる者なれば、之を聖念にとめたまふや、人の子は如何なる者なれば、之を顧みたまふや。

五 只すこしく人を神よりも卑くつくりて、榮と尊貴とをかうぶらせ、

六 また之に手のわざを治めしめ、萬物を其足下におきたまへり。

七 すべての羊、うしまた野の獸、そらの鳥、うみの魚、もろくの海路をかよふ者をまで皆志かなせり。

八 われらの主エホバよ爾の名は地にあまねくして尊き哉。

註 釋

一節 われらの主 以上の詩は個人的なりしが今や複數となる乃ち
 個人的の情感の國民的になりし初めの詩篇なり其の神はイスラエルの
 神なり彼等の贖主として其名エホバを以て己をイスラエルに知ら
 しめ給ふ神は即ち天を造り地の基を置きし所の神也
 二節 ちのみ子 ユダヤにて二歳或は三歳にて乳をはなる
 夫の蒼天を仰ぎ望みて彼處にニエトフ及ラプレリスの榮光を見る
 も神の榮光を見ざる所の腐敗せる心及び亂れたる智識の人の愚かな
 るに對しては幼兒の信仰たりども充分なる城砦なり或る註釋者等は
 哥前一章廿六||八を是處に導き來れどもダビデは文字の如く語り出
 でしなり
 三節 幼兒すら之を認識する程に著明なるとして天地に於て目撃せ
 る神の榮光を述べ其の例證とす

四節 世の人 希伯來人は人を以て弱きとを現はせり
 浩蕩たる穹蒼天に吊り茫々たる天霄際涯あらず太陰星宿其の間に爛
 爛として碁列す顧みて眇たる己を見れば則ち必ず本節の如き感なく
 んばあらず此の暗黒の黙示に更に靜聞の黙示を加へよ人は榮々とし
 て其の事業は暗黒の裏に湮滅し去られん
 五節 すこしく神よりも卑く 神明の地位より少しく劣りての義な
 り是は神の驚く可き謙遜より來るもの也
 六節 人は王者の資格を有する者なり神は之に榮と尊きを與ふるの
 みならず領地と服従する者とを與へたまへり創一章廿六
 萬物は皆な其足下に屬す可し最後に滅さるゝ敵は死也

教訓

二の極端

夫れ人は中庸を歩むと難くして、動もすれば、兩端孰れか其の極に馳せ去り易し。故に惟我主義を取りて、十方世界、天地六合を我が心の儘に吞吐し、乾坤我なる歟、我れ乾坤なる歟、我なくんは理想なく、理想なくんば則宇宙なき也など、放言高談得々たる者なきにあらざ。是れ即ち一方の極端説なり。然れどもまた翻つて他方を觀れば、則ち偉大活潑なる人生を以て徒らに微物昆蟲の蠢爾たるが如きに比し來りて、箕蟲蝸牛を以て負かに人に勝れりとなし、消え易きとは沸々たる夫のうたかたも音だならずとなし、蜉蝣を以て自ら任じ、其の有爲の一生を徒らに虚無に寄せんとす。是れ即ち亦た一方の極端説なり。二者共に誤てりといふ可し。

希伯來詩
人の人生
觀

然りと雖も、今希伯來詩人が人生觀を觀察せば、則ち皇天上帝の前には肅々として、其の自ら微物たるの謙徳を全うし、一顧しては其の天父より賦與せられたる萬物統治の大權あるを承認す。然り吾人の足は地につけり、然りと雖も吾人の首は天に向へり。吾人一半は地の子なり、然れども他の一半は天の子なり。吾人は此の天地が神の榮光と智識を以て、満たされたるを認識すると同時に、亦人生は其間に榮光と能力とを頒賦せられたるを認識する者なり。然り吾人は造化主が其の美妙なる演技場として創造し給ひし、此宇宙覆載の間に立ちて、其美を頌讚しつゝある也。

第九篇

ムツラメン(調子の名)に合せて俗長に歌はしめたるダビデの歌

緒言

性質

悪者を滅ぼし、壓制せらるゝ者を禦ぎ給ふ所の、義しき審判者なる神に感謝するの詩なり。十三節の外本篇は全く勝利の作也。故に多くは之を以つてアンモン又はベリシテ人との戦争の後、恐らくはダビデの作りし者なる可しといふ。然れども十三、四兩節及び其他の多分を説明せんに、斯る想像を以つてすると全く難しとす。

イスラエル人が異邦人の爲めに苦められ、其の壓制を受けしは事實也。而してイスラエルの敗北せしは、即ち神の審判の現れたる者なり。然共是れダビデの歴史に符合する者にあらず。

七十人譯前にも言ひしが如く、紀元前凡そ百五十年頃、舊約聖書を七十

分段

人の學者にてヤリシヤ語に翻譯せし者をいふの時代より、次の第十篇と直接に連続せる一篇なりと考へられたり。是の説は多分十篇に端書なきとの第一部に於て異數なる事實、及び少くとも兩篇に於ける原詩の句頭のアルフハベットの整列、及び他の詩篇には無くして、兩篇に於ける或る熟字、其の狀態等より推論せる者也。然れども是等以上の事情は、偶々以つて作者の同一なる可きを證する者にあらずや。されど本來一詩たるを證する者にはあらず。又原詩のアルフハベットの整列は、殊に十篇に於て不完全なりといふ。

而して全篇を観察し來れば、前篇は凡て勝利と希望にして、後篇は恰も怨言くが如く、殘虐無道の行爲に對して祈れる者也。元來希伯來の區別は多く此の如きとに分たるゝ者也。

之を分つて八とす、(一)一二神を讚美せんとの決定、(二)其の理由、詳

言せば神の義の顯示、個人的(三、四)一般に(五、六) (三)尙ほエホバは唯一眞
 正にして、且つ永遠の審判者なると(七、八)故に悪者を滅すのみならず、義
 者の城皆なると(九、十)、(四)神は義なるを以て之を讚美す可しとの忠告
 (十一、十二) (五)此の義は個人的に歌ふ者に示され得べき祈り(十三、十四)、(六)
 諸國民の自ら其の罪に陥りて滅ぶるは神の義なる證據也(十五、十六)、(七)
 貧者の望みと對照して此の滅び尙ほ布衍すると(十七、十八)、(八)過去に於
 て神の既に爲し給ひしが如く、神の尙ほ再び其の義の尊嚴を示し給ふ
 とを祈る(十九、廿)。
 一 われ心をつくしてエホバに感謝し、其のもろくの奇しき事跡をの
 べつたへん。
 二 われ汝によりてたのしみ且つ喜ばん至上者よなんぢの名をほめう
 たはん。

三 わが仇あたりぞくとき躓きたふれて御前にほろぶ。
 四 なんぢ我が義とわが罪とをまもりたまへば也、なんぢはたゞしき
 審判をまつ、寶座にすわりたまへり。
 五 またもろくの國をせめ、悪き者をほろぼし、世々かぎりなく彼等が
 名をけしたまへり。
 六 仇はたえはて、世々あれすたれたり、汝のくつがへしたまへるもろ
 くの邑は失せて其の跡だにもなし。
 七 エホバはどこしへに聖位に坐りたまふ、審判のために其の寶座をま
 うけたまひたり。
 八 エホバは公義をもて世をさばき、直をもてもろくの民に審判をお
 こなひたまはん。
 九 エホバは虐げらるゝ者の城、又難みの時の城なり。

一〇 聖名を志る者は爾に依頼ん、蓋はエホバよ爾を尋ねるものの棄てられしこと斷えてなければ也。

一一 シオンに住みたまふエホバに對ひてほめうたへ、其の事跡をもろもろの民のなかにのべつたへよ。

一二 血を問ひ糾したまふ者は苦む者を心にどめて、其の號呼をわすれたまはず。

一三 エホバよ我をあはれみたまへ、我を死の門よりすくひいだしたまへる者よ、ねがはくは仇人のわれを難むるを視たまへ。

一四 さらば我なんぢのすべての頌美をのぶるを得、またシオンのむすめの門にてなんぢの救ひを喜ばん。

一五 もろくの國民はおのががつくれる阱におちいり、そのかくしまうけたる網にておのが足をとらへらる。

一六 エホバは己を志らしめ、審判をおこなひたまへり、惡き人はおのが手のわざなる蹄にかゝれり、ヒガイオン、セラ。

一七 惡き人は陰府にかへる可し、神をわするゝもろくの國民もまた然らん。

一八 貧き者はつねに忘らるゝにあらざ、苦む者の望みはどこしへに滅ぶるにあらざ。

一九 エホバよ起きたまへ、願くは勝を人にえしめたまふなかれ、御前にてもろくの國民に審判をうけしめ給へ。

二〇 エホバよ願くは彼等に懼れを起さしめたまへ、もろくの國民に己たゞしき人なることを知らしめたまへ、セラ。

註釋

一節 心に喜ぶ者にあらずんば、エホバに感謝すると能はず、既に其の恵みに感謝す、安ぞ之を人に宣べ傳へざるを得ん。

二節 汝によりて、世人の樂み且つ喜ぶ所は、恰も砂の上に建てし家の如く、流れ來らば忽ちに倒れ去らん。唯だ神によりて樂む者こそ眞正の喜びを得め。

三節 悪者の倉皇あわてふため、様宛然目前に見るが如し。

四節 不法、不義、不虔の徒、世に於て、傍若無人の振舞を爲すとも、エホバは上より照鑒して之を許し給はず。

五節 個人的のみならず、神は悪き國を審判し給ふ也、此の反對は即ちエホバを其の神とする國は福なりといへる是れ也。

六節 五節を敷衍せり、悪者の棲家は野犬の家となり、荆棘の茂る所となり、誑ひは永遠除かれざる可し。○其の跡だにもなし、復言せる也、民十四章三十二。

七節 四節を尙ほ詳かに復言す。

八節 世をさばき、全世界を審判するの義也。

九節 正義を守りて、此世の厄に遭ふ者鮮しとせず、然れどエホバは之を護り給ふ也。

十節 聖名を知る者、神を求むる者は乃ち神其の者を求むる也、異教徒の如く富貴、名譽、權力の如き、拜む神々其者より外に求むるの類にはあらず、須らく刮目注意す可し。

十一節 シオンに住みたまふ神の契約の櫃の在る所なれば、斯く云へる也、然れど神の王國は全世界に在り、故に本節の後半に萬國民に其

事跡を述べ傳へよといへり。
 十二節 血を流し人を殺したる悪者の、其正當なる處罰せられんとを
 求むる也。○苦む者 民十一章十一||十五申一章十二、又ルーテル曰
 く、人は凡ての前に苦めらるゝ也。
 十三節 テリリツチユ曰く、十三、十四兩節は苦めらるゝ者の號呼なり、
 然らずば詩の全軀の一致を缺き、又勝利の中に卑怯の意を注射す、然
 れど詩に於て感情の急變は敢て異數にあらざ、神の制へらるゝ者を惠
 み、其仇を復へし給ふといふ考へは、詩人をして彼の上に神は慈愛の眼
 を以て照鑒し給ふ可しと祈らしむると、是れ自然の結果にあらざや。
 十四節 シオンのみすめ むすめに別に女子の義あるにあらざ、シオ
 ン其の者を指して言へるに異ならず。○門にて 是は東洋の風習に
 て群衆の公會場なり、イスラエルの習慣にて古代より審判の座を市邑

の門に設けたり、亦羅馬人にも此事ありといふ。

故に其喜び讚美の情を、公會の前にて宣べ傳へんどの義なり。

十五節 悪者は己の愆に捕へられ、其の罪の繩に繋がるゝ也、又坑を掘
 る者は自ら之に陥らん、石を轉しあぐる者の上には其の石轉びかへら
 ん。夫れ人の詩く所は刈る所となる可き也。

十六節 己を知らしめ 神は自ら其名エホバなるを人に知らしめ
 給へり、頑陋不虔の埃及王法老も數次之を知れり、然れども神に従はず
 して遂に滅びたり、神の嚴なるとは蹟者に顯れぬ、義の審判は照々乎と
 して明白なり、故に人々推諉る可きやうなし。○ヒガイオン 絃線を
 彈ずると也。

十七節 かへる可し 元と創世紀三章十九の『汝は塵なれば塵に歸る
 可き也』に基けり。○神を忘るゝ 神は天地萬物により、又人の良心に

より己を人に知らしめ、人は之を悟れり、されど之を忽諸にし、又之を忘る安んぞ其の罪なしとせんや。

十八節 人は貧窮及び苦惱のために多く失望し、其の太甚しきに至つては自暴自棄遂に自殺する者なきにあらず、然れども皇天上帝は恒に

彼等の父として、又城として支配し給ふ也。
十九節 起きたまへ 起ち上りて働くを意味する者なり、例へば民數紀零十章三十五節にモーセは祈りてエホバよ起ちあがり給へ、然らば

汝の敵は打ち散され、汝を惡む者等は汝の前より逃げ去らんと、言へるが如し。
廿節 夫れ服従する精神を起すには、先づ懼れ憚るの心なくんばあらず、罪人の懺悔する時常に然りとす。ピリピの獄吏パウロに向つて戰慄其前に跪れ伏して、曰ひけるは、君よ我救はれんために何を爲す可きか、

ど使徒行傳第十六章を見る可し。 ○たい人なるとを知らしめ給へ人の傲驕不遜なるは全く己の何者たるを辨識せざるの罪也。故にソクラテスは其弟子に己を知るとを教へたり、惡き者の神に向つて不虔に、義人に向つて無禮なる、亦深く己を知らざるが故なり。是を以て詩人は

彼等の反省して唯だ己は死す可き人間に過ぎざる者なるを悟らしめ給へと祈れる也。

教訓

惡者の獲る報は虚しく、義を播く者の得る報賞は確し。堅く義をたもつ者は生命にいたり、惡を追ひ求むる者は己の死を招く。心の戻れる者はエホバに憎まれ、直く道を歩む者は彼に悦ばる。夫れ神の怒りは不義を

學生焚殺
せられん
此詩を唱す

以つて眞理を抑ふる人々の凡ての不虔不義に向つて天より顯はる蓋
は人の知る可き所の神の事情は人に顯明にして既に神之を人に顯は
し給へば也夫れ人の見るとを得ざる神の永能と其の神性とは造られ
たる物により創世より以來さとり得て明に見る可し是の故に人々推
諉る可きやう無し。

一千五百五十三年佛蘭西にて宗教改革の有りし時改革黨中危禍に罹
りし者少しとせずリオン府に近きラウセンの學生五名焚殺の刑に處
せられしが其刑場にて此詩を高唱し血を問ひ糾したまふ者は苦む者
を心にとめて其の號呼を忘れたまはずと歌へりぞぞ。

第十四篇

うたのかみに謡はしめたるダビテの歌

緒言

第十二篇と其の感情甚だ似たる者あり詩人は當時神に反逆する者の
多きことを痛く嘆息慷慨せり此の短篇中第七節を除くの外は皆な悉
く違法者のことを言へり前代ノアの時の如く世は復び腐敗壞亂の極
に達し義を審判の機會全く熟したるかの如く言へり(二節)また第十二
篇と等しく悪者の義者を制抑へ且つ之を呑み盡さんとすることをも
言へり。

本詩の形態はドラマ的なり神に反對して惡の暴戾不法益甚だしく神
は昔しバベルの塔を九天の上より見玉ひしが如く今亦其の寶座より
彼等の虚しき業を下望し玉ふなり。

性質

神の見玉ふこと(二節)天より語り玉ふこと(四節)其の聖聲を聽きて惡者
 共は周章狼狽せしこと(五節)等深く注意すべし本篇著作の時代并に其
 由來については明かに知る可らず然れども眞實に神を畏敬れ之を慕
 ひ奉る者の心情には普通の感情也而してまた天來の光に照され聖き
 熱心に蝕はれたる人の心鏡には其當時の時代程腐敗壞亂したりと感
 ぜざる者あらず然れば此詩人の今斯くの如く痛嘆せるも固より當然
 の事なりといふ可き耳

一 愚なる者は心のうちに神なしといへり彼等は腐れたり彼等は憎む
 可き事をなせり善を行ふ者なし

二 エホバ天より人の子を望みて悟る者神をたづぬる者ありやを見たまひしに

三 皆逆きいでることく腐れたり善をなすものなし一人だになし

四 不義を行ふ者は皆智覺なきか彼等は物くふごとく我が民を食ひま
 たエホバをよぶことをせざる也

五 視よかゝる時彼等は大におそれたり神はたゞしきものゝ類のなか
 に在せばなり

六 なんぢらは苦しめるものゝ謀畧をあなどり辱かしむされどエホバ
 は其の避所なり

七 ぬがはくばシオンよりイスラエルの救ひのいでんことをエホバ其
 の民のどらはれたるを返したまふときヤコブはよろこびイスラエ
 ルは樂まん

註 釋

一節 愚なる者 聖書は常に神を畏敬れざる者を稱して斯く言ふ。
 ○心のうちに神なし云云 是は哲學的に理性に訴へて拒非むにはあ
 らず悪者の實際なり。道徳的に神あるとを承認せざる程に其の心腸全
 く腐敗して、一點の光明をだにといめざる也。

サウスなる人あり、其の説教に此節を取りて曰く、無神論者は其の説を
 公言することを敢てせず、唯だ其の心の中に之を愛するのみなりと然
 れども、ムーコンは説をなして曰へらく、愚なる者は心の中に神なしと
 思へりとは言はれざりき、何となれば何人たりとも神あることを拒否
 み得ざればなりと、蓋し後の説こそ眞なれ。

三節 使徒パウロ亦た己が當時人心の痛く腐敗せるを慷慨し、此句を
 引用せり(羅三〇十)ルテール曰く、凡てを書き現はす所如何に多くの字
 の用ゐらるゝこと哉、先づ皆といひ、次にことごとくといひ、而して又者

なし一人だになしと

四節 神親ら宣ふの語なり。○皆智覺なきか 蠢々たる動物の如く、
 痴鈍愚昧なるの義なり。否却て彼等にも劣れりといふ可きか。イザア曰
 へることあり、牛は其主をしり、驢馬は其あるじの廐をしる、然れどイス
 ラエルは識らず、我が民はさどらず(賽一〇三節) ○彼等は物くふ如く
 云々 無意識に心なく物を食ふが如く、義者を迫害苦惱て顧ざるなり。
 預言者ミカ神の言を宣べて曰く、我言ふ、ヤコアの首領よ、イスラエルの
 家の侯伯よ、汝ら聽け、公義は汝らの知る可きことにあらずや、汝らは善
 を惡み、惡を好み、民の身より皮を剥ぎ、骨より肉を剔り、我民の肉を食ひ、
 其の皮を剥ぎ、其の骨を碎き、之を切りきざみて鍋に入るゝ物の如くし、
 鼎の中にいるゝ肉の如くす(米三〇一より三) 尙ほ耶十〇廿一、何七〇七、
 詩五十三〇四等を参照す可し。○我が民を啖ひ 姦惡なるときに於て

すら猶ほ神の民の遺類の在る有り、而して鹽たり、光たり、五節のたいし
 きもの類と同一なり。昔者神の人エリヤイスラエルを神に訴へいひ
 けるは『主よ彼等は爾の預言者を殺し、爾の祭壇を毀てり、只われ遺され
 しに、又我が命をも求めんとする也。然るに何を神は答へ給ひし乎、我
 自らの爲めにバアルに跪かざる者七千人を存せりと、此の如く今も尙
 ほ恩の選びに由りて遣れる者あり』然り神の詩き給へる種は決して枯
 死せざる也、唯だ信ぜよ。

五節 加へる時 神の聖聲の恐る可き時をいふ。

六節 悪き者は苦しめる者の謀略をあなどり辱かしむ、然れども悪者の
 謀略は決して成功す可き者にあらず、蓋は神に敵すれば也。

七節 五十一篇の十八九の如く第二神殿の禮拜式に似たり。バビロン
 の放逐に方り、シオンより救ひの出でんことを望めり、彼等は信ぜらく、

エホバは決して其の聖山をすてず、たどひ其の民を異邦人の間に一度
 散し玉ふとも、必ず復び之を救拯ひ玉ふ可し。ダニエルはバビロンに
 楚囚の身となりし時、日に三度エルサレムに向つて祈禱りけり、但四〇
 十一、然れども此の民のどらはれどいふこと必ずしもバビロンの義を
 有せりと謂ふ可らず、又必ずしも苦を免れ、福に復歸するを比喩的に言
 ひしやを保す可らず。伯四十二〇十、結十六〇五十三を参照す可し。今此
 の詩を放逐時代に追ひ遣るは、前述の説明を適用するの勝れるに及か
 ず。

教訓

世の愚な

『何なればもろくの國人はさわざたち、諸民はむなしきことを謀るや』

「愚なる者は心の中に神なしといへり、彼等は腐れたり、彼等は憎む可き事をなせり」實に眞なり、愚なる者、惡き者の神に逆ひ、神の民を害するは、則ち神を愛するの愛なく、光を靦るの明なければなり、故に彼等の謀略は常に虚きこと、風を捕捉ふるが如く、光を知らざること、猶ほ盲者の色を嗤ふに異ならず、夫の祭司の長及び長老の使徒等に於ける（使四〇）、エヒソ人のパウロに於ける（使十九〇）、共に其の愚を極めたる者なり、請ふ今哲人の教を聽け、曰く、爾の耳を智慧に傾け、爾の心をさとり、にむけ、若し知識を呼び求め、聰明を得んと、爾の聲をあげ、銀の如く之を探り、秘れたる寶の如く之を尋ねば、爾エホバを畏るゝことを曉り、神を知ることを得可し、蓋はエホバは智慧をあたへ、知識と聰明と其の口より出づればなり、と。

著者適々此篇を草するに方りて、長州萩講義所迫害の報知に接す、曰く、

亂民數百、毎夜來りて戸を撃ち、塙を毀り、瓦石を抛ち、吶喊、哄鬨、信徒の負傷せし者二名、亂民の警署に引致せらるゝ者若干名、又同時に阿州徳島より飛書あり、曰く、少青年三四十名、常に隊をなし、講義所に來りて妨害を加ふることを再三再四、遂に一青年警官のために捕へられたり、而して彼は中學の生徒なりしといふ、噫、吁、矇昧なる無智漢！眞に慙む可き哉、あゝ不義を行ふ者は皆、智覺なきか、彼等は物くふが如く、神の民を食ひ、無意識に、無感覺に、公義聖善に仇せん、とす、彼等若し眞實に其の信ずる所を以つて立たん、と欲せば、須らく公々然として、白晝、匕首を懐にし、堂堂男子たるの振舞をなし、少くともベリシテ人のゴリアテたる可し、燕人の荆軻たる可し、然れども、彼等は先づ暗夜に乗せざる可らず、大數に依頼せざる可らず、密かに其身を蔭にせざる可らず。

抑も、颯風、狂瀾、と雖も、豈其れ平靜、暢和に復するの時なからんや、况んや

百六
螳螂の斧を以て龍車に向ふが如く、能力なき人の手を以つて宇宙乾坤の
大能者たる上帝に敵せんとするに於てや、天に坐する者笑ひたまは
ん、主彼を嘲りたまふ可し。』拙者の違逆は己を殺し、愚なる者の幸福は己
を滅さん。起てよ、神の子等！勝は爾の手に在り、神若し我儕を守らば誰
か能く我儕に敵せんや。

第十五篇 ダビデのうた

緒言

時
性質
本篇は神の契約の櫃をシオンシオンの山に移すに方りて作られし者なり。母
下六〇十二より十九并びに代上十五〇十六を參稱す可し。
第廿四篇に於ける問答の同一なる事變は則ち吾人をして前述の如く
想像せしむる也。本篇の主意乃ち此に在り。
然れども一節の聖山といふは後世に出でたるの語なりとて之に反對
する者なり。されど山をして聖からしむる神の櫃を移すの場合なれば、
敢て疑ふ可からざるが如し。詩の形態は單純にして段落なしといふも
可なり。一節に問ひあり二節より五節迄に答たり。人の歡喜を以つて神
に接近し奉る事を簡明に述べ、虚禮を退けて實際神に事へ、近く其御前

に在ることの完からんことを教ふる者也。

一 エホバよ爾の帷幄のうちにはやどらん者は誰ぞ、なんぢの聖山にすまはん者は誰ぞ、

二 直くあゆみ義を行ひ、其の心に眞實をいふ者ぞ其の人なる

三 かゝる人は舌をもてそしらず、其の友をそこなはず、又其の隣をはぢ

しむる言をあげもちゐず

四 惡にまづめる者を見ていとひかるしめ、エホバをおそるゝ者をたふ

とび、誓ひしことはおのれに禍害となるとも變ふることなし

五 貨をかして過ぎたる利をむさぼらず、賄賂をいれて無辜をそこなは

ざるなり、斯ることどもを行ふものは永遠にうこかざることなかる

可し、

自ら義とし己を欺くにあらざる證據は即ち劈頭先づ神聖壯嚴なるエ

ホバの字を以て起し來れるにても知る可き也。今や詩人は神の人の肖像摸型を神の光により、其の大御前に於て描寫せり。以つて其の御前には偽善者、不義者、形式者の起ち得ざることを示しぬ。而して詩人は直接に神に向つて其の問ひを設けぬ。其の答はもとより天來の神宣なり。とは想はれず、詩人自ら神の靈の光により、其の能力に啓迪誘導せられて神の言、其の心靈に照臨せしかの如く言へり。夫のアンブロ、サクソン譯によれば、其の時主は聖靈の啓示によりて、預言者に答へ給ひぬ。而して預言者は言へり、我知る、然れども其の處に住む者は誰なりやと問ふ也。

註釋

一節 帷幄聖山 單だに形容詞に過ぎずとは見る可らず帷幄は寧ろ
 神殿の義なり單だに「神の幕屋人と共に在り」どの義にあらざ又聖山を
 或人の如く安全にして破る可らざる住所なりと單に解すること能は
 ず是れ唯だシオンを意味する者なり然れども詩人は問ふエリ又サム
 エルの如く聖き神の庭に住む可き價值ある者は誰ぞや神と共に常に
 親密にして留まるに適する者は誰なれやと蓋は舊約に於て神の現在
 と其自顯し玉ふことは或る場所と親しく關係すればなり故に愛と烈
 しき望みは常に説明するに場所を要せしなり例へば詩廿三〇六廿六
 ○八廿七〇四五八十四〇一五の如き亦然り
 二節以下は神と共に住む者の資格をいへり
 二節 其義者の爲す所の事をいふ彼は(一)其の心を生涯の全き人にし
 て(二)神の聖意を行ふ者(三)眞實を語る者なり

ルイテル曰く是れ美はしき順序なり人は先づ直きによりて受けられ、
 次ぎに義によりて其の働きを受けられ、次ぎに眞實によりて其の語を
 受けらるゝなり
 三節 其の爲さる所の事をいふ彼は(一)言語によりても(二)行爲によ
 りても(三)虚説をきくこと、又傳ふることによりても、決して他人を損害
 せざる者なり
 四五兩節に至り再び確定と拒否とによりて説明す即ち四節は惡より
 離れ善を貴び誓ひを重ずるの人にして五節は高利を愛せず賄賂を取
 らざる人なり
 五節 斯ることもを行ふ者は善人をいふ。○うごかざるゝとな
 かる可し 巖の上に在るが如く確實安定の形容なり

聖徒の資格

是れ乃ち希伯來詩人の筆によりて描寫せられたる所の聖像なり。ダビデは此の聖山に住む可き者の資格を算して今十一となしぬ。讀者試に之を點檢せば則ち可なり。イザアは之を六となして曰へらく、義を行ふ者直きを語る者、虐げて得たる利をいとひ棄つる者、手をふりて賄賂をどらざる者、耳をふさぎて血を流す謀略をきかざる者、目をどちて惡を見ざる者、かゝる人は高き所にすみ、かたき磐は其の櫓となり、其の糧はあたへられ、その水は乏しきことなからんと。

ミカは之を三となしぬ、曰く、エホバの爾に要め玉ふ事は、唯だ正義を行ひ、憐憫を愛し、謙遜りて爾の神と共に歩むことならずやと。アモスは之を一となして曰へらく、エホバかくイスラエルの家に言ひ給ふ、爾曹我

雅各書

自他の人生觀

を求めよ、さらば生く可し、と。

ハバクク亦之を一となして曰ふ、義き者は其の信仰によりて活く可し、と。

夫の新約雅各の書は、此詩を敷衍祖述し、之を註解したる者なり。尙ほ舊約中之一同意義の者を求めんと欲せば、則ち賽三十三〇十三以下十六迄を見る可し。

夫れ信仰は生命なり。此の世を以つて徒らに有爲轉變の修羅場なりと信ずる、佛者が世を果敢みて、此苦境より解脱せんと企つるは、敢て無理からぬことなる可し。されば流るゝ水を觀ても、靡く煙を眺めても、月や花や、其の眼に映り來る者は悉く、流涕大息の媒たらざるはなし。然れども仰ぎて蒼天を望んで、神の寶座たるを讚頌し、俯して大地を觀ては、其の覺たるを信ずる、彼基督の徒、此六合宇宙を以て上帝の大殿堂なり

基督の愛
の存する
所は聖殿
なり

シヨ
ン、
ウ
井
ル
ソ

とする亦宜ならずや。されば窮通禍福一に皇天上帝の因つて以て吾人を誘掖啓發するの手段と信じ、常に讚美と祈禱とを以つて泰然自若たる。豈其れ偶然ならんや。基督の愛より我を離さんとする者は、果して何者ぞ、迫害か、饑餓か、裸躰か、刀劔か。あゝ基督の愛の存する攸は、神の殿堂なり、帷幄なり、聖山なり。ユダヤ人はいふ、我等が拜す可き所はエルサレムなりと。されど余は信ず、聖と眞を以つて父を拜する所、乃ち是れ神の帷幄なり、聖山なりと。あゝ此の大帷幄、大聖山に於て眞神を拜する者は福なる哉。昔者神の人エノクは三百六十五年の間神と共に歩みて嘉せられたり。我も亦其れ基督と共に歩まん哉。基督と共に歩まん哉。

シヨ
ン、ウ
井
ル
ソ
なる人あり、『蘇國生活の光暗』と題する其の著書に、長老の死牀に於て、歌ふ可き聖歌として、本篇を選定せり。蓋し『主の贖ひ給ひし者の歌を以て、シオンに歸り行くこと』は、則ち蘇國の舊習なりし

也』此の感情は數世紀間百般の生涯に於て、彼等の教會と國家に名譽と氣力なりし階級の人士を能く説明する者なりと謂ふ可し。其の歌に曰く、

エホバよ君の	あげばりに	やどらん者は	誰なるか。
エホバよ君の	最ときよき	み山に住むは	誰なるか。
直くあゆみて	たゞしきを	わざに行ふ	其の人ぞ。
偽りあらで	こゝろより	眞實を語らん	其の人ぞ。

第十六篇

ダビデがミクタムの歌

緒言

性質

劈頭直ちに「神よ我を護りたまへ、我爾に依頼む」といひ、又十節に強く其
 確信する所を言ひ彰す點より觀察すれば危急の場合に遭遇して、ダビ
 デの作りしや、蓋し疑ふ可らず。果して然りとせば、則ち危急の思想も、忽
 ち神の現在と、其愛とを認識せることによりて、煙散霧消全く呑み込ま
 れたるなり。本篇は地上の物、一物たりとも、決して侵し得ざる所の福祉
 の言ひ彰しを以て、全篇炯々として光輝を放てり。頃刻忽卒の間に起り
 し出来事よりは、むしろ其の畢生の確信を説明する者なり。活ける大能
 の神は自らダビデの資産及び嗣業にして(五、六)其の右に在し(八)、現在其
 の心の喜び(九)にして、而して限りなく喜樂を以て、彼に充たしめ給ふな

神は嗣業
なり

り。

母上廿六〇十九を比較し來れば、則ちダビデの曠野に在りし時、詠
 ぜしことを想像す可し。當時サウル王ダビデを追ふこと急也。ダビデ王
 に答へて曰く、王我が主よ、請ふ今僕の言を聽きたまへ、若しエホバ爾を
 我に敵せしめ玉ふならば、願くはエホバ禮物をうけ玉へ、されど若し人
 ならば、願くは其人々エホバの前に誼はれよ、其は彼等爾ゆきて他の神
 につかへよといひて、今日我を追ひ、エホバの産業に連なることをえざ
 らしむるが故なり。さればにや遂に彼をして四、五節を吐かしめしなら
 ん。エホバの産業に留まることより追ひ迫られて、遂に其認識は彼をし
 て更に強く、エホバは地にあらずして、エホバ自らこそ其の産業なれど
 の真理を確信するに至らしめたりき。
 使徒ペテロは使二〇三十三、三十一に此十節を引用して、基督の復活を論

ペテロの
引證

證せり。パウロ亦使十三〇三十五より七に於て之を引用し、是は全く基督に應ずる者たるを論ぜり。然れども此の語の本來は、其預言的の意を害せざる限り、ダビデ其者に適用するも妨げず、何となれば本篇の全部必ずしも基督に推論するの必要なく、其の一部を指定して足れば也けり。

- 一 神よねがはくはわれを護りたまへ、我なんぢに依頼む
- 二 我エホバにいへらく、爾は我が主なり、爾の外に我福祉はなしと
- 三 地にある聖徒はわが極めてよろこぶ勝れし者なり
- 四 エホバにかへて他神をとる者の悲哀はいやまさん、我かれらがさぐる血の御酒をそゝがず、その名を口にとなふることをせむ
- 五 エホバは我が嗣業また我が酒杯にうく可き者なり、なんぢは我が所領をまもりたまはん

- 六 準繩は我がために樂しき地に落ちたり、宜われよき嗣業をえたる哉
 - 七 われは訓諭をさづけたまふエホバをほめまつらん、夜はわが心われを淡しふ
 - 八 われ常にエホバを我が前におけり、エホバ我が右にいませば我動さるゝことなかる可し
 - 九 この故に我が心はたのしみ、わが榮はよろこぶ、わが身もまた平安にをらん
 - 一〇 そは爾我がたましひを陰府にすておきたまはず、なんぢの聖者を墓のなかに朽ちしめたまはざる可ければなり
 - 一一 爾生命の道をわれに示したまはん、なんぢの前には充足れるよろこびあり、爾の右にはよろこびの快樂とこしへにあり
- 端書 ミクタム 興義、又深く感ずるの義なり。

註釋

一節 四節 主としてエホバを敬愛し、之に依り頼むは、乃ち一方に於いては神と之を愛する者との一致、並びに友侶なることを包含み、又他方に於いては、他神に遠ることを示せり。

ヘンダス
テンベル
ヒ

二節 二節 ヘンダステンベルヒ曰く、なんぢはわが主なりとは、即ち出二十〇二「我は爾の神也」の答にして、又爾は我が救也、爾の外にわが福祉はなしとは、「爾われの外に神ありとす可からず」の答なりと。○わが福祉はなし。世間の風波に動揺せられず、確然天命を樂むの状、掬す可し、詩百六〇五、伯九〇廿五、又詩七十三〇廿五等を参照せよ。福祉の字は次の四節にある悲哀と照應す。而して又五、六節の杯、所領、嗣業等に相應呼

して鏘然聲あり。

三節 地にある聖徒 イスラエルは祭司の國、又聖き民なり(出十九〇

六、申七〇六) ○勝れし 原意は光輝壯麗の義なり、八〇一には尊きと譯せり。

四節 どの 原意は出廿二〇十六に基ける者にして、聘禮により妻を得るに用ゆ、交易によりて得ること也。○悲哀 二節及び十一節の確信に反對する者なり。エホバの外偶像邪神を拜む者の真正なる歡喜平和なきことを知る可し。○血の御酒 モロク(偶像の名)の如きには人の血を沃げり。

五節 二節を敷衍して、其の自ら取る所を説けり ○嗣業 詩百十九〇五十七、百四十二〇五を参照す可し。サヴォナローラ曰く、萬物の持主を持つ者何を持つ可からざるかと。パウロ曰く、萬物は爾の物なりと。

サヴォナ
ローラ

○我が所領をまもりたまはん 神の守護あるを以つて我より能く之を奪ふ者あらざる也。カルヴァイン曰く、第三の比較必要ならずといふ可らず、蓋は其の財産を保護する者なきを以て、之を信せざる所有者數々之れあり。されど吾人は神助によりて常に喜び得るが爲めに、神は彼自らを與へたまへり、と。

六節 準繩 昔者カナンの地をイスラエル十二の支族に分配せしことより來れり、書十七〇五、米二〇五、されど是れ地の嗣業をいふにあら

ず、神の自己らと與へしことをいふ。○訓諭を

七節 前節の如き豊かなる所有あるを以つて感謝せる也。○訓諭をさづけたまふ云云 神の恩恵によりて五六節を選ぶことを得たりとの義なり。○夜はわが心われを茂しふ 半夜人定まり靜然默坐、沈思を凝し來れば、耿々たる我が心光を放ちて我を訓育する所あり、然れど

も肉靈に追從し難し。基督かつてペテロを警めて曰く、惑ひに入らぬやう目を醒まし、且つ祈れ、其の靈には願ふなれど、肉體よはきなり、と。深く注意す可し。

八節 尙更に進みて其の確信を述べ、啻だに危急の場合に遭遇せし時に止らず、常に其の目を神に定めて向けぬ。ダビデの神は抽象的觀念の如き者にはあらずして、其の前に歩み玉ふ所の實在の活ける神なりき。

九節 靈魂も肉體も共に全神に依頼せり。○平安 七十人譯には望どなせり、即ち復活の義なり。然れども適當の譯にあらざるべしと想はる。是は神は常に其の生涯を護り、猶死より助く可しといふダビデの信仰を彰せる者なり。此の意味に於いては、固より基督に適用す可し。

十節 陰府にすておきたまはず。ルーテルも地獄と譯せり、然れどもダビデの意は、其の死後遭遇す可きことを言ふにあらざ、神は我を護り

て滅ほろしたまはず、又墓はかの餌えとなさずとの確ま信しんを説ときし耳のみ。
 十一節 生命いのちの道みち 肉にくの生命いのちに限かぎらず、神かみの前まへに在ありて、又神かみと共ともに在ありて見み出いたさるゝ所ところの歡喜快樂くわんきくわいらくをいふ。夫それ生命いのちは其そのの眞義しんぎ神かみと一ひとなること即すなは是これ也、是これれより不ふ死してふ觀念くわんねん因よて以もて起おこり來きたる也。實じつに神かみと共ともに在ありて永遠えいゑんを想おもへる、ダビデの心懷しんくわいと、信仰しんかう察さつす可べきなり。抑おさ神かみの己おのれを默もく示ひし、又個こ人じん的てきの約やく束そくを賜たまひし其そのの人ひとは、如何いかでか暗黒あんこくの裏うちに湮滅埋沒えんめつまいぼつせらる可べき。基督キリストサドカイ人に告つげて曰いはく、神かみは死者しにしのの神かみにあらず、活いける者ものの神かみなりと。不ふ死しといひ、復ふ活かつといひ、皆みな靈れいの生命いのちより追つ從じゆうし來きたる所ところの者ものにあらずや。

教訓

ヒュー、
マツケエ
ール

其熱心

蘇國スコットランドの殉教者じゆんけうしやヒュー、マツケエールがエデンバラの草市場くさいちばに於おいて、空むなしく刑場けいじやうの露つゆと消きえたる前夜ぜんや讀よみし所ところの最後さいごの聖書せいしよは乃すなはち本篇ほんぺんなりき。彼かれ之これを讀よみ了まりて、其そのの父ちち及および共ともに座ざに在ある者ものに語かたつて曰いはへらく、世若よし悽然せいぜん心に甘あまんぜずして、見棄みすてらるゝ者ものありとせば、是これれ即すなはち聖書せいしよの讀よみ方に在あり。余あまは主しゆを、主しゆをさへ活いける者ものの國くにに於おいて見みざる可べしと言いへり。然しかれども是これれ吾人われらをして悲かなましむるを要えせざる也。吾儕われらの行ゆく所ところ、羔かひつは乃すなはち聖書せいしよなり、其そのの都みやこの光ひかなり、彼かれの在ある所ところ、乃すなはち生命いのちあり—生命いのちの水みづの流ながれあり、活いける泉いづみありと。
 ヒューは天資てんし熱心ねつしんなる詩人しじんの性質せいしやうを有いうし、才能さいのう知識ちしきを具そなへたる一個いっごの好青年こうせいねんにして、エデンバラ大學たいがく及び和蘭ホルラントに於おいて其教育けいよくを受けたりき。チヤイレス二世せいでいミツツルトン、シヤープの徒とによりて蘇國教會けうかいの蹂躪じゆうりん荒敗かいせられし時とき、猶なほ説教せつけうをなすの允可いんかを得えたりき。彼かれが最後さいごの説教壇せつけうだんに

立ちしは、エデンバラの高教會監督教會の一派にして、他方には同時に
四百の長老教會教役者其の教會より追ひ拂はれたりといふ。事實に
千六百六十二年八月八日なり。彼教會の迫害を論じ、語を次ぎて曰く、教
會は王座に於ては、アハアより國家に於ては、ハイマンより、教會に於て
は、エダより、苦惱を受けたりき、而して彼自身は、シヤープによりて遂
に迫害せられたりき。其の極酷の殘忍なると、軀軀の羸弱なるとは、彼を
して殆ど刑場に臨むの日を待つに堪えざらしめたり。其の世を辭せん
とするや、歌つていはく、

右にひだりに 我が耳を 向くるあたりは いくくにも
別離のかぬの 音すなり 我が身のおもき いたづきは
身を死の門に 導きぬ ぶたたび健全く なさんどて
天の御門は 待ちに覺

嗚呼亦勇壯ならずや『われ常にエホバをわが前におけり、エホバ我が右
に在せば我動かざることなかる可し。このゆゑに我が心はたのしみ、我
が榮は喜こぶ我が身も亦平安にをらん』實に趣味ある言なる哉。基督
曰く、われ平安を爾曹に遺す、我が平安を爾曹に與ふ、我が與ふる所は世
の與ふる所の如きにあらず。爾曹心に憂ふる勿れ、又懼るゝ勿れ、と。此の
熱中の冷苦中の樂、豈夫れ眞悟に因らずして、知ることを得可けんや。
語を寄す、世間幾多の詩人よ、畫工よ、爾曹の描寫す可き好題目、好材料は
此の如き義人の死、亦其の尤なる者にあらずや。徒らに風月を詠じ、花鳥
を弄するは、眞詩人、眞美術家にあらざる也。

第十九篇 歌のかみに誦はしめたるダビデの歌

緒言

性質

本篇は二種の特質より成れり。一は自然界に於ける神の顯現にして、他は道に於ける其の顯現を對照する者即ち是れなり。前者は諸の天に現はるゝの榮光にして、後者は其の律法に示さるゝ榮光なりけり。五節に於て歌へるが如く、旭日の紅潮を漲らして、東天に昇り來れる時に、作りし者なる可し。全篇朝氣の潑々たる生命、新鮮と熙々たる榮光、喜悅を呼吸せり。敬虔なる詩人は、先づ神の御手の工を觀察し、而して黙々たれども、毎に永遠無窮なる證據を、其の造化主に對して有する所の、あらゆる萬般の受造物を目撃せり。然して後天啓の聖書に於いて發見す可き、神に關して尙ほ一層明晰にして、更に勝れる所の證據に向ひ、深き

注意に付
ての議論

満足の感情を以つて己自身を向けぬ。かくて彼は己を待つ義務に向つて、攻め來る可き所の試練に向つて、其の周邊に雲の如く、集り來る所の悲哀に向つて用意せり。彼は其の深く神聖にして、又靈を扶持する所の勢力なる者を知了せり。然して又心を探り且つ試み、又神の純聖と、人の多罪なるを啓示する所の道なる者あることをも知了せり。故に彼は肅然襟を正し、跪き且つ祈りて曰く、誰か己の過失をしり得んや。願くは我を隠れたる愆より解放ちたまへ（十二節）と。

本篇の主意二分せる間に、注意す可き書き方の相違あること及び其の過渡の急激なるは、元來二篇の者なりしなる可し。或る批評家をして疑はしめたりき。エワルドは前半はダビデ時代の光輝ある、而かも成功せざりし碎片の美麗なる紀念標なり。而して後世の詩人之に加ふるに、律法の讚美を以てせるなりといへり。然れども必ずしも此想像を要せ

百三十
ず。固より一節以下六節迄は確かに叙情詩にして、後半の教訓的韻語との間に、劃然著しき相違あること論を俟たず。されど主意の性質によりて、其の書き方に變化を及ぼすことは、當然のことなり。過渡の急變固より拒否す可きにあらざるも、唯だ全く叙情詩として論じ去らんとするが故のみ。按ずるに是れ畢竟前後の對照に、強き力を込めんが爲めに計りし結果にあらざる無らんや。されば此の如き結果、必ずしも感ず可からざることにあらず。
本篇は基督降誕祭に讀む可きために、選定せられし詩の一なり。教會は義の太陽の地に昇るを祝頌せり。パウロは福音の擴張弘布せらるゝとのために引用せり。羅十〇十八。而して是が爲めに、福音の擴張に導く所のインカルチーション(成肉)とは、自然に聯想隨感せらる可き親密なる關係あり。夫れ基督の成肉は、神の完全なる默示なり。此の基督は神と共

に在り、又神なりし道にして、其肉體をとり、世に降るや、天父の聖意を明
晰圓滿に彰しぬ。白晝に向つての福音及び書翰は、本篇の選びし眞の説
明なり。是は人に迄與へられたる、神の默示にして、天震を始めとし、萬物
は其證者なり。
一もろくの天は神の榮光をあらはし、穹蒼は其の手のわざを示す
二この目ことばを彼の日につたへ、この夜知識をかの夜におくる
三語らず言はず其聲きこえざるに
四そのひゞきは全地にあまねく、そのことばは地のはてにまで及ぶ、神
はかしこに帷幄を日の爲めにまうけたまへり
五日は新郎がいはいの殿をいづるごとく、勇士がきそひ走るをよろこ
ぶに似たり
六そのいでたつや、天の涯よりし、その運びゆくや、天のはてにいたる物

として其の和煦をかうぶらざるはなし

七エホバの法はまたくして靈魂をいきかへらしめ、エホバの證詞はかたくして愚なる者を智からしむ

八エホバの訓諭はなほくして心をよるこばしめエホバの誠命はきよくして眼をあきらかならしむ

九エホバを惶みおそるゝ道はきよくして世々にたゆることなく、エホバのさばきは眞實にしてことごとく正し

一〇これを黄金にくらぶるもおほくの純精金にくらぶるも彌増りてしたふ可く之を蜜にくらぶるも蜂の巢の滴瀝にくらぶるも彌増りて甘し

一一なんぢの僕はこれらによりて儆戒をうく、これらをまもらば大なる報償あらん

一二たれかおのれの過失を志りえんや、ぬがはくば我をかくれたる徳より解放ちたまへ

一三願くばなんぢの僕をひきどめて故意なる罪を犯さしめず、それをわが主たらしめ給ふ勿れ、さればわれ瑕なきものとなりて大なる徳をまぬかるゝをえん

一四エホバわが磐わが贖主よ、わが口の言わがこゝろの思念なんぢのまへに悦ばるゝことを得しめたまへ

註釋

一節 詩人は先づ創造の偉大なる、其の秩序の井然たるに感動せし言を以て筆を落せり、而して第一には天の神の榮光を彰す事實を以

てし、次に其の天は如何に創造せられしか、詳言せば神乃ち之を造り給へりとの證據を説明せり。八〇二、四、羅一〇廿、使十四〇十七〇等を參照す可し。盲動の勢力の、決して能く爲し得ざる所なることを明にす。今神の手親く之を造り、之に光を衣の如く被せ、其の讚美を示さんとて、太陽を中天に置き給へることを述べ。

二節 天を人の如くに言ひ爲し、次に晝夜を以て亦人の如くに言ひなせり。是は希伯來人の習慣にして珍しからず。

三節 天に語あり、然れども人間之に符合す可き方言なし。天に聲あり、然れども耳に語らず、唯だ敬虔にして、よく解する心にのみ語るなり。

四節 尙ほ其の證據は皆だに充分、且つ明白に斷えざるのみならず、普通一般なることを示せり。天の吊る、攸、地の載する所、何處にても等しく、聖き説教の聲は響きつゝある也。此の如く基督の福音も亦全地の極まで、弘布宣傳せらる可き也。

○帷幄を日のために 固より形容の詞なり、哈三〇十一には、爾の奔る矢の光のために、爾の槍の電光の如き閃爍のために、日月其の住處に立ちどまり、といへり。

五節 朝の景色の愉快にして、大氣の新鮮なる、横雲漸く遠山の端にはれ行き、瞳々たる旭日影、徐々に東天に昇るなる、壯麗の様より著しきものは、あらむ。デーリッチュ曰く、朝の光は新鮮と、快樂と、若やぎとを具有せり。是の故に旭日は新生涯の最初に於て、其の心の満悦せる者の希望、又は新婚の日の喜樂、其の顔色に尙ほ照々として、輝ける新郎になぞらへられたり、と。

デーリッ
チュ

七節 詩人は今や自然界に於ける神の自顯より進みて、其の道に移りて論ぜり、凡ての世人普通の性質より進みて、猶太人の特權に移れり。此主意の變更するに伴ひて、大能者の聖名亦變じて、神はエホバと成りぬ。

デル曰く、自然界の詞は吾人に神(エル)を宣言し、聖書の詞はエホバなり。前者は神の創造の能力と、尊嚴とを示し、後者は其の意見と意思とを示す也。此の主意の推移は多少急卒なること疑ふ可らず。然れど是れ唯だ比較をして、更に著しく明白ならしめん爲めなる而已。○靈魂をいきかへらしめ。是より以下神の法の正しき結果につきて言へり。死の蔭に彷徨ひつゝある靈魂も、神の法を悟るを以つて復び生命の道に歸順するなり。○愚なる者を智からしむ。心の戸を開きて妄りに臆断せず、直き心を以つて學ぶ者には聖知を賜ふと也。(提後三〇十五、太十一〇廿五、哥前一〇廿七等参照す可し)。

八節 直くして。人の曲りたる途に反對せり。○心をよるこはしめ。神を嗣業として心に善を満たしむ。○眼をあきらかならしむ。詩百十九〇十八、使廿六〇十八、弗一〇十八。

十一節 エホバの律法に従ふことの福を、個人的の經驗に照して述べたる也。

十二節 神の詞に向つて慕ふと共に之に混ざる所の恐れと、尊敬起り來る也。○たれか己の過失を知りえんや。カルヴァイン曰く、吾儕の中何人も、おのれに粘着する所の悪の百分一をも知り得ざる程、サタンの多くの網と、機檻とに縛れかゝれる者なり。○かくれたる愆。外部より來らず、心より出づる者なり。

十四節 エホバ十七回反復して用ゐたり。○誓法を保つことに於いて磐なり。○贖主。罪の力より救ふ故に贖ひ主なり。○悦ばるることを得しめ玉へ。牛の燔祭をもて禮物となし、エホバの前に受納れ玉ふ様にすること、利一〇三四を見る可し。又祈禱の受け納らるゝこと、に付きては、ホセアは斯く言へり、「爾曹言詞をたづさへ來り、エホバに

歸りていへ、諸の不義は赦して善ところを受納玉へ斯くて我等は唇をもて牛の如くに爾に献げんと。

教訓

無聲の形

無形の形は最も確實なる者なり。無聲の聲は最も音高きものなり。無聲の聲を聴く者は聰なり。無形の形を視る者は明なり。あゝ此の乾坤六台に響き渡れる無聲の聲を聴取せし者果して幾何ぞ。又天の極より天の極迄現れ渡れる無形の形を視得したる者果して幾人ぞ。

無信の學者

嘗て某の學者あり曰く、若し天に我存すてふ神の文字あらば則ち我神の存在を信仰す可し、然れども天に其の文字あらず、是れ我が神を信ぜざる所以なり、と憫む可き哉、此種の徒儕徒等は視れども見えず、聽けど

敬虔者

も聞えざるなり。夫のピタゴラスは井然たる天地の秩序正しきを觀嘆頌して『萬有の音樂』を聴くが如しといひける者を、又夫のリンニアスは微々たる一莖の草葉を見て肅如として神の背面を拜すといひける者を。

一天文學者論

嘗て米國に天文學者某といふ者ありけり、常に無神説を主張して自ら誇れり。一日公會に演説して喋々自然を陳述し、且つ語を次ぎて曰く、某の星は其光線幾十年を以て、某の星は幾百年を以つて始めて地上に達す可し、偉なる哉、宇宙遼たり此の天地然れば、則ち此人類は猶ほ蠢々たること、蟻蟻の如く、微々たること、蜂蟻に異ならず、然るに世に神あり之を守護り、又攝理の中に置くなど、とは實に笑ふに堪えたることなり、余輩は斷じて其の妄を嗤ふ、席に人あり、若し余輩が説に反對せんとならば、何人たりとも勝手に討論す可し、云云、實に傍若無人の振舞なる哉、人

人は片腹痛くぞ思ひける。折しもあれや、一人の少年あり、徐々と歩みて演壇の下に近づき、學者に謂つて曰く、先生、余は實に先生の博識深才に敬服せり、其學を脩むるや、勉めたりといふ可き也。遼遠なる天空の星辰を捉へ來りて、其の意の恣にするに任ず。今先生既に此の如く偉大なり、然れば安ぞ在天の神、先生の如き偉人物を、螻蟻蜂蝶の蠢々微々たるど同一視するの理あらんや。余は先生の演説を以つて益々有神論の確實なるを信ぜんと欲すと、語り了り徐々として退く。滿場の喝采涌くが如く、某は茫然自失したるが如く、忸怩として退きたりといふ。

録して曰く、神は知者を其の自分の詭計によりて執へ、邪なる者の謀計をして敗れしむと。智者安くにある、學者安くにある、抑も亦世の論者安くにある。神は此世の智慧をして愚ならしむるにあらざや。世人は己の智慧を待みて神を知らず、彼等須らく顧慮三省して可なり。

神の智

第廿三篇

ダビツのうた

緒言

性質

此の詩は實に最も靜かに最も確かに神を信認せる信仰の空氣を呼吸せる者なり、『死のかけ』てふ思想さへ、寸歩も侵し得ざる程、深遠與妙なる、平和立命の眞理を證明せり。凡そ世の中に、涓々として流るゝ谿水の畔、萋々たる芳草の野に、或は臥し、或は飲み、或は躍り、或は飛びつゝ、常に守らるゝ柔和の羊の有様より、いかに美しく、いかに安全に、平穩なる者はあらざる可し。此の信認の感情は、乃ち三種に説き得べし。(一)何事も缺乏するものなきこと、(二)如何なる者をも恐れざること、(三)限りなくエホバの家に住むこと、乃ち是れなり。

又他方を回顧すれば、神を形容するに、二個の肖像を用ゐたり、乃ち甲は

信仰の三

要點

第廿三篇 緒言

エホバを以つて眞の牧羊者となし、乙は其の賓客を款待する主人の如しとせり。然れども此甲乙推移の過渡は著しく明白ならず。三四兩節に於て牧羊者の形容は漸次エホバが其の民を守護り給ふを現すことに於て消滅し、而して尙ほ後部の形容を導く可きために準備せり。然れども此詩を一致聯結する所の思想と感情は、乃ち神に依頼すてふ一の思想なり、一の感情なり。

今や彼の歴史に徴證して、其の格段なる場合に推論するの必要なし。必ずや永く神の惠賜を経験して、之れに依頼し、全き平安を得たる心情の漫々として溢れし時、之を記せし者なる可し。其の語は過去の生涯の記憶によりて、美麗に彩色せられたり。ダビデ自身牧羊者たりし其の経験は、本篇の前部を想察せしめ、後部は恐くは母下十七〇廿七以下廿九迄の境遇を想起せしむるなり。當時ダビデは其子アブサロムの謀反に際

してマハナインに陣をどれり時にアンモン人等、王及び其民等の飢渴疲勞を慰問せんがために、器具食料等を贏らし來りけり。

或は書き方の簡短なるを以つて、早年の作となす者あり。然れども本篇の思想と想像の善くかくも完全に一致して、其の書き方の簡短なるは、却つて多數の批評者をして、むしろ壯年時代の作なりと想像せしむる也。

- 一 エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ
- 二 エホバはわれをみどりの野にふさせ、いこひの水濱にともなひ給ふ
- 三 エホバはわが靈魂をいかし、名のゆゑを以て我をたゞしき路にみちびきたまふ
- 四 たどひわれ死のかけの谷を歩むとも禍害をおそれじ、なんぢ我と共にいませばなり、爾の筈なんぢの杖われを慰む

五なんぢわが仇のまへに我がために筵をまうけわが首にあぶらをそそぎたまふ我が酒杯はあふるゝなり
六わが世にあらん限りは必ず恩恵と憐憫とわれにそひ來らん我はとこしへにエホバの宮にすまん

註釋

一節 牧羊者たる國民の間に於ては、自然の想像なりといふ可し。此の比喻はヤコブの先づ用ゐし所なり、創四十八〇十五。詩百九〇百七十六節は個人的なり。其民の牧者として七十八〇五十二、八十二〇二、米七〇十四、賽六十三〇十三、殊に結三十四〇の如き是れなり。最も美はしくして感ず可きは賽四十〇十一なり。又新約にては約十〇一乃至十六、同

廿一〇十五乃至十七、來十三〇廿、徒前二〇廿五、同五〇四等を参照す可し。

われ乏しきことあらじ。是の義は又乏しきこと有り得ず、又有る可からざるなりとの意味あり。現在のみならず、尙ほ未來、後日に付ても確信する所ある也。詩三十四〇十、若き獅はともしくして饑うる可きあり、されどエホバをたづぬる者は嘉物にかくるとあらじ、申二〇七、同八〇九よりも意味更に強し。是等は本篇の標語たるに過ぎざる也。ダビデ彼自身其羊の群を護り、之を緑の野に導き、又猶太にて元來缺乏しき勝なる水畔に伴ひ、野獸を防ぎたる等、一々凡て其の經驗に照して、深く神の擁護と導きを心に感ぜしなり。

二節 いこひの水濱 賽八〇六、ゆるやかに流るゝシロアの水の如き徐々たる緩流にあらず、涔々滔々巖を噛みて流るゝが如き、如何にも勞

ブルーク

エツラ

れ果たる氣力を善く復活せしむるものをいふ也。

三、四節 に至りて形容的の意義を離れ、短刀直入、其の本義に入れり。

三節 我が靈魂をいかし、ストツプ、フォルト、ブルーク曰く、神は慰藉

を與ふるのみにあらず、夫れ慰藉は品性を弱くする者なり、神は吾人に

賜ふに、能力を以つてせり、蓋は眞正の慰藉者は悲哀の時に際會し、其の

人を強むる者にして、之を他に移す者にはあらざる也。○たいしき路

イブン、エツラは之を屈折に反し、直路なりとして、曰く、彼(神)は吾儕を

して谷、丘を超えて歩ましめず、平滑なる路を行かしめ給ふなりと、夫れ

詩人の意は神の攝理を歌ふなりや、或は其の仁恵を歌ふなりや、其の二

者を想像すれば、多少相違の點なきにあらず、然れども其本來の眞意を

言へば、敬虔者は此二者を如何にして劃然分解し得べき、攝理の神は仁

恵の神なり、一は何處に始まり、他は何處に終るといふが如き、何人能

く之を定め得可き抑攝理は仁恵に走り、仁恵は攝理の中に己を失ふ。故

に詩人は御名のゆゑを以て、ど加へたるなり、善く意を注ぐ可し。

四節 神の擁護有りて、信心は敢て平安無事の時に限らず、亦危急艱

苦の來り侵す時さへ、我が支柱なり。○死のかけの谷 黯々として光

明なき所なり、谷は寧ろ狭間の義にとる可し。

五、六節 王の賓客となり、其の饗筵に列るなり、神は羊の乏しきを護る

牧者たるのみならず、又富める王者なり(太廿二〇一)

○仇のまへへ 仇は見るとも、我に害を加ふると能はず。○筵をまうけ

箴九〇二、賽廿一〇五、結廿三〇四十一。○首にあぶら 饗筵にての習慣

なり。○あふるゝなり 満つるといふよりは、尙更に多くして豊かな

る義あり。

教訓

牧羊者

エフ、ダブリユ、ロバートソン曰く、パレスタインの燃ゆるが如き天の下、清朗たる星月夜、牧者と其の群羊相慕ひ、相親むの情を生ずるなり。其の地には断崖の急流あり、山賊あり、狼あり、常に其の羊を奪ひ去らるゝの虞あり、故に其の牧者たる者は常に瞬間たりとも、其危難の爲めに之を注意擁護せざる可らず。茫々たる原野、悠悠たる天地、兩者必ず相親和するの情を惹起せざるを得ず。一は保護者の愛にして、他は感謝の生涯の愛なり。かくて兩者炎風骨を銷すの夏、朔風肌を劈くの冬、晝となく、夜となく、同情の活ける絆によりて、其の間を聯結せらるゝ也。かく相親しみ、相馴れて牧者は其の羊を識り、又其の羊に識らるゝ也。

「是れストッブ、フォルト、ブルーク本篇につき、説教の中にいへることあり」

ブルーク

ウエルシ

凡ての其の對照を調和し、凡ての其の變化を融和し、而して四節の陰鬱も、五節の勝利も、終節の結合せる回想も、預言も、皆一節の平靜なる觀察に、全く一致する者にして、ダビデの神に依頼する精神、全篇に貫徹せりと。

「ソ、ヨン、ウエルシ」云つて其の蘇國より追はれて出でんとするや、告別として此の詩を再次朗吟せり。其の會友等は之を海岸に祖道し、深く悲み惜みて、共に祈禱ししが、夫のミレトス埠頭エビソの長老等と、告別せしパウロの當年を追懷せしむる者ありき。ソ、ヨンは夫の著名なるソ、ヨンの義子にして、エデンバラ大學を卒業せる後、蘇格蘭、佛蘭西兩國の改革教會に働き、夙に名聲ありし者なり。其の自國を追はれし後、遂に再び歸來せしことなかりしが、後嘗つて彼が牧せしエーアの會友三十名、教會の使者として、彼をロケルに訪ひし時に、方り之に説教し、又

ライスの海岸にて本篇を朗吟せりといふ。
 エドワード、アーヴィンク其の死の床に横臥しつゝ、希伯來語にて本篇
 を數々反復せり。彼が最後の語は『生死共に余は主の者也』といふことな
 りき。彼は基督の降臨まで慥かに世に留る可しとの確信を有てり。然れ
 ども遂に彼は死の來り侵す所となりぬ。クリスチアンは須く『主の臨ら
 ん時に至り、活きて存れる我儕は、直に寢れる者よりも先だたじ』といへ
 る言を識りて、其の必要に調和す可き也。
 サイ、ウ井ルリアム、ハミルトンは著名なる蘇國の哲學者なり、其の將さ
 に易箚せんとするや、本篇四節の語をいへり、曰く爾の答爾の杖われを
 慰む、と。
 ドクトル、アレキサンドル、ダッフは印度の傳道者なり。嘗てヒマラヤ地
 方に旅行して、會々土人の牧羊者其の群を引率するの實況を目撃せり

といふ。牧羊者は屢々踏み留りて、後を回顧せり。偶一羊の群を離れて、峻
 なる斷崖に近くを見れば、則ち歸り來りて之に就き、而して其の杖を
 羊の後足に置き、物柔かに其の群の伴ふまで引き行けり。氏牧者に接近
 し、其の杖を視しに、其の長さ彼の丈に等く、下の半分は鐵條にして、其の
 先きは圓く屈折せりといふ。元來該地方は狼の如き猛獸多くして、群羊
 の牧せらるゝ周邊を徘徊し、之を奪ふなり。是の時牧者疾走、其の鐵條を
 揮つて、之を毆撃し、其死し、或は遁るゝ迄に至るなり。氏は之を聽き、ダビ
 デの所謂爾の答と爾の杖我を慰むといへるを深く感ぜしといふ。この
 答は神其の羊を擁護りたまひ、杖は其の敵に向つて防禦ぎたまふ者な
 り。一千八百七十八年、氏將さに死せんとし、漸く其意識を喪ひし時、其令
 愛は此の廿三篇を反復し、而して毎句の終りに至れば、毎に首肯き應答
 せりと。

又ハイソリッヒ、ハイ子なる者あり、彼は有名なる獨逸の詩人也。其凡神論を奉じたるや、忽ち嘲笑者となり、忽ち失意者となり、多くは憂悶陰鬱の間に其生を送りて、嘗て自ら其の苦痛を世界大博覽會に出品せば、第一等賞を得べしといひ、又數年間病床に在りて『蒲團の墳墓』などといひし程なりしが、聖書を繙くに當りては、多く詩篇を讀めり、其の敬虔的に深く感動せられし細君に宛たる詩あり、其の晩年の作の一なるが、其詩の主意は、乃ち神の牧者として其民を牧養したまふことを詠じたる者なりき。彼が早年の天才の陸離たる光彩は、其の色を缺きたる憾みありと雖も、其の資性の溫柔となりしは、桑榆の功を收めたりといふ可きか。

第廿四篇

ダビデの歌

緒言

由来

此の狀大なる讚美は、必ずやエホバの櫃をマベデエドムの家より、ダビデの邑なるシオンの上に移すに方りて、作り且つ歌はれたる者なる可し。母下六〇、代上十三〇、同十五〇參照す可し。按ずるにダビデがバスタインの中に残りし、カナンの山族の手より、シオンの保壘を奪ひ取りしことは、此の前短きことなる可し。故に其の古より本地住民の以て犯し難き天險なりと思惟ひし、山邑を選擇びて王の居所と定め、又宗教的禮拜の中心となせり。而して其の敵を降服せしめし後、猶ほ五十年間、キリアテヤリムに捨て置かれたりし神の契約の櫃を、其居城に移さんと決心せしなりけり。

最初の企ては偶ウザの變死によりて、ダビデの心さへ失望するに至れり。故に其の櫃をガデア人なるヲベデエドムの家に、三月間駐めたり。然れども其の家に祝福ありしを聞きて喜び勇み、再次之を移さんと決心し、王も祭司も人民も民の長老も皆一同嚴爾に音樂と歌とを以つて之を聖山に移しぬ。是の時尊嚴なる歌は天上に迄及び一節、榮光の王を入れ奉るには、此の舊き堡壘の諸門も、尙ほ狭小なりとて「門よ爾曹の首をあげよ」と命ぜられたり。

此の詩は歌者の聲は、他の歌者の聲に答へ、一の音樂は他の音樂に應じ、兩々相對せしこと明かなり。猶太の史家ヨセフス曰く、是の時王命によりて、七隊の謳歌者と奏樂者とは櫃に先ち行きて、王さへも琴を操りて、エホバの前に力を極めて躍れりと。

此の行列の聖山に到達するや、此の一、二節を歌ひ出せしことを想像せ

しむ。而して一隊は三節を以つて歌ひ問へば、乃ち他の一隊は歌つて答ふるに四節を以つてし、かくて終に二隊共に六節を合唱せり。是の時「セラ」あるが如く、歌ひ止んで劇亮たる音樂のみ響くめり。かくて祭司と利未の族行列に先行して、門を過ぎ、而して其の残れる者また上るに方りて、壯嚴なる歌再び起り、「門よ首をあげよ云云」と歌ひ、内なる者八節の「榮光の王は誰なるか」と歌ふ。而して外より再び八節の「ちからをもちたまふ猛きエホバなり云云」と歌ふ。再び十節の始めに問ひを起して、終に洪水の鳴りよどめくが如くに、其後を歌ひおさめし也。

エワルドは本詩を以つて古詩二篇の碎片の結合せられたる者なりといへるは理にあらざる。普遍なるエホバの王國を要求する所の本篇の冒頭は、恰も能く此の終末の節に、首尾應照符節を合するが如しといふ可し。かく本篇の如く説明せられたる感情は著しく、ヘブライ大詩人及び

分段

大預言者の性質を彰明する者といふ可き也。

夫れエホバは彼等のためには誠にイスラエルの約束の神なり然れども亦た天地の主なり而して其の真正の崇拜者の性質を發露せる所の本篇の諸節は如何にも此の際に適切該當するのみならず又ウザの死によりて影響せし處少小ならざるを知る可し。

本篇は分つて二部となす可し乃ち(一)聖山にエホバの入りたまふ準備のため(一—六)(二)其の入りたまふこと(七—十)これなり。

一 地とそれに充るもの世界とその中にすむものとは皆エホバの物なり

二 エホバはそのもとみを大海のうへに置るこれを大川のうへに定めたまへり

三 エホバの山にのぼるべきものは誰ぞその聖所にたつべき者は誰ぞ

四 手きよく心いさぎよき者そのたましひ虚しきことを仰ぎのぞまず、偽りの誓ひをせざる者ぞその人なる、

五 かゝる人はエホバより福祉をうけそのすくひの神より義をうけん六 斯の如きものは神をまたふもの、族類なりヤコブの神よなんぢの聖顔をもとむる者なりセラ

七 門よ爾らの首をあげよ、どこしへの戸よあがれ、榮光の王いりたまはん

八 えいくわらの王はたれなるか、ちからをもちたまふ猛きエホバなり 戦闘にたけきエホバなり

九 門よなんぢらの首をあげよ、どこしへの戸よあがれ、榮光の王いりたまはん

一〇 この榮光の王はたれなるか、萬軍のエホバ是ぞえいくわらの王なり

註釋

一、二節 イスラエルの神エホバは、亦世の造化主にして、其の主權者なり。
 二節 創世記に基けり。○其のもども云云 伯三十八〇六、同廿六〇七もどより詩想的なり。
 三節 六節 眞に神に近づき奉るに、必要なる道德的の條件をいへり。此の詩は普通なるものより、特別なる者に、神を造化主として一般の人類より、其の選民たる特別の關係に進み移れり。全能の神は亦聖き神なり、故に其の民たる者亦聖からざる可らず、又詩十五〇、及び賽三十三〇

昇天の歌

十四、五を見る可し。
 四節 虚きこと (一) 世の敗壞ぶ可きもの、伯十五〇三十一、賽五十九〇四、(二) 虚偽、伯三十一〇五、詩百十九〇三十七、(三) 偽神偶像、詩三十一〇六、拿二〇八。
 五節 義をうけん 救ひなり、賽四十五〇廿二、四十六〇十三、五十〇五、五十六〇一。
 七節 十節 神の聖所に、榮光の王として、エホバの入御し玉ふと。今や行列はシオンの門に到着せり。本篇は其の性質より言へば、疑ひもなく預言的、むしろ預表的なり。主の昇天日の詩の一として、教會に用ゐられたり。榮光の王として、基督の天位に歸り玉ひまことを讚美せしは、最も適當のことなり。凡ての心の戸、凡ての神殿、凡ての王國皆な基督の前に廣く投げらるゝ時、天に於けるが如く、地上に於ても其の承認せらるゝ

時是は全く成就應驗す可し。

教訓

聖き地

昔者神の人モーセ其の妻の父なるミデアンの祭司エテロの群を牧ひをりしが其の群を曠野の奥に導きて神の山ホレブに至るにエホバの使者棘の裏の火篋の中にて彼にあらはる彼みるに棘火に燃ゆれども其の棘燬けずモーセ言ひけるは我ゆきてこの大なる觀を見何故に棘の燃えたえざるかを見んエホバ彼がきたり觀んとするを見たまふ即ち神棘の中よりモーセよモーセよと彼をよびたまひければ我こゝに在りといふに神いひたまひけるは此に近よるなかれ汝の足より履を脱ぐ可し汝の立つ處は聖き地なればなりと。

身を潔め

神の前に立つ者

神殿に入る者

モーセ既に神に召されたりければヨシユア之に代りてイスラエルに將となり神の聖地バレストアインに進むに方りて將さにヨルダン河を濟らんとするや民に命じて曰へらくなんぢら身を潔めよエホバ明日なんぢらの中に妙なる事を行ひ給ふ可しと。萬軍の主天地の神の大御前に出で或は其の格段なる大御業に際會せんとするに方りてや惴々肅々として謹慎自ら處し齋戒自ら潔くす可きこと固よりいふを埃たざる也宜なりエホバの山にのぼり其の聖所にたつ可き者は手きよく心いざぎよく又虚偽なき者ぞ其人なる。語を寄す今や神の聖山又聖所なる教會に入り萬軍の主を禮拜せんとする者果して此の心を昧しつゝありや否や神の教會を以つてエルサレムの神殿の如く汚穢の空氣は侵入しつゝある所となさざるや否や吾儕は固より其の決して然らざるを信ずる者なり果して然るか然れ

ば則ち吾人は教會を以つて榮光の王の在し玉ふ所となし、靈と眞とを以つて之を禮拜す可き也。

第廿七篇 ダビテのうた

緒言

聖所を慕ふ

第廿六篇及び第廿八篇と同じくアブサロムアブサロムの亂に方りて作りしものなる可し。斷えず常に神の聖所に近く在る可き特權を有せし者の之を妨害阻障せられたれば強く之を想ひ出で、詠みし者なり。然れども其の感情の最も活潑にして、神の慕屋の務と法令とに従ふ熱心は、本篇を以て其の最とす。而して心の裏の凡べての他の希望は、恰も『我一事を乞へり』といへる中に、集合包含せられたるが如し。本篇前半の確立不動晏如として、全く神に依頼する様は、第三篇を想起せしむる者あり。蓋し同一の境遇に推論す可し。

(一) 六節 如何なる敵をも脅迫し得べきエホバを最も深く信認せ
る説明なり。

(二) 七十四節 現在に必要なる助力と慰藉に向つて最も熱心に叫べ
り之によりて其の靈魂は再び神に於ける多望なる依頼の上に起てる
なり尙ほ之を小分細別すれば則ち左の如し。

(一) 詩人の神に依頼すること。

(甲) (イ) 凡ての恐怖に對し其の避所として(一節)、

(ロ) 過去に於ける其の保護者として(二節)、

(ハ) 常に其の希望として(三節)、

(乙) エホバの家に常に住まんとことを願ふ其の信任を尙ほ更に説明
す(四節)、

(イ) 蓋は彼かしこに安全を發見す可ければなり(五節)、

(二) 必要に際會して詩人の祈ること、
(ロ) 而して其の敵に勝つことを期して望む可し(六節)、

(甲) 自己のためならず、

(イ) 蓋は我爾の言を辨ずればなり(八節)、

(ロ) 我は爾に救はれたる僕なり(九節)、

(ハ) 我は荒され又棄てらる(十節)、

(乙) 然れども我を救ひ玉へ、

(イ) 我に爾の途を示すことによりて、

(ロ) 我を我が敵より救ふことによりて、

(丙) 我は其の信ずる者を知る故に

(イ) 我が彼に依頼することは即ち尙ほ我を支持ふなり(十三節)

(ロ) 我をして永久彼に信頼せしめよ。

一 エホバはわが光わが救なり、われ誰をかおそれん、エホバはわが生命のちからなり、わが懼る可きものはたれぞや

二 われの敵われの仇なるあしきもの襲ひ來りて我が肉をくらはんとせしが躡き且つ仆れたり

三 たどひいくさびど營をつらぬて我をせむるとも我心おそれじ、たどひ戦ひ起りて我をせむるとも我になほ待みあり

四 われ一事をエホバにこへり、我之をもとむ、われエホバの美きを仰ぎその宮をみんながためにわが世にあらん限りはエホバの家にするどこそ願ふなれ

五 エホバはなやみの日に其の行宮のうちにて我をひそませ、その幕屋の奥にわれをかくし巖のうへに我をたかく置きたまふべければなり

六 今わが首はわれをめぐれる仇のうへに高くあげらる可し、この故に

我エホバの幕屋にて歡喜の禮物を献げん、われ歌ひてエホバをほめ
たゝへん

七 わが聲をあげてさけぶときエホバよ聽き玉へ、また憐みてわれに應へたまへ

八 なんぢらわが面をたづねもどめよ、斯る聖言のありし時わが心な
んぢにむかひてエホバよ我なんぢの聖顔をたづねんといへり

九 ねがはくは聖顔をかくしたまふなかれ、怒りてなんぢの僕をどほざ
けたまふなかれ、爾はわれの助なり、噫わがすくひの神よ、われをおひ
いだし我をすてたまふなかれ

一〇 わが父母われをすつるともエホバわれを迎へ玉はん

一一 エホバよなんぢの途をかれにをしへ、わが仇のゆゑにわれをたひ
らかなる途にみちびきたまへ

一二いつはりの證をなすもの暴厲を吐くもの我にさからひて起りたり願はくはわれを仇にわたしてその心のまゝに爲さしめたまふなかれ

一三われ若しエホバの恩寵をいけるもの、地にて見るの恃みなからましかば奈何ぞや

一四エホバを俟望め雄々しかれ爾の心を堅うせよ必ずやエホバをまちのぞめ

註釋

一節 我が光 舊約中神に附けたる名稱の、我が光といへる直接の適

一節 我が光 舊約中神に附けたる名稱の、我が光といへる直接の適

カルヴァイ

スチール

用は唯だ是の一のみ。されど生命といへるは詩十八〇廿八、三十六〇九申三十〇廿等に見ゆめり。

カルヴァインは此の我が光が救わが生命のちから、の三者を評して曰へらく、是れすなはち彼を脅迫する各種の恐怖に反對する所の三重の盾なりと。

二節 最も多数の註解者はダビデの過去の経験なりとす。然れどもスチールの説に據れば、現在及び將來に關する信仰の倚賴にして、ダビデは既に成就せしが如くに語れる程、其の敵の確かに敗るゝことを知りて言ひしなり、乃ち、詳言せば、跌き且つ休れたりとは、彼等の避く可らざる運命となり。○肉をくらはん、野獸より取り來りし形容なり、伯十九〇廿。

四節 ダビデは幕屋の務にて、期る福祉を経験せり。若し出來るならば

常に此處に住まんとことを選びたる可きが如き、平和と歡喜とを此處に
 發見せり。神は彼に其の住まんとことを許容し、又其の在すことを彼に示
 せり。而して全能者の蔭に在ること、見えたり。祭司の生活の如き全き
 敬信なる生涯の卓越したる福祉は、如何に詩人の心鏡に映り來りしか。
 十五〇、廿三〇、六十五〇、八十九〇等を見る可し。而してダビデの如く數
 次聖所より離るゝことを強ひて迫られたる者あらじ。廿三〇六と同じ
 き福祉なり。○エホバの美はしき。ルイテルは主の美しき務といへ
 り。されど是れ單に幕屋の外部の榮光に限らず、信仰の目に現れ來れる
 者を主眼とす。然れども又他の或る者は九十〇十七に於けるが如く、信
 實、寵愛の義となす。デトリッチュは友誼とす。實は其の本體の美と同時に
 他人に對して信實を説明する者なりけらし。
 五節 幕屋 是は全會衆の集會す可きためにとて、モーセの作れる物

ルイテル

デトリッチュ

にあらざ、蓋はソロモン王の之を神殿に移せる迄は、尙ほギベオンに在
 りたればなり(代下一〇三、四)故にレオンに契約の櫃を移せし時、是れが
 爲めにダビデの建てし物なり(母下六〇十七)。
 六節 歡喜の禮物 多分民十〇十を暗示するなる可し。
 七節 一頓挫來れり、神に倚賴して勝利を得べき筆法は、卒然として悲
 哀的眞面目なる願望に其の地步を譲りぬ。以上前半に於いては神の確
 實なる擁護を強固なることによりて自ら慰めしが、尙ほ更に助力を受
 けんが爲めに祈りを言ひ出でしか、或ひはかく神によりて自ら強うせ
 し時、急卒に試みを受けて一打せられしか。
 十節 犖然助けなく、友なきに至れるも神は之を棄て玉はず、賽四十九
 〇十五、六十三〇十六。○迎へ。申廿二〇二、書廿〇四、或はスチールが
 言ふが如く、神子として養はるゝなり(廿二〇十)。

十三節 轆轤迫害身に迫り來りて、四面楚歌の聲高しと雖も、堅く希望をエホバに置けること此の如し。

教訓

亡國の印

ヒマラヤの山高くして、崔嵬雲霄に聳え、アルヤヅハルタの水深くして、洋々大海に沃ぎ、五穀は穰々として千里の野に充ち、珍珠は瑩々として、滄海の底に輝く。美なる哉山海、實に印度の寶なり。然りと雖も、時利あらず、人才あらず、宗社一たび傾倒して復た血祭せず。數億の蒼生徒らに異邦の奴隸となり、今や其の國家自ら乃ち佛陀氏の所謂涅槃寂滅の域に陥らんとす。人あり而して自主の民たること能はず。宗教あり而して祖國を救済すること能はず。天下豈此に勝れる遺恨あらんや、噫、嗚呼、悲

ラウレンス夫人

い哉

時維れ一千八百五十七年腥風は起りぬ、血雨は沃ぎぬ、硝煙天に罩め、死屍野に滿ち、憫む可し、大印度帝國は遂に英國の獅子旗を奉ずるに至れり。然れども餘燼尙ほ容易に全く斷えずして、動もすれば再燃の虞ありき。當時サー、ジョン、テウレンスなる人あり、事に役すたま、其の夫人は良人と訣を別ちて、本國なる其の子女の許に歸朝す可きこととなりぬ。

彼の女は當時の實狀を記して、云へることあり、一千八百五十八年一月六日のことなりき、愈々訣別の最後の朝は來りぬ。吾等は其の常例の如く聖書を繙きぬ。而して其時共に讀みし所の詩第廿七篇をおもふごとに、其の悲哀き當時を追懷せずんばあらず。

本篇を閲讀する者は徹頭徹尾句句皆な慰藉の原泉混々として涌き出

で、盡きざるを感得す可し。
著者本篇を草するに方々朝鮮の獨立問題に關し清國に對して宣
戰の詔勅は公布せられたり而して新聞號外は數々來つて我が帝國軍
隊の勝報を齎らせり天下豈亦此の如き快事あらんや夫の清國其れ何
者ぞ徒らに專制の餘弊に慣れて而して義を知らず理を悟らず妄りに
干戈を弄して私利を逞うし事頗る亡狀なる天地鬼神亦赫として怒ら
ざらんや吾人は本篇を唱し勝利の歌を歌ひ、劔を按して起舞せんとす。
由來我に正氣の在るあり神州豈其れ印度ならんや。
又十節の如き深く關心留意す可き也。信仰の仇敵は其の家なるこ
とある可し。最愛の父母すら我を棄つること亦之れなきにしもあらず。
然れども忍びて俟つ者は彼等をも遂に救ふに至る可し。而して縱令我

れ棄てらるゝとも勝を得たる者は神之を養ひて其の子となし玉ふ可
し。新選讀美歌第六十七番の如き亦た此の意味を歌へる者なり。

第三十三篇

緒言

神は創造攝神仁惠の神なり。エホバは世を創造し(六節以下)又支配し(十節以下)而して凡ての國民王公は彼を承認するとせざるに拘らず、皆彼の手の樂器たるに過ぎず。エホバは殊に恵と愛とに於いて自らを其の選民に默示し玉ふなり(十八以下)。

分段

分つて四とす(一)緒言にして、詩人音樂を以つてエホバを讚美せんことを義人に諭す(一―三)。(二)彼は善にして且つ眞實なるが故に(四、五節)。(三)彼の言によりて萬物は造られたれば也(六―九節)。(三)彼は全知(十、十一)全見(十三―十五)全能(十六、十七)なるを以つて國民の父なること。(四)彼は其の名を信じ己を畏るゝ者を守護り(十八)救ひ(十九)且つ助くること(廿)尙ほ

イスラエルの望みの如く短き祈念を以て結べり

一たゞしき者よエホバによりてよろこべ讚美はなほきものに適はしきなり

二琴をもてエホバに感謝せよ十絃の琴をもてエホバをほめうたへ

三新しき歌をエホバにむかひてうたひ歡喜の聲をあげてたくみに琴をかきならせ

四エホバのみことばは直く其のすべて行ひたまふところ眞實なればなり

四エホバは義と公平とをこのみたまふその仁慈はあまねく地にみつ

六もろくの天はエホバのみことばによりて成り天の萬軍はエホバの口の氣によりてつくられたり

七エホバは海の水をあつめてうづだかくし深淵を庫にをさめたまふ

八 全地はエホバをおそれ、世にすめるもろくの人はエホバをおぢか
しこむ可し

九 そはエホバ言ひたまへば成り、おほせたまへば立てるが故なり

一〇 エホバはもろくの國のはかりごとを虚くし、もろくの民のお
もひを徒勞にまたまふ

一一 エホバの謀略はどこしへに立ち、其みこゝろのおもひは世々にた
つ

一二 エホバをおのが神とする國はさいはひなり

一三 エホバ嗣業にせんとて選びたまへる其の民はさいはひなり。エホ
バ天よりうかひひてすべての人の子を見

一四 その在すところより地にすむもろくの人をみたまふ

一五 エホバはすべて彼等の心をつくり、その作すところをこどくく

く鑑みたまふ

一六 王者いくさびと多きをもて救ひをえず、勇士ちから大なるをもて
助けを得ざる也

一七 馬はすくひに益なく、その大なる力も人をたすくることなからん

一八 視よエホバの目はエホバをおそるゝ者並その憐憫をのぞむもの
のうへにあり

一九 此はかれらのたましひを死よりすくひ饑饉をたるときにも世に
ながらへしめんがためなり

二〇 われらのたましひはエホバを俟ち望めり、エホバはわれらの援け
われらの盾なり

二一 われらはきよき名によりたのめり、かくてぞ我等の心はエホバに
ありてよろこばん

二二エホバよわれら爾をまちのぞめり、これに循ひて憐憫をわれらの
うへに垂れたまへ

註釋

三節 あたらしき歌 四十〇三、九十八〇一。神の能と恵みとを驚異す
るものにあらざして、むしろ感謝と歡喜の心底より新鮮に出で來れる
者、且つ舊き題目を新光におかんと求むるものなり。
四五節 義者は何故にエホバを讚美す可きか、其の理由として先づ神
の道義性を知らしむ。詩三十六〇五、六を參照す可し。
六節 地上に於ける神の愛の現在なる證據より、聖き詩人の思想は自
然に萬物の創造に歸納せり。而してエホバの言と王は其の實體の性質

に在りど、前(四節)に言ひしが如く今また進みて其の言の能と其の結果
をいへり言のことは尙ほ九節にも見ゆ。○エホバの口の氣 是れ
乃ち受造物の生命の本元なり、伯廿七〇三、三十三〇四、詩百四〇三十。
七節 天の香々たる海、の漫々たる唯だ神の全能力の演技場たるに過
ぎず。
九節 創世記より由來せり。
十、十一節 詩人は先づ神の創造力を語り出で、後其の世界を統治し
玉ふ攝理に及べり。
十二節 十八、廿三節に詳かに言へり。廿四〇一の如く一般の神なり、
然れども今前節の十一に直接に關係せり。エホバの謀略は詩百四十七
〇十九、廿の如く、神の嗣業として選び玉ひし人民詩四十七〇四の慰め
なり。

十三〇十五節 神の無所不在乃ち宇宙普遍に存在し玉ふこと并びに其の全能なるとの夫れ神は人の爲す所を觀察するのみならず其の心を創造りし者として能く之を洞知し玉ふなり。詩九十五〇八以下、賽廿九〇十五、六を見る可し。

十六七節 人力の纖弱なることを云ふ、讀者深く注意す可し。○救勝の義なり。○馬はすくひに益なく。王者軍馬多きを以つて救ひを得ず。助けをえんとてエジプトにくたり馬に依り頼む者は禍なる哉。戦車多きが故にこれにたのみ騎兵はなはだ強きかゆゑに之にたのむ。されど勝利はエホバに在り、救ひは神に在り。

十八〇廿二節 エホバを俟望み、之に依頼すること。

教訓

人間の歴史

詩人歌つて曰く、讚美はなほき者に適はしきなり。と實にエホバを讚美するの舌ある者は福なる哉。エホバをおのが神とする國はさいはひなるかな。夫れ人間の歴史は戦鬪の歴史なり、罪惡の歴史なり、墮落の歴史なり。然れども亦正義廉直敬神愛主の勝利を得たる歴史なりといふ可し。上下數千歳時に隆替あり國に興亡あり、仁人出で志士起ち義人死し、俠夫倒れ義旗翻り、將星殞ち、走馬燈の如く各種の觀を呈すと雖へども、畢竟皆な此大數を免れざるなり。曩に有りし者は復た後にある可し、曩に成りし事はまた後に成る可く、日の下には新しき者あらず、彼等は皆な自己自身を數々反復しつゝあるに過ぎざる也。其れ然り然れば則ち人生には進歩なきか、福祉なきか、希望なきか。

曰く否、エホバの謀略はとこしへにたち、そのみこゝろのおもひは世々にたつ。エホバを己が神とする國はさいはひなり。エホバ嗣業にせんとて選ばたまへる其の民はさいはひなり。視よエホバの目はエホバをおそるゝ者並その憐憫を望むものゝうへにあり。先哲云へることあり、曰く踏正勿懼と請ふらくは吾人の歴史をして、敬虔正義の歴史ならしめよ。

第三十七篇

ダビテの歌

緒言

神の攝理とは、其の世を管理統轄し玉ふことに於いて、保護せらるゝの意味なることを教ふ。作者の心情は同時に悪人の現實なる成功と利達とを觀て、動搖せられたるは疑ふ可らず。蓋は吾人夫の悪人の大に世に持て囃され、盛昌に時を得たるが如きを目撃して、神を疑ふは普通の試みなれば也。今や作者は其の時を俟ち、主に依頼し、又終始を觀察し、如何に神の應報し玉ふやを見る可きことを忠告せり。此の感情は種々の形骸に反復せられ、又美しく説明せられたり。本篇は箴言的の性質を有せり。原詩はアルファベットの順序に随つて句の首字を始めたなり。一悪をなすものゝ故を以て心をなやめ、不義を行ふ者にむかひて嫉を

おこすなかれ

二 かれらはやがて草のごとくかりとられ、青菜の如く打萎るべければなり

三 エホバによりたのみて善を行へ、この國にどいまり眞實をもて糧とせよ

四 エホバによりて歡喜をなせ、エホバはなんぢが心のぬがひを爾にあたへたまはん

五 なんぢの途をエホバにゆだねよ、彼によりたのまば之をなしどげ

六 光の如くなんぢの義をあきらかにし、午日の如くなんぢの訟をあきらかにしたまはん

七 なんぢエホバのまへに口をつぐみ忍びてこれを俟望め、おのが途をあゆみて榮ゆる者の故をもて、あしき謀略をどぐる人のゆるをもて

心をなやむるなかれ

八 怒りをやめ忿恚をすてよ、心をなやむるなかれ、これ悪をおこなふ方にうつらん

九 蓋は悪を行ふものは斷滅され、エホバを俟望むものは國をつぐ可ければなり

一〇 あしきものは久しからずしてうせん、なんぢ細密に其の處をおもひ見るとも有ることなからん

一一 されど謙る者は國をつぎ、また平安のゆたかなるを樂まん

一二 悪き者は義きものにさからはんとて謀略をめぐらし之にむかひて切齒す

一三 主はあしき者を笑ひたまはん、かれらが日のきたるを見たまへば也

- 一四 あしきものは劔をぬき弓を張りて苦む者と貧きものとをたふし、
行ひなほき者を殺さんとせり
- 一五 されど其の劔はおのが胸をさし其の弓はをらる可し
- 一六 義人のもてる物すくなきは多くの悪きもの、豊なるにまされり
- 一七 そはあしきもの、臂は折らるれどエホバは義きものを扶持たまへばなり
- 一八 エホバは完全ものゝもろくの日をまりたまふかれらの嗣業は
かぎりなく久しからん
- 一九 かれらは禍害にあふとき愧をおはず、饑饉の日にもあくことを得
ん
- 二〇 あしき者はほろびエホバのあだは牧場のさかえの枯るゝが如く
失せ烟のごとく消ゆかん

- 二一 あしきものは物かりて償はず、義き者は恵ありて施しあたふ
- 二二 神のごとほぎたまふ人は國をつぎ、神の誼ひたまふ人は斷滅さる
可し
- 二三 人の歩みはエホバによりて定めらるそのゆく途をエホバよろこ
びたまへり
- 二四 たどひその人たふるゝことありとも全くうちふせらるゝことな
し、エホバ彼が手をたすけ支へたまへばなり
- 二五 われむかし年わかしくして今老たれど義者のすてられ、或はその裔
の糧こひありくを見しことなし
- 二六 たゞしき者は終日めぐみありて貸あたふ、その裔はさいはひなり
- 二七 悪を離れて善をなせ、然ばなんちの住居とこしへならん
- 二八 エホバ公平をこのみ、その聖徒をすてたまはざればなり、彼等は永

遠にまもりたすけらるれど悪きものゝすゑは断滅さる可し

二九たゞしきものは國をつぎ、その中にすまひてどこしへに及ばん

三〇たゞしきものゝ口は智慧をかたり、その舌は公平をのぶ

三一かれが神の法はその心にあり、そのあゆみは一步だにすべることあらじ

三二あしきものは義者をひそみうかひて之を殺さんどはかる

三三エホバは義者をあしき者の手にのこしおき王はず審判のときに罰ひたまふことなし

三四エホバを俟望みてその途をまもれ、さらば爾をあげて國をつがせたまはん、なんぢ悪者のたちぼろぼさるゝ時にこれをみん

三五我あしきものゝ猛くしてはびこれるを見るに生立たる地にさかえ茂れる樹の如し

三六然れどもかれは逝ゆけり、視よたちまちに無なりぬ、われこれをたづねしかど遇ふことをえざりき

三七完人に目をそゝぎ直人をみよ、和平なる人には後あれど

三八罪をおかすものらは共にほろぼされ悪きものゝ後は必ず断たるべければなり

三九たゞしきものゝ救はエホバより出づ、エホバは彼等が辛苦のときの保砦なり

四〇エホバはかれらを助けかれらを解脱ちたまふ、エホバは彼等を悪者よりときはなちて救ひたまふ、かれらはエホバを其の避所とすればなり

註釋

一節 惡者の時めくを見て之を羨み、不義を行ふ者の途を好しとするは、道念微弱なる者の免れ難き所なり。箴廿四〇十九、三〇卅一、十七〇廿四。わが足つまづくばかり、わが歩すべるばかりにてありき、是はわれ惡き者の榮ゆるを見て其の誇れる者をねたみしによると、アプサは歌へり(詩七十三〇二三)。

二節 彼等惡者の榮華は暫しのみ、草の如く、青榮の如く、亦虹の如し。

三節 一節の反對なり。○この國にどいまり イスラエルに約束せられたる者國民としてイスラエルの榮光は國と共に立つ者なり。我等も亦與へられたる精神的約束せられたる信仰の王國に踏みどいまる可し。

四節 神の選び且つ喜び玉ふ所の事を爾も亦選び且つ喜ぶなる可し、故に神は爾の心の望む所を爾に賜ふ可し。

五節 ゆだねよ 箴十六〇三、路十二〇廿二、彼前五〇七。

六節 あきらかにしたはん 正し、審判するの義なり。

七節 忍びて俟望 現在に不満足を懷く者能く考ふ可し、自己の力に倚らずして、神に倚頼するは最も賢きことなり、雅五〇七。

八節 怒りは人を罪に至らしむる導火線なり。

九節 惡き者の受く可き業は滅亡なり(伯廿七〇十三、廿三、されど義人の苗裔救ひを得(箴十一〇廿一)其の果は生命の樹なり(同十一〇三十)。

十節 伯七〇十、廿〇九。

十二節 惡者の實狀なり。ヨブ曰はく、彼怒りてわれを撕き裂き且窘しめ、我に向ひて齒を噛みならし、我が敵となり、目を鋭くして我を看る云

云。

十六節 少しの物をもちてエホバを畏るゝは多くの寶をもちて擾煩あるに愈る。蔬菜をくらひて互に愛するは肥えたる牛を食ひて互に恨むに愈る。

十八節 志りたまふ 守護し注意するの義なり。

廿一節 ものかりて 強ひて無理に借るの義なり。

廿三節 人は心におのれの途を考へはかる、されどその歩みを導く者はエホバなり。

廿六節 我等は世に與へんとし、世は我等より取らんとす。前の廿一節なる悪者の行爲とを比較す可し。

三十節 かたり 又思ふの義なり。

三十一節 神の法を守り、主義によりて立ち、主義によりて進む者なり。

三十二節 悪者は陰謀を企て、竊かに思ひをめぐらして義人を害せんとす。

四十節 全篇の髓なり、よく味はふ可し。

教訓

トゲルハルト
パウエル、ゲルハルトは此の詩によりて有名なる讚美歌 *Beſel du deine Werk* を作りしが、ルイラルの *Ein feste Burg* (新選讚美歌の神我が城なり) に次いで獨逸にて嘖々傳唱せらるゝものなり。シヨン、ウエルレー之を英譯にせり。

初めブランデンブルグ公不法の行爲あり、ゲルハルト之を争ひて、其の意に觸れ遂に公の爲めに放逐せらる。ゲルハルト乃ち妻子を提げて怒

學生を送るの歌
教會創設の歌
王井ザ女

忽ベルリンを出づ。然れども心にもあらぬ旅行なりければ、何所を指して行かんよすがもなく、妻頗る戚める色あり。是の時彼徐るに本篇の五節を引證して爾の途をエホバにゆだねよ、彼によりたのまば之をなしとげたまはんと慰めつゝ、ともに庭園に入りぬ。而してとある橋の木かげに憩ひつゝ、其の歌を綴りて之を妻に讀み聽かせぬ。其の夜たま／＼メルゼブルグ公の使者二名來りて其の宮中に召し之を優待せんとの命を傳へたりといふ。此の歌は善く彼が品性と其の生涯を説明したる者なり。獨逸の或る高等諸學校にて學生の其の業を卒へて去らんとするや、此の歌を謳歌しつゝ之を其邑門に送るの風習ありたり。又一千七百四十三年米國フレラデルフリアに於いて第一路得教會の創設せらるるに方りても、亦此のゲルハルトの歌を以つてせり。
一千八百〇六年のことなりき。エナに於ける戦争の不幸なる報知の始

リヴィン
グストーン

ペールリ

めて普魯西女王ル井ザに達するや、女王は忽ち泣き沈みて終に地に倒れしが、後僅かに起ち上りて、物柔かに此の歌をピアノに合せて唱ひぬ。其の曲罷むに及びて、其の眼はいと清く晴れ渡りて、其の心も亦和暢きて長閑となりけり。
此の第五節は夫の有名なる亞非利加の傳道者、又探險者たりしダヴィド、リヴィングストンの人を食ふて蠻民の間を跋渉し、危険の境を踏破するに方りて、常に其の精神を鼓舞し、其の信仰に水灌ぎし句なりといふ。
又此の第廿五節はシヨルヴァイスウードのロバート、ペールリが、一千六百八十四年十二月廿四日其官爵を奪はれエデンバラにて死に定められし時、其の若き子なるデヨイシに與へし句なり。彼は有名なるシヨン、ノックスの曾孫にして、其の宗教上又政治上の意見のため、幸なく

して怖れ且つ憎まれたりし也。ドクトル、ジョン、チーエン、蘇克蘭なる一友人に書を裁し、ペールリーのことに付いて曰へらく、卿等は實に卿等の間に大精神の人物を有せり、シヨルツイスウイドのペールリー氏の如き、余が殆ど未だ曾つて遭會せざる所の最大なる伎倆を有せる一人物なりと。

其迫害

ペールリーはエデンバラの舊刑場に建設せられし斬首臺頭演説を試みんとして、『プロテスタント教を愛する余が愛は、余をもて茲に至らしめたり』と、將さに語を次がんとするや、驟々たる鼓聲高く起りて遂に再び言ふことを得ざりき。是より先き彼は其の死を知り、證して曰へらく、余は神の我が神にして、又我が業なる數多の反覆せられたる確認を有せる、我が神の慈愛仁惠なる心の上に、我が妻子を委任する也。又其の死の前宵彼を訪へる其子ヂョーヂに向ひ、詩人の證據を信認すること

を命ずらく、『われむかし年わかして今老たれど、義者のすてられ、或は其の裔の糧こひありくを見しことなし』と、果せる哉、子は父の價値を證明せり、ヂョーヂは革命の後高官に昇進り、ロバート、ペールリーの苗裔は王國に於ける高貴なる家族の一位を占むる也。

第三十九篇

俗長 エドトンにうたはしめたるダビデの歌

緒言

エワルド
の評

エワルド曰く詩篇の凡ての悲哀歌中其の最も美しきもの也。蓋し溢美にあらざる可し。其の深き歡喜は猶ほ其の陰々き憂鬱の中に存し。又た人生の最も巧妙なる合奏を奏する所の純粹質朴なる感情の中に在り。作者は悲哀の囹圄に囚へられ、又是が爲めに其の心を攪き亂されたりき。而して自から其の譴責の由つて來る所以を解することあたはずりき。夫のヨブが神の攝理の秘密に關して爲せしが如く、神と議論せしなる可し。又質疑せしなる可し。又其の口はヨブの如く議論にて充ちしなる可きも、神に反對する徒輩に遭ひて、辭柄を與へんことを恐れ、自ら己を制して其の溢るゝ感情を説かざりき。而して彼の周邊には其の信

慰藉

仰を異にせる者、彼を誤解せるもの、又彼が忍耐することあたはずして、怨言く言を喜びて其の口頭より捕捉へんと待てる者ありき。故に彼は其の口をつぐみて、悪者の畏にかゝらざらんことを心がけぬ。然れども、遂に自ら制するに堪え得ずして、言ふに至れり。されど其の言ふ所は苦みにあらず、訴へにあらず、神の攝理を問ふにもあらず、只だ貞節なる服従を以つて、教訓のために問ひしなりけり。彼は此の須臾の間に、而かも艱難多き生涯の意義を學ばんとて、「エホバよ願はくは我が終りど日の敷のいくばくなるを知らしのため」(四節)といへり。而して世は空の空にして、富貴の愚なるを見、乃ち其望み唯一目的たる神に向ひて、「主よ今何をかまたん、わが望みはなんぢに在り」と大觀するに至りぬ。是に至りて、彼が靈魂は其の慰藉を發見したる可し。想はる。然れども事實は決して然らざるなり。尙ほ前と等き筆法は其の跡を藏めずして、

其の眼には滴々として落つる涙あり而して其の叫び出づる所は人生の須臾なるが爲めにして其の死に勝ちしが爲めにはあらざるなり如何に天真なるぞまた如何に感ずべきぞ

本篇は詩三十八〇、六十二〇及び約百書と對照す可き諸點あり此の四節を伯七〇十一、二十一、九〇十七、八、十〇一、十七に、又五節を伯六〇十一、二、七〇一、十、十〇廿、十四〇一、三に、又六節を伯百十四〇廿一、二、及び同廿九〇、三十〇に比較せよ此の二記者の調子と解説の相類似せるは甚だ趣味ある所の問題なりヨブ此の記者に據りしか記者ヨブに基きしか、二者果して如何記者若しヨブによりしとせば則ち本編はダビデの自作にあらざること明白なり何となれば約百書の成りし時代はソロモンより以前となすこと難ければなりトルップ、デーリッチュの徒は、ヨブ本編より借りたりといふ然れども明

對照

約百書の關係

確なる論據なくして又個人的批評の同一ならざるは是れ亦疑問なりとす可し五節及び十三節の外に思想ならびに解説の類似の甚だ著しきもの恐くは之れあらず

本編の主眼なる人生の短くして又確實ならざること詩九十〇亦之をいふ而して其の言ひ方の高尚にして且つ感ず可きことは彼本編に勝れりといふ可し人生の短きことに付いては此の五節を九十〇五に、此六を彼の九十に、罪のことについては此の八十一を彼の七八に、教訓のため祈ること付ては此四を彼の十二に、神の恵に訴ふことに付ては此の十二、三を彼の十四、五に對照せよ茲に今較著しき比較の點あり本編は悲哀的願望を以つて結ぶに『我こゝを去りてうせざる先きに爾面をそむけてわれを爽快ならしめたまへ』といふを以つてせり然れども第九十編は喜び勇める希望を以つてし世短意常多に勵まされ

主意

て世にあらん限り神の工を爲す可き熱心は「エホバの佳美をわれらの上にのぞましめ、われらの手のわざをわれらの上に確からしめたまへ」といへり。

分段

分つて二とす、(一) 一三詩を作るに至れる序文的由來、

(二) 四十三當時に於ける詩人の情感を説く。

更に細別すれば、則ち三とす可し。

(イ) 四五、人生の虚空を感じ、之れにつきて正當なる教訓を得んことを

祈る、(ロ) 六十一、其虚空きことの告白及び罪惡は譴責の答を來す

可きを知ることを、(ハ) 十二三、人は世の寄寓者にして、其の地上に寓

するの日も僅少なることなれば、神の彼に聽きたまはんことを更に祈

念ること等なり。

一 われ曩にいへり、われ舌をもて罪を裁かさざらんために我すべての

途をつゝし、しみ惡者の我が前に在るあひだは我が口に銜をかけんと

二 われ黙して啞となり善言すらことばにいたさず、わが憂なほ起れり

三 わが心わがうちに熱し、おもひつゝくるほどに火もえぬれば我舌を

もていへらく

四 エホバよ願はくはわが終りと我が日の數のいくばくなることを知ら

しめたまへ、我が無常を志らしめたまへ

五 視よなんぢ我がすべての日を一掌にすぎさらしめたまふ、わがいの

ち主前にてはなきにことならず、實にすべての人は皆その盛時だに

もむなしからざるは無し、セラ

六 人の世にあるは影にことならず、そのおもひなやむことは虚しから

ざるなし、その積蓄ふるものは誰が手にをさまるを知らず

七 主よわれ今何をかまたん、わが望みはなんぢにあり

八ねがはくは我をすべての徳より助けいだしたまへ愚なるものに誹らるゝことなからしめたまへ

九われは黙して口をひらかず此はなんぢの成したまふ者なれば也

一〇願くはなんぢの責をわれより放ちたまへ我なんぢの手にうちこらさるゝによりて亡ぶるばかりになりぬ

一一なんぢ罪をせめて人をこらし、その慕ひよろこぶところのものを、蠢のくろふが如く消えうせしめたまふ實にもろくの人はむなしからざるはなし、セラ

一二あゝエホバよねがはくは我が祈をきゝ、わが號呼に耳をかたぶけたまへ、我が涙をみて黙したまふなかれ、我はなんぢに寄る旅客すべてわが列祖のごとく宿れるものなり

一三われこゝを去りてうせざる先になんぢ面をそむけてわれを爽快

ならしめたまへ

註釋

一節 われ曩にいへり 詳かに言へば、我思ひ且つ此の決定をなせりとの義なり、彼其の言ふ所は、怨言なりと誤解せられんことを恐れたり。されど其の心の悲愴は此の決定に打ち勝ちて、遂に躍然として外に現出するに至りぬ。凡そ感情の他より妨礙せらるゝや、倍々熱して炎々、遂に制止すること能はざるに至るは、勢の自然なり。エレミヤ曰はく、エホバの言我が心にありて、火の我が骨の中に閉ぢこもりて燃ゆるが如くなれば、忍耐につかれて堪えがたしと。

四節 人生を觀し來れば必ず此の問題起らざるを得ず。

六節 齷齪として經營り營々として勞し心は常に形のために役せられ身死して事に虚し前人既に之を悔いて後人未だ全く悟らず常に後人をして後人を哀ましめ後人をして更に其の前の後人を哀ましむ而して遂に大悟達觀に到達するの人少し如何に悲しからずや伯甘七〇十七傳二〇十八廿一廿八

七節 幸福なる未來世の生涯に於ては彼未だ確然として悟了るに至らずと雖も其の信仰は死の迫れるときに於てすら猶ほ活ける者として又活る者の神としてエホバに倚賴して安心せり是れ乃ちヘンクステンベルヒが茲に於て亦看取せしが如く現在の地位は四面晦暝の間に在り其の來世の觀察に於ては憂鬱煩悶の夜に在りながら其の自己を失ひつ其の信仰を絶對的に又躊躇なく全能者の聖手に一任せしは實に舊約時代の卓越超俗の信仰と稱せざるを得ざる也 ○今何をか

またん 悲哀觀より一轉して不變不易なる神に向ふの過渡なり千鈞の力あり又千金の價あり

八節 すべての徳 今や直ちに凡ての悲哀と凡ての煩擾の牙城を衝きとめたり

九節 口をひらかず 性急の言によりて過失を犯すことあらんを恐れ之を神の前に反覆し而して其の由來を辯ぜり是れ乃ち三十八〇十三に等し然れども彼にては人に向つて黙し此にては神に向つて口を開かず

十節 我爾の手 意味強し自己の纖弱なると己の上到手を置きたまひし神の能とを無言の中に比較せしことを含めり

十一節 尙ほ深く神は其の責を取り去る可きことの理を述ぶ

○意のくらふが如く 或は云ふ人の美は弱くして亡ぶること意の如

し(伯四〇十九)と或は云ふ神の人の上に働きたまふこと猶ほ靜かにして秘密なること意の如し然れども其の結果は確實なり(何五〇十二)。
十二節 人生すでに此の如し須く永遠無窮の神に祈る可き也。
○旅客 彼前二〇十一、來十一〇十三、創廿三〇四、代上三十九〇十五、十三節 伯七〇十九、廿廿一、又七〇八九〇廿七。

教訓

五世紀の頃舊約聖書歴史家にソクラテスといふ人あり、バムポ一なる者につぎ左の物語りを残しぬ。
バムポ一 一日某てふ學者の許を音なひて詩篇のことにつぎ教へを請ひけり。學者乃ち第三十九篇を開きて「われ曩にいへり、われ舌を以て罪

バムポ一

を犯さざらんために我すべての途をつゝしまん」と讀み始めぬ。バムポ一は此の最初の文章を聽きて先づ此の第一の課程を學ぶ可しとて暇を乞ひけり。其後少しも再び來らざりしが二月を経、其師偶々途にて彼に邂逅ひければ、之れに何時來るやを問ひぬ。バムポ一は尙ほ未だ其の第一の課程を學び得ずと答へぬ。其後四十九年を経、同一なる問ひを爲せし人に、亦同一の答辭を爲せしといふ。

使徒ヤコブは、人たれも舌を制し能はずといひしが、バムポ一は最良の注解者なり。然れども彼若し此の七節なる、主よわれ今何をか待たん、わが望みは爾に在り、といふ其の師の言に従ふか、或ひは又使徒の言へるが如く、上よりの智慧は第一に潔く、次に平和寛容雅三十七といへる教へを求めしならば、即ち恐らくは更に勝れる成功を見しならん。世間バムポ一たらざる者、果して幾人かある。

夫の有名なるカルザイ其晩年に至り心ならずも肉體に痛く苦惱ありし時數次ヒゼキア王の言なる『我は鳩の如くうめきわが眼は上を視て衰ふ』(賽三十八〇十四)を反覆し之に次ぐに此詩の九節なる『われは黙して口をひらかず此はなんぢの成したまふ者なればなり』を以つてせり。

第四十二篇

俗長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

緒言

此の第四十二篇より第七十二篇までは詩篇の第二部に屬するものにして神に對するの名稱前部に異なれり第一部にてはエホバと稱し第二部にては神(エロヒム)といふ。デトリッチユの計算する所に據れば前部にてはエホバの字二百七十二回にしてエロヒムは十五回なり本部にてはエロヒムの字百六十四回にしてエホバは三十回なり第二の相違の點は端書にあり前者は作者ダビデにして後者は利未の謳歌なり。却説本篇の年代と作者を審みせずと雖も場所は地方なること疑ふべからず詩人は多分ヘルモン山(六節)に近きヨルダンの東部に在りたりと見ゆ其の地方には追放せられたる者の避難所ありき多くの註解者

著作の場

エホバ
エロヒム

はダビデ其の子アサロムの難を避けて遁れ作れる所となせり。母下十七〇廿四以下を見れば、エリコに近きヨルダンの淺瀬を渉り、東方の高原に登り、マハナイムに難を避けたり。是の地は昔者ヤコブが神の萬軍を目撃せし邊にして、蒙塵の王は其の寧所を茲に求め、其の民等は近邊の曠野に留れり。

作者に付
ての異論

今此の詩を見れば、シオン山上に於ける神の聖所に接近することを禁歇せられたるの語氣あり。然れども是はダビデ當年の境遇に適應する者にあらず、ダビデは其のエホバを信奉するを嘲笑する敵(三十)の中にあらず、却て敬虔にして彼の如く宗教的友人と共にありき(母下十七〇廿七九)。されば縱令其の子非常の行爲ありて、其の臣僚の亦之れに與みする者ありといへども、九節の如く『我わが磐なる神にいはん、なんぞわれを忘れたまひしや、なんぞわれは仇の志へたげによりて悲しみあ

テ、ウエツ
ト、マウレ
ル

フ、ハイヒ
ン、ゲルエ
ロ、ド

りしや』といふが如きを要せざる也。故にデ、ウエツト、マウレル等の如き、此詩はエロポアムの時代に神殿に接近することを禁ぜられし祭司なるか、或はエルサレム城の没落に際して、カルデア人に誘はれて都城を去らんとし、低回遅々として遙かに回顧し、最後の嘆息を洩せし祭司の悲歌なる可しといふ。フ、ハイヒンゲルは之を以てアタリアに追はれし利未人の作なりと爲せり。エワルドはエホヤキム王のアッスリアに囚虜となりて行かんとするどきの自作なりといふ。然れども詩の調子より觀察すれば、バビロンに捕はれて彼地に移るよりは、むしろその故國に速かに歸らんことを希望する者に似たり。
一 あゝ神よ、まかの溪水をしたひ喘ぐがごとく、わが靈魂もなんぢを志たひあへぐなり
二 わがたましひは渴ける如くに神を志たふ活神をぞ志たふ、何れの時

にか我ゆきて神のみまへにいでん

三かれらが終日われにむかひて、なんぢの神はいづくにありやとのし

しる間はたゞ我が涙のみ晝夜そゞぎてわが糧なりき

四われむかし群をなして祭日をまもる衆人どもにゆき歡喜と讚美

のこゑをあげて彼等を神の家にともなへり、今これらのことを追想

してわが衷よりたましひを注ぎいだすなり

五あゝわが魂靈よ、なんぢ何ぞうなたるゝや、何ぞわが衷におもひみだ

るゝや、なんぢ神をまちのぞめ、われに聖顔のたすけありて我なほわ

が神をほめたゝふべければなり

六わが神よ、わがたましひは、我が衷にうなたる然ればわれヨルダンの

地よりヘルモンよりミザルの山より爾をおもひ出づ

七なんぢの大瀑のひゞきによりて淵々よびこたへ、なんぢの波なんぢ

の猛浪ことくくわが上をこえゆけり

八然はあれど晝はエホバ其の憐憫をほどこしたまふ、夜はその歌われ

どもにあり、此のうたはわが生命の神にさゝぐる祈なり

九われ我が磐なる神にいはん、なんぞわれを忘れたまひしや、何ぞわれ

は仇の志へたげによりて悲しみありしや

一〇わが骨もくだくるばかりに我が敵は終日われにむかひて、なんぢ

の神はいづくにありやと言ひのゝしりつゝ我をそしれり

一一あゝ我が靈魂よ、爾何ぞうなたるゝや、何ぞわがうちに思ひみだる

るや、爾神を俟望め、我尙ほわが顔の助なる我が神をほめたゝふべけ

ればなり

註釋

一、二節 神及び聖所に向つて望む所の熱心。

二節 渴けるごとく 三十六〇八、九、賽四十一〇十七、五十五〇一、耶二

ソ
ン
|
ロ
ボ
ル
ト

〇十三。ロボルトソン曰く、無窮の願望として最も良く記せられたる人心に於ける希望茲に在り。制限ある物は満足せしめざる様に吾人は造られたり。夫れ人の運命は不満足なる可からず、然れども不満足なり。無限の善—目之を見、心之れを想像せし物の外なる美、缺點なき正汚斑なき義—是等に向つて慕ひ望むは乃ち神を渴けるが如く慕ふとなり。

〇活神 偶像に反するのみならず、凡ての死せる抽象に反對する、活けるベルソン、凡ての生命の原因なり。ロボルトソン曰はく、吾人は發見す可し、吾人の要する所のものは無限にあらず、制限なき其の者なり。愛は

此の宇宙の律法なりと感ずるにあらずして、其の名は愛なる者を感じ得するに在り。何となれば、秩序の此世界に於て其の依つて以て立つ所の中心なる者なく、又其の存在に付て、其の説明者なく、又此の多般なる謀計の世に於て、天に其の震ふ所の温和と、共に其の清潔を與へし、有心的の感情なしとせば、則ち此の秩序や、感情や、謀計や、知識や、是れみな唯だ驚く可き抽象たるに過ぎずして、吾人は此の恐る可き宇宙に於いて、然として孤立せんのみなればなり。其のベルソナリテ、(有心者)の意義失はるゝときは、乃ち暗黒なる瞬間なり、不死を疑ふよりも、尙ほ恐る可きものなり云云。

〇神のみまへ 普通神殿の聖所に行くことに用ゆ、八十四〇七、出廿三〇十七。又神の面の前をいふことは、出三十四〇廿四、申十六〇十六、卅一〇十一等に見ゆ。

三節 嘲笑する所の敵の言によりて哀むこと。○なんぢの神 是れ嘲笑の最も苦き者なり、七十九〇十百十五二耳二〇十七米七〇十に太廿七〇四十三を比較対照す可し。

ロポルトソソ曰はく、是れ宗教的混雑に於ける陳套の事たり。同情なき世界は嘲り且つ誤解する者なり。精神的苦痛に於て彼等は問ふなり、曰はく、何故に彼は他人の如くあらざるか、と。親戚故舊の死するや、彼等は云ふ、なんぢの深き悲む可き不信仰なりと。不幸に際會するや、彼等はなんぢを慰藉むること、ヨブの友人の如く爾を訪問して爾の靈魂は神に向つて叫ぶにも拘らず、彼等は爾を目して不信なりといふ。殊に其の暗黒酸慥たる時に臨みて、我が神、エリ、エリ、と云ふや、彼等は云へり、俟てエリヤ來りて彼を救ふや否や試む可し、と。

四節 過去の祝福を回想し來りて自ら己を慰めんと企つること嘗て

敬神の徒と共に歡び共に讚美し、此上なき福祉を感ぜしに、今は昔者の夢となり了んぬ。苦痛の時に方りて過去の喜樂を回想する程苦きものはあらしむ。ダンテが嘆きしも實に道理なりけり。○歡喜と讚美 是は旅の隊をなして音樂や讚美歌を合唱しつゝ、都城に上りて節會に參會する仲間のことにて、母下六〇五を見る可し。又京城詣の歌、詩百二十より百三十四篇迄は此の如き場合に使用せしなり。○これらのことを追想 苦痛と慰藉と混合せり。曩日には共に隊の友人等と喜び勇みて、聖き京城に向ひ旅行せしに今は空しく旅の空、天の一方を遙かに望みやりて、今昔の感に堪えざることを察するに餘りあり。テリリツチユは之れを苦日の回想と名づけぬ。

五節 靈魂に向つての戒告。カルヴァイン曰く、ダビデは今茲にて自己を二分して、吾人に示したりと。

是れ乃ち信仰と憂鬱の二精神間及び高き性質と低き性質又靈と肉との間の混亂也。されど神によりて生れたる信仰は、其の自然の懦弱なる憂悶、屈託を禁歇する者なり。○神をまちのぞめ、吾人が爲す所の過失は神に向つて全力を注ぐに代へ己に依つて慰藉を求めんとするに在り。されど神は昨日も今日も變らず在りて在る者なればなり。

ロホルト
ソン

ロホルトソン曰く、神の現在したまふてふ信仰の感情及び神の斯くある可しとの信仰の望みよりは別種なり。有形の障害來りて靈魂の窓を朦朧として暗くするの時あり、傷つける神經は生命を單に保存するに過ぎざるの日あり。知力的の困難は決定に向つて壓制し、神を閉ぢ出すの年月あり。其の時信仰は希望によりて原位に回復せられざる可からず。爾等今我が爲す所を知らず、されど後之を知らん。漠々たる陰雲、駭々たる暗黒彼を圍繞することあらん。されど義と眞理とは是乃ち神の

寶座の在る所なり、我が靈爾を望むなれ。○我なほわが神をほめたまふ。轍柯落魄の間に在りといへども、猶ほ前に爲せしが如くす、其の堅信知る可き也。

六節 前の一部は靈のうなたるゝに終りしが、後部は希望の光に向つて再び起たんとす。

六七節 神に隔離し其の現在の地より遠く僻在するは其の心を制抑すること。○然ればわれわが靈魂衷に弱し時我エホバをおもへり、しかして我が祈り爾に至り、なんぢの聖殿に及べり(拿二〇八)といふに似たり。○ミザルの山、ヘルモン山の一峰なり。

八節 然れども猶ほ失望より起つ所の勉勵することなり。○晝、又夜もどより詩想的にして常にあることをいふ也。○憐憫をほどこし

たまふ イブン、エズラ及び其の他の者の想像するが如く、過去にあら
ず、詩人失意の時に方りて希望の光線燦然として彼に照り來れり。四十
三〇三。〇其の歌 彼(神)は人をして夜の中に歌を歌ふに至らしむ(伯
三十五〇十)に同じ。
今や此の歌は其の生命の神に献ぐる祈禱なりといふ實に篤信の詩人
なりけり。

教訓

鹿は溪水を志たひ喘ぐが如く、わが靈魂もなんぢを志たひ喘ぐ也、とは
初代の基督教徒が迫害に遭遇するに方りて、數々其思想を代表せし者
なりき。當時彼等が難を避くる所とせし、地下の墳墓の壁に鹿を徽號と

して普通に用ゐたりき。又此詩を集會の終りに歌ふこと數次なりき。
あるわが靈魂よ、なんぢ何ぞうなたるゝや、なんぞわが衷におもひみだ
るゝや(五節)。一千六百二十一年プラグーにて被害を受けたるボヘミア
の殉教者の死に當りて、シヨン、シユルチスも其の一人なりしが、斷頭臺
上にありて、此の言をいひ、猶ほ語をつぎて「なんぢ神を望め、蓋は我なほ
我が神をほめたゝふべければなり、」義者の眼には死するが如く見ゆ
るなり、されど彼等實は其休息に就ける也と語りて跪きつゝ、なほ言へ
らく「來れ、來れ、主イエスよ、踰躅ひたまふ勿れ」と、かくて其の頸は彼を見
棄てたり。

呦々たる鹿鳴、野の草を食ひ、溪の水を飲む、懇誠衷心より發し、自然の熱
情眞に掬すべきものあり、義人の神を慕ひ求むるや亦此くの如きに異
ならず、夫れ水の起るや、混々涌きて泉となり、濛々走りて瀬となり、濛々

二百二十六
湛えて淵となり或は松根を洗らひ或は岩を噛み終に洋々として江海
に入る今全編を通讀すれば則ち大に之れに肖たる者あり神は猶ほ浩
蕩淼漫たる蒼海の如きか本編の終節は恰も水の流れて遂に其の終極
に安ずる者の如し噫呼吾人の生涯をして亦此の如く清然たらしめよ
また夫の流水の如く自然たらしめよ又混々涓々生氣をして涸死せざ
らしめよ。

第四十五篇

百合花のまらべにあはせて伶長に歌はしめたるコラ
の子の教の歌愛の歌

緒言

王者の大
婚
王者誰

王者の聘禮の日の爲めに作られたる結婚の歌たること疑ふ可からず乃
ち猶太の王と外國の王女との婚姻を祝賀頌讚する者なり然れども如
何なる特別の王の名譽のためなりや明白ならず舊くして且普通なる
註釋者は之を以つてソロモン王と埃及王パロの嬢との婚姻なりとす
フリーアエルドはツロの王ヒラムの嬢となし十二節を其の證とす王上
十一〇一を見ればシドンの婦又ソロモンの諸妃中にありヒッチヒは
アハブ王とシドン王エテバアルの女イゼベルとに歸し而して此の八
節の象牙の家と王上廿二〇三十九とを引證すデーリッチュは猶太國

史中第二のソロモンたるヨシヤパテの子ヨラムとアタリアとに歸す。而して此王はソロモンの如く外國貿易をなせし者なり。乃ち貿易品は黄金象牙等なり。又恐らくは象牙の殿アタリアの父アハアの象牙の家(王上二十二〇三十九、歷三〇十五對照)とに推論し得可し。又更に波斯王のためにせしものなりとの説あれども、確實なる論據あるにあらざるなり。

ソロモン

全篇に現れたる王の尊嚴、榮華壯麗等を通觀すれば、猶太中ソロモン王の外に適用す可きにあらざる。ソロモンは元來平和の人なりしが、本篇の王は軍人なり、故に不都合なりとの反對論は探るに足らず。或る點に於ては詩歌たることを許さざる可からず。擴張せられたる王國の勝利の觀念と聯想せらるゝこと當然の勢なり。加之ソロモン王師を出せしことあり、又兵車千四百輛、騎兵一萬二千人ありき、されば何故に此三四節

眞王者

の如く歌ふ可からざるか。然れども「ソロモンより大なる者茲に在り」、イスラエルの眞王はダビデにあらざる。ソロモンにあらざる。彼等は唯だ其の雛形たり。豫表たり。模型たるに過ぎざる也。唯一の王は獨りの彼なり。彼に於いて神人は其致を合するなり。

新郎

基督自ら教會の新郎なりと宣へり(太廿二〇一廿五〇、弗五〇三十二、哥後十一〇二、黙十九〇七、廿一〇二)神亦猶人の新郎と言はれしことあり。(賽五十四〇五、耶三〇一、結十六〇八、何一〇二)然れども本篇は譬喩にあらざる。猶太の歴史に於ける實際の頌讚也。而して猶太の歴史は摸型的なる事實よりして、更に高尚なる意味を導くものなり。

本篇をメシヤ的に説くは最も舊説なり。來一〇八九には基督の神性の

ために此詩の六、七節を引用せり。

本篇は重なる二の部分と將來に向つての譬喩的形骸にて短簡なる結末とあり乃ち、

(一) 一〇九 王者の新郎を頌讚すること、人に勝れる其の美唇の文雅勝

利の力神聖なる尊嚴及び其義を讚むること、
(二) 二〇五 新婦の服装、音樂にて其の行列すること、

(三) 三六七 將來の諸王子に向つての先見と希望是也。
一 わが心はうるはしき事にてあふる、われは王のために詠みたるものをいひいでん、わが舌はすみやけく寫字人の筆なり

二 なんぢは人の子輩にまさりて美しく文雅そのくちびるにそゝがる、このゆゑに神はとこしへに汝をさいはひしたまへり

三 英雄よなんぢ其の劔その榮其の威を腰に佩ぶ可し

四 なんぢ眞理と柔和とたいしきそのたみに威をたくましくし、勝ちをえて乗りすゝめ、なんぢの右手なんぢに畏るべきことを教へん

五 なんぢの矢は鋭して王のあたの胸をつらぬき、もろくの民はなんぢの下にたふる

六 神よなんぢの寶座はいやとほ永くなんぢの國のつゑは公平のつゑなり

七 なんぢは義をいつくしみ悪をにくむ、このゆゑに神なんぢの神はよろこびの膏をなんぢの偈よりまさりて爾にそゝぎたまへり

八 なんぢの衣はみな、沒藥、蘆薈、肉桂のかをりあり、琴瑟の音、象牙の諸殿より出で、爾をよろこばしめたり

九 なんぢがたふとき婦のなかにはもろくの王のむめすあり、皇后はオフルの金をかざりてなんぢの右にたつ

一〇女よきけ目をそゝげなんぢの耳をかたぶけよなんぢの民どなんぢが父の家とをわすれよ

一一さらば王はなんぢの美麗をまたはん王はなんぢの主なりこれを伏拜め

一二ツロの女は贈物をもてきたり民間のとめるものも亦なんぢの恵をこひもどめん

一三王のむすめは殿のうちにていと榮えかゝやき其のころもは金をもて織りなせり

一四かれは鍼縫せる衣をきて王のもとにいざなはる之にともなへる處女もそのあとにまたがひて爾のもとにみちびかれゆかん

一五かれらは歡喜と快樂をもていざなはれ斯して王の殿にいらん

一六なんぢの子らは列祖にかはりてたちなんぢはこれを全地に君と

なさん

一七我なんぢの名をよろづ代にまらしめんこの故にもろくの民はいやどほ永くなんぢに感謝す可し

註 釋

一節 序文の性質なり詩人の其の問題如何に大なるか又其の心の如何によりて充たさるゝやをいふは希伯來の詩にては異數なりとす

○うるはしき事 ルーテルは美しき歌と譯せり ○あふる 煮る 泡立つの義なり問題の大なるに由りて詩人の心其の中に煮え泡だつなり

二節 詩人は先づ王の美を讃む(賽三十三〇十七)然後其の説き勸むる

能辨をいふ傳十〇十二。

カルヴァイン曰はく其の暴力を以つて臣下を制御せんよりは惠の言に
よりて心服せしむること、王のために王らしきことなりと。○このゆ
ゑに、美と文雅なる能辯あり、この故に我は結論して、神はどこしへに
爾をさいはひしたまへり、といはん、是れ神の心の爾に存する證據なり。
三節 王は風采の美なるのみならず、口の文雅なるのみならず、亦戦ひ
に強き英雄なり。
四節 威をたくましくし、威を腰に佩ぶること三節に見え、今復た之
を反覆せしは乃ち語勢を強くせんがためなり。フーフエルトが之を無
用の長物、蛇足の反覆となせしは乃ち其詩想足らざるが故なり。
六節 神 軽く瞥見し去ればソロモンにせよ、其の他の王にせよ、之を
神とよぶは不当なりと想はる、然れども王士師、統治者に與へられたる

尊稱を見る也、八十二〇六七を見る可し。基督は約十〇三十五に用ゐる王
ひしことあり。カルヴァインはエロヒム(神)を以つて一人より多くを意味
する時或ひはモーセが法老の前に神の如く遣られし時(出四〇一)の如
き、或る束縛を以つて使用す可からずとせり。然れども此語の一人に用
ゐらるゝ場合なきにあらず、母上廿八〇十三の如き、サウル王の婦に向
つて爾何を見るや、其の形容は如何と云ひしに、婦答へて「神の地より上
るを見たり」とあり。此神の字日本譯に單數の如くなれども、外國譯には
神々とあり。されど一人の爲めに使用せしこと明白なり。カルヴァインは
唯だ之をソロモンにのみ適用するを承認せり。其の語に曰く、神は諸王
に超えて己の榮光の或る徽號を附與せしを以つて、彼はいはるゝとも
尙ほ斯る尊稱は如何なる人よりも別段なりと。今詩人は如何なる廣き
意味にて用ゐしや、明白ならず、是等の語は唯だ基督によりて成就せら

れ而して神は此の成就を企て玉ふことは踟躕なくして承認す可し。然れども舊約時代に於てインカルテーション(成肉)の秘義の特別に啓示せられ、又明白に解得せられたりとは想像するに容易ならず。故に詩人の是等の語を用ひしは、神はイスラエルの王なる確信と、真正の王なるメシアはダビデの子なりとの確信より起り來りしものなる可しと結論す可し。

七節 然れども此王は神よりは異なり。○義をいつくしみ 諸徳の中義は王者に最も適しきもののみならず、永遠に續く可き寶座と王國との必要なる基礎なり。○神なんぢの神 エホバと言はず、此の第二部の特色なり。○よろこびの膏 八十九〇廿使十〇三十八對照す可し。○なんぢの侶 他王及び婚姻にて王を護るの侶なり。八節 愛の歌は茲に至りて益々佳境に進みぬ。王を人として、英雄とし

て、神の如き統治者として解釋せり、今は之を新郎とせり。

九節 詩人が多妻主義を記せしは、太だ奇怪なりと雖も、東洋當時の實際を筆にせしものにして、もとより理想に説きしものにはあらざるなり。

十節 詩人は今新婦に向へり、而して新主に忠事せんことを勸む。

○女よ 箴言に『我子』の如く年齢及び主權聖命を受けたるかの如く、父の子に於けるが如く、教訓す可き權ある者として言ふは、東洋普通の用法なり。

十二節 ツロの女 シオンの女といふが如く、地を人にせしなり、是れ希伯來の語法なり。

十三節 殿のうちにて 先づ王の女の到着を報知せらる。マウレルが言ふが如く、王宮にあらざして、先づ他の所に入り、後王前に導かるゝな

り。
 十四、五節 新婦の行列なり。
 十六節 再び王の事を説きて結はんとす。○爾の子ら ソロモン
 の王子(王上四〇二)と、レホボアムの子(代下十一廿三)を對照す可し。本節
 に據れば之をメソヤの預言なりとして全篇を取ること難し。詩人地の
 婚姻を觀て之を祝ひ、琴を弾きつゝ天來の光に照らされて榮光を望見
 せしなり。

教訓

本篇はチッス河口に近き北ピクト種族(日耳曼人種にして昔蘇國に來
 往せし者)の王の城砦のあたりにて有名なるコロムバによりて唱はれ

コロムバ

たることあり其の傳を物せしアダムナンの言に據るに太だ面白き傳
 ふ可き話しあり蓋しブルード王の城砦の近邊にてありしことなりと
 いふが夫聖徒は僅の兄弟等と夕暮の讚美歌を歌ひつゝありけり時に
 數名のドルード教の僧侶來りて異邦人の中に於て神の讚美歌を唱す
 るは不都合なりとて之を妨止せり是に於て聖徒は聲を勵し此の四十
 五篇を高歌せしが其聲恰も霹靂たる雷の如く夫の王も人民も痛く驚
 き且つ怖れたりといふ尙ほアダムナンの言ふ所に據れば彼の聲は五
 十歩に或は時として千歩にすら能く達せしことありされど近く聽
 くに左程に高声にはあらざりしといふ而して昔時のピクト人の傳説
 に彼の聲を壓せんとせしも其の目的を達せざりしといへることあり
 以つて其勇壯なる一斑を卜す可し吾人初代の蘇國傳道者の殘酷の
 死を遂げし者を見ること唯此一人なり而して此れとても預めより謀

殺せしものにはあらざりしが如し。

又本篇はエドワード、アーヴィンに特別なる關係あり、ドクトル、ベツグの言ふ所によればエデンバラの西教會にて夥多の聽衆の前に立ち、沈低にして而かも微妙なる曲調を以て歌ひし時に、如何に満場の感動を惹起せしか、殆ど名状す可からざりしといふ。コロンバ及びアーヴィンによりて彰されたる勢力と感情の相混同せるは、偶々以つて尊嚴と溫柔とを示して餘りある詩篇の一なるを證す可し。夫のアルド王及び其の勇猛なるピクト首領等より、十九世紀のエデンバラに至る迄、其間相の距ること太だ遠し、然れども其の預言的勢力に富むや一なり。

あはれ英雄

其のつるぎ

歌にいはいはく、

千代に八千代に
民がたへん

身に佩びぬ。
君が名は
歌なれや。

第四十六篇

女音のまらべにまたがひて俗長にうたはしめたるゴラの子のうた

緒言

利信仰の勝

大勝利に際會して作りし者なり。想ふにエルサレム城下にてアッスリアの王セナケリアの大軍急に敗北せし時の作なる可し。○當時彼は破竹の勢に乗じて諸邑を陥れ、洪水の堤を決し、氾濫として溢るゝが如く、京城に迫り來りぬ。此危急存亡の秋に方り、誰かよく之を一撃の下に打ち退くるが如きとを夢想す可き。ヒゼキヤ王も軍隊も之を防戦するに堪えずと思惟せしが、王は時の預言者イザヤと共にエホバに祈りしかば、神の使者は降りてアッスリアの一切の大勇士將官及び軍長等を絶ちけり。乃ちセナケリアは倉皇愧ぢて國に還り去り、ユダは救はれたり。(代下三十二〇九廿三を見る可し)かくてユダの國民は太く驚喜し、モ

一セ、ダビデの日再び歸來せしかの如く想像せり。又數々失敗せしと思ひし預言者等の希望も全く應驗成就せん時の迫り來り、エルサレムは全世界の喜びとなり、萬民はエホバを承認して彼等の神となす可きの時機到來せしかの如く見ゆめり。京城の神殿樓臺は奇蹟によりて敵の毒手より救ひ出されて安然として舊時の如く天霄に聳え、神は自ら安んぜん。避所なることを民等に知らしめたまひぬ。是を以つて其の名は世に高く響き渡る可く、吾人は感謝と勝利の歌によりて讃頌せられたる。此の如く救ひを發見せんことを待つべく、又是等の歌に於て記憶せらる可き特別なる結果の指示する所を發見せんことを待つべし。故に吾人は殊に本篇及び第四十八篇を以つて、當時に成りしものと想像するは最も自然の傾向なりとす。且つ又本篇はイザヤがアッスリヤ人の入寇に際して預言せし所、其の思想説明等に著しく符合する者なり。

イザヤはアッスリヤの軍勢をナイル、エフラテ等の如く溢れて高きもの外、すべてのものを沈め去ることを川に喩へたり。此詩人は敵を怒れる海の狂瀾溢れ來ることによりて、山を震盪するが如き同一なる譬喩を用ゐぬ。又イザヤはエルサレムの平和と安全とをシロアの徐流に喩へ(八〇六)信仰の眼の外には弱く見ゆることを云ひ、詩人は河あり、其の流れは神の京城を喜ばすとて之を讚めたり。此の如く雙々相類する者あり。又預言者はダビデの家の軍馬よりも勝れる所の保護あるをいひ、敵の力を嘲笑していはく「もろくの民よさばめき騒げ、なんぢら摧かる可し。遠きくにの者よきけ、腰に帶せよなんぢらくだかる可し。なんぢら互にはかれ、遂に徒勞ならん、なんぢら言を出せ、遂に行はれじ、そは神われらどもに在せばなり(八〇九、十)」と、而してインマヌエルの生るゝことによりて、約束の救ひ來ることを標語せり。又本篇は神の避

所なること及び力なること、又インマヌエル(七)のことも言へり、是れ亦意相通ずる者なり。

デーリッチュはヘンダステンベルヒに従ひて、本篇及び以下二篇はア
ンモン、モアブ、エドム等合縱して來り攻めし時に方り、ヨシヤバテ王の
勝利を得たることなりといふ(代下二十〇)然れども本篇は全くイザヤ
の靈を受け、其の語に由りて彩色せられたることを承認せり。彼は之を
格段に賽三十三〇と對比し、而して本篇の主要なる觀念は三十三〇二
に在りとし、詩人と預言者の間に言語の同一なる證據として、賽二十五
〇四に推論しつゝ、其の結末は賽三十三〇十三に似、而して詩の四節な
る流れの想像は賽三十三〇二十一に於て猶強き形を以て反覆せらる
ゝとせり。十節の崇められは賽三十三〇十に基因するものとし、全世界
を通じて戦争止み平和となる希望は賽二〇を引用する者とせり。

分つて三とす、常にセラを以て終結す、
 (一) 一 || 三 常に神は力なること、神の之と共に住み玉ふ者は如何なる困難に遭遇するも決して恐怖せず、
 (二) 四 || 七 シオンシオンの平和は神の住みたまふに由りて確立す、凡ての其の敵、敗北せんこと火を賭るよりも明かなり、
 (三) 八 || 十一 神は今其の救ふ能力を此の大なる救助によりて現はしたまへり、而して地の上に崇められたまへり、
 一 神はわれらの避所また力なり、なやめるとき、の最ちかき助なり
 二 さればたどひ地はかはり山はうみの中央にうつるとも我儕は恐れ
 三 よしその水はなりとゆるきつゝさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん、セラ

四 河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ至上者のすみたまふ聖所をよろこばしむ
 五 神そのなかにいませば都はうごかじ、神は朝つとにこれを助けたまはん
 六 もろくの民はさわぎたち、もろくの國はうごきたり、神その聲をいだしたまへば地はやがとどけぬ
 七 萬軍のエホバはわれらとともなり、ヤコブの神はわれらのたかき櫓なり、セラ
 八 きたりてエホバの事跡をみよ、エホバはおほくの懼るべきことを地になしたまへり
 九 エホバは地のはてまでも戦鬪をやめしめ、弓を折り、戈をたち、戦車を火にてやきたまふ

一〇 なんぢら志づまりて我の神たるを志れわれはもろくの國のうち
 ちに崇められ全地にあがめらる可し
 一一 萬軍のエホバはわれらと偕なりヤコブの神はわれらのたかきや
 ぐらなりセラ

註釋

二節 地は震動して其の基礎も亦撼揺するとも神の民は安全なり是
 等の地變は六節に在る世の騷擾をいふなり
 〇地はかはり山はうつり 詩十八〇七七七五〇三八八十二〇五伯九〇
 六
 三節 第一部の末節なる本節は第二部の七節及び第三部の十一節と

句法を異にして結びたり。フーエルドは之を句の過失なりといふ。然
 れども是れ正當の確論にあらず近世の叙情詩に於けるが如く必ずし
 も規律井然として一の模型に入れたるが如きを望む可らず。志かのみ
 ならず茲に其の理由の存する者あるなり。乃ち四節なるシロアの緩流
 と相對照せしめんがためなり。
 或は水なりといろきといひ溢れ來るといふは敵兵の勢強くして且つ
 驕慢なる形容なり。〇セラ 第三篇二節の註を見る可し。
 四七節 城壁の外には騷擾あれども神の京城の中には全く平和安
 康あり。
 四節 此の河の流れは涸れず清澄くして塵芥なし。都民は之によりて
 養はる乃ち神の京城は其の守護警衛の下に在りて平和と福祉とを喜
 び樂むの様に喩ふ可し。

五節 都はうごかじ 六節には世の王國は亂れ萬民は騒ぎ立つに相照應せり。○朝つとに カルヴイン、デ、ウエットの徒は毎朝の義となせども、悲哀不安の夜に反對して、贖ひと勝利の朝なり。

六節 神其の聲 雷は神の審判の徽號なり、十八〇十三、殊に七十六〇八を見よ。

七節 萬軍のエホバ サムエルの母ハンナの口より始めて起る母上一〇十一。○ヤコブの神 カルヴイン曰く我等の信仰の頼つて以つて立つ所の二柱なり。

八節 十一節 神の現在したまふこと、國民の危機に蒞みて、神の佑助の眞實なること、故に來りて見よと言ふめり。

九節 戦闘をやめしめ 此希望は米四〇三、賽二〇四、九〇五に見ゆ。

十節 神自ら宣ふ言なり。

十一節 今弓を折り、戈をたちなどしたふのみならず、尙ほ其の事業を永續

教訓

して平和の王國の全世界に徧く成就完全なるに至る迄かくなしたまふ可し。

十節 神自ら宣ふ言なり。

ルーテル

本篇は乃ち夫の有名なるルーテルが詠せし『神わが城なり』てふ讚美歌の因つて出でたる所なり。英氣勃勃々、敵愾の精神充溢す、而して不動不屈の堅信所謂基督教的豪傑の水火鼎鑊をも物の數どもせざる精英の氣は、歌の毎行に磅礴たり。之を物せしはアウグスブルヒ會議の準備中にして、ポロタスタント派の實に岌々乎として危く見えし頃にして、一千五百二十九年のことなり。會議中ルーテルはコーブルヒの城に留り、

毎日窓に憑り、天を仰いで彼が得意の笛にて唱ひけり。
 後ウヰッテンベルヒはチャイレス五世のために攻められしかば、ル
 テルの死後獨逸新教徒の領袖たりし、レランクトン、ヨナス、及びクロイ
 チーゲル等追はれてワイマルに遁れ、心大に戚々たりき。一日彼等途を
 行きしが、遇々一少女の此讚美歌を唱ふを聞きたり。メランクトン乃ち
 之に語つて曰へらく、唱へ愛する我が女よ、爾は我等の心情に如何なる
 慰藉を與ふるや、自ら知らざる也。大に疇昔の感慨に堪えざる者あり
 しなる可し。
 又北方の獅子と稱せられたる新教徒瑞典王グスタヴス、アドルフス、一
 千六百三十一年九月十七日ライプチッヒの戦争の前に當り、其の全軍
 をして此の歌を唱はしめたりといふ。
 獨逸の詩人ハイチ、此の讚美歌の始めて歌はれたる所を誤解せしとい

へども、其の精神及び歴史を善く記載せり。其の語に曰く、ルイテルは音
 樂を愛好し、アイスレーベンの白鳥と稱せられたりき。然れども其の友
 人の勇氣を鼓舞し、又自ら己をして憤激せしめ、或る詩歌に於ては、全く
 白鳥に異なれり。彼が其同志と共にウオルムスに入るに方りて歌ひし
 其歌は實に軍歌なりき。舊き禮拜堂は其の非常なる音響に由りて震動
 し、鳥は其の暗き巢より驚き遁れて塔に飛び去れり。此の讚美歌は宗教
 改革の進軍歌にして、尙ほ今日に至りても、其の餘力を残せり、而して恐
 らくは吾人速かに復た鐵を以つて閃きつゝ、又鋭せられたる此の舊き
 詞を復生せしむるに至る可し、と。
 又此の十節「なんぢまづまりて我の神たるを知れ、われはもろくの國
 のうちに崇められ、全地にあがめらる可し」はリチャード、カメロンが其
 の死する三日前乃ち一千六百八十年七月十七日ドラムクログに近き、

二百五十四
アヴオンデールに於て説教せし所の題詞なり。其の生涯は流星の如く短きも、其の精神は強く燃えつゝ燦爛として輝きて、旭日の東天に昇る迄導きの星たりき。其の最後の説教中注意す可き點あり、曰く一旦着手せし事業は百般の反對に拘らず成し遂げざる可からず爾若し救はれず又自由にして聖潔き民とならざれば爾今日猶太人に勝れる國民たる所果して如何余が斯く語る所以の者は爾を低下せんがためにあらず爾をして基督に頼らしめ爾をして彼の立場に等しく列せしめんとて獎勵せんがためのみ我等の主は此の世に於いて之を高むるに失敗したまふ者にあらざる也、テ、願はくは蘇格士蘭に於いて爾あらんことを。

第四十九篇

俗長にうたはしめたるコラの子の歌

緒言

性質

現世に於ける義者、不義者に對する神の應報の相異なれることを論證せる者なり。富者の生涯の短きこと、其の不確實なることの普通なるのみならず、又善の爲めに善を行ふことを語り、困苦と危険に際會して自ら勇奮振起す可き哲學的の說にもあらず、短刀直入直ちに事の根本に論及せるものなり。富に富の虚空きことのみならず、富を以つて自ら誇稱するもの、終末を吾人に示す者なり。義者を其の壓制困難の場合に於いて慰藉するに、單に終に不義者に勝つことを確證するのみに止らず、神と共に在る所の生涯の更に榮光ある希望なることを以てせり。神は此の生涯に於いて彼は依頼する者を捨てざるのみならず之を己

に接けたまふことは即ち眞正の慰藉の原因なり。是れ乃ち特に説明せられたる此の詩の特色にして亦詩人が己に聽かんことを人に注意する所なりとす。

分段

- (一) 一四 序文にして全世界の此の詩人に聽く可きこと、其の語る所は乃ち天啓なること。
- (二) 五十二 普通富みを盛ゆる者の誇り、且つ愚なる想像を以て地に永存せんと欲すること、然れど其は全く空望なること。
- (三) 十三二十 俗人の終末と對照して義者を慰藉すること。
- 或は五十五 俗人と信徒との種々なる運命に關する教訓の連續せる斷片なりとし、十六二十 を以て苦み且貧き者を慰めつゝ、俗人の利達は其の躓く石なることを教訓する也とす。

二 一もろくの民よきけ賤きも貴きも富るも貧きもすべて地にすめる者よ、なんぢらともじに耳をそばだてよ

三 わが口はかしこきことをかたり、わが心はさときことを思はん

四 われ耳を喩言にかたづけ琴をならしてわが幽玄なる語をとき現さん

五 わが踵にちかゝる不義のわれを打圍むわざはひの日もいかで懼ることあらんや

六 おのが富をたのみ財おほきを誇るもの

七 たれ一人おのが兄弟をあがなふことあたはず、之がために贖價を神にさしげ

九 八之をどこしへに生存へしめて朽ざらしむることあたはず(靈魂をあがなふには費いと多くして此事をどこしへに捨置ざるを得ざれば

なり

- 一〇そは智かきものも死しおろかなる者ものも獸け心れ者ものもひとしくほろびてその富とみを他人あたしびとにのこすことは常つねにみるところなり
- 一一かれら竊ひそにおもふわが家いへはどこしへに存ぞんりわがすまひは世よ々にいたらんとかれらはその地ちにおのが名なをおはせたり
- 一二されど人は譽はなのなかに永ながくとまらず亡はろびうする獸けもののごとし
- 一三斯かのごときは愚おろなる者ものの途みちなり然しかはあれど後のちの人は其そのの言ことばをよしとせん、セラ
- 一四かれらは羊ひつじのむれのごとくに陰府よみのものと定めらる、死しこれが牧ぼく者しやとならん直なき者もの朝あしたにかれらを治おさめん、其そのの美容うつくはしきは陰府よみにほろぼされて、宿やどるところなかる可べし
- 一五されど神かみわれを接つけたまふべければわが靈魂たましひをあがなひて陰府よみ

のちからより脱だつかれしめたまはん、セラ

- 一六人のとみて其そのの家いへのさかえくはらんとき爾なんぢあそるゝなかれ
- 一七かれの死しるときは何なに一つだづさへゆくことあたはず、其そのの榮さかは之これに去さたがひて下くだることをせざればなり
- 一八かゝる人ひとはいきながらふるほどに己おのがたましひを祝しゆくするともみづからを厚あつうするがゆゑに人々ひとびとなんぢをほむるとも
- 一九なんぢ列祖おやたちの世よにゆかん、かれらはたえて光ひかりをみざるべし
- 二〇尊貴たうきなかに在ありて曉さらざる人はほろびうする獸けものの如ごとし

註 釋

一〇 四節 序文及び詩人の目的を告知せるなり、劈頭預言の如く嚴格

にして禮節あり米一〇二王上廿二〇廿八賽一〇二
 一、二節 富るも貧きも 本詩中教訓は二分して一を戒め他を慰む
 ○地にすめる者 此の世に在る者なり
 四節 耳を喩言にかたづけ 神聖き默示を聴くためにす夫れ詩人の
 インスピレーション(神宣)も亦預言者の如く天より來る也彼は自家の
 心情を語ること能はず神の彼に語り玉ふ所を聴くべきなり人より言
 へば耳を傾くるは之に従ふことを示し神の方より言へば耳を啓くこ
 とにて天の智慧超自然の知識を授くる所なり(賽五十〇五)ダイヲタチの
 想像する所に據れば耳を傾くることは音樂者より譬喩を借り來りし
 ものなり彼の絃を調ぶるや耳を傾けて各絃の調子合ふや否やを檢す
 今詩人の萬國民の彼に聽かんことを云ふは則ち斯くの如く其の天來
 の聲を聴きたればなりけり神の事を眞に教ふる者は語るに先ちて先

チ|ダイ
イ|ガ
タ

づ耳を傾けざる可からずと
 五節 踵にちかいる 近くあるの義にして蝮の如し
 七節 富も人を救ふの能力なし
 八、九節 七節に關係す生存する様に贖ふこと能はずとの義也
 十一節 是れ乃ち俗人の常に爾考ふる所なり秦始皇の如き天下を二
 世三世より以つて萬世に傳ふ可しと爲し自ら稱して始皇帝となせし
 と雖も其の墳墓の土尙ほ暖かなるに發かれ輪奐の美をつくせし阿房
 宮は天下の笑柄となりぬ尙後段を視る可し
 十二節 美花永く薫ぜず令名久しく留まる可からず ○亡びうする
 獸 死てふ永久の静黙に導かるゝの義なり
 十三節 十一節に接續するものなり元來此の節は意味も組織も共に
 疑はしきなりエタルドは斯の如きは愚なる者又之と同じき仕方に語

るを喜ぶ者の途なり』とせり。

十四節 尙ほ富なる愚なることに付て言ふ。○朝にかれらを治めん

苦難悲哀より救はれたる曉には、足下に彼等の頸を踏みにじりて治む

る者は義人直者なり。○美容は陰府にほろぼされ。艶は乃ち偽りな

り、美は乃ち虚しきなり。

十五節 されど、唯だといふ義なり。○神われを接けたまふべけれ

ば。ポツチエルは此の句をもつて千鈞の力ありとす。此の思想は七十

三〇廿四にも見ゆ、尙ほ十六〇十一十七〇十五を見る可し。復活の望み

なしとするも、神と永久に共なることの強き望みなり。詩人はエノク、エ

リヤ等の如く自ら活きながら天にとられんとの望みありしとは、想は

れども、是は人に現れたる其不死なることにつき、神の證據なり、又神と

俱なる生命の證據なり。而して固より希望にして、啓示せられたる確實

ル | ホ
ツ | チ
エ

なる者にあらず、又特別なる約束にもとづける者にもあらず、又教理を
明確に示したる者にもあらず、然れども此の世にて愚の時を得がほに
盛大となり行くを見る所の、正しき者を高め、且つ奨勵鼓舞するには餘
力ありといふ可し。

十六節 自家すでに前言の如く希望を得たり、故に人に向つて奨勵す
るに至れり。

十七節 人は世に來りしが如くにまた裸躰にして歸りゆく可し。其の
勞苦によりて得たる者を毫厘も手にとりて携へゆくことを得ざるな
り。

十八節 己がたましひを祝するども、己を以つて幸福なる者とし喜

ぶども空の空なり。路十二〇十九を見るべし。

十九節 なんぢ、或る人之を彼と譯して靈魂のことゝす。

教訓

空の空

富める者あり自ら其の心に言けらく、來れ我多年を過す可きに足れる財貨を積めり、以つて爾を試みに喜ばせんとす、なんぢ宜しく逸樂を極めて其の天命を全うせよ、と然れども是れ空の空なり、風を捕捉ふるが如し、神は乃ち之に謂つて曰く、無知なるものよ、今夜なんぢが靈魂とらるゝとある可し、さらばなんぢの備へ置く物は誰が有になるや、と凡そ己のために財を積へ、神に就て富まざる者は此の如きなり、彼等心竊に以爲へらく、わが家はとこしへに存り、わがすまひは世々に至らんと、彼等は其の地に己の名を負はしめたり、然れども其の建つる家は蟲の巢の如く、また番人の造る茅屋の如し、彼等は富る身にて寢臥し、重ねて

始皇

興ることなし、又目を開けば、乃ち其の身きえ亡す、懼ろしき事大水の如く、彼等に追及き、夜の暴風かれらを奪ひ去る、東風彼等を颯げて去り、其の處より吹きはらふ、神これを射て恤まず、彼等は其手より逃れんども、かく人これに向ひて手を鳴し、嘲りはらひて其ところをいで行かしむ、夫れ燕趙の收藏、韓魏の經營、齊楚の精英、秦人之を倚疊して山の如く、寶鼎を視ること、鑑の如く、珠玉を視ること、石の如く、秦人之を視るも亦甚だ惜まず、以爲へらく、富四海を有ち、位天子たり、天下萬世此の如くして、復た我に敵する者なかる可し、と安んぞ知らん、祖龍死して其の土尙未だ乾かざるに、秦の天下は土崩瓦解、楚人一炬、可憐焦土となり、了んぬ、豈啻秦王のみならんや、己が富に誇りて徳を脩めざる者は、其の途皆な一なり、彼等は遂に死の鐘の縛する所となり、陰府の者と定められ、其處にて哀み切齒す可きのみ。

然れども真理は最後の勝利者なり。エホバの眼は常に義者の上に在り。
直き者は常に神の途を去たふなり。

ビーデン

アレキサンドル、ビーデンは蘇國の聖徒なり、艱苦は雲霧の如く常に彼の
の身邊を圍繞したれども堅信不拔、深く神の義の最後に發耀せられて、
各種の雲霧も全く消散す可きことを信ぜり。嘗て愛蘭土に遁れしこと
ありしが、傳説に據れば、當時森林の間に於て説教し、又此の詩篇を讀み
たりといふ。而して之を歌ふに方りて聽衆を戒めらく、其の信仰の精神
を以つてするにあらずんば、則ち俱に歌ふ可からずと。其の眞摯なる
熱心、以つて察知すべきなり。

希伯來詩心の緒琴(上卷) 終

希伯來詩心の緒琴(下卷)

第五十一篇

緒言

ダビデがマテセバにかよひしのうち預言者ナタンの來れる時よみて
俗長にうたはしめたる歌

著作の由來

本篇は眞摯にして虚偽なき悔改の説明なり。先づ苦き根として罪の性質より出で來る罪行を謙遜に告白して其の赦免を祈り、次ぎに聖靈によりて新になり、聖くせらるゝことを祈り、又罪人に對する神の洪恩を感謝し、尙ほ將來に向ひ聖き決心を以つて誓約せり。

是は第二部の中に、ダビデの作に歸する十五篇第五十一―第六十五篇の第一なり。端書に従へば、彼大罪を犯せしに、預言者ナタン來りて其の良心を容易ならざる昏睡より喚起したる後の作なりと見ゆ。是れよ

り先き其の心の中痛恨悲哀の情感は戦ひしも其の罪を潔く悔い改む
 ることを拒みたり然れども「爾は人なり」どの一言は彼の心を刺し透し
 たりき本篇は歴史にては唯だ短き報知なる「我罪を犯せり」どの告白の
 充分なる者なり
 罪を確信すること此の如く強き之を悔ゆること此の如く深くして且
 つ偽りなき其の心情の柔順にして告白の此の如く眞實なる新生に向
 つて希望すること此の如く熱心なる神の赦罪の愛を信ずること此の
 如く謙遜にして且つ孝心なる舊約中決して他に見る可らざる所なり
 誠に本篇及び三十二篇は彼に歸せられたる端書を判するに過ちなき
 もの也是等の詩に於て吾人は眞正の人間を認識する也其の罪や固よ
 り大なり然りと雖も其の心頑梗にしてたゞ利己専制萬人を以つて自
 己の快樂と罪惡との機械となせしが如きにはあらざる也故に預言者

彼に來るや乃ち眞實の悲哀を以つて神に向ひ神は父の放蕩なる子に
 對するが如く之に接したまひしが如し
 近來反對論者ありて端書の文字の如くには信せざる者あり其の説の
 要領にいふ
 (甲) 本篇はダビデの作たるを得ず何となれば十八節の「エルサレム
 石垣を築きたまへ」どの祈りは唯だ其の敗壞せるに際してのみ言ひ得
 べきものなり故にバビロン俘虜の間か又直ちに其の後の頃ならざる
 可らず
 是に答へんに二種あり
 (一) 此の説明は單に形容詞なりダビデは其の罪に由りて王國の安寧を
 害し之を危くせしを悟了り之を防禦せんことを祈りし也
 (二) 終末の兩節は後世の追加なり恐らくは俘虜の後なるべし猶ほ四十

一〇及び七十二〇の末節の讚辭の如し、而して是れ最も譬喩的のものなり。

(乙) 本篇の説明の多分はダビデの口に不適當なるものなり。

(一) ナタン彼に來りし時(母下十二〇)ダビデは直ちに其の罪を悔いて、罪の赦免を受けたりといふ。然れども神の赦免は常に大罪を犯せし者によりて、充分に且つ直ちに受け入れらるゝ者にあらずと答ふるを得可し。

(二) 論者また曰ふ、ダビデなれば四節の獨り神に向ひて罪ををかせりと云ふ可からずと。ロイス曰く、此の如き語は、其の忠僕を殺して、其の妻を辱しめたる人の口より出づること甚だ奇怪なりと。かく彼は人にも、神にも、兩者に對して、犯罪せりといふ也。此の説には四節の註に於て答ふ可し。

(三) 又いふ、詩人は或る一種の極悪なる罪にあらずして多くの罪より赦されんこと、又其の全体性質の新生せんことに付て祈れりと。然れども眞に其の罪を觀る者は、罪の隠れたる原因及び其の多くの悪き結果に於ても亦同じく之を見るや當然のこと也。

(四) 又いふ、罪の根深く入りて、生來の敗徳及び其の纏綿たる汚穢を知了ることとは、ダビデの時代に於て到底望む可からずと。然れども是れ臆斷に過ぎざる也。

要するに吾人は端書の如き境遇に於て、ダビデ之を作れりて、教會の確實にして、道理ある信仰に反對するの必要を發見せざる也。本篇は分つて三とす、

- (一) 一〓八赦罪の祈
- (二) 九〓十二新ならんことを祈る
- (三) 十三〓十九神の罪を赦し玉ふ愛と、聖くする恵を経験せし者の聖

き決心けつしん是これなり、

六

- 一 あゝ神かみよねがはくはなんぢの仁慈じんじによりて我われをあはれみなんぢの憐憫れんみんのおほきによりてわがもろくの愆とがをけしたまへ
- 二 わが不義ふぎをことくくわらひさり我われをわが罪つみよりきよめたまへ
- 三 われはわが愆とがを知るわが罪つみはつねにわが前まへにあり
- 四 我われはなんぢにむかひて獨ただなんぢに罪つみを犯とがし聖前みやまへにあしきことを行おこなへり、さればなんぢのいふときは義たがひとせられ、なんぢ鞠まげくときは咎とがめなしとせられたまふ
- 五 視みよわれ邪曲よこしまのなかにうまれ罪つみにありて我母わがははわれをはらみたりき
- 六 なんぢ眞理まことをころの衷うちにまでのぞみ、わが隠かくれたるところに智慧ちえを志こころらしめたまはん
- 七 なんぢヒソプをもて我われをきよめたまへ、さらばわれ淨きよまらん、我われをあ

らひたまへ、さらばわれ雪ゆきよりも白しろからん

八 なんぢ我われによるこびと快樂くわいらくとをきかせ、なんぢが碎くだきし骨ほねをよろこばせたまへ

九 ねがはくは聖顔みかほをわがすべての罪つみよりそむけ、わがすべての不義ふぎをけしたまへ

一〇 あゝ神かみよわがために清心きよこころをつくり、わが衷うちになほき靈れいをあらたにおこしたまへ

一一 われを聖前みやまへより棄すてたまふなかれ、爾なんぢのきよき靈みたまをわれより取りたまふなかれ

一二 なんぢの救すくひのよろこびを我われにかへし自由じゆうの靈みたまをあたへて我われをたもちたまへ

一三 さらばわれ愆とがを犯とがせる者ものになんぢの途みちを滅なげしへん、罪人つみびとはなんぢ

に歸り來る可し

一四 神よわが救のかみよ血を流せし罪より我をたすけいだしたまへ、

わが舌は聲たからかになんぢの義をうたはん

一五 主よわが口唇をひらきたまへ、然ばわが口なんぢの頌美を彰さん

一六 爾は祭物をこのみたまはず、もし然らずば我これをさしげん、なん

ぢまた燔祭をも悦びたまはず

一七 神のもどめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり、神よなんぢは碎け

たる悔いしころを藐しめたまふまじ

一八 ぬがはくは聖意にまたがひてシオンにさいはひし、エルサレムの

石垣をきづきたまへ

一九 その時なんぢ義のそなへものと燔祭と全き燔祭とを悦びたまは

んかくて人々なんぢの祭壇に牡牛をさしぐべし

註釋

端書 バチセバエリアムの女にして、ダビデの勇士ウリヤの妻。

一、二節 罪の赦免を乞ふ。

一節 なんぢの仁慈 神を敬する者の哀傷は希望あり、望みなき哀み

は痛恨と失望とにして悔改にあらざ、故に大罪を犯せりと感ずるとき

に於ても眞の悔改は神の仁慈に向つて仰ぎ望むなり、すでに「なんぢの

子と稱ふるに足らざるものなり」と告白する時に於てすら猶ほ其の唇

には我が父との叫びある也。○憐憫のおほき だビデは赦罪の原因を

己の中に求めず、二十五〇六七にいへらく「なんぢのあはれみと仁慈と

はいにしへより絶えずあり、エホバよ之を思ひ出したまへ。わが若きと

十
きの罪をわが愆とはおもひいでたまふなかれ」と是れ晩年に至りて懐
舊の陳情なる可し。其の罪惡の大なるを感ずるが故に、亦た憐憫のおほ
きを要す可きを感じずる也。

○愆をけしたまへ 罪の赦しは二様の形容によりて説明せらるゝを
得可し。先づ爲したる事を爲さざりしが如く消却るゝとなり、すでに書
冊或は表の如きものに記録せられし所より削り去らるゝことなり、出
三十二〇三十二民、五〇廿三の如し、詩六十九〇廿八には債權者と負債
者との關係の如く之を消すことによりて取らるゝ也。次ぎは抹殺し、除
き去るの義なり、王下廿一〇十三、賽四十四〇廿二の如し。
二節 あらひさり ダビデが赦罪の祈りに用ゐし第二の形容なり。元
來泥に塗れ汚れたる衣を洗ふの義なり、而して罪を取り去ること用
ゐらる、賽一〇十六、耶四〇十四。〇きよめたまへ 普通の言なれども殊

に祭司の癩病をきよむるに用ゆ。

三節 原書には此句の首初に蓋はの字あり乃ち神の彼を赦すべき道
理をいふにあらずして、罪の赦免に向つて願ふ所以の理を現すものな
り。○わが罪つねにわが前にあり 詩三十二〇五。ルイテル曰く詳言せ
ばわが罪己を苦め、飲食起臥一の休息の暇なく、又一の平和あらず、我は
常に神の怒の審判を怖るゝなり、然れども今茲にては神の怒又審判
を怖るゝにはあらずして、神の愛と仁にも拘らず、深く罪を犯せしと
を悲むは最も高尚なる感情なり、ダビデは罰を恐れずして、神より離る
ることを恐れたり。
四節 罪は二重の惡なることを承認す、乃ち先づ其の目的に於て、次ぎ
は其の原因に於て、先づ神に向つて犯せりとして、次ぎは腐敗せる性質
より起れりとして、○獨なんぢに罪を犯し 論者はいはく、バテセバに

對する罪間接に敵の手を借りて殺せるウリヤに對する罪、其の汚れたる己の家族に對する罪、其の害を加へたる己の王國に對する罪、是等は人に對しての罪にあらざや、果して然らば神に向ひて獨罪を犯せりと云ふ可からずと。

(一) 或る註解者は云ふ、ダビデを王として論ぜば、神に對する外、人に對しては責任なしと。ア
ノ
ビ
ア
ス、カ
ツ
シ
テ
ド
ラ
スの如き即ち是なり。然れども專制の政治にて其の臣下に犯せし罪も、其の爲せし所の惡は、王者も私人も決して異なることなし。

(二) キムキー、マルドナタスの如きは、其の罪は唯だ神にのみ知らるゝとの義なりとす。然れども此の説は不通なり。

(三) カルヴインは云ふ、神は我が審判者なりと感ず、人の甘言も、慰藉も何かあらん。神の審判の重きに壓し碎かれては、神は千人の他に勝れる者

なれば、其の外に一の告發者を要せざる也。
(四) 然れども尙ほ妙境に到らず。

抑も是等の詞は罪を罪として、ダビデの深き確信によりて説明せしものなり。其の瞬間には他の百事は全く吞込まれしなり。神と顔を對しては、神の現在を忘れ、其の聖徳を汚し、其の愛を嘲けりしとの事の、外何をみ見ず、又何をも考へ得ざりし也。故に隣人に對して犯せし惡に付て考ふるに先ち、先づ神に告白し、其の赦免を請はざる可からざりし也。

又神の凡ての物に勝りて愛したまふ所の懺悔する心の、深き感情は神が其の受造物に於ける關係に、其の根底を深く有する者なり。諸般の罪は乃ち神に背戻するにあり。隣人に對する罪は、乃ち神の像に肖せて造られたる者に犯せるものなり。隣人を惡に誘ふは乃ち神に反對してサタンに左袒せる也。人にてはも財産にてはも、肉にも、靈にも、苟も他を傷くる

は、乃ち神の仁慈に背戻する罪なり。故にパウロ曰く爾曹兄弟に罪を犯し、其の弱き心を傷めしむるは、キリストに罪を犯すなり。此反證は乃ち太廿五〇四十を見る可し。

故に今ダビデの獨爾に向つてといへるは、神に犯せし愆と不敬との皮肉なる感情を露出せしものなり。神の肖像なる人に向つて犯せし罪は、乃ち神を犯すに等し。此の思想はすでに創九〇六に見ゆ。

五節 今や罪の原因に論及す。フレデリツキ、ロホルトソ曰く、彼は己に歸するに單一なる過失を非難するに代へ、其の汚れたる性質の非難を以つてせり。啻に兇殺のみならず其の兇殺の性質を以つてせり。曰ふ、罪に在りて孕まれたり、と初めより今に至る迄彼は單罪、罪罪のみを見たり、其の他はあらざるなり。

ルーテル曰く、人若し正しく罪につき語り、且つ教へんとならば則ち須

く深く之を熟考し、且つ罪及び凡て不信なることは、如何なる根柢より萌芽し來るものなるやを示さざる可からず。而して其の犯せし罪にただ漠然として罪の意義を附す可からず、蓋し人々の罪とは如何なるものなるやを知らず、又理解せざる所の誤りより、又更に仁慈とは如何なるものなるやを知らず、又理解せざる所の他の誤り起り來ればなり。

却説此の詩によれば父母より産るゝ者はみな罪にして、此の如き惡き根よりは何も善きものは、神の前に成長することなしと言はざるべからず。

カルヴァイン亦曰はく、要するに茲には彼自ら單に一或ひは多くの罪を懺悔するに止らずして、其の原泉より出づる所を告白せる也。即ち母の胎より己と共に罪の外には何を齎さず、性質によれば全く腐敗し、惡を以つて汚されたるものなり。

而して眞理より言へば、吾人其の

全性質を腐敗したるものとして咎むるにあらざれば、吾人は全く其の罪を承認せざるものなり。

人性の善惡に關しては東西古今種々の説をなす者あり。孟子曰く、性善なり。荀子曰く、性惡なり。豈啻に彼等異教徒のみならん、神學者中亦其の説を異にせり。或は意志の自由を説き、或は原罪説(アダムの罪は遺傳して子々孫々に至るといふ説)を説き、其説く所一ならず。要するに自ら深く罪を感ずる時には、理論に訴ふるの暇なく、自ら全く惡より出でたりと思惟する者なり。然れども罪とは其惡たるを知りつゝも、之に適せずして却つて其の虜となり、自ら意志より決心して其の惡に従ふものなり。故に理論より正當に觀察せば、人は生來純粹なれども、父母より傳はれる罪に傾ける状態あり、又罪惡の境遇に成長し、之に教育せらるるを以つて、遂に性の純惡を信ずるに至るなり。

○視よ 更に高尚なる、又新奇なる知識をあらはすに用ゆる語也、伯四〇十八、廿五〇五。

六節 元來此の句の初めにも五節と同じく視よの字あり、乃ち前にも視よ未だ決して見ざりし所の罪を見たりとの意を現し、又更に一方には視よなんぢ衷心に於て望みたまふは、乃ち眞實なりとのことを學びたりとの意を現さんためなり。

眞實をこころの衷云云 自ら罪の多きことを悟りて見れば、則ち自己の眞實の足らざるをも亦悟れる也。

七節 なんぢヒソプを以て我をきよめたまへ 此の文章の時に付て諸説あり、七十人譯及びゼローム、エワルド等は未來とす、然れども近世註解者の過半は英譯と同じく命令法とす。○ヒソプ モーセの法律に據れば癩病を潔むる時(利十四〇四)又死躰に關して潔めを行ふ時(民十九〇

六〓に方り此の葦に似たる物なる、ヒソプを水に浸して其の禮を行ふ。今茲に用ゐしは敬虔なる猶太人には非常に強き意味を與ふる也。○あらひたまへ。是れまたモーセ法にて、汚れたる人の衣服及び身軀を洗ふことより來る。

八節 今預言者ナタンにより、又神の言により、其の罪の赦されたることを言はず、寧ろ全會衆の一致して神を讚美する所の公會に於て己も赦されたる罪人として、其の一人に加はらんことを望み、感謝に充ちたる心を以つて、公然其衷情を吐露する所の一人たらんことを望みぬ。○碎きし骨 フリーブエルドがいへるが如く心の代りにはあらずして、身軀すべてを指していふなり、六〓二を見よ。

九〓十二節 第二部なり、前二節にて其願ふ所を神は爲し玉ふべしとの確信より、今ダビデは神に對して眞面目なる告白をなせり、是れ凡て

の偽りなき祈禱に於て發見すべきものなり、乃ち感情の動搖によりて之を知る可し。先づ赦罪を請ふて、次に新ならんことを求む、此の順序は必要に従ふものにして、知力の順序にあらず。

九節 聖顏詳言せば怒りの聖顏なり。

十節 清心をつくり、神と交通するに必要なる條件として斯く言へり、詩廿四〓四、太五〓八、又此のつくりの字は嚴密に神の創造力に用ゆるものなり。人の靈性は全く空漠に落ちたり、潔白なる心幼兒の如き信念は、唯新なる受造物として歸り得べし、弗二〓十、四〓廿四、今此の祈を以て耶廿四〓七、結十一〓十九、三十六〓廿六の約束に比較對照すべし。

○なほき靈 信仰確實にして容易く其の荏弱なる性と試練とによりて動搖せず、常に確乎として主に従順なること也。正路を進むなり。

十一節 棄てたまふなかれ 此の熟字王下十三〓廿三、廿四〓廿、耶七

○十五等にも在り、神の恵よりイスラエルの拒否せらるゝとに用ゐらる。○靈をわれより取りたまふなかれ。カルザインは此の語を以て聖靈は尙ほ未だ全くダビデより取り去られず、故に神に選ばれたる者の信仰は遂に墮落し得ざる慰藉ありとの結論を誘ふなりといふ。然れどもルイテル派は全然之に反對して、全き滅亡なりと想像し、又必ず全く新になり得べきことを信じて、再の字を補入し「再び爾のきよき靈を云云」と改む可しといふ。然れども兩者ともに其の見解を確證するに足らず。抑も此の祈念は寧ろ凡ての善良なる思想、凡ての最も眞面目なる希望、又凡ての決心の唯一なる原因なりし所の聖靈の佑助なくしては、一瞬間たりとも見棄てられんことを恐れて、深く自ら其の罪の重大にして、不正不義の行爲に充ちたることを悟りし者の、聖き敬畏恐縮の情念を説明せしものなり。是れ乃ち前には知らざりし、己の性質の荏弱にし

て、試練は強盛に神佑の必要なるを始めて悟り、又神の其の靈を取り去り玉ふこと程、世に恐るべきものなしと知りし人の叫聲なり。當時固よりダビデは吾人の如くに聖靈に付ての知識なし、聖靈は基督の榮光を得し後降りし者なり。然れど吾人甚だ奇異の念に勝えざる者は、夫の幼兒の如く言ひし當年の語が、今日成人たるクリスチアンの最も成熟せし感情を説明するに適用せらるゝ是れなり。

十二節 前半は八節の思想に似たる者を反覆す、希望と信任なり。○自由の靈 又尊き靈なり。ルイテルは神の靈を以つて火に喩へ、人の靈を以て其の感化によりて熱する水の如しといへり。

十三節 すでに愆より自由にせられたる良心をもつて、又神の靈に由りて新にせられたる神の洪恩に向つて、感謝に充ちたる心を以て、如何にか黙々として、其の深き感慨を心底に秘め置き得べき、必ずや他の罪

人をして神に向はしめんと勉む可きなり第三十二篇は恐らくは本詩の成りし後の作なる可し其の決心の如何に保たれしやを示せり○な

ロイス

んぢの途 詩人の歩み來りし神の誠の途なり『われエホバの途をまもり、惡をなしてわが神よりはなれしことなければなり』十八〇廿一。十四節 血をながせし罪 ダビデが敵の手をかりて殺せしウリヤの血なり。ロイスは之を以て我を兇殺者より救ひたまへ』乃ち殺さるゝことより救はるゝの義なりとす然れども希伯來の使用法に戻れり○な

フリープエルド

んぢの義をうたはん 何故に神の性質は讚美の題目として特別に記せらるゝや。フリープエルドは神の支配の故なりといへるも、漠然たるを免れず、按ふに罪を赦したまふより(約壹一一〇九)。十五節 口唇をひときたまへ 罪のために緘封せられたれども神の自由赦免ありしに由り喜び歌ふの原因を與へられんとなり。カルヴィ

ンは之を以つて四十〇三に比せり『エホバは新き歌をわが口にいらたまへり此はわれらの神にさゝぐる讚美なり』十六節 是れ乃ち神に感謝と、感謝す可き心と唇との精神的祭物を捧ぐる所以をいへるなり。十七節 是れ乃ち罪を深く感じ、又柔和なる良心の他方の證據也感謝に付て言ふならば、喜びたる心、又は感謝する心といふべき也蓋し赦罪せられたる喜ひは、罪に向つての悲痛と後悔とを追ふものにあらずして、尙ほ繼續する者なればなり。罪を感ずること愈深ければ、則ち之れが爲めに悲むこと愈真にして、罪の赦免を謝すること亦愈切なるものなり。故に柔和謙遜にして、又碎けたる心は、最良なる感謝の祭物なり。十八節 以下二節は國民的祈念を以て全篇を結び、而して前の個人的異なれり。本篇の緒言にも言ひしが如く、議論多き所なれども要す

るに放逐時代の後間もなく之を追加したりと見ゆ。

教訓

シヨ
ウ井
シヤード

神の審判を觀じ來りて、是れがために神の仁慈と自家の聖潔ならんことを叫び求むる者なり。シヨウ井ッシヤード聖、アノドリユースにて焚殺せられんがため捕へられて囹圄に投ぜられし其の前夜、友人等と團樂して相語り共に晚餐を快食せし後、怡然として笑ひを帯びつゝ、語つて曰く、余は眞面目に眠みに就かんことをこそ、我が畢生の本望なれど、尙ほ語を次いで曰へらく、吾等一篇の詩を歌はんか、乃ちウエツダーボルンが譯せし蘇國風なる本詩第五十一篇を指定し、翕然共に之を高唱せりといふ。

ヘン
リ
五世

永く中世に於て又宗教改革の後、裁判所の法廷に出頭せんとする者の、仁慈を求めんがため歌ひし所の者なりき。

ケ
レ
夫

英王ヘンリー五世(一千四百十三年)同二十二年將さに死せんとするに當り、本篇を朗讀せる者其の十八節「エルサレムの石垣をきづきたまへ」といふに至るや、半死の人の耳朶には嚴然たる呵責の如く響きしもの、如く見えぬ蓋は誓約を懐きたりければ也、乃ち怨言きて曰らく、予若し佛蘭西の戦争を終り、平和を得て後、聖都(エルサレム)をサラセン人より救済はんがために、バレスターインに行かんと思ひしなりと。

エ
コ
ラ
ム
バ
デ
イ
ユ
ス

レデー、シエン、グレイの其夫ギルドフォールド、ダッドレーと共に一千五百五十三年八月二十二日殉教の死を遂ぐるに當りて、先づ羅甸語にて讀み、後英語にて復た反覆せりといふ。

エコラムバデイエス病革り次いで其友ゾインダルの不意なる最後の

報知によりて、其の死を急ぎしが、其の最後の祈禱は乃ち本篇なりき。彼諸教會の教役者を呼び集め、教理の忠實聖潔を保たんことを忠告し、諄諄説き了りて、眞面目に第五十一篇なるダビデの言に於て祈禱し、其後直ちに死せりとぞ。

ミレット

又佛國にて新教徒の残酷なる迫害に遭遇せしことは、實に異常なる所にして、吾人は加害者の残忍に驚かぬか、將た又被害者の堅忍に感ずべきかを判知するに苦む程なりき。ピア、ミレットは乃ち最初に焚殺せられし者の一人にして、一千五百五十年パリスのマウベルトにて當時の最も残忍なる所刑を受けたりき。其後二百餘年を経て、乃ち一千七百五十二年三月廿七日フランシス、ビテジツト亦た迫害に遭遇せしが二者どもに此の第五十一篇を口にしつゝ、最後を遂げたりといふ。其の蘇克士蘭たると、佛蘭西たるを問はず、其の殉教者の死の様を等しくする

トビテジツト

者は宗教革命の時に方り、其の精神の振作せると、又詩篇に對して彼等の敬虔の情普通なるに基因することは、固より當然の事といふ可き也。

フオーレ
ツト

トーマス、フオーレツトは宗教革命が尙ほ未だ蘇國に於て堅牢なる基礎を据ゆるに先つこと二十餘年、エデンバラの城丘にして殉教者の名譽を得たる人なり。獅子王ウヰリアム(一千六十六三年ノルマンより來り攻めて英國を裁定せし人の時より、フハイフに於ける名族の一にして、インクホルムの教職に就きし人なり。始めアウグスチンの書を読み、聖書に導かれ、遂に基督によりて救拯を得るに至りぬ。人民のため、來りて金錢の免恕を請ふことあれば、則ち曰はく、余は爾に眞理を語る可く束縛せられたり、我等の罪を赦すは唯基督の血あるのみ、法王及び其の他の者何人たりとも、決して能はざる所なりと。此等の語及び其の説

教の事業は遂に彼をしてダンケルドの監督及び聖、コルムスの長老の
前に召喚せしむるに至りぬ。其時長老彼に命じて黙せしむ。フオーレ
ト乃ち答へて曰く、爾は我が肉體の友にして、わが心霊の友にあらず。余
が語りし一語を自ら拒否するに先ち、爾は此の我が身體の灰となりて、
風に吹き去らるゝを見る可し。其最後の光景は彼が忠僕アンドリュ
ー、カーキーによりて審かにせられたり。其の城丘なる火刑柱に持ち來
さるゝや、先づ羅甸語にて、次ぎに英語にて、『神よ罪人なるわれをあはれ
みたまへ』、次いで『主耶穌よわが靈を受けたまへ』といひ、終に『神よなんぢ
の仁慈によりて我をあはれみたまへ』と祈り了れりといふ。
四時元々たる氷山を以つて充たされたる地球の最北部、ピーチー岬の
あたり、朔風雪を捲きて晝尙ほ暗憺として時に北極星の微光を放下す
る所一の墳墓あり、蓋しアライト號にて、アークチック海に到れるサ、

ジョーヂ、チーアス、遠征隊の一員の爲めにせしものなる可し。遺骸を被
ふに大石を以つてし、上に銅牌あり、彫みて曰はく『われを洗ひたまへ』と
らばわれ雪よりも白からん』と。
一千六百四十二年六月十日カリックフォオルグスにて蘇國の移住民
始めて長老教會を設立せしが、教役者は五人にして、長老數多ありき。其
の時十八節を題詞として説教せられしが、二百年後一千八百四十二年
教會の各役者は同題詞を以つて説教せり。今教會は五百以上に
上れりといふ。

第五十六篇

緒言

「ダビデがガテにてペリシテ人にさらへられしとき詠みてしめたるミクタムの歌」

著作の由

敵のために痛く壓制せらるれども、尙ほ深く神を信じ、之れに倚り且其の約束に安んじて、其の扶助を求めんが爲めに彼に遁れ、又其恵みを感じ謝する者の訴へなり。造次顛沛事々物々深く神に信賴して、決して之れより離れざる也。故に吾人は茲に信仰の混雜よりは寧ろ其の勝利を觀る、亦宜ならずや。此の四節の語ある亦當然なりといふべし。本篇の端書に従へばダビデにてガテがペリシテ人に捕へられたるの作なり。然れども歴史は彼がガテに行きし時、此の如く俘囚となりしことを告知せざる也。母上廿一〇十一〥十五、廿七〇〥廿九〇。

分段

ヘンクスランベルヒ及びデリーリッチュは「執はれて狂人の様をなし」廿一〇十三といひ、又廿二〇の初めに「是の故にダビデ其の處を出で立ちてアドラムの洞穴に逃る」といふを以つて牢に入りしか、或ひは捕はれしなるべしと想像せり。フリーベエルドは此の端書に關すること歴史に見えざるを以つて、此端書は信ずるに足らずといへり。然れども是は古來の傳説に據れること、固より疑ふ可らず。殊に近世の編輯者は歴史より、むしろ端書をして正當ならしめんと試みたり。本篇は自然に三分せり、其の第一、第二は殆ど其問題を異にせず、敵に對して神の助力を求め、又神に倚賴することを説けり、然れども第二は多少第一より強く言へり。

(一) 一〥四 (二) 五〥十一 (三) 十二、三、敬虔なる感謝を以て結べり。

一 あゝ神よねがはくはわれをあはれみたまへ、人いきまきてわれをの

まんどし、終日たゝかひて我を志へたぐ
 二 わが仇ひねもす急喘てわれをのまんどす誇りたかぶりて我とたゝかふものおほし
 三 われおそろゝときは爾にたのまん
 四 われ神によりてその聖言をほめまつらん、われ神に依頼みたればおそろゝことあらじ、肉體われに何をなし得んや
 五 かれらは終日わがことばを曲ぐる也、其の思念はことごとく我にわざはひをなす
 六 かれらは群つどひて身をひそめ、わが歩に目をどめて我靈魂をうかがひもどむ
 七 かれらは不義をもてのがれんとおもへり、神よねがはくは償ほりてもろくの民をたふしたまへ

八 爾わがあまたゝびの流離をかぞへたまへり、なんぢの革囊にわが涙をたくはへたまへ、こは皆なんぢの冊に志るしあるにあらざや
 九 わがよびもどむる日にはわが仇しりぞかん、われ神のわれを守りたまふことを知る
 一〇 われ神によりてその聖言をほめまつらん、我エホバによりて其のみことばを讃めまつらん
 一一 われ神によりたのみたれば懼るゝことあらじ、人はわれに何をなしえんや
 一二 神よわが爾にたてし誓はわれをまどへり、われ感謝のさゝげものを爾にさゝげん
 一三 爾わがたましひを死よりすくひたまへばなり、なんぢ我をたふさじどわが足をまもり生命の光のうちにて神のまへに我をあゆませ

たまひしにあらざや

註釋

一節 我をのまんどし 野獸の血に渴きて飲まんとする様なり(伯七

〇二)

フリープエ
ルド

三節 フリープエルド以爲へらく、恐怖と倚頼とは相支吾矛盾するものにして兩立せず、然れども二者兩立することは決して難きにあらざ。唯だ神に倚頼するは高く打ち寄する所の恐怖に勝つものなり。ペテロは主に請ひて水上を歩みしとき、風波の荒きに驚き、將に沈去らんとして、主よ我を救ひたまへ、と叫びしにあらざや。神に倚頼すてふことは、吾人をして人たること、又人の感情を有することを止めしむるにはあら

カルヴァイ

ず。ストイク學派的の冷靜死灰たるに勝りて、人を犯し來る所の恐怖のために戰慄する人を高め、恐怖の中に在りて、爾おそる、勿れ、我爾と共に在り」どの聲を聴かしむる所のものなり。

カルヴァイン曰く、是れ慥かに吾人の信仰の信實なる證據なり。恐怖は吾人肉性の關する丈、吾人を惱ますものなり。然れども吾が心を顛覆混亂するものにあらざ、實に恐怖と希望とは兩者共に同一なる心裏に住むこと、甚だ矛盾する所なりと想はる。然れども經驗に據れば、心の或る部分の恐怖によりて用ゐらるゝ所を、希望は領するなり、云云。

四節 神によりて 彼と其の助けを信するによりてといふが如し。
聖言 約束なり。

カルヴァイ
ダビデは僅かの瞬間前まで死を恐れし者なるに、卒然其の敵をも足下に蹂躪するが如き勇氣の、如何にして起り來るを得べしや。予は答へん、

是の信仰は凡ての武器の我が身邊に達し得ざる所の地に身を置きしが如く、凡ての恐怖を除き去り、又凡ての危難の中に、平然として微笑するが如き證據にあらざらん。然れども希望の楯を保ち、安全確實なる救に
 よりて、凡ての恐怖は守られ、而して又我神に依頼みれば、あそるゝこと
 とあらじ、と聖き誇りを以て、恐怖を逐除し得べきなり、(カルヴァイン)。
 五節 十一節迄は其の敵の攻撃、および悪き謀略を更に詳記して、其の復讐をなさんと、神に呼び求めしなり。
 ○ことばを曲ぐる。曲解し、又悪意を之れに附する也。廣く言へば吾が行爲言語、凡ての境遇を、痛苦悲哀の出來事に向けんとする也。
 六節 歩に目をとめて。踵の義なり、乃ち蛇の踵を覗ふが如し、詩四十九〇五の如し。
 七節 作者の平和と生命とに反對して、道に背き、黨を結びし者の滅び

れんことを祈る心の強き感情に噴火口を與へしものなり。○かれらは不義をもてのがれんと。諸説あれどもエルワード、又フーエルドの如く、彼等の不義のゆるをもて、之に復讐せよとの義に解す可し。○もろく、の民 端書の如くんば、ハリシテ人を直指する者なり、然して強ち一國民より、以上たらざる可からざるの必要はあらず。
 八節 流離 恐らくは逃奔、又追放の義なり、或は云ふ内部の休息なきこと也。カルヴァインの説に、此の單數なるは、一の繼續する追放を意味するかの如く、其の全き流離の生涯を説明するためなりと、因にいふ上にあるあまた、ひの字は、三四の他國譯を参照せしに之れならず、此日本譯は如何なる者にや。○なんぢの革囊云云 是に至つて調子は一變せり、詩人は柔和なる個人的感情を以て、人より神に向へり、其の流離の時、發見せし所の凡ての避所運びし凡ての歩み、其の敵を避けし凡て

の謀略是等は皆な神によりて計へられたり天を仰ぎて濺ぎし涙は一滴も地に落ちざりき彼は神に向つて凡て是等を其の革囊に納められんことを請ひ又神は之を其の冊に記したまふことを信ぜり詩六十九〇廿八同百三十九〇十六

十一節 バウロが所謂若し神われらを守らば誰か我儕に敵せんやと同趣味なるものなり

十三節 生命の光のうち 活ける人の光のうちといふに同じ伯三十三〇三十の如し

教訓

全く信ぜ

苟も主を信ぜといふ然らば爾の全靈全身を彼に一任せよ半は彼を信

ずるが如く装ひて半は漠々たる疑雲の間に其の身を投ず是れ乃ち一手をエホバに捧げ一手をサタンに與ふる者にあらずや而して曰はく我が事成らず神我に福祉せずと抑も過てりといふ可し冷にもあらず熱もあらざるラオデキヤ的の信仰の沸騰して物を煮るの勢力なきは當然なり爾世に事へんとせば則ちエホバを離れよ爾エホバに事へんとせば則ちバアル(偶像の名)を棄てよ今日爾の正さに事ふ可き所を選ぶ可し爾をして今日に到らしめし者は何者ぞ鞭を加へて福せしエホバなるか誘ふて悪に導きしサタンなるか

ユシヤル 監督

第八節 爾わがあまたの流離をかぞへたまへりなんちの革囊に我が涙をたくはへたまへこは皆なんちの冊に在るしあるにあらずやといへるは英國の大監督ユシヤルの數次口にせし處なりき彼は一千五百八十年ダブリンに生れしが當時國歩艱難にして教會亦騷擾を來た

しぬ。故に愛蘭及び英蘭の間を徘徊せしが、終に五十三年間福音のため
に鞠躬盡力して、一千六百五十五年英蘭のレীগーフトに於て永遠の平
安を發見せり。

第六十二篇

緒言

エドトンの鉢にしたがひて俗長にうたはしめたるダビデのうた

ユワルドは十一節に據りて想像すらく、作者は預言者にして、當時の腐
敗せる人々と相争ひ、真正なる宗教の大維持者の一人なるべきか、而し
て彼等は永く彼を攻撃し、遂に彼等は今や確かに勝利を得たりと爲せ
り。然れども攻撃排擠の間に在りながら、聖き詩人は毅然として堅く神
に倚頼し、唯一真正なる贖主の手に在りて、己を強くし、潑々たる生氣を
有せしのみならず、亦人をも奨勵し、感化し、又慰藉するに適當なりし也、
と。

性質
神に信任すること深く、勝利の氣に満ち、人生の浮華にして、其の力も富
も決して恃むに足らざるを明白に告白し、危難の間にも從容不動、如何

分段

にも勇氣に、又快爽にして敬虔の情に富める者、本篇の外殆ど見るべからず。

分つて三とす、各四節より成る。初めの二部は敵の攻撃に際し、神を信ずるの福祉と安全なるを説き、終に之れに強く比較するに、人に倚頼するの愚なるを以つてせり。

一 わがたましひは黙してたゞ神をまつ、我がすくひは神よりいづる也

二 神こそはわが磐わがすくひなれ、またわが高き櫓にしあれば我いたくは動かされじ

三 なんぢらは何のときまで人におしせまるや、なんぢら相共にかたぶける石垣の如く揺ぎうとける籬のごとくに人をたふさんとするか

四 かれらは人をたふとき位よりおとさんとのみ謀り、いつはりをよるこび、またその口にてはいはひ其の心にてはのろふ、セラ

五 わがたましひよ黙してたゞ神をまつ、そはわが望は神より出づ

六 神こそは我が磐わがすくひなれ、又我がたかき櫓にしあれば我はうごかさざり

七 わが救とわが榮とは神に在り、わがちからの磐わがさげどころは神にあり

八 民よいかなる時にも神によりたのめ、その前になんぢらの心をそゝぎいませ、神はわれらの避所なり、セラ

九 實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり、すべてかれらを權衡におかば上にあがりて虚しきものよりも輕きなり

一〇 暴虐をもて恃とするなかれ、掠奪をもてほこるなかれ、富のましくははる時はこれに心をかくるなかれ

一一 ちからは神にあり、神ひとたび之をのたまへり、われ二次之をきけ

り

二三 わゝ主よあはれみも亦なんぢにあり、なんぢは人おのゝの作に
またがひて報をなしたまへばなり

註釋

一節 たい神をまつ 各種の困難およびサタンの多般なる試練の中
に立ちて唯だ神は吾が目的として倚頼する所なり
二節 わがすくひなれ 前節には神より救ひの來ることを述べける
も、尙ほ進みて神こそ救ひ其のものなれと説けり
三節 詩人は前節の如く、自ら神に倚りて強く勢を得、今や敵に向つて
言を放てり。此の言ひ方は四〇二に似たり、彼にては吾が榮光を耻辱に

ドンテ

向け更へんとし、此にては吾を高き位より落さんとす、而して俱に虚偽
を喜ぶものなり。詩人危難なるに方り、宛かも傾ける石垣の如く、ゆるげ
る籬の如く見ゆるや、敵はすでに全く之を推し倒すことによりて、其の
工を終りしが如し。
四節 口にていはひ、心にてのろふ 朝廷の臣下外を装ひて、内心にて
は叛き、所謂假面をつけたる者なり。
六節 二節を反覆せしものなり。ドンテの説教にいふ、本篇中二節、六
節に於て二度之を反覆せり、七節に於て敷衍せらるゝが如くに、神
は我が避所、我が榮なりといふ。若し神さげどころならば、如何なる敵
が能く我を追ひ求むべき、若し神わが櫓ならば、如何なる試練か我を傷
く可き、若し神我が磐ならば、如何なる嵐か我を動すべき、若し神わが救
ならば、如何なる憂鬱病か我を惱すべき、若しわが榮光ならば、如何なる

誹謗か我を讒すべきと、
 六、七節 前段より尙ほ進みて己を神にありて強くし、其の由つて出づ
 る原因を明白にせり。
 八節 民よ 一般には人を指せり、特別にはイスラエル人にして、尙ほ
 狭く言へば、ダビデの臣下を指す者なり。
 九節 前節に對比し來れば活潑なる對照なり。
 十一節 結末に至りて詩人は尙ほ前の誠を神の默示に訴へて警告を
 試みたり。○ひとたび、二次 數次の義なり、伯三十三〇十四、四十〇五
 の如し。

教訓

詩人歌つて曰く、我が靈魂は黙して唯だ神をまつと、ある何ぞ敬虔謙讓
 の精神の盛なるや、夫れ人生の失敗墮落は堅忍不拔の志氣衰へて、基徹
 振作せざるに在り、故に天の將に大任を此の人に降さんとするや、必ず
 先づ其の心志を苦め、其の筋骨を勞し、其の肌膚を餓し、其の身を空乏に
 し、其の爲す所を拂亂す、是れ乃ち心を動し、性を忍び、其の能くせざる所
 を曾益する所以なり、寶刀は百鍊の功を経ざる可らず、羅馬は一日にし
 て成らず、吾人は終りに至るまで疑ひを懐かざる望みを保たんが爲め
 に、須く夫の信仰と、忍耐と、を以つて約束を嗣げる者に倣ふ可き也、夫れ
 アブラハムは其の信ずる所の神、乃ち死し者を活かし、無きものを有し
 ごとく稱ふる神に倚り、其の望むべくもあらぬ時に尙ほ望みて、多くの
 國民の父とならんことを信ぜり、我儕は此の望みを執らんが爲めに、此
 の馳場に於て馳するなり、此の望みは靈魂の錯の如し、堅固して動かざ

る也。來れ疾風迅雷來れ鯨鯢龍蛇。
終に臨み、十一節なる神の默示について一言せん。夫れ神は能と愛の神
なり。吾人若し強からんことを欲せば、蒸發氣の如き人間に倚るべから
ず。唯だ全能の上帝あるのみ。吾人若し酬を望まんか、決して掠奪を刀劍
に求むべからず。唯だ其の行爲によりて酬ゆる神の愛の手に於てすべ
し。愛なき能は殘忍なり。能なき愛は懦弱なり。能は愛の強き基礎なり。愛
は能の美と見なり。

第六十五編

俗長にうたはしめたる歌ダビデの讚美なり

緒言

詩想の着色燦爛として、光彩陸離たる、正しく是れ黃雲靄然として野に
満ち、禾穀稷々として車に溢る、收穫に際して作られ、又シオンに於け
る神の前に膺集せる全會衆によりて、感謝の讚美歌として謳歌せられ
たるものにして、また疑ふべからざる也。七八兩節の暗示する所に據れ
ば、大なる政治的騷擾の時に方り、諸國民王國等の動搖するが中にも、神
は其の民に仁恵を示せしことを見るべし。
本篇は神の守護し玉ふ注意と愛との二大例證を共に結合せしものな
り。シオンの周邊に敵の取りまき騒ぎし際にも、神はシオンに平和を與
へたまへり。早魃と飢饉の迫り來りし時にも、神は仁恵を以つて年あら

しめ之を以てシオンを裝飾り玉へり。神の民其の罪を告白して其の必要を訴ふる時は、乃ち之を聴きたまへり。今や民等は其の恩恵を感謝せんがために、神の大庭に再び集ひ來りて之を讚美するは適當のことなり。此の二重の性質はエルサレムの前にてアツスリア兵の敗北せし後、間もなきこと明かに知るべし。賽三十七〇三十(ヒゼキヤ)よ、我がなんぢにたまふ徴は是れなり、なんぢら今年は落穂より生えたる物を食ひ、明年は蘗生より出でたるものを食はん、三年にあたりては種くことをなし、收ることをなし、葡萄ぞのを作りて其の果をくふべしに約束せられたる豊饒なる收穫は、其の結果に従ふ可く、敵の足下に近來蹂躪せられたる野は、今歡喜を以て歌ふべく、叫ぶべくも、黄金の波立ち騒ぎたり。然れどもロイスは本篇に於ける歴史的の暗示、および豊饒な收穫に推論することを拒めり、而して曰く、本篇は唯だ自然界の支配、殊に蔬菜界

ロイス

端書

分段

に現はれたる神の父たる攝理を讚美する歌に外ならず。

本篇の端書にはダビデの作となせり、然れども後世の證據ありとも感ずるを得ず。常に端書を熱心に辯護維持せるデトリッチユすら、此の道傳を棄て、而してエワルドと共に、本篇はセナクリブの敗北頃、乃ち基督紀元前七百十二年頃に書かれたりと思惟する程に、此の證據は確實なるものなりと、

分つて三段とす、

- (一) 一〇四 劈頭會衆の神に近づき、其の仁恵を感謝せんが爲めに來會せし思想と、感情の説明にして、
- (二) 五〇八 エホバの聖名の地の極にまで承認せらるゝ程、自然界及び諸國民の間に於ける、其の有力なる働きを讚美し、
- (三) 九〇三 神のおくりたまふ雨露の恩澤及び目前豊熟なる收穫を

殊に感謝する乃ち是れなり。

第一、二段の如きは句々の連續順序等整齊せざるが如し、然れども第三段は之に反して、言葉は思想と共に流れ出で盛大なる收穫の舞臺は、詩人の眼前にあり、彼は飄々たる黄雲の滿野に棚引ける光景を眺めや、彼の眼界は神の榮光ある約束を喜べる其の内情と、共に一致せり。油たる其の歡喜の情は溢れ流れて、無情なる受造物に迄及び、田畝も嬉嬉として共に叫び、共に歌ふかの如く見ゆめり。

一、あゝ神よ讚美はシオンにて爾をまつ、人は御前にて誓をはたさん

二、祈を聽きたまふものよ、諸人こそりて爾にきたらん

三、不義のことは我にかてり、なんぢ我儕のもろくの愆をきよめたま

はん

四、爾にえらばれ、爾にちからづけられて、大庭にすまふ者は福なり、われ

らは爾の家、なんぢの宮のきよき處のめぐみにて飽くことをせん

五、われらが救の神よ、地と海とのもろくの極なる極めて遠きものこ

恃とする、爾は公義によりて畏るべきことをもて我儕に答へ玉はん

六、神は大能をおび、其の權力によりてもろくの山を固くたゝしめ

七、海のひいき、狂瀾のひいき、もろくの民のかしがましきを鎮めたま

へり

八、されば極遠にすめる人々もなんぢのくさくの預兆をみておそる、

なんぢ朝夕のいづる處をよろこび、謳はしめたまふ

九、なんぢ地にのぞみて、漑ぎ大にこれをゆたかにしたまへり、神の河に

水みちたり、なんぢ如此そなへをなして、穀物をかれらに與へ玉へり

一〇、なんぢ畝を大にうるほし、畝をたひらにし、白雨にて之れをやはら

かにし、その萌芽を祝し

一 一 また恩恵をもて年の見弁としたまへり爾の途には膏をたゝれり
 二 二 その恩滴は野の牧場をうるほし、小山はみな歡びにかこまる
 三 三 牧場は皆羊のむれを衣もろくの谷は穀物におほはれたり、かれらは皆よろこびて呼ばはり又謳ふ

註釋

一 一 四節 毎句其の意味は明白なれども、思想の連續追ふべからず。然れども概ね次ぎの如くならんか、乃ち神はシオンに於て知られ、又讚美せられ、又禮拜せられ玉ふ、而して彼は祈念を聽きたまふものなり、是れぞ神の性質なる故に萬人亦神に來るなり。自ら弱きを感じ、其の恩恵と助力とを要せんと欲する者は、之を神の側に求むる也。此の如く來るも

カルザイ

同

のは乃ち罪の重荷をもて來る者なり。而して其不法を赦され、神に接近することを得る者は福なり。我等之れに加へられて、其一人となり、其の福を受け、之に充たされ、又満足する也。

一 一 節 爾をまつ。カルザイン曰く、神は其の民に日々讚美のため、新奇なる題目を與ふる程、恵に富みたまふなり。然れども或る人は説をなして曰はく、敬虔に於て、黙想に於て、神の前に沈黙するは乃ち讚美なり、と。

三 三 節 不義のことば我にかてり。不義我がために餘りに強し、我が不義われに追ひ及きて仰ぎ見ること能はぬまでになりぬ。カルザイン曰はく、我儕が不義は我儕を爾(神)の前より追ふべしと雖も、爾はすでに講和せられたるものとして、自己を示したまふにより、不義は我儕の祈禱の進路を妨げざるべし。イザヤ曰へらく、エホバの手は短くして救ひ得

ざるにあらざ、其の耳は鈍くして聞えざるにあらざ、惟なんぢの邪曲なる業なんぢらと、爾曹の神との間をへだてたり、又なんぢらの罪、其の面を被ひて聞えざらしめたり、と。

デーリッチュは多くの會衆を一人として我といへるなりといふ。

四節 飽くことをえん 凡て神惠の示す所の物に向つて、吾人飢え渴

くが如く之を去たひ、又空乏なる靈魂の之を以て飽くことを得るより、

更に勝れる感謝あらず(デーリッチュ)。

五節 今や詩人は猶ほ近く其の大主意に進みて、先づ神の其の民を助

くるためなる奇跡を述べ、其の奇跡はイスラエルに神あるを全地に知

らしむる程、大なることをいへり。○畏るべきこと イスラエル人のた

めに神の爲したまふこと、殊に埃及より救ひ出ださるゝためになした

まひし働きに用ゆる字なり。

六七節 神は自然界にも、政治界にも、其主權を保有ち玉ふなり、四十四篇を見る可し。

八節 五節より本節までを略言すれば、全世界、山も、海も、地極より地極までの住民も、みな神の掌理に在り、彼等は神を待ち、神は凡てをして喜ばしめたまふなり。

九節 茲に至りて收穫の特別なる感謝を始む。九、十一、十三諸節の動詞の用法によりて、地の實を成熟せしめ玉ふ神恩は一般を承認するのみならず、四時特種の時候に關係す。○如此そなへ 雨を降すこと。○あたへたまへり 現在にして與へたまふの義なり、常に一年のみならずして、年々歳々のことなり。

十節 五風十雨ともいふべきなり。

十一節 年は恩恵をもつて己の裝飾となし、惠の膏は途に滴々として

溢れぬ。十三節 皆よろこびて エワルド及びデリーチユは不思議にも人及び凡ての受造物なりといへり然れども穰々としてもろくの谷に満てる穀物を指せりてふ詩想の勝れるに及かず。

教訓

神の能

誰か度量を定めたりしや誰か準繩を地の上に張りしや其の基は何の上に奠かれたりしやその隅石は誰が置えたりしやかの時には晨星相ともに歌ひ神の子等みなよろこびて呼ばはりぬ海の水流れ出で胎内より涌き出でし時誰が戸をもて之れを閉ぢこめたりしやかのとき神雲をもてこれが衣服となし黒暗をもてこれが襤褸となしぬ爾生れし

天恵

日より以來朝にむかひて命を下せしことありやまた黎明に其の所を知らしめこれをして地の縁を取へて悪き者を其上より振り落さしめたりしや地は變りて土に印したるごとくになり諸の物は美しき衣服のごとくに顯はる誰か大雨を灌ぐ水路を開き雷霆の光のすぐる路を開き人なき地にも人なき荒野にも雨を降し荒れ且つ廢れたる處々を潤ほしかつ若菜蔬を生え出でしむるや雨に父ありや露の珠は誰が生める者なるや

イザヤエホバの勅を宣べて曰く天より雨くだり雪おちて復かへらず地をうるほして物をはえしめ萌をいださしめて播く者に種をあたへ食ふ者に糧をあたふかくわが口よりいづる言もむなしくは我にかへらずわが喜ぶところを成しわが命を遣りし事はたさんなんぢらは喜びて出で來り平穩にみちびかれゆくべし山と岡とは聲を放ちて前

共に歌へ

にうたひ野にある樹はみな手を拍たん。松樹はいばらにかはりて生え、
 岡拈樹は棘にかはりて生ゆべし。此はエホバの頌美となり、並どこしへの
 徴となりて、絶ゆることなからん、と。
 嗟吁、美なる哉。此の天地、熙々たる哉。エホバの稜威、其の恩澤は普く地の
 極より、地の極にまで及び、其の榮光は天の端より、天の端に至れり。噫吁、
 人の子よ、來れ。天地、山野と共に手を拍ち、聖き詩人に聲を合せて歌へ。

第八十二篇 アサフの歌

緒言

治者の不義

本篇は律法を守る務を負ひながら、其の私情のために之を蹂躪せし者に對し、預言的の筆法を以つて嚴肅なる警戒を加へし者なり。
 神は自ら其の義を彰さんがために、國民の間に立ち、其の威嚴を以つて民の治者、審判人を審判せんこと、詩人の目前に見ゆるが如くなりき。本篇は夫の五十篇の如く、世民を審判せんとにあらざ、民の士師たる者を審判するものなり。會衆の形式に流れ、偽善に走るを責めんとにあらざ、治者、士師の乖戾、破廉耻にして、正義を曲げ、公平を蔑するを譴責、叱咤する者なり。
 詩人は神前に於けるが如く、是等の不義者に對して、「爾曹は正しからざ

る審判をなし、あしき者の身をかたよりみて幾何時をへんとするや」と云へり。夫れ彼等は至上者(神)の名によりて立てらるゝ者、又其の肖像を心に有し、其の主權を實行し、全く彼を代表し、而して其の義と智とを保有すべき者たる也。然るに彼等は其の聖職を苟し、義に代へて不義を行ひ、悪人匪徒たりと雖も、強くして富める者は之を曲庇して、孤兒寡婦の如き無告の弱者は、容赦なく之を冷遇殘待して憚る所あらざる也。詩人の訴ふる所は、空しく水泡に歸せり。彼等の良心道念は全く腐敗し、其の理性は傾斜し、其中の光は朦朧たり。かくて社會の基礎は撼揺し、世道の根柢腐朽せり。詩人は全地を觀察して、其の普遍一般を知れり。エワルド、デ、ウエット、及びヒッチヒの徒は本篇をもつて、異邦の治者、侯伯を指示せるものにして、バビロンに在りて其放逐時代の終の頃、同帝國の壤亂腐敗の現狀を目撃し、之に向つて其の聲を揚げたるものな

著作の由來

りとせり。此の觀察は乃ち八節の諸國といへるに憑據するものなり。然れども眞正なる預言的精神に於て、其の自國の人民よりは、廣き意義を取るは、詩人の慣手段にして、怪むには足らざる也。又イスラエルに於ける神の特別なる支配と默示を、神の普遍一般なる王國の唯だ一部として承認せることは、七篇の六||八を例證とすべし。是れ亦本篇に引證するに足れり。

スチール、フープエ、ルド

ブリーク、ブレン

スチール、フープエ、ルド等の説によれば、神、至上者の子などいふが如き名稱は、聖書中異邦の君主を指示せしことならず。フープエル、ブリークの徒は、此の神は人の士師にあらずして、天使なりといふ。ブレン亦是の説に従へり。然れども約十〇三十四に於て、基督の本篇を引用せられし所と調和すること難しとは、吾儂カルヴァインに左袒せんとす。

本篇の参考とすべき所のものを擧ぐれば則ち申一〇十七、十〇十七、母
 上八〇三、代下十九〇五、七、寶一〇十七、三〇十三、十五、耶廿一〇十一、
 二、亞七〇九、十、麼五〇十二、十五、米七〇三の如き是れなり。
 一 神は神の集ひの中にたちたまふ神はもろくの神の中に審判をな
 したまふ
 二 なんぢらは正しからざる審判をなし、あしき者の身をかたよりみて
 幾何時をへんとするや、セラ
 三 よはきものと孤子とのためにさばき苦しむ者と乏しきものとの爲
 めに公平をほどこせ
 四 弱きものと貧しきものをすくひ彼等をあしきものの手よりたす
 けいませ
 五 彼等は知ることなく悟ることなくして暗中をゆきめぐりぬ、地のも

ろくの基はうごきたり
 六 我いへらく、なんぢらは神なり、なんぢらはみな至上者の子なりと
 七 されどなんぢらは人のごとくに死もろくの侯のなかの一人の如
 く仆れん
 八 神よおきて全地をさばきたまへ、爾もろくの國を嗣ぎたまふべけ
 ればなり

註 釋

一 節 神の集ひの中にたちたまふ 世の士師及び治者等は自ら無上
 不羈にして制裁なしとすれども實は大に然らず尙ほ更に其の上には
 是れより高貴なる者の存するあり神は肉眼を以つては固より認識す可

からず、然れども王侯と共に其の座にあり。故にソロモンの座はエホバの座と稱せられたりき、代上廿九〇三。又神は士師と共に其法庭の座にあり、而して又彼の主權を委託せし彼等どもに在り。又たちたまふことは賽三〇十三を参照すべし。〇もろくの神、上帝より出づる主權を有する耳ならず、公平慈愛、正義を以つて神の代理たる者なり。エロヒムの字を用ゐし神クノーベル又フリーブエルドが言ふ如く、其の名に於て審判の宣告せらるゝ神にあらざして、神の名と、其の主權によりて行ふ所の審判者其者なりとの、デーリッテユの説に従ふ可し、出七〇一十八〇十五、母上廿八〇十三。

二節 なんぢら、不義なる審判者なり。

三節 弱きを扶助け、制抑へらるゝ者を救ふは、舊約以來の教訓にして、基督は至俵を全く成就せし者なり。

五節 かれら、四節のあしきものを受けていふ。〇知ることなく、不義を行ふ者は知覺なし、五十三〇四、七十三〇廿二、又賽一〇三を参考すべし。道德の不明は衆惡の原因なり。〇暗中をゆきめぐり、約三〇十九、廿を見るべし。〇地の、基うごきたり、社會の壞亂は上流者の腐敗より來る、避くべからざるの結果なり。上の好むところ下これより甚だしきはなし。然り、君子の徳は風の如し、小人の徳は草の如し。人の師表先覺たる者、豈其れ慎まざるべけんや。

六節 我いへらく、多くは神の言と解す。〇なんぢら、乃ち士師等なり。

八節 神の全地を審判し、諸の王國を支配したまふことをいふ、一節と相呼應して常山の蛇の如し。

教訓

婪潔と貪

廉潔は建國立身の天使にして、貪婪は亡國傾身の魔鬼なり。苟も廉潔なり、富貴淫する能はず、貧賤移す能はず、何者の魔神ぞ、能く其の間に乗ずることを得べけんや。苟も貪婪なり、賄賂以つて鑿くことを知らず、公義彼に於て何かあらん、以つて正義を枉ぐべし、以つて人を偏視すべし、以つて強者に諂ふべし、以つて寡婦の家を呑むべし、以つて弱者を虐待すべし、惡首擡げられてすでに高し、百千の惡行之れに隨ふ固より當然なり、復た何をか怪まんや。ゆゑにイスラエル建國の時に方りて、神は「爾其の隣人の家を貪る勿れ」と聖誠嚴分炳分、以つて千萬世不朽不變の律法となしたまひこと深く省察せざる可からざる也。然れども不幸にして

貪る勿れ

清廉

其の聖誠は暴君汚吏のために潰されたること、あけて數ふ可からず。イスラエル猶ほ且つ然り、况んや他の異邦に於てをや。基督曰く、戒心して貪心を慎めよ、夫れ人の生命は所蓄の饒なるには因らざる也。我は決して利己のために生擒せらる可からず、進んで人を利し世を益するの大慾望を成就せざる可からざる也。パウロ曰はく、貧しきに似たれども多くの人をとまし、何も有たざるに似たれども凡ての物を有てり、是れ乃ち眞の富有者なりといふ可し。故に我は一身に纏綿せる有限の財を棄て、天地と和合し、宇宙を併呑し、小利を抛棄して、大利につくべし。然れども其の妙域佳境に到らんと欲せば、すべからず先づ心を光風霽月の間に放ち、洒々落落々として逍遙せしめざるべからず。心一旦羽化登仙するの術を得ば、則ち其の希望庶幾する故、何事か成らざらん。是に於てか眞人たるべし、義人たるべし、仁者たるべし、俠夫たるべし。要する所

唯だ一の潔字のみ神の子曰く心の清き者は福なり其人は神をみることを得べければなりと。

第八十四篇 ギテトの琴にあはせて俗長に歌はしめたるユラの子のうた

緒言

神を慕ふ

本篇は普通の性質四十二、三篇に甚だ近く相似たり。感情の非常に深遠にして、柔和なる人の熱心なる、又エホバの家と、其禮拜のために敬虔なる彼の四十二〇と同一なり。又放逐の時、詩人は神の聖所より遠く隔離し、其の際艱苦憂悶具さに至りて、之を作りしこと亦彼の四十二〇と同一なり。國民の神を頌讚し、又聖き京城に上れる途次の神民の群を描寫すること、亦彼と同一、否むしろ彼に勝りて更に強し。今此二篇を對比せんに、此二を彼の一二に、此四を彼の四に、又神を活ける神として、此二と彼の二と、又更に此の七と四十三〇三の如き著しきものあり。其の構造感情言語の彩色、および其の特質と創意によりて、ユワルドは

著作の由

兩篇の作者を一人なりとせるは、蓋し正當の論結なること疑ふべからず。本篇の九節によりて觀れば、作者は王なるべし。エワルドはエホヤキム王乃ちバビロンに捕へられ、多年幽閉の間にありしが、後遂に赦免を得て王位に復せし者、王下廿五〇廿七〇三十なりと想像せり。本篇の前半は亦四十三〇に比すべし、而して廿七〇及び四十五〇とを結合せし説明あり。

端書の熱心なる維持者ヘンダステンベルヒは、ダビデ其の子アブサロンの亂を避けて、ヨルダンの東部地方に在りしとき、之れに伴隨せし利未族のコーが家人之を作れりといへり。

ブロンプターは凡てコーの子と端書せるものは、ヒゼキヤ王の時代利未族の作りし者とせり、而して本篇は四十二篇と同一なる事情に際し、作られたるものにして、敬虔なる一利未人、若しくは其の中間の者アツ

ヘンダステンベルヒ

ブロンプター

スリヤ王セナケリブの兵の爲めに阻められ、定時に神殿の聖務を奉ずべき、當番を遂行し得ざりしものなりと想像せり、而してコーの子はダビデの時(代上九〇十九)神の幕屋の門守なりしことを引證す。尙ほ彼は以爲へらく、本篇著作の地はヨルダンの東方ヘルモンの邊、詳言せば、レアテの高原にて、遙かに嘗てエルサレムに旅行せし當時を回想追懷して、ヨルダンの谷を通過しては、痛く苦惱に犯され、熱氣のために焚殺せられんとせし、曠昔の光景宛然として目前に現出し、炎々として焼けたる岩石の狹路は、道者の涙によりて潤ほはされたりと、詩人は想像せしなりと。

分つて二段とす

(一) 一七 神殿に於ける聖務の福及び之に與かることを許されたる者の福なること、

(二)八||十二 詩人は今自らは聖所より隔離せりと雖も、神はなほ其の光なり、盾なり。

又之を三段に分つ者あり、

(一)一||三(或は四) (二)四(或は五)||七 (三)八||十三とす。若し一段を三節迄とせば、則ち一段と三段とは共に句の頭に「萬軍の」を冠とし、之に反して二段の首節なる四節は一段の主意を完うする者なり。

フープエルド、デーリッテ、デ、ウエツト等は「セラ」を以つて句切となし、

一||四、五||八、九||十二とせり。然れども八節を以つて二段の結句となすは、全く成しがたきことなり。

一萬軍のエホバよ、爾の帷幄はいかに愛すべきかな

二わが靈魂はたえいるばかりにエホバの大庭を志たひ、わが心わが身は活ける神にむかひて呼ぶ

三誠や雀は窩を得、燕子はその雛をいる、巢をえたり、萬軍のエホバわ

が王わが神よ、これなんぢの祭壇なり

四なんぢの家にすむものは福なり、かゝる人はつねになんぢをたへまつらん、セラ

五その力なんぢにあり、其の心シオンの大路にある者はさいはひ也

六彼等は涙の谷をすぐれども、其處におほくの泉あるところとなす、また前の雨はもろくの恵をもて之をおほへり

七かれらは力より力にすゝみ、遂におのくのシオンに到りて神にまみゆ

八萬軍の神エホバよ、わが祈をきゝたまへ、ヤコブの神よ、耳をかたぶけたまへ、セラ

九われらの盾なる神よ、みそなはしてなんぢの受膏者の顔をかへりみ

たまへ

- 一〇 なんぢの大庭にすまふ一日は千日にもまされり、われは悪の幕屋にをらんよりは寧ろ我が神のいへの門守とならんことを欲ふなり
- 一一 そは神エホバは日なり盾なり、エホバは恩と榮光とをあたへ、直くあゆむものに善物をこばみたまふことなし
- 一二 萬軍のエホバよなんぢに依頼むものは福なり

註釋

一節 帷幄 多數なり、是は聖所の種々なる所を示さんかため、又むし
 ろ詩想的にして、恐らくは爾かせしものならん。
 二節 靈魂といひ、心といひ、身といひ、又其の動詞といひ、實に全心全

を盡せしものなり、○大庭 人民の聖會のために造りしものなり、六

十五〇四、賽一〇十三、

三節 今作者はシオンより遠く隔りて天涯にあり、燕雀の自由自在に
 聖所の軒端に巢を營みて、棲息ことを羨望せり、彼等は詩人の保有し得
 ざる福祉あり、此の失望憂心の際、彼等は詩人に勝りて、神に近く接見す
 るが如く見えたり。

○これなんぢの祭壇なり 家といふべきを詩想的にかく言ひし也。
 元來此の句には諸説あり、一鳥は其の巢、其の室家、其の隱家を有せり、我
 も亦其避所、隱家を神殿の裏に發見せりとなり、二略文なり、夫れ雀は其
 の家を發見せり、然れども我は爾の祭壇を發見すべしとなり、三フリープ
 エルドの想像する所にして、句を轉動變換するなり、即ち三節の終り二
 句を四節に入れて、『爾の家、爾の祭壇、或は祭壇の近くに住むものは福な

フリープ
エルド

り萬軍のエホバ我が王わが神よかゝる人は常に爾をたへまつらん』
 どなす也。(四)ヘングステンベルヒ、デーリツチユの如きは鳥を以つて詩
 人自ら喩へしとせり。
 四節 つねに爾をたへん 今は苦みて軛軻落魄の裏に忍ぶと雖も、
 將來を望みて猶ほ常に云云と解する者もあり。
 五節 七節 管に神の殿に住み、之に近くある者のみ福にあらずして神
 殿に詣でんとて、其の途に在る者も亦福なり。彼等は斯る時の感情を追
 懐して行くものなり。其の経過する途は岩焼け、砂燃え、荒涼酸澹たる谷
 間あり、然れども心は常に勇壯にして泉の如く、涙の谷にも天來の靈雨
 によりて、百花薫然として咲き匂ふの思ひあるなり。而して歩々、又宿所、
 宿所とともに生氣活潑にして遂に神の前に到達するなり。
 六節 エワルド曰く、賽卅五〇七焼けたる沙は池となり、うるほひなき

地は水の源となり、何二〇十五(アユル(患難)の谷を望みの門となしてあ
 たへん)の猶ほ單純なる形態に於ける同一なる形容を用ゐられたるを
 比較せよ。パレスタインの入口は實際荒廢、乾燥せる死地なりと。○涙
 の谷 アルクハルトの説によれば、シナイ山の近傍に涙の谷といふ所
 ありと。原語は「ベカ」なり古代の譯には「泣く」とせり。デーリツチユ、エ
 ワルド等は「ベカ」は樹名なりとせり、母下五〇廿三代上十四〇十四。○
 前の雨 シオンの子等エホバによりて樂め喜べ、エホバは秋の雨を適
 當なんぢらに賜ひ、また前の如く秋の雨と春の雨とを、なんぢらの上に
 降らせたまふ(耳二〇廿三)。
 七節 力より力にすいみ エホバを俟ち望む者は新なる力をえん(賽
 四十〇三十一)。
 八節 作者は今や神の前より離れ居れども、前節なる彼等と共に同一

なる恵みに與らんがために祈りし也。

九節 受膏者 王のことなり、今茲にて作者のことなり。

十節 篤信想ふに餘りあり。

十一節 第一句神エホバは日なり盾なり、は七十人譯にては「主なる神

は仁慈と眞理を愛す」とあり神を直接に日といひし所は唯是所のみ常

に光といひ、又義の光(馬三〇廿)といふことあり。

十二節 詩人は遂に此の確信に到達せり。

教訓

青年殉教者
ホント

フオックス、マリア女王の治世なる一千五百五十四年の頃の、殉教者の事を記録せしが、其の内に十九歳の青年なるウ井リアム、ホントの逸

ヘリ
ホル
トン

事ありけり。蓋し其の兄弟の物語に據れるものなり。抑もウ井リアムは堅信不拔にして、其の將さに死せんとするや、此の第八十四篇の詩を誦讀せり。偶々一紳士あり、曰く、神の彼が靈魂を恵み玉はんがために、余は祈らんと、傍人等答へて、アイメン、アイメンといひぬ。かくて火刑の準備は全く成れり、火は點ぜられたり。時にウ井リアムは正しく其の詩篇の巻を兄弟の手に投ぜり。兄弟彼に向つて「ウ井リアム、爾基督の聖苦を想へ、決して死をな恐れぞ」といひければ、彼は乃ち「余は恐れず」と答へしが、頓て其の手を天に向けて上げつ、「主よ、主よ、主よ、我が靈を領け玉へ」といひ了り、其の首は再び逆巻く黒煙と、怒りの舌を吐きつゝある炎々たる火焰の中に垂れにけり。實に彼は其の血を以て主の榮光と、讚美の證を全うし了んぬ。

第八十四篇 教訓

トマス、ヘリホルトンの將さに死せんとするや、入をして此第八十四篇

を讀ましめ、其終りに至り自ら亦之れに和したり。而して祈り了りて後にいへらく「余は常に不調子の聲にして、耳亦よからず、然れども其の最も悪きは、不調子の心情なりけり。然れども最早直に天なる聖所の務に加はれば、則ち永遠無窮の世界なる彼處には、調子に外れし情愛は一絃だも存せざるべきなり」とかくて其の後教師の一人をしてドクトル、チロウエンが著述せし「基督の人物」てふ書中、天國の神殿にて務むべきことを記録せる一段を朗讀せしめたりといふ。トマスは一千六百七十四年に生れ、一千七百十二年短命にして死せしが、其の名は噴々として蘇人の唱道する所なり。彼は哲學に長じ、明晰なる能力に、熱心なる性質を調和せる驚くべき才能を有せしものなりき。其の敬虔なる信念はルーサー、フオールド及びマツケインの如く、深篤なる情感を、基督の人物に緊結せり。其の死に臨みて語りし所は、多く其の友人等の傳唱する所な

るが、一二を例せば「神よ、余が嘗て生れしとを祝したまへ。余は父母及び十人の兄弟姉妹を天に有せり、余は應に其の第十一たるべし。余が生れし日を祝したまへ」といふが如し。彼は聖アンドリュにて神學教授たりしが、彼處にてルーサー、フオールドの側に眠れり。
トマス、カールイル嘗て懷疑と失望とを伴ひてクレイゲンポットツなる閑適の山莊を出で、紅塵萬丈なる倫敦の熱鬧界に向はんとするや、其兄弟アレキサンドル及び自己を慰藉せんがために、羅八〇廿八と混合して、此十一節を引用せりといふ。按ふに彼が聖書に通ずるの知識は、其他の知識と、共に同日に語ること能はずといふも、敢て誣言にあらざ。彼自らも亦詩篇作者の細心なる言葉を、使徒等の言葉に於てよりも、むしろ自家の哲學に適用せることを許せり。然れども其衷心に於ける信仰は、クリスチアンにてありき。彼いへらく「余は余が思想を天に向ふるな

り、蓋し此地上なる吾人の旅路のために、如何なる基礎にても、之を發見する所は、唯だ天に在るのみなればなり。夫の蒼々たる天の屋蓋の、吾人すべてを圍繞するが如く、確かに在天の主の攝理亦然り。神エホバは直く歩む者に善物をこばみたまふことなし。是乃ち昔時の詩人の信仰なりしが如く、亦等しく吾人の信仰たらしめよ。余は思ふ、是れ人に屬し得べき凡ての資産のアルバ(始めなり、チメガ(終り)なり、と。

第九十篇 神の人モーセの祈禱

緒言

アイザック、テール其の著「希伯來詩の精神」に曰く、詩第九十篇は恐らくは人間の文章中、最も高崇するもの、感情に於ては最も深遠なるもの、神學的觀念に於ては、最も高尚なるもの、其の意思に於ては、最も壯大華麗なるものと稱するも、敢へて誣言にあらざる也。煩悶、多罪、又無常なる者として、人生を論ずるに眞實也。永遠者、主權者、審判者の觀念及び人間の最も嚴酷なる試鍊に拘らず、彼(神)に依頼することを失はず、信仰確實にして、恰も豫言せられたるかの如く、生氣恢復の時近きに向つて祈る者の避所、又希望の觀念に於て眞實なるものなり。不死の教理は、默示の遠く隔りたる日の來るまで、秘

密に包被せられて茲に致されたり蓋し此の世や短くして意常に多く、此生や須臾にして憂苦酸慳以つて夫の神聖なる不變不易に比す永生の思想實に茲に胚胎す本篇中驕慢不遜にして神聖を瀆し或は個人的又關係的に憂悶者の言語上有毒なる彩色を流し或ひは神の公義仁愛を非議するが如き汚點は毫も一點だも其痕跡をどゞめざる也本篇は正しく希伯來の大立法者に歸するも或は歸せざるも之を全く古人に歸する所以のものは單に其典型の尊嚴にして單純なるに因るのみならず又消極的に人民の知識又道德の歴史に於て後世に屬する思想の詭辨的ならざるに職由する也云云

あるを承認す

エワルド曰く本篇は神明の深遠玄妙に到徹し非常に較著にして且つ嚴肅なる或るものを有せり主意および其書方は創意的にして其創意や乃ち能力あり而して若し吾人尙ほ精密に編纂者とせらるゝに至りし神の人モ一七(後世の編纂者の彼を爾稱するが如く申三十三〇一)喇三〇二の歴史的原因を知りしならば則ち正しく彼に歸すべき也エワルドが之れを以つて後世乃ち紀元前九世紀或ひは八世紀頃の作なりとする一の理由は本篇を貫通せる所の人生の荏弱および有爲轉變の深遠なる感覺は太古時代に於て起り得べきものにあらずと臆断せるに過ぎざる也

ヘンクステンベルヒ曰く端書に於けるが如く本篇を以つてモ一七の作なりとするに緊要なる内部の理由存する也本篇は乃ち全く上古の

ルートル
ヘルテル
分段

印證を有せり。斯くの如く明晰に感情の創意的説明を現す所の詩篇一も此の他にあらざる也。又特質を現すもの、此の如き詩篇亦他に存せざるなり、又一方に於ては五書に殊に詩想的言句、又就中申命記三十二章に暗合するものあらざる也。ルートルは又他の特質に付いていへらく、モーセは律法を教訓することに於て、爲せしが如く、此祈禱に於ても亦等しくなしぬ。彼は罪惡の中に禁錮せられたる、傲慢者を警戒し、其の眼前に其の罪惡を包まず、隠さず暴露するため、死、罪滅亡を説法せりと。罪惡の應報として死を説ける教理は甚だ卓越したるものにして、本篇の特質なり。是は數次聖書に、殊に詩篇に現るゝ教理にあらず。唯だ一度創二〇三に見ゆるのみ。
詩人ヘルテル亦古代の詩永遠不朽の讚美歌なりと稱せり
分つて二段とす、

(一) 一 || 十二 人間の荏弱なる、有爲轉變と神の永遠不變とを對比して默想すること、詳言すれば先づ之れを比較し(一 || 六)、
次ぎに此有爲轉變の道理乃ち人の罪、神の怒り及び之を向け更ふる智慧を祈ること(七 || 十二)、

(二) 二十三 || 十七 神はイスラエルの罪と、其懲戒とに拘らず尙ほイスラエルの望又避所にして、終に其の民を憫み、悲哀に代へて歡喜を與へ(十三 || 十五) 又成功を以つて凡ての其工を飾らんことを祈る(十六、七)
一 主よなんぢは往古より世々われらの居所にてまします
二 山いまだ生りいでず爾いまだ地と世界とをつくりたまはざりしとき永遠よりとこしへまでなんぢは神なり
三 なんぢ人を塵にかへらしめて宣はく、人の子よなんぢら歸れと
四 なんぢの目前には千年もすでにすぐる昨日の如く、また夜間の一時間

に同じ

五 なんぢこれらを大水のごとく流れ去らしめたまふ、かれらは一夜の寝のごとく朝に生えいづる青草の如し

六 あしたにはえいでゝさかえ夕にはかられて枯ゝなり

七 われらは爾の怒によりて消えうせなんぢのいきどほりによりて悔まどふ

八 爾われらの不義をみまへに置きわれらの隠れたる罪を聖顔の光の中にあきたまへり

九 われらのもろくの日はなんぢの怒によりて過ぎ去りわれらがすべての年のつくるは一息のごとし

一〇 われらが年をふる日は七十歳にすぎずあるひは壯にして八十歳にいたらん、されどその誇る所はたゞ勤勞どかなしみとのみ、その去

りゆくこと速にしてわれらもまた飛び去れり

一一 誰かなんぢの怒のちからを知らんや、たれか爾をおそるゝ畏にたくらべて爾のいきどほりを知らんや

一二 願くはわれらに己が目をかぞふることを教へて智慧のこゝろを得しめたまへ

一三 エホバよ歸り玉へ斯くていくその時をへたまふや、ぬがはくは爾のしもべらに係れるみこゝろを變へたまへ

一四 願くは朝にわれらを爾のあはれみにてあきたらしめ世をはるまで喜びたのしませたまへ

一五 爾がわれらを苦しめたまへるもろくの日とわれらが禍害にかかれるもろくの日とにたくらべて我らをたのしませたまへ

一六 なんぢの作爲をなんぢの僕等になんぢの榮光をその子等にあら

はしたまへ

一七 かくてわれらの神エホバの佳美をわれらのうへのぞましめ、われらの手のわざをわれらのうへの確からしめたまへ、願くはわれらの手のわざを確からしめたまへ

註 釋

一節 世々 是は神の人モーセが將さに世を去らんとするに方り、イスラエルの全衆に向つて言ひし『昔の日を憶え過ぎにし世代の年を念へよ』申三十二〇七といひしに基ける言なり ○居所 是亦モーセの晩年の言にして『永久に在す神は住所なり』申卅三〇廿七より起る。是は啻に其の性質を言ひしのみならず、經驗なり、アブラハム、イザク、ヤコブ

の確乎として定まりし家なく、寄留者旅人なりしとき、神はなほ其の居所なりしことを承認す。

二節 萬軍の主管て宣はく、我はエホバなり、ど。エホバとは即ち我は在りて有る者なりとの義なり、自ら立ち、自ら存し、決して他物に倚らず、他物の制裁を受けざるの意味なり。

二節 塵にかへらしめ 創三〇十九、傳十二〇七。

四節 ベテロ之を引用して言へることあり、彼後三〇八を見よ。

○昨日のごとく 猶太にては日の晩より翌日新しき日となる。

○夜間の一時 昔しは夜の間を三分し、後に至りて四分せり。

七節 句の首に『蓋は』の字あるべし、而して前節を説明するものにして、

議論にはあらず、

八節 神の御前には隠れ避くることを得ず、陰府もあらはなり、心腸も

さらさるゝなり。

九節 神の前には何人も能力なく、價値なきこと見るべきなり。パロは如何にヘロデは如何に。

十節 日の下に在りて、人の役々として勞する所は何事ぞ。

○その誇るどころ 其のとは年齢に對してなり。

十二節 穀物の收穫の如く、賢心は聖き教育より集むる果なり。

十三節 前段の黙想せし深き原泉より、流れ來りし禱告なり。神は永遠

なり、されど人は消え易くして、又多罪なり。神の其の聖手を人の上に置

きたまふ時に於てすら、人は其の罪を正すこと能はず、されば罪を悟り、

世の轉變を知るべき、神の聖き教育を要すること、固より言ふに足らず。

モ一七 深く之を悟りて、忽諸にせず、神と親しく交りて、其の仁恵を請へ

り。

十四節 朝に 悲哀の暗き夜過ぎ去りて、喜樂の朝を得んことを望め

るなり。

十五節 人情弱點の通感なり。

十六節 爾の作爲 審判並びに恵みにも、共に用ゆ。

十七節 われらの手のわざ云云 人自ら己の意に任せて行ふ所は、徒

勞にあらずんば、則ち過失なり、罪惡なり、故に聖き光に照されて、確實な

る事業をなすべき也。

教訓

エホバの御前に肅然として襟を正し、瞑想黙思し來れば、則ち聖徒の胸裏、必ず這般の感慨なくんばあらざる也。乃ち始むるに神の永遠無窮な

るを以てし結ぶに永久の將來神と俱ならんことを祈る、固より其の所
なり。

本篇一―四節は魯西亞の教會にて、葬儀の歌に用ゐらる。

又十二節に付ては傳ふべき談あり。今トマス、フルレルの云ふ所に據り
て之を記すべし。嘗て監督ラッドカンターベリーの大監督と、共に女王
エリサベスの前に出で、説教を請はれぬ。抑もラッドは女王の殊遇する
所にして、大監督の死後には、其の相續者と指定せられし人なりき。扱此
の時大監督はラッドに告ぐるに女王すでに衰へて、少壯時代の機智辯
才其の能力を失へり。須らく之を指摘して、其の心を感動せしむべしと
いふを以つてす。正直なる監督ラッドは、乃ち爲めに力を得、題詞として
本篇十二節を選定し、人生の不確にして、恃むべからざるを説き、之を個
人的に女王に適用せり。されば死を聽くことを好まざる女王、いかでか

之に黙すべき。彼は直ちに其寵遇を失し、且つ大監督の相續權を奪はれ
たり。然れども神聖にして敬重すべき教長の令名は永く彼に伴ひて、其
の死に至れりといふ。

又ドクトル、ストートン、ジョン、ハムプデンの葬儀を記して曰へること
あり。其の遺骸は大ハムプデンの壁次に送られたり。乃ち夫の愛國者が
嘗て郷紳士の勉強と遊戯とにて、其の生涯を永く送りし舊宅に接近せ
る所なり。山毛櫛の生ひ茂りたる、チルタルンの白聖の丘の下なる小徑
を、彼が愛せし軍隊の分隊は帽子を脱し、武器を倒まし、其の旗を卷き、
悲歌を唱ひつゝ、徐々として彼を其の永久の寢所に送りけり。其の歌に
曰く、主よ、爾は往古より世々われらの居所にたまはせり。爾人を塵に
かへらしめたまふ。爾は彼等を大水の如く流れ去らしめたまふ。彼等は
一夜の寝りのごとく朝に生え出づる青草のごとし。朝にはえいで、さ

九十八
かえ夕には枯られて枯るゝなりと。かくて其の葬儀は了り、兵士等は村
里の教會堂より、各其隊に歸るに方り、夏の日の緑の森、白き丘をして美
しき祈禱を反響せしめたり。曰く、神よねがはくは我をさばき情志らぬ
民にむかひて我が訟へをあげつらひ詭詐多き邪なる人より我をたす
けいだしたまへ。爾は力の神なり、なんぞ我をすてたまひしや、何ぞ我は
仇の暴虐によりてかなしみありしや、願くは爾の光となんぢの眞理と
を放ち我をみちびきて其の聖き山と其の帷幄とにゆかしめ給へ。詩四
十三〇一―三。シヨン、ハムプデンの死せしは實に一千六百四十三年
七月にして大内亂の始まりし比なりき。其の將さに死せんとするや、祈
つて曰く、テ、萬軍の主エホバよ、爾の仁慈は大にして、吾等罪人になし
たまふ所は正しくして且つ聖し。主よ願くは吾が生國を救ひたまへ。此
等の領地を爾の特別なる保護の下に置き玉へ。主イエスよ、吾が靈魂を

九十九
受け玉へ。あゝ主よ我が國を救ひたまへ、あゝ主よ恵みを……と。是に
至り語止み、後方に倒れて絶息せりといふ。
ヨークの大監督、かつて説教の中にいへることあり、本篇は天來の啓發
を受けたる言ひ顯はしの最も舊き者の一なり。是れロンドンにても毎
週人の子數百人の死すべき塵の上に讀まるゝ所の祈禱なり、而して斯
く用ゐても少しも之を舊きものとせず、三千年の過去も此の句を廢す
るの必要を感ぜしめざる也。イスラエルの子と永遠なる神との關係に
歸する所の言は、尙ほ其の悲哀に際して神に向ふ英國人の信仰心を説
明するに適するものなり。此の壯大なる言の語らるるや、吾人が生涯の
周邊に掛れる幔幕は引き去らるゝが如く見え、又嘗つて夢想せざりし
深遠玄妙の外を見る也。刻々たる時間及び成功の徐々たる結果より、分
秒及び永くまた多く見えし時間より吾人は神に向ふなり。神の永遠な

る性質は今在るが如く、亦かつて世が創造せられし時に在りし者なり。彼には千年も猶ほ甦睡者の夜の一時に於けるが如く、夫の永遠に固く定められたりと見ゆる諸國民は、時間の轟々として鳴りよどめく瀑布に異ならず、傲慢榮光又權力に富める人も、其盛衰夫の草に等し。されど神エホバは獨り昨日も今日も何時までも不變不易に存し玉ふ也。

第九十一篇

緒言

端書

ヘルデル

プロムタ

由來

希伯來の原書には端書なし、七十人譯にはダビテの作とす。然れども十分の道理あるにはあらず。神の愛其の深き注意、又神を以て其の避所となす者の、完全き平和と、安全とを讚美するに説明の變化著くして且佳美なるものなり。ヘルデルが神の攝理は之れに勝りて尙ほ更に眞實に更に温和なる精神に於て教へられ得べきや、といへるは誣言にあらざる也。

プロムター曰く、節々殆どテマン人エリパゾ(伯五〇十七||二十三)が善人の生涯を記する言聲の反響なり。本篇は疫病流行せしとき(母下廿四〇十五の如き)作られたりと想像す

る者あれども、確實なる言證あるにあらざ、蓋し用ゐられたる形容の多種なるは即ち詩人は如何なる者も彼を動すに足らず、又勝利者よりも勝れる其の信任を更に喜ばしく説明せんがために、各種の危難を思ひ、又凡ての危険及び恐怖を其の目前に活如として躍れるが如く描し出すものなれば也。若し神我等とともなれば、誰か我等に敵せんとは富贍多變なる此詩に於て、説明せられたるパウロの叫聲なり。

本篇の構造は或る點に於て全く別格なりとす。詩人はあるときは己より、又あるときは己に向つて語れり。彼は主觀なり、又客觀也。或は自家の經驗を言ひあらはし、或は聖約を以つて自己を獎勵せんことを求む。

一 至上者のもとなる隠れたる所にすまふ其の人は全能者の蔭に宿らん

二 われエホバのことを宣べてエホバはわが避所わが城わがよりたの

む神なりといはん

三 そは神なんぢを獵人のわなと毒をながす疫癘よりたすけいだしたまふべければなり

四 かれ其の翮をもてなんぢを庇ひたまはん、なんぢその翼の下にかくれん、其の眞實は盾なり干なり

五 夜はあどろくべきことあり晝はどびきたる矢あり

六 幽暗にはあゆむ疫癘あり日午にはそこなふ勵しき病あり、されどなんぢ畏るゝことあらじ

七 千人はなんぢの左にたふれ萬人はなんぢの右にたふる、されど其の災害はなんぢに近くことなからん

八 なんぢの眼はたゞこの事をみるのみ、なんぢ惡者のむくいを見ん

九 なんぢ曩きにいへり、エホバはわが避所なりと、なんぢ至上者をその

住居となしたれば

- 一〇 災害なんぢにいたらず苦難なんぢの幕屋にちかづかじ
- 一一 その至上者なんぢのために其の使者輩におほせて爾があゆむもろもろの道になんぢを守らせたまへばなり
- 一二 かれら手にてなんぢの足の石にふれざらんために爾をさへん
- 一三 なんぢは獅と蝮とをふみ壯獅と蛇とを足の下にふみにじらん
- 一四 かれその愛をわれにそへげるが故に我之を助けん彼わが名を志るが故にわれ之を高處におかん
- 一五 かれ我をよはし我答へん我その苦難のときに借にをりて之をたすけこれをあがめん
- 一五 われ長壽をもてかれを足はしめ且わが救をまめさん

註釋

- 一節 至上者 敵の忿怒怨恨の上に超然として抜き出でたる者也
- 〇全能者の蔭 其の前には何人たりとも立ち得ざるの義を含めり
- 二節 エホバのこと 約束と仁慈の神にして己を其の民に默示せる者なり
- 三節 そは 斯る人はエホバに付て斯く云ふべし蓋は云云
- 五節 歌三〇八、箴三〇二十三、廿六を比較すべし恐らくはギデアンがミデアン人を夜撃せしが如く(師七〇)又アッスリヤ王セナケリブが犯し來りしが如きをいふならん
- 七節 トーロック曰く大任のために召されたりと自ら信ずる大將は、

彈丸雨注の間に在るも、自若として平靜なる眼確立せる足を以て自ら
 以爲へらく、我を打つ弾丸は決して放たれざるなり、斯くの如く預
 言的の信仰ある人は、危急の時に方りても、電光は其の頭より外に避け、
 急流は其の足下に乾き、箭は力なくして其の胸より落つべしとの確信
 を抱きて屹立するものなり、蓋は是れ主の聖意なればなり。
 十節 なんぢの幕屋 埃及より出でし頃にして、未だ定まりし家屋な
 く幕屋に住みたればなり。
 十一節 もろくの道 柔順義務等の道なり。
 十二節 ますく神の攝理と其の庇護の深きを知るべき也。此の十一
 二節は悪魔が基督の神の子なる信仰を破らんがために試みの言とし
 て引證せし處なり(太四〇六)。
 十三節 頭を足下に蹂躪するは勝利の印なり。昔しより敵の王等を生

教訓

擄りし時にかく行へり。
 十四節 以下神の言にて、我とあるは神親らのことなり。
 愛をそいぐといふも、名をまるといふも、十五節の我をよはいといふも
 皆神の僕なる記號なり。
 十六節 長壽 現世の長命は特別なる神の約束として重ぜしこと、舊
 約時代普通なることなり。

テヲドール、ビザ嘗て其の青年の時に方り、一日カイレントンの教會に
 て、此九十一篇の講義を聽聞せしが、痛く此二節の「我エホバのことを宣
 て、エホバはわが避所わが城、わがよりたのむ神なり」といはん」といふこ

とに感動したり。而して其の死に臨み友人に語るに其生涯の變化するや、乃ち此の約束の一一々々應驗せしことを以つてせりといふ。

當時佛蘭西にても内亂切りに起り、國內鼎の如く沸きしが、其の間に在りて毅然自ら處し、其の非常なる危険の裏に救はるゝことを確信せり。自ら言へらく、余は今や待つ所のものは、九十一篇の末節なる『我が救を示さん』との聖言の應ぜんことのみ、是れ余が確信を以て俟ち望む所なり。と。ビザは一千五百十九年に生れ、一千六百〇五年に死せり。其早年に方りては専ら浮世的の快樂を崇拜し、『此世の神』に事へしが一旦其の悔改むるや、カルヴェインに次いで新教徒の牛耳をとり、大に感化力を以て彼等を誘掖せり。其の永き生涯を説教著述、及び管理等に従事し、甚だ熱心なりき。其のラテン譯の新約聖書は當時新教徒の間に普通に使用せられ、又詩篇を佛蘭西に譯するや、ヒューゲノット(當時佛國の改革教徒

をかくいへり)の精神油然として溢れ、其の詩才大に見るべきものあり。其の詩篇は過半彼の手になりしが、其残りはクレメント、マロットによりて完成せられたり。ビザ及び佛國改革教徒の有名なる先輩等の記念を以て聯想せらるゝカレントンの教會は、新教徒禮拜の自由を以て喜ばれしセエン、及びマルンの聯合に近き、パリス郊外に在りて非常なる建築にして、多くの能辯敬虔なる説教者及び篤信なる禮拜者の記念の存する所なり。然れども終にナントの布令は、路易十四世のために破棄せられ、是等の記念物も亦全く毀たれて、憫むべし。彼等をして『彼等はなんぢの聖所に火をかけ、聖名の居所をけがして地におとしたり』詩七十四〇七)と哀歌を歌はしめしに至りぬ。然れども後一世紀を経て、佛國王朝の寶座も亦た遂に顛覆せられたり。

第九十三篇

緒言

性質

ヒッチッヒが言へる如く本篇の總計と主意は九十二篇八篇の「エホバよ爾はどこしへに高處にましませり」といふ中に包含せらるゝなり。宇宙の統轄者としてエホバの榮光稜威を讚美せり。彼は世の造化主にして、又永遠より永遠に至るまで其の王者なり。萬物は之に倚りて化育せられ、又保存せらるゝ也。法則なきが如く見ゆる凡ての自然力は彼に従ひ、人類の忿怒も亦遂には彼に服従すべきなり。エホバの榮光と稜威は、自然力及び彼に反對して己を自由に處する者、凡てを支配すること、於てのみならず、亦其の聖言の眞實なると、又其の家の聖潔なるに於て、明かに見るべきものなり。

- 一 エホバは統御たまふエホバは稜威をきたまへり、エホバは能力を衣となし、帶となしたまへり、さればまた世界もかたく立ちて動かさるることなし
- 二 なんぢの寶座は古より堅くたぢぬ、なんぢはどこしへより在せり
- 三 大水は聲をあげたり、エホバよおほみづは聲をあげたり、おほみづは浪をあぐ
- 四 エホバは高處にいまして其の威力はおほくの水のこゑ海の逆巻くにまさりて盛んなり
- 五 なんぢの證詞はいどかたし、エホバよ聖潔はなんぢの家にどこしへまでも適應なり

註釋

一節 世界もかたぐち。エホバの統御しまたふ其の結果に由る。
 二節 箴八〇廿二三十一。
 三節 大水 普通に河又流れなり然れども時に亦海にも用ゆ詩廿四
 〇二、拿二〇三、耶四十六〇七八。〇聲をあけたり。過去なるを以て、或
 る者は歴史の出来事となし、或る者は敵の力の集合なりとす然れど
 も未句には現在なれば是れ亦疑はし。フ、エドは大水の字をもて、神
 の榮光と大能とを現はし玉ふ者とせり(哈三〇八、エホバよ爾馬を驅り、
 爾の拯救の車に乗りたまふ是れ河にむかひて怒りたまふなるか、海に
 向ひて爾の憤恨を洩したまふなるか)此外大能のこと出埃十五〇十に
 見ゆ又聲をあぐることは哈三〇十に見ゆ(山々爾を見て震ひ、洪水溢れ

萬物神に服す

わたり淵聲を出だして其の手を高く擧ぐ。
 五節 神の尊嚴を述べつゝありしが今や卒然として己を默示したま
 ふことに及べり世界の王國權力榮光名譽あらゆる者の限り之れに屬
 する神は其民に確證を與へたまふなり而して彼等の間に來り住みて
 己が家となし之を聖潔めたまふと也。

教訓

神の御前には陰府も顯露なり滅亡の坑も蔽ひ匿す所なし。彼は北の天
 を虚空に張り地を物なき所に懸けたまふ。水を濃雲の中に包み玉ふて
 其の下に雲裂けず御寶座の面を隠して雲を其の上に展べ、水の面に界
 を設けて光と暗とに限りを立てたまふ。彼叱咤すれば天の柱震ひ且つ

怖る。其の權能をもて海を静め、その智慧をもてラハブを撃ち碎き、その
氣嘘をもて天を輝かせ、その手をもて逃る蛇をつきとほしたまふ。視よ
是等はたゞ其の御工作の端なるのみ。我らが聞くところの者は如何に
も微細なる耳語ならずや、されど其の權能の雷轟に至りては誰加之れ
を曉らんや。

第九十六篇

緒言

神の國

此の偉大なる預言的の詩は、地上に天國の建設せらるゝことを確實に
先見し、之を喜びしものなり。然れどもメシヤ的なるは唯間接なり。而し
て未來の福祉をダビデの裔の顯現することよりは、エホバの來臨とに
結合せり。此二者降臨の集合點及び其の終極の一致は唯赫々たる新約
の光線に於て成就するを見るべき也。然れども同一の希望の二者に集
合することは、賽十一〇一―九と本篇とを對照すべし。

カルヴァイ

カルヴァイン本篇の序文にいへらく、是れ皆にユダヤ人のみならず、亦諸
國民に宛てられたる神を讚美すべきの勸告なり。吾人は本篇を以て基
督の王國に關係するものなりと推度す。蓋は彼世界に啓示せらるゝま

では、其の名はユダヤに於けるの外何所にも呼ばれざればなり。
 七十人譯には二重の端書あり。(一)放逐の後に作られ、第二神殿の禮拜に
 用ゐられたり。(二)第百五、六篇と共に或る變化を以て、ダビデがアサフ及
 び其の兄弟の手に救はれ、契約の櫃シオンの聖所に移搬せられしとき、
 主に感謝すべき大祝歌として、歴代記畧の著者によりて作られたり。
 分つて四段となし、毎段各三節より成り、規律井然たり。

(一) 一 || 三 エホバは凡ての世界、および各時代に於て讚美せらるべき
 こと

(二) 四 || 六 彼は唯だ獨り讚美せらるゝの價値あり、蓋は凡て他の禮拜
 せらるべき目的物は虚妄なればなり、

(三) 七 || 九 すべての異邦人をして之を告白せしめよ、而して彼の聖名
 に適はしき榮光を獻げよ、

(四) 十 || 十三 凡ての世界をしてエホバの王なること、又生命なきもの
 も、普通の喜びを頌つ所の福音を聽かしめよ。

一 あたらしき歌をエホバにむかひてうたへ、全地よエホバにむかひて
 謳ふべし

二 エホバに向ひてうたひその名をほめよ、日ごとに其の救をのべつた
 へよ

三 もろくの國のなかにその榮光をあらはし、もろくの民のなかに
 その奇しきみわざを顯すべし

四 そはエホバはおほいなり大に讚めたくふべきものなり、もろくの
 神にまさりて畏るべきものなり

五 もろくの民のすべての神はことごとく虚し、されどエホバはもろ
 くの天をつくりたまへり

- 六 尊貴と稜威とは其の前にあり能と善美とはその聖所にあり
- 七 もろくの民のやからよ榮光とちからとをエホバにあたへよ、エホバにあたへよ
- 八 その聖名にかなふ榮光をもてエホバにあたへ、献物をたづさへてその大庭にきたれ
- 九 きよき美しきものをもてエホバを拜め、全地よ其の前にをのゝけ
- 一〇 もろくの國のなかにいへ、エホバは統御たまふ、世界もかたく立ちて動かさるゝことなし、エホバは正直をもてすべての民をさばきたまはんと
- 一一 天はよろこび地はたのしみ、海とそのなかに盈つるものとはなりどよめ
- 一二 田畑とその中のすべての物とはよろこぶべし、かくて林のもろく

の樹もまたエホバの前によろこびうたはん
 一三 エホバ來りたまふ地をさばかんとて來りたまふ義をもて世界をさばきその眞實をもてもろくの民をさばきたまはん

註釋

- 一節 あたらしき歌 本篇其ものをいふにあらず新しき榮光の時代の凡ての思想、希望、および勝利の適當しき説明をいふ王の其國に入るに方りて之を歓迎する也、賽四十二〇、六十六〇、六十六〇、十九
- 三節 全世界にエホバの名を宣べ傳ふべしとなり
- 五節 エホバは能力と威光を以て、創造者として全世界の目前に現れたまふなり

七九節 諸族はエホバの榮光を謳ふために召されたり。預言者ゼバニヤの書にいへらく、其の時われ國々の民に清き唇を與へ彼らをしてすべてエホバの名を呼ばしめ心をあはせて之れにつかへしめん。又此三節廿九〇一、二より來れり。

榮光とちからとをエホバにあたへよとあり、乃ち榮を神に歸することなり。

十節 全世界の聴くべき喜びの音なり、世界の最大なる希望充たさる。新時代乃ち義と和との支配、および非情の受造物も其の餘澤を受くべき福なる時期始らんとす。賽三十五〇一、四十二〇十、四十四〇廿三、五十五〇十二等エホバの來臨と神國の建設と共に、受造物の凡ての破れたる調和恢復せらるゝなり。羅八〇廿一。此の句多少唐突の感あり。○世界もかたたくたちて動かさるゝことなし。

ローゼン
ミユルレ

デーリッ
チユ

り。エホバの自然界の秩序を確定し玉へる事實は、造主として支配したまふ能力と權威とを示すことを證する者なり。ローゼンミユルレ。又世界の諸國民は戦争、無政府等によりて動かされ離散せしむ、今やエホバの義の支配の下に平和安全なるの義なり。デーリッチユ。

教訓

コンスタンチン大帝一旦基督教を信奉してより、朝日の昇るが如く又潮の涌くが如き勢力にて全帝國內に弘布せられしが、後ち大帝の甥な

るシユリアンなる者帝位に即けり時に紀元三百六十一年なり元來シ
ユリアンは帝室に養育せられ強ひて基督教を教へられしが徒らに外
形にのみ走りて其真髓を悟るに至らざりしが故位に即くや公然大帝
の基礎を定めし基督教を棄て偶像教を恢復するの心を起し僅か二年
間の短日月なりしかども之れが爲めに大に力を盡したり而して偶像
教の舊き革囊に基督教の新精神新道徳を盛らんことを企てしことあ
り而して一方には偶像の祠宇を改造し其の禮拜の爲めに巨多の財寶
を消費し又自ら日々百頭の牛を犠牲として献げ他方に於てはクリス
チアンの墮落者を褒賞し或は争論を互に起さしめ又古代文學を研究
するを禁じ間接に種々の妨害を加へたりき而して又ユダヤ人のた
めにエルサレムの聖殿を改築し之に結托して基督教に反對せんとせ
しが其の際地震數次起りて其の基礎を置くこと能はず工夫等も痛く

恐怖して其事遂に成らずして止みぬ後間もなく自ら戦陣に臨み負傷
して死せり當時の教會歴史家の説に據れば其支配の間クリスチアンの
普通謳ひし詩篇は此の第九十六篇なりしといふある誰かよくエホ
バに敵せんや。

第四百四篇

緒言

カルザイ
ンの評

カルザイン曰く、本篇は神の教會に與へられたる、特別の慈仁に付て論ずるものにあらず、又吾人を天上の生涯に高むるものにもあらず、然れども吾人の前に世界の構造、自然の秩序、神の智能愛の活ける肖像を描き出し、而して神を讚美することを吾人に勸告するものなり、蓋は此の荏弱なる死すべき生涯に神は己を父として啓示すればなり、是乃ち宇宙を透して生命と喜樂とを注ぎつゝある神の創造的能力を形容するや、光彩陸離蓋し、本篇の如きもの多からず。

注意すべ
き點

(一) 神を造化主として、彼は萬物の前に在り、萬物は彼によりて存すてふ、

神と萬有

宇宙の絶對的眞理に關係せる、此の如きもの、古代の詩に於て他に見るべからざる也。此の眞理は全篇に貫通する所の脈管なり、全幅を織り成せる經緯なり。
(二) 受造物の大なる工は茲に單に過去のものなりとせず、又一度宇宙は行動せる後、其の運命或は不變の法則に放任せられたる機械にあらず、大行動者は其の中に在りて常に働きつゝある也。世界及び萬物は其の過去の起原、および其の現在の形態を、神の綿々たる行動に歸せり。受造物は常に己を反覆し、死は生命によりて成功せられ、受造物は復一變して地の面を新にす、是れ乃ちパウロがアテンのアレサ山上にて説破せし、宇宙を造化主との關係の同一なる觀察なり。彼亦過去を現在より分離すべからざることを注意せり、而して『それ宇宙と其中の萬物を造りたまへる神は是れ天地の主なれば、手にて造れる殿に住みたまはず』使

創造の順次

十七〇廿四と言へり。此の神は他物の爲めに阻障妨害せらるゝが如きものにあらざり。

(三) 大概本篇は創一〇に録せる天地創造の談に従へり。作者は其の高尙なる説明を黙想し、其中に彼の主意と天啓を發見せり。然れども尙ほ自家獨得の勢力と創意とを有せり。或る關係に於ては舊約時代の報告よりは、更に著しく宇宙の無限なる偉大秩序および生命を説き得たりといふべし。西班牙の註解者サンケツ曰く、此の叙情詩は其の自由と熱心とに少しも失ふ所なくして、同時に創世記に於て吾人に示されたる自然の圖景凡ての力と單純を保てり。夫れ創世記の創造は過去の創造にして、本篇の創造は現在の創造なり。一は永遠の秩序の創始を描き、一は其の永久に活ける光景を寫せる也。故に此は彼より更に活氣を有せりといふ可し。

サンケツ

アマラルダス

アマラルダスはギリシヤ、ロマの凡ての叙情詩中出色なるものとして本篇を選出せり。

フリープエルド

フリープエルドは圖取りの精密にして、其の變化の巧妙なる、又自然と同情の暖にして、其の形容の佳美なるは、希伯來詩中敢て之れと比肩し得べきものなしとせり。

フムボルト

大哲學者にして、自然論者なる、ア、フオン、フムボルト曰く、此の單純なる一篇は殆ど全宇宙の形象を現示するものといふべし。斯る制限せられたる區域の叙情詩に於て、僅々たる少量を以て、略述せられたる全宇宙の天地を發見するは驚くに勝へたり。人の事業と、自然の動物的生命との比較、および全地を其意の儘に新にし、また其の佳める者を拭ふ、普通不可見的能力の肖像は、壯大にして、嚴肅なる詩想的創造を有せり。

ヘルデル曰く、本詩は如何に喜悅の眼を以て、地を觀察するものかな。是れエホバの緑なる山なり、彼は水を其の上に高め玉ふなり。是れバラダイス也、彼は海の上にかく多般なる受造物の居所のために確定せしなり。詩人の茲に彰明する所の形容の次第は即ち誠に地の自然史なり。本篇は創世記の一章に従ひ、光雲および嵐を有せる天を以て始めたり。

(二||四)是れ創一〇三||八の第一、第二日に關す。

次に地に移りて、其最初の混沌たる光景および神の聲にて地と水の分裂せしこと(五||九)創一〇九||十の第三日に屬す。

次に地を活物の居所として種々の裝飾あること(十||十八)創一〇十一、二に屬す。

次に天軀を記す(十九||廿三)第四日にして創一〇十四||十八に云へる人と動物との生命に、更に直接なる關係を以てす。

次に(廿四)簡短なる感謝の辭に次々にすでに第五、六日の鳥獸混蟲および人の驚くべき創造のこと(創一〇廿||廿六)を述べたる後再び歸りて、廿五、六に海に其の生命(創一〇廿一)のことを以てせり。終りに活如たる字句に於て萬物の其の造化主に絶對的關係を述べたる後(廿七||三十)詩人は己および凡ての受造物の力ある調和の一部分たるを發見し、創造の新安息日は東天正さに曙光を放ち、神は其工を喜びたまひ、彼等亦神を喜び、世界は讚美歌を以て、充たされたる神殿となることを望めり(三十一||三十五)。

- 一 わが靈魂よエホバをほめまつれ、わが神エホバよ爾は至大にして尊貴と稜威とを衣たまへり
- 二 なんぢ光を衣の如くにまどひ天を幕の如くにはり
- 三 水のなかにおのれの殿の棟梁をおき、雲をおのれの車となし、風の翼

にのりあるき

四 かぜを使者となし焔のいづる火を僕となしたまふ

五 エホバは地を基の上におきて永遠にうごくことなからしめたまふ

六 衣にておほふが如く大水にて地をおほひたまへり、水たゝへて山の

うへをこゆ

七 爾叱咤すれば水退き、なんぢいかづちの聲をはなてば水忽ち去りぬ

八 あるひは山にのぼり或ひは谷にくだりて爾のさだめたまへる所に

ゆけり

九 爾界をたてし之をこえしめず、ふたゝび地をおほふことなからしむ

一〇 エホバは泉を谷にわきいだしたまふ、その流れは山の間にはしる

一一 かくて野のもろくの獸にのましむ、野の驢馬もその渴をやむ

一二 空の鳥もそのほとりにすみ、樹梢の間よりさえづりうたふ

一三 エホバは其の殿よりもろくの山に灌溉たまふ、地は爾のみわざ

の實によりて飽き足りぬ

一四 エホバは草をはえしめて、家禽にあたへ、田産をはえしめて人の使

用にそなへたまふ、かく地より食物をいだしたまふ

一五 人のこゝろを歡ばしむる葡萄酒、人の顔をつややかならしむるあ

ぶら、人のこゝろを強からしむる糧どもなり

一六 エホバの樹と其の植ゑたまへるレバノンの香柏とは飽き足りぬ

べし

一七 鳥はそのなかに巢をつくり、鶴は松をその棲とせり

一八 たかき山は山羊のすまひ、磐石は山鼠のかくるゝ所なり

一九 エホバは月をつくりて時をつかさどらせたまへり、日はその西に

いることを知る

- 二〇 なんぢ黒暗をつくりたまへば夜あり、そのとき林のものは皆志のびくに出で来る
- 二一 若き獅ほえて餌をもとめ神にくひものをもとむ
- 二二 日出づれば退きてその穴にふす
- 二三 人はいでゝ工をとり其の勤勞は夕にまでいたる
- 二四 エホバよなんぢの事跡はいかに多なる、これらは皆なんぢの智慧にてつくりたまへり、なんぢのもろくの富は地にみつ
- 二五 かしこに大なるひろき海あり、そのなかに數志られぬ匍ふもの小なる大なる生ける物あり
- 二六 舟そのうへをはしり爾のつくりたまへる鱈そのうちにあそび戯ふる
- 二七 かれら皆なんぢを俟望む、なんぢ宜時にくひものを之にあたへ玉ふる

ふ

- 二八 かれらはなんぢの與へたまふものをひろふ、なんぢ手をひらきたまへば彼等嘉物にあきたりぬ
- 二九 なんぢ面をおほひたまへば彼等はあわてふためく爾かれらの氣息をとりたまへば彼等は死て塵にかへる
- 三〇 なんぢ靈を出だしたまへば百物みな造らる、なんぢ地の面を新にしましたまふ
- 三一 願くはエホバの榮光どこしへにあらんことを、エホバそのみわざを喜びたまはんことを
- 三二 エホバ地をみたまへば地ふるひ、山にふれたまへば山は煙をいだす
- 三三 生けるかきりはエホバに向ひてうたひ、我ながらふるほどは我が

神をほめうたはん

三四 エホバをおもふ我が思念はたのしみ深からん、われエホバによりて喜ぶべし

三五 罪人は地より絶ち滅され、あしきものは復あらざるべし、わが靈魂よエホバをほめまつれエホバを讃め稱へよ

註釋

カルヴァイ

二節 光の出来しは創造の第一日なり、神曰く、光あれど、かくて光は創造せられたりき、創造の常に間断なく永續せる所に、神は光を衣として着たまふなり、光は自ら照し出づる力あり、又人は常に之を目に見れども、直接に本體を視ること能はず、カルヴァイン亦此の意味にていへら

く、光を衣に喩ふることにて、詩人は縦令神は仰ぎ見るべからざるも、其の榮光は表現せらるゝの義を示しぬ。

吾人若し神の本體に就て言へば、固より近づくべからざる、光の中に住み玉ふこと眞實なり、然れども神は全世界を照すに、光を以てするが故に、隠れたる神も、或る度に於て己を見ざるべきものとして現す所の衣あり。其の稜威榮光に於て神を求むるは愚なり、吾人をして其の眼を世界の最も佳美しき構造に向けしめよ、神は其の間に在りて、吾人を目撃せらるべし、吾人神の秘密を精査するに、怠慢なる好奇心を以てするは猶ほ木に縁りて魚をもとむるが如きに異ならず、

○天を幕の如くはり是れ創造の第二日なり、希伯來人は天を神殿なりと想像せり、故に蒼天は同時に神の住みたまふ高樓なり、又吾人の住所の屋蓋なり、想ふに天幕に住める者は天の幕屋の形容を最も善く愛せ

ヘルテル

り。彼等は以爲へらく、神日々之を張り眼界の盡くる所地平線の極より極まで及ぼし、而して天柱乃ち山に掛くるものなりと。是れ乃ち神が其の受造物と共に住む所の安全、休息および父たる者の歡待の幕屋なり（ヘルデル）。

アウグスチン
チン

アウグスチン曰く、如何なる無限の勞働、辛苦、困難および繼續せる刻苦も、僅かに一小室を張るが如きに過ぎず、神の工に於ては此種の刻苦は一も存せざる也。爾が其の家、屋蓋を張るが如く、神は其の天を張りたまふと爾想はざる也。然れども爾のために單一なる皮膚を張ることの容易なるが如く、夫の茫々漠々たる天を張ること、神に於ては容易なる也。否神は爾皮膚を伸すが如くに、天を伸さざる也。今縮み又皺よりの皮を爾の前に置き、之に手を觸れずして、言によりて張れよ。爾は答へていはん、我能はずと。然して後爾は神の働きて玉ふ所と、爾との間に如

向に徑庭あるかを見るべしと。イザヤは「おほぞらを薄絹のごとく布き、これを住まふべき幕屋の如く張りたまふ」といへり。

三節 水のなかに 天上の事にて、希伯來人が昔時の想像なり。

四節 皆な神の大能を形容せしものなり。

五節 地を基のうへにおき 地を物なき所に懸けたまふ。伯廿六〇七。

神の置き玉ふ所は他物之を移すことあたはず、此の神の秩序こそ最も安全なる支柱なれ。

六節 八節 連續せる解明なり、創一〇九を詩想的に擴張せしものなり。

六節 天地開闢の初め混沌たる光景は水陸混同したりとせし、異教徒の意見に従はず、地はすでに其の形態を有し、全く水の中に發達進化せるものとせり。此の渺茫澎湃たる大海も、神の叱咤に聽き従ひ、又其の指定したまふ所に沈むなり。地は其の水より現れ出で、山谷を以て限ら

れたる其の表面を示すなり。
十一節 以下數節神の萬物を愛し玉ふ様を描寫す物はみな其の處を得つゝあり。

十三節 神は地を潤ほすに泉および流れのみならず、亦雨を以てせり、創二〇五十。○殿 雲のことなり。○もろくの山に灌漑たまふ

山の上に雲宿り雨となり流れ是れより出づ元來パレンスタイン(ユダヤ人の神の約束によりて得たる國土は山地なればなり。

十五節 雨によりて地の満足することより、詩人の思想は更に地によりて人の満足することに向ひぬ。

十六節 飽足 雨によりて十分の養ひを得ることなり。
十九節 創造の第四日に移れり。○月をつくり 前にも云へるが如く、晩方より新なる日となり次の日といふ創一〇にも夕あり朝ありと

あるも此の故なり。○西にいる 次ぎの二十節に黑暗をいはんがため伏案なり。

二十||廿三節 夜も猶ほ其の働きをなすこと、野獸も神の攝理の下に待つ所ありて働くなり、人も亦働きて神の賜ふ所を取るべしとなり。

廿四節 受造物に現れたる所の神の工と智とに驚嘆す。
廿五節 詩人は恐らく遙かに地中海を望んで、此の感ありしならんか。

誠に海邊の實況なり。
廿九節 神は常に保存者なるのみならず、家の父なるのみならず、實に生命の起元なり。○面をおほひ 怒るとき、又不興の際に用ゆる字なり、今は注意を放棄するの義なり。

三十一節 受造物の榮光あるを見て、神を讚美す。

教訓

ステフハ
ナス

ヘンリー、ステフハナスは著名なる古文學者なり、一千五百六十二年パ
 リスにて詩篇の註解を出版せり。其の序文の中に據れば、嘗てロマに至
 り、古文學を偏愛せる所の人々に會見せり。彼等は詩篇の詩想的價値な
 きことを主張し、詩人アントニアス、フラミニウスが之を拉甸韻脚に翻
 譯せんと企てしことは、猶ほ乾枯せる砂地に種を下すにことならずと
 嘲笑せり。是に於てステフハナスは全く反對の意見を抱懷きて、詩篇中
 殊に百四篇を引證し、古代文學中是等の叙情に勝れる詩想と、天啓とは、
 發見すべからざると、並びに又フラミニウス若し成功せざりしとせば、
 則ち其の罪は播種者其人に在りて、毫も土地にあらざるを確信すと語

晩の歌

れりとぞ。

十九〇廿四節は露西亞教會の晩歌なり。
 本篇に關しては、すでに本書の序文に詳記したれば、則ち今茲に略すべ
 し。唯だ讀者に告げんと欲する所は、此の如き佳篇を輕々讀過すべから
 ず、といふを以て満足せん。

第百八篇

ダビデの歌なり讚美なり

緒言

性質

一 五は第五十七篇七十一に據り、又六十三は乃ち第六十篇五十二に據り、此二部を合併して一篇の詩となしたり。右二篇はダビデの作なるを以つて、本篇にも其の名を端書になせり。然れども此二片を合併せし者はダビデなりと論定せんは敢て論據あるにあらず。後世の詩人の恐らくは自家の境遇に應用せしものなるべし。而してエドム、ベリシテに對する勝利を追想せんことを希望せしなり。

一 神よわが心はさだまれり、われ謳ひまつらん、稱へまつらん、我が榮をもてたゝへまつらん。

二 箏よ琴よさむべし、われ黎明をよびさまさん

三 エホバよ我もろくの民の中にてなんぢに感謝し、もろくの國のなかにてなんぢをほめうたはん

四 そは爾のあはれみは大にして天のうへにあがり、なんぢの眞實は雲にまでおよぶ

五 神よねがはくはみづからを天よりも高くし、榮光を全地のうへに擧たまへ

六 ねがはくは右の手をもて救をほどこし、われらに答をなして愛みたまふものに助をえしめたまへ

七 神は其の聖きをもていひたまへり、われ甚くよろこばん我シケムをわかちスコテの谷をはからん

八 ギレアテはわがもの、マナセはわが者なり、エフライムも亦わが首のまもりなり、ユダはわが杖

九モアアはわが足盤なり、エドムにはわが履をなげん。ペリシテよ我故
 によりて聲をあげよと
 一〇 誰かわれを堅固なる邑にすし、ましめんや、誰かわれをみちびきて
 イドムにゆきしや
 一一 神よなんぢはわれらを棄てたまひしにあらざや、神よなんぢは我
 等の軍とともに出ゆきたまはず
 一二 ぬがはくは助をわれに與へて敵にむかはしめたまへ、人の助は空
 しければなり
 一三 われらは神によりて勇しく働かん、かれらの敵をふみたまふもの
 は神なればなり

註 釋

テ
リ
ッ
チ
ユ

一節 わが榮 吾が靈魂のことなり、神の聖像に肖せて創造せられた
 る者として、合理的動物乃ち人間に屬する能力、才藝なり。
 二節 黎明 勇壯と佳美の形容なり、我が歌は能く之れを呼びさます
 べしとなり。
 三節 諸國萬民の中に讃美すべき者、感謝すべき神は、唯だ一のエホ
 バあるのみ。
 五節 テーリッチユ曰く、是に勝りて大なる祈禱の言は、決して人類の唇
 頭より出で來らざりし也。天地は其の含むが如く、互に織り込まれたる
 歴史を有す、而して此の多福なる又榮光ある終極は、神聖き榮光の兩者
 を出づる所の旭なり。
 七節 神はその聖をもていひたまへり。ヘングステンベルヒの説は

詩人の心裏にありしならん(創四十九〇、民廿四〇、申三十三〇)とせり。
○われ甚く云云　フープエルド、ブンセン、ナルスハウゼン等は神とな

し、ヘングスタンベルヒ、デトリッチユ等は王とす。

八節　ギレアテ、マナセは下のエフライム、ユダの西にてイスラエルを

代表するが如く、東方にて之を代表するなり。

九節　足盥　賤しき器具なり。○聲をあげよ　勝利の聲なり、エワル

ド等は恐怖と悲哀の聲なりとす。

十節　堅固なる邑　ヘングステンベルヒは驚くべき岩石を以て築造

せられたるペトラの邑とす、或人はアムモンとし、又モアブとす。

教訓

疑者

使徒ヤコブ曰く、疑ふ者は風に撼かされて翻へる浪の如し、斯の如き人は主より何をも受くると想ふ勿れ、と抑も神に事へんと欲せば、則ち精神をつくし、心を盡し、意を盡さるべからず、誠意正心直行、猛進猶ほ未だ到らざるを恐るべき也、然るに半信なるが如く、半疑なるが如く、或は左せんとし、或は右せんとし、風に動かさるゝ葦の如く、波に揺らるゝ萍の如く、心の確定せざる者は禍なるかな、昔者ヨシユア、イスラエルの民に語りて曰へらく、われ(神)黄蜂を汝らの前に遣はして、彼のアモリ人の王二人を、なんぢらの前より逐ひはらへり、なんぢの劔、又は汝らの弓を用ゐて、斯せしにあらず、而して我なんぢらが勞せしにあざざる地を、なんぢらにあたへ、なんぢら建てたるにあざざる邑を、なんぢらに與へたり、汝らは今その中に住み居る、汝らは亦己が作りたるにあざざる葡萄園と、橄欖の園とにつきて食ふ、されば汝らエホバを畏れ、赤心と眞實

今日選へ

とをもて之に事へ。汝らの先祖が河の彼邊、およびエジプトにて事へたる神を除きてエホバに事へよ。汝ら若しエホバに事ふることを惡とせば、汝らの先祖が河の彼邊にて事へし神々にもあれ、又は汝らが今をる地のアモリ人の神々にもあれ、汝らの事ふべき者を今日選べ。但し我と我が家とは共にエホバに事へんと。預言者エリヤ亦嘗てイスラエルの總ての民に語りて曰く、汝等何時まで二の物の間にまよふや。エホバ若し神ならば、之に従へ、されどバアル若し神ならば、之れにまたがへ、と。夫れ人は二人の主に事ふることあたはず、善惡正邪必ず其の一を選ばざるべからず。

詩人は歌ふて曰く、神よわが心は定まれり、われ謳ひまつらん、稱へまつらん、と。今やなんぢの選びし所は何ぞ、其の心の定まりし所は如何。

我心定め

第一百篇

ダビデの歌

緒言

王なる基

本篇は神聖き神の默示の結果たること、固より明確にして疑ふべからず。詩人の口より産れ出でたれども、其の胚胎せし所は神の聖所なり。此の神宣はシオンにて支配する王者に關するものにして、彼これを聽き而して更に他に宣言すべき所のものたり。詩人は此の王を呼ぶに「主」の名を以てせり。エホバは之を尊び、之を高め、而して己の尊榮を之に願ち、又其の凡ての敵に打ち超えて、勝利を與へらるべきことを述べ、又王は夏の朝露の滋きが如く輝きたる無數の若き武士に圍繞せられて、戰場に向ふなり。

而して又此の王はエホバの約束によりて、メルキセデクの如く永遠の

祭司たることを述べ次に戦場に於ける王を想像し神の力によりて連戦連勝破竹の勢に乗じて苦熱の日光も之を妨げざることを見たり。之をメシヤ(救主的)の詩として差支なし。按ずるに作者はダビデ時代の詩人なるべし。さればダビデを指して主といふこと固より當然なり。最初の最も卑近なる意味にては神政的の王として先づダビデに適用すべく終極の最も高尚なる意味にてはダビデの大なる裔基督によりて成就せらるゝものなり。然れども此の説明は三福音書にある所の基督のバリサイ人との争論に際し引用したりし言と衝突するが如し。太廿二〇四十一―四十五可十二〇三十五―三十七路にはダビデ自ら詩の篇に云云と言へり廿〇四十二。今此の論法につきて二點あり。第一はダビデ自ら本篇を作れり。第二は之を記するに當りて彼は聖靈に動かされたりと。ダビデ自ら己の事に

あらずして之を主といひつゝ大なる其の裔を指せしや明白なり。彼は聖靈によりて其の裔の基督なるを知れり。是れ乃ち基督の論法なり。さればダビデ及び其の他の王を指示せざるや是れ亦た固より明白なり。乃ち基督を以つて眞の王となし又メルキセデクの狀に等しき永遠の祭司として預言せし者なり。基督の論法と調和せしめんとすの計畫は數次せられたりき。然れども基督の人性に於て吾人必ずしも其の全知を要求せず。普通ユダヤ人の間に傳はりし所に據り玉ひしことを記憶すべし。文學及び批評のことに至りては當時の知識なりし也。マイエル亦是の説を抱く。又或者は此の難問を避けんとして是はサドカイ人に向つて復活の眞理を語りしとは異にして唯だバリサイ人の口を塞ががために語れるのみといへり。

一エホバわが主にのたまふ、我なんぢの仇をなんぢの承足とするまで
はわが右にぎすべし

二エホバはなんぢのちからの杖をシオンよりつきいださしめたまは
んなんぢはもろくの仇のなかに王となすべし

三なんぢの勢の日に爾の民は聖なるうるはしき衣をつけ心よりよろ
こびて己をさげん、なんぢは朝の胎よりいづる壯き者の露をもて

四エホバ誓ひをたて、聖意をかへさせたまふことなし、爾はメルキセ
デクの状にひとしくどこしへに祭司たり

五主はなんぢの右にありてその怒りの日に王等をうちたまへり

六主はもろくの國のなかにて審判をおこなひたまはん、此處にも彼
處にも屍をみたしめ、寛濶なる地をすぶる首領をうちたまへり

七かれ道のほとりの川より汲みて飲みかくて頭を擧げん

註釋

一節 承足とする 敵の全く服従するの義にして、之を足の下に踏む
ことなり、詩八〇六書十〇廿四五。 ○わが右にぎすべし 王に次げる
位にして東洋の通常法なり。アラビアには王の次位に「ラダフ」なる者あ
り、常に王の右方に坐す。王先づ杯をあげて飲めば、則ち之に次ぎ、王遠征
に出づれば、則ち之に代りて其の座に在りて、其の職を行ふ。王若し凱旋
し來れば、則ち夫の「ラダフ」は其の分捕物の四分一を受くる也。
二節 詩人は神の黙示によりて受けたる神宣を述べたる後、王に向つ
て話しかけ、而して如何なる手段による可きか、即ち神の佑助と其の人

民の勇敢献身によりて勝つべきことをいふ。ダビデの子はダビデの
 邑なるシオンにて其の王座を有し、神恵によりて其處より天下に號令
 し、律法を興へ、エホバの代理者として、又其の力によりて支配し、エホバ
 は其の杖を保ち玉ふなり。
 ○なんぢのちからの杖。爾の王たる威嚴の杖なり、耶四十八〇十七及
 び結十九〇十四。基督の弟子等主の『行きて萬國の民を弟子とせよ』との
 命令に従ひ、世界を従へし時、用ゐしは即ち此の杖なり、是はモーセの杖
 より復かに勝りて力あるものなり、彼は河を打ちて水を分ちしが、此は
 世の不虔者を寸断にせり。夫れ十字架は神の力なり、此の杖はよく海陸
 をして改宗遷善し、又其の救拯を全うせしむるの力なり、使徒等が身に
 よろひてエルサレムより始めて天下に踏み出せしは、即ち此杖なりき、
 殉教者等が腰に佩びて、或は斷頭場裏に、或は焙烙柱上に悪魔と戦ひし

は即ち此の杖なりき。

三節 勢の日 王の軍を檢閲するの日なり。 ○なんぢの民 敵の中
 にありても王は其の忠實なる陪従者を有する也、賽廿八〇五六。 ○聖
 なる衣 祭司の服なり。 ○心よりよろこびて 己の自由なる意志
 より決心し、喜びて献身するなり、師五〇二九。 ○朝胎 もとより形
 容詞にして朝を以て人の如くいひなせしなり。 ○壯きものゝ露 勇
 氣大膽の義にして元來露は新鮮にして、美を意味するものなり、殊に亞
 細亞にて露は無数の義に用ゆ。
 四節 本篇中にて中心の默示なりといふべし。 ○メルキセデク は
 アブラハムの時代の人なり、來六〇廿七〇一以下を見るべし。
 五節 以下三節は前の二節より四節までの軍事的の筆法を反覆す。
 ○主 エホバなりといふ説あり、又王を指せりとの説あり、而して七節

の川より飲むことはエホバにあらざして王なりといふに基づけり。又アドナイ(主)は神の外にメシヤ(救主)にも何人にも使用せられずといふ。又怒りの日は王よりも神の方なること自然の勢なりといふ。又六七節にて主格變じて、文章中の主人異なり、連續せず、是れ希伯來の詩の特質にして、他に見ざる所なりともいふ。○王たちをうちたまへり民廿〇のモーセ書十〇のヨシユア、師五〇三、十九のデボラ、同八〇のヤデヲンの如き榮光ある勝利なり。

六節 主 是は前節に異なりて、王とおもはる。○首領 惡魔なりといふ説あり。又デトリッチュメンデルソンの如きはダビデ時代の歴史上のことなりといふ。

教訓

パウロ嘗てテモテを諭して曰く、爾基督耶穌の精兵卒の如く、我と共に苦みを忍ぶべし。兵卒を務むる者は、世事を以て自己を累はせず、是れ募れる者の心を悦せんとすればなり。と、夫れ我等は義の王によりて、罪惡の内より救ひ出だされ、今や義の器となり、精き兵卒の如く、善く戦争を爲すべきために、選ばれたる者にあらざや。されば自己の心情と事情によりて、主の公事に私することなく、身心に神の武具を鎧ひて、其の事を完了すべき也。夫れ其の僕に求めらるゝ所のものは、乃ち唯一意専心、其の職に忠實誠意ならんことなり。

山ゆかば草むす屍海ゆかば水づくかばぬと、むかしより言ひつぎ語りつぎしは、日本男兒の本領なり、况んや今我が活くるは、我の活くるにあらず、主われに在りて活けるなりと、悟り得たるクリスチアンに於てを

や。夫れ主は聖し、曰く、我聖ければ爾曹も亦聖くすべし。と。されば其の民は聖なる美しき衣を着け、心よりよろこびて、己を活ける禮物として神に献げ、勇ましき最後を果すべきにあらずや。

第百十五篇

緒言

著作の時
エワルド

バビロンの俘虜より還り來りしに、猶ほ異邦人なる敵の罵詈訕笑の聲鳴り騒ぎて、其の心情を痛め、又バビロンにてイストラエル人等の親しく目撃せし偶像の事を回想し來り、其の心に之を賤侮するの情復更に新鮮なりし頃、第二神殿の禮拜式に用ゐんが爲めに恐らくは作りしものなるべし。

エワルド
グロート

エワルド以爲へらく、本篇は犠牲を神に献ぐるに方り、歌へるものなり。十一節は祭司の聲にして神は之を受けたまふことを宣言するものなりと抑も一十一節は會衆の言にして、十二二十五は祭司、十六十八は會衆なり。然れども九節に於て聲の變化尙ほ著しきものあり。トイロ

ツクの想像する所に據れば、九十、十一の毎節前半は單音として、恐らくは利未族の一人之を歌ひ、後半は合唱せられしが如し、と。

一 エホバよ榮光をわれらに歸するなかれ、われらに歸する勿れ、なんぢのあはれみと爾のまこととの故によりてたゞ名にのみ歸したまへ
二 もろくの國人はいかなればいふ、今彼等の神はいづくにありやと
三 然れどわれらの神は天にいます、神はみこころのまゝにすべての事をおこなひ給へり

四 かれらの偶像は銀と金にして人の手のわざなり

五 その偶像は口あれど言はず、目あれど見ず

六 耳あれどきかず、鼻あれどかかず

七 手あれどとらず、脚あれどあゆまず、喉より聲をいだすことなし

八 此をつくる者とこれに依頼む者とは皆これにひとしからん』

九 イスエラルよなんぢエホバに依頼め、エホバは彼等の助けかれらの盾なり

一〇 アロンの家よなんぢらエホバによりたため、エホバはかれらの助けかれらの盾なり

一一 エホバを畏るゝものよエホバに依頼め、エホバはかれらの助け彼等の盾なり』

一二 エホバは我儕をみこころに記めたまへり、われらを恵みイスラエルの家をめぐみアロンのいへをめぐみ

一三 また小なるも大なるもエホバをおそるゝ者をめぐみたまはん

一四 願はくはエホバなんぢらを増加へなんぢらとなんぢらの子孫とをましくはへ給はんことを
一五 なんぢらは天地をつくりたまへるエホバに恵まるゝものなり』

一六 天はエホバの天なり、されど地は人の子にあたへられたり
 一七 死人も幽寂どころに下れるものもヤハを讃稱ふることなし
 一八 されどわれらは今より永遠にいたるまでエホバを讃めまつらん、
 『爾曹エホバをほめたへよ』

註 釋

一二節 先づ劈頭自家の價値なきことを告白し、又神は其の榮光を異邦人の嘲笑に對して拒ぎたまはんことを祈る。
 ○榮光をわれらに歸するなかれ あゝ是れ如何に偽りなき謙遜なるや。○あはれみまこと 神の二大特質なり使徒ヨハ子は律法はモーセによりて與へられたりといへり、此の二者舊約中にも見ゆるなり。

三〇八節 神は無形全能にして、宇宙の絶對無上なる統轄者なるを述べ、又偶像と其の禮拜者を嘲ること。
 尙ほ偶像のことにつきては乃ち賽四十四章を見るべし。
 九〇一節 全イスラエルも祭司も、人民も神にのみ信賴すべし、神こそ之れに全任するの價値あり、而して民の助けなり盾也。
 十二〇一五節 エホバは斯く己を信ずる者に福を與へたまふ。
 十六〇一八節 前段の如く、神の恵あるが故に之に感謝すべし。

教 訓

「ノン、ノビス、ドミン」は驍勇なる波蘭の王、ジョン、ソビスキがカール、レンベルヒの山里より馳せ下りて、夫のザインナを攻め圍める土耳其の大軍

を打ち敗り、之を追ひ拂ひし時に謳ひし軍歌なり、時實に一千六百八十三年九月十二日なり。是れ乃ち東國最終の大入寇なりき。爾來土耳其の勢力および回教の信仰が地を拂ひし歴史の決着點なりき。『もろくの異教徒はいかなればいふ、今かれらの神はいづくにありやと、然れどわれらの神は天にいます、神はみこゝろのまゝにすべてのこゝろを行ひたまへり』と歌はれし時は、如何に彼等は熱心なりしか、蓋し筆紙のよく竭すところにあらざりき。

貴女バリア

又昔時羅馬の皇帝シユリアンの時に貴女バリアなる者残酷なる迫害に遭遇せしが、其苦惱の裏に在りながら、彼女は『かれらの偶像はまろがねと金にして人の手のわざなり』と歌ひつゝ、死せりといふ。此シユリアン帝の事は、本書第九十六篇の項を見るべし。

第一百六篇

緒言

性質
死の危難に遭遇せし者、三九十五節救を得て、全心神に感謝す。先づ神を敬愛するの意を以て始め、又其恩恵の洪大なることを十二節述べ、終りにエホバに負ふ所を、會衆の前に果し、又嚴肅なるエホバの聖務に列すること、を以て結べり。

時代

本篇はバビロンの俘虜より歸り來りて、後一箇人の宗教的生涯の深厚なること、及び眞理の證據なり。蓋し其の時代の作なること、疑ふべからず。

死の歌

本篇は初代教會の使用せし、挽歌の一なり。
一われエホバを愛しむ、そはわが聲とわが願望とをきゝたまへばなり

二 エホバを呼びまつらむ
 エホバを呼びまつらむ
 三 死の繩われをまどひ陰府のくるしみ我にのぞめりわれは患難どう
 四 その時われエホバの名をよべりエホバよ願くはわが靈魂をすくひ
 五 エホバは恩恵ゆたかにして公義ましませりわれらの神はあはれみ
 六 エホバは愚かなる者を護りたまふわれひくゝせられしがエホバ我
 七 わが靈魂よなんぢの平安にかへれエホバは豊かになんぢを待らひ
 八 爾はわがたましひを死よりわが目をなみだよりわが足を顛蹶より
 九 われは活けるものゝ國にてエホバの前にあゆまん
 一〇 われ大になやめりといひつゝもなほ信じたり
 一一 われ惶てしどきにいへらくすべての人はいつはりなりと
 一二 我いかにして其の賜へるもろくの恩恵をエホバにむくいんや
 一三 われ救のさかづきをとりてエホバの名をよびまつらん
 一四 我すべての民のまへにてエホバに己が誓をつくのはん
 一五 エホバの聖徒の死はそののみまへにて貴し
 一六 エホバよ誠にわれはなんぢの僕なりわれは爾の婢女の子にして
 一七 われ感謝をそなへものとして爾にさゝげんわれエホバの名をよ

八 爾はわがたましひを死よりわが目をなみだよりわが足を顛蹶より
 九 われは活けるものゝ國にてエホバの前にあゆまん
 一〇 われ大になやめりといひつゝもなほ信じたり
 一一 われ惶てしどきにいへらくすべての人はいつはりなりと
 一二 我いかにして其の賜へるもろくの恩恵をエホバにむくいんや
 一三 われ救のさかづきをとりてエホバの名をよびまつらん
 一四 我すべての民のまへにてエホバに己が誓をつくのはん
 一五 エホバの聖徒の死はそののみまへにて貴し
 一六 エホバよ誠にわれはなんぢの僕なりわれは爾の婢女の子にして
 一七 われ感謝をそなへものとして爾にさゝげんわれエホバの名をよ

ばん

一八わがすべての民のまへにてエホバに我がちかひを償はん
一九エルサレムよ爾のなかにてエホバのいへの大庭のなかにて之を
つくのふべし、エホバを讃めまつれ

註 釋

三節 後世の詩人其の感情を殊に危急悲哀に際して最も能く説かんと欲せば、ダビデの詞を借り來るなり、十八〇一―六を見よ。
五節 神の聖答に代へて其の性質を言ひ顯せり、是れモ―セに神の顯現れ玉ひし以來試みを受けし者、又神を信ずる者の喜びと慰めなりしなり(出埃三十四〇六)。

七節 平安にかへれ 神に倚り頼むことなり、是れぞ永遠なる平安の巖なれ。

十節 如何に篤き信仰なるかな。

十三節 救のさかづき 喜びの杯なり、師九〇十三。

十五節 注意して再讀すべし。

十六節 婢女の子 正當の嫡流にあらず己の罪のために謙遜せる言なり。

十八九節 公然神に感謝の祭りをなし己の缺けたる所を告白する者なり。

教 訓

アンテテケのパピラス、デシアス皇帝の時、其の殉教の死を遂ぐるに方りて、自ら己を慰藉せし者は、此七節なりき。歴史家曰く、吾人は是に由りて我が靈魂の此の平安なき世界より死によりて動かさるゝときは、乃ち平安に赴くことを學ぶなりと。

ブルカルド、ウワルデスの有名なる感謝の歌の基礎は、乃ち本篇にあり。彼は元僧侶なりしが、後に獨逸にて著名なる福音の宣傳者となりぬ。宗教革命の教義を抱懐せしがために、一夜捕縛せられて其の家を距る數百哩の地に送られ、嚴酷に囹圄の裏に禁錮せられたりしが、其兄弟ヨハソ、及ひベルンハルドの救濟するありて、僅かに危禍を免かるゝことを得たり。彼乃ち之れに贈るに其の歌を以てせりといふ。

第一百十九篇

緒言

性質

希伯來語の『いろは』なるアルファベットの頭文字をとり、順次に一篇を作り成したる長篇にして、亦最も精妙を盡したるもの、一なり、分つて二十二の短篇となし、各篇八節より成る。

主意

詩人が讚美せる大主意は神の律法なり。是が爲めに十九篇の後部を敷衍祖述せるものとの説あり。成りし時代はバビロンより歸り來りし後なりといふ、然れども確説なりとするに由なし。詩人は律法を日々の學課となし、其の喜ぶべきものとなし、又其の顧問となしぬ。是の律法とは明かに記録せられたるものをいへるなり。舊約聖書はエヅラ、テヘシヤの力與りて大なりき。

普通の性質をいへば、詩といはんよりも寧ろ黙想なり。故に後世の作となすの想像起りぬ。

作者

此の詩人は困難なる境遇に在りて、其漠々暗憺たる黒雲の拂ひ去られ、青天白日を仰ぎ望みて、神の律法を愛し、又之をよく悟了るの光を更に得つ、又之を保存つ、力を得、尙ほ且つ全心を以てせんことを祈れり。テオリッテユの説に據れば、作者は青年なりといふ、其の論據とする所は九、九十九、百節にあり。然れども九節は寧ろ自ら過去の生涯を回想し、青年の聖潔を守るは神の旨なりと、青年に勧告する者なり。傳十二〇一亦此の如し。全篇を通觀するに、深く神の旨に通曉せる者の如く、又自家の經驗より出でたりと想はる、されば中年の作者たるべし。

ベテ (第百十九篇)

九わかき人は何によりてか其の道をきよめん、聖言にまたがひて慎むの外ぞなき

- 一〇われ心をつくして爾をたづねもどめたり、願はくはなんぢの誠命より迷ひいださしめたまふなかれ
- 一一われ爾にむかひて罪を犯すまじき爲になんぢの言をわが心のうちに藏へたり
- 一二讀むべきかなエホバよ、ねがはくは律法をわれに教へたまへ
- 一三われわが口唇をもて爾の口よりいでし、もろ／＼の審判をのべつたへたり
- 一四我もろ／＼の財産をよろこぶごとくに、爾のあかしの道をよろこ

べり。

一五われなんぢの訓誡をおもひ爾のみちに心を定めん

一六われは律法をよろこび聖言をわするることなからん

註釋

一節 多二〇六、提前四〇十二を對照すべし。

十一節 神の言を心のうちに藏ふことは乃ち外部の行爲の規律たる

のみならず、内なる生命なり、能力なり。

十四節 智慧に比ぶべき物なきこと、箴二〇四、同三〇十三、十五、八〇

十一、十九、同十六〇十六、伯廿八〇十五、十九。

教訓

青年

青年は猶ほ驛馬の如し、故に規するに其法なかる可らず。然れば何によりてか、其斷岸絶壁も、深淵沼澤も、躊躇なくして一躍に踏破せんとする、其勃々たる客氣を抑制せん。蓋し人生の失敗は殆どすべて青年客氣の時代にあり。故に亦其昂々として千里の相を全うするも、青年勇壯の時代にあり。されば青年は『失敗』と『成功』との二點に達すべき出立點の停車場に在る者なりといふべし。又満潮涸汐の寶瓊を得たる彦火々出見尊なりといふべし。

ヘンリー・スコーガルは『人の靈魂に於ける神の生命』の著者にして、其の青年の時聖書を繙きしが、讀みて此の第九節に至り、大に其精神を喚起せりといふ。爾來全心神に忠事し、教役者となりて傳道に従事せり。後キ

ルスコーガ

ンクスコレチの神學教授に任じ、一千六百七十八年年僅かに二十八にして死せしが、其の芳名永く存して死せずといふ。

ザイン (第百十九篇)

四九ねがはくは爾の僕に宣ひたる聖言をおもひいだしたまへ爾われに之れをのぞましめたまへり

五〇おんぢの聖言はわれを活かせしがゆゑに、今もなほわが艱難のとき、の安慰なり

五一高ぶる者おほいに我をあざわらへり、されど我なんぢの法をはなれざりき

五二エホバよわれ爾がふるき往昔よりの審判をおもひ出だして自ら

なぐさめたり

五三なんぢの法をすつる悪者の故によりて我はげしき怒をおこしたり

五四爾の律法はわが旅の家にてわが歌となれり

五五エホバよわれ夜間になんぢの名をおもひ出だして爾の法をまもれり

五六われ爾のさとしを守りしによりて此のこゝを得たるなり

註釋

五十節 聖言は神の賜ふ所にして、而かも其の聖言は我に生命を與へ、今尙ほ患難のときに方りても確實なる救拯と安慰なり。

五十一節 高ぶる者 又嘲る者なり、箴廿一〇廿四、我が災害と神を信

奉することを笑ふなり。 五十二節 審判 全篇を通じて義しき律法と同義なり。

五十三節 昔者エツライスラエルの牧伯等の犯罪を聞くや、衣と袍を

裂き、頭髮と髭を抜き驚き呆れて坐しぬといふ、(剛九〇)神の爲め義の爲

め熱心なる者、必ず此くならざるを得ざるべし。基督の神殿にて商賣せ

し者を追ひ拂ひたまひしも、亦此の聖き熱心の大なる者なりし也。

五十四節 如何に愉快なる信仰の生涯なる哉。

五十五節 半夜入定りて天地寂々肅々たるの時、静座黙想し來れば神

恩の豊かに厚きに感謝して、尙ほ將來の生涯に於て必ず神の法を守ら

んと決心するは當然の事なるべし。

五十六節 この事を得たるなり。 此の意味明白ならず、或は前節の爾

(神)の名のことなりといふ説あり、余按ずるに、嘗だ神の名をおもひ出づることのみならず、神の法を守り得る事も亦其内にあり。

教訓

人生の行路

『爾の律法はわが旅の家にて我が歌となれり』。人生の旅行なること人誰か之を疑はんや。すでに旅行といふ、其の途や必ず崎嶇たる山路なきにあらず、滔々たる江河なきにあらず、失敗あり、蹉跎あり、憂ふべきことあり、悲むべきことあり、哭すべきことあり、又盜賊の難あり、饑渴の苦あり、風あり、雨あり、汗あり、涙あり、實に『我儕は此の(世)幕屋に居り重きを負ひて歎くなり』。然るども我は尙ほみづから慰むる所あり、烈しき苦痛の中にありて喜ばん。神の聖言は我を活かし、が故に、今もなほわが

艱難のときの安慰なり。仇する者よし我を攻むるとも、我之を怖れず。夕陽はすでに西の山の端に傾きて、衣手寒く吹く風に腸を断ち、高根よりあるす入相の鐘の音に無常を告げらるゝとも猶ほ神を信じ、神に倚り、其の律法を喜び守りて讚美の歌となし、感謝の歌となし、主と共に曠野を歩むことの如何にたのしき。噫呼、讚むべきかな、神エホバ、主基督。

ヌン (第百十九篇)

一〇五 なんぢの聖言はわが足の燈火わが路の光なり
一〇六 われなんぢのたゞしき審判をまもらんことをちかひ且かたくせり
一〇七 われ甚いたく苦めりエホバよぬがはくは聖言に従ひてわれをい

かしたまへ

一〇八 エホバよぬがはくは誠意よりする我が口の献物をうけて爾の審判を教へたまへ
一〇九 わが靈魂はつねに危険を犯す、されど我なんぢの法をわすれず
一一〇 あしき者わがために蹄をまうけたり、されどわれ爾のさとしより迷ひいでざりき
一一一 われ爾のもろくの證調をどこしへにわが嗣業とせり、これらの證詞はわが心をよろこばしむ
一二二 われ爾の律法を終までどこしへに守らんとて之れに心を傾けたり

註釋

百六節 審判 前にも言ひしが如く、全篇に通じて律法の義なり。
 百七節 甚だしき苦惱我を試むるも、我は決してエホバより離るゝことなし、否、神の聖言によりて活きんことをぞ願ふなる。
 百八節 口の献物 誠意より溢れ來り口より洩れ出づる祈禱也。
 百十節 不義者は我を擒にせんとすれども、我は神の訓誡より離るゝことなし。
 百十一節 昔イスラエルは世襲財産としてカナンの地を神より與へられしが、今や神の律法は之れに勝れる永遠の嗣業なり。而して我が常に心をよるこばす所のものなり。
 百十二節 一旦心を決して神の律法に従ひ、其の甘味なる恩恵を咀嚼

し來れば、畢生必ず之を棄てずして確く守らんと全力を盡すなり。

教訓

「光の燈火」

宗教改革の前に方り、「ロルラード派の愛讀せし『光の燈火』てふ小冊子は、乃ち此百五節に基きしものなりき。該書序文の祈禱の末句に此の語あり、曰く嗚呼主よ、爾十字架にて死たまひしとき、爾は其言に生命の靈を吹き込みたまひぬ、而して爾自ら『我が爾曹に語りし所の言は靈なり、生命なり』と宣ひしが如く、爾自らの貴き寶血によりて、吾儕を喚起發憤するの力を爾の言に與へ玉ひぬ、と。

英、蘭、及び蘇格蘭の「ロルラード派」はウイックリフの翻譯せし、自國の聖書を読み、又僧侶より受けし教訓の外に、自ら之を議することを攻

「英蘇のロルラード派」

撃せられたり。是の故に彼等は「聖書の人」と稱せられぬ。後宗教改革の起るや、彼等は其良田沃野にして、而かも亦其の種子を持ちたりき。

ペ (第一百九篇)

- 一二九 爾のあかしは妙なり、かゝるが故にわが靈魂之をまもる
- 一三〇 聖言うちひらくれば光をはなちて愚なるものをさとからしむ
- 一三一 我爾の誠命を志たふがゆゑにわが目をひろくわけて喘ぎもどめたり
- 一三二 ぬがはくは聖名を愛するものに恒になしたまふごとく身をかへして我をあはれみたまへ
- 一三三 聖言を以て我が步履をとゝのへもろくの邪曲をわれに主たら

しめたまふなかれ

- 一三四 われを人の虐げより贖ひたまへ、さらばわれ訓諭をまもらん
- 一三五 ぬがはくは聖顔をなんぢの僕のうへにてらし、爾のおきてを我にをしへたまへ
- 一三六 人なんぢの法をまもらざるによりてわが眼のなみだ河の如くに流る

註 釋

百三十節 雲破れ、天開けて、神の聖殿の現るゝが如く、神の聖言人に臨めば、則ち愚なる者も教訓を悟るを得べき也。猶ほ「なんぢの聖言は己が足の燈火、わが路の光なり」といふが如し。

百三十一節 口をひろくあけて喘ぐなり。口を開きて仰ぐこと春の雨のごとし。伯廿九〇廿三といへるが如く熱心なる希望なり。宛かも渴ける者の泉を忘たふが如く熱に苦む者の涼風を待つが如し。

百三十三節 我は一意専心唯だ神を君主と仰ぎ命令者とせり。我が歩惟たゝ命の儘のみ願はくは我が步履をして亂れまめず聖意の如く進ましめたまへとなり。

百三十六節 すでに我は神恩の優渥を知り又謹んで其の命を奉じ其の法を守るされば人の不虔不義不法を觀れば則ち之れが爲めに哭き哀むこと預言者エレミヤの如くならざるを得ず

教訓

社會の亂調

靈の一致

邪曲世に主となり不義巷に叫び不虔不法日に月に人生の野を蹂躪荒敗せんとす。王は王と戦ひ民は民と争ひ國は國と相攻む人情は寒冷なること猶ほ朔風の枯草に戦ぐが如く亂調なること宛かも毀敗せる樂器に異ならず。

夫れ熟練なる兵士は其の步履萬人も猶ほ一人の如し一進一退一に將官の命に存す是に於て敵に向ふや舉措度に合はざるなく戦つて勝たざることなし神の兵卒たる者亦此の如し須らく聖言によりて凡ての亂調を正し人生をして最巧妙なる合奏たらしめよ。

第百二十一篇

京詣での歌

緒言

都詣での歌
時代
注質

京詣での歌は第百二十篇より以下凡て十五篇あり。素離れて一部の讚美歌集たりしこと疑ふべからず。毎歳エルサレム大祭の時他邦に在留せるユダヤ人が隊を組織みて、京都に上りつゝ之を歌ひしものなり。現在の如く編成せられしはバビロンの俘囚より歸國せし後のことなるべし。蓋し其内數篇は俘囚の當時を回想せる詩人の感情尙ほ新にして髣髴として暗示せるものあり。

本篇は實に美しくして、天地の造化主イスラエルの守護者なるエホバの照鑑したまふに由り、幸に安全平靜なるを得るを喜べる、心情の眞實なる告白なり。宇宙の造化主國民の守護者は、亦一個人をも庇護する者

論場所の異

なり。全篇を貫通する思想、及び其の特質は守の字に在り。四節以下短篇中尙ほ反覆すること六回に及べり。

本篇の成りし境遇如何の問題は明かに答辯することを得ず。エワルド、デ、ウエットの如きはバビロンの放逐時代に成りしといふ。詩人は故里の岡に向ひて回顧の眼光を放つこと、宛かもダニエルが遙かにエルサレムに向ひて其の窓を開き祈りしに異ならず。プーエルドの如きは、一節の山を以つてシオンの群峯乃ち神の山なりとせり。

又説をなす者あり曰く、道者の隊の始めてエルサレムに近づき、其の立てる山を遙かに望みて、其時歌ひしものなり。乃ち明日は目指せる京城に達す可きて、前日の夕方幕を張りて宿となし、日輪は漸く西山に没して、暮色蒼々たるの比遙かに高塔樓閣の樹立せるエルサレムを模糊髣髴たるが裏に望見すれば、平和安全なること名狀すべからず。是の

時に方り隊の中央に在りて一、二節を高吟すれば則ち之に次ぎて他聲起り三節を謳ふ。かくて全衆相和して四節を唱す。而して明日に至り彼等は『エルサレムよわれらの足は爾の門のうちにてり』百十二〇二と

歌ふめり。要するによしバレストアインの地よりならずとも神の聖所より隔たり

てありしことは明白なり。本篇は著しき段落なし、句は二句づゝ相對するが如し。

一 われ山にむかひて目をあぐわが扶助は何處よりきたるや

二 わがたすけは天地をつくりたまへるエホバよりきたる

三 エホバはなんぢの足のうごかざるゝを容したまはず爾をまもる者は微睡みたまふことなし

四 視よイスラエルを守りたまふものは微睡むこともなく寝ること

なからん

五 エホバは爾をまもる者なり、エホバはなんぢの右手をおほふ蔭なり

六 ひるは日なんぢをうたず夜は月なんぢを傷じ

七 エホバはなんぢを守りてもろくの禍害をまぬかれしめ並なんぢの靈魂をまもりたまはん

八 エホバは今よりどこしへにいたるまで爾のいづると入るとをまもりたまはん

註釋

一節 山 或ひはエルサレムといひ、或ひは神殿の在る所なりといふ。兎に角、希望と敬虔の眼を以て、エホバに向ふことなり。

三節 詩人は自ら己に向つて説けり。
 四節 微睡、寝 或る人は二語の中に意味の進歩あるが如く想へども必ずしも然らず。
 五節 前には守る者の性質を述べ、今や進みて守る者はエホバなりと説きぬ。○なんぢの右手云云 爾を守らんが爲めに右手に立ちたまふエホバは爾をかざす者なり。又蔭とは苦熱に對して云へるなり。イザヤは「爾神熱をさくる蔭となりたまへり」といへり。
 六節 日 日の熱に撃たるゝことはユダヤ邊にての常狀なり。王下四〇十八||二十、拿四〇八、詩百二〇四。○月 西部亞細亞にては月また害あり、デリーリツチユはテキサスの説によりていへらく、ユダヤあたりにて月光清く晴れ渡れる時露宿せば、眩暈て精神錯亂し、太しきは死することすらありといふと。

デリーリツチユ

七節 然れど神は常に夜となく、日となく保護りたまふなり。
 八節 進退出入皆な神の佑助あり。

教訓

ドクトル、ブレイキー其の著、ダヴィド、リヴィングストンの傳の中に、彼が亞非利加の第一傳道者として發するに臨み、其の家人と訣別せんとするや、本篇及び百三十篇を讀みしといふ。今其の概畧を記載すべし。彼が姉妹記すらく、余はクリスチアンの使命に關して物語りせし吾が父と彼とを記憶する也。彼等は高貴富有の人々が徒らに獵犬馬匹の爲めに金錢を消費するに代へて、宣教師等の全軀を支給するを以て、名譽なりと思惟するの時應に到るべしといひぬ。一千八百四十年十一月十七

リヴィングストンの逸事

日の朝まだき吾等は五時に起き出でぬ。ダヴィドは百二十一篇及び百三十五篇の詩を読み而して祈禱りぬ。かくて吾が父と彼はリヴハブール行きの漁船を得んが爲めにグラスゴーに向ひけり。かくて其の子の眞面目に暗黒なる大陸に向ひしに引き代へ老爺は憐むべし。犖然寂寞たる心を以てブランドアイヤに歸り來にけり。

モツフハ
ト夫人

本篇は亦リヴィングストンの義母なるモツフハト夫人の希望の基礎なりき。彼女は此希望を以て夫の危険多艱なる旅行の門戸なるリヴィンチに在る其の義子に贈つて曰く、吾が愛子リヴィングストンよ今に至るまで吾は吾が精神を保ちぬ。我等が大夫子は尙ほ爾を安全に保ち得べしと信ずるは適當のことなり。然れども彼の途は不思議にして測るべからず。而して余は九十一篇及び百二十一篇の如き現世の保護に關して彼の言に於て爲されたる多般の貴き約束に結び付けられぬ。

されど縱令熱心なりども凡て祈禱る所は唯だ彼の聖意に従ふべきことを教へられたり。爾のために斷えざる祈禱は献げらる。余爾を思ふ時は吾が心飛び立つなりと。

第二百二十二篇

ダビデがよめる京まうでの歌

緒言

迎會の歡
 本篇は京まうでの端書ある歌の中に、最も強く道者の旅行を示すものなり。是は三大節、逾越節、五旬節、構廬節の一を守るべき途に上れる時のために作られしことは、確實なるべし。詩人は地方に住居し、其節會の近づきて、其友人隣保の者來りて、其同伴を勧めし時、如何に其心に喜びしか、劈頭明かに之を説きぬ。かくて第二節に至りては、直ちにエルサレムの京城に移れり。次いで其の固く立てる壯嚴美麗の様を述べ、而して嘗てイスラエルの支族の續々踵を接して上り來りしことを述べ、神民の集會場はダビデの家なることをいへり。
 是等を回想し來れば、則ち啓發せられたる心より、油然熱心なる祈禱は

作者

エワルド

デーリッ
チユ

起り來り、遂に炎々として燃え上りぬ。其の神を愛するが如く、亦其國家を愛し、過去に於て京城の盛昌なりしが如く、將來亦然らんことを希望せんがために祈りぬ。
 端書に據れば、ダビデの作なり。然れども四五兩節は回顧にして過去の歴史なり、而してダビデ自ら言ふべくも見えざるなり。此の京まうでの歌は悉くならずとも、過半は俘囚の後に成りしなるべし。然れども是れ亦問題なり。

エワルドは俘囚より歸り來りし一老人の自らは沙漠を横斷る旅行には同伴せずして、道者の上に祝福あらんことを祈りしものにて、其友人に離れ、又同情に打たれて、古人イスラエルの國民的團結の中心點、支族の宗教的民法の基礎たる京城の名譽を述べたる者となしぬ。
 デーリッチユも亦此の觀察に同せしも、作者は尙ほ俘囚に在りとせり。

一人われにむかひて率エホバの家にゆかんといへるとき我よろこべり

二エルサレムよわれらの足はなんぢの門のうちにてたり

三エルサレムよなんぢは稠くつらなりたる邑の如く固くたてり

四もろくのやから即ちヤハの支族かしこに上りきたりイスラエル

にむかひて證詞をなしまたエホバの名に感謝をなす

五彼處にさばきの寶座まうけらる是れダビデの家のみくらなり

六エルサレムのために平安をいのれ、エルサレムを愛する者はさかゆ

べし

七ねがはくは爾の石垣のうちに平安あり、なんぢの諸殿のうちに福祉

あらんことを

八わが兄弟のためわが侶のためにわれ今爾の中に平安あれといはん

九われらの神エホバの家のために我なんぢの福祉をもとめん

註釋

一節 如何に信仰篤き告白なるぞ。エホバの前に出で、禮拜するは其の喜びなり。昔し神の律法に爾の男たる者は皆年に三次主エホバの前に出づべし。(出廿三〇十七)とあり。

二節 大節會に際して自ら城の中に来り、禮拜の群衆と共に在る一人の喜悅と満足を説くものなり。是れイスラエルの特權なり。

三節 稠くつらなり。スタンレーは土地の形勢上より解釋し、山谷相接する様をいふ。ヘルデルは人家櫛比して巍然たる大都會を見ては、目常に村落に慣れなる人民の自然なる感嘆より出でたる言なりとす。が

スタンレ
ヘルデル

リラヤの漁民および農夫等亦此の感に打たれたりき太廿四〇路廿一〇可十三〇。〇固くたちり。バビロンの俘囚より歸り來りて再び修繕して成りしことをいふ説あり。

四五節 過去の盛時を回顧するものなり然れども今やダビデの王位なく民も一人の王者の下に在らず又支族は悉く來らず。

〇證詞をなし 男子は年に三回主の前に來るべきなり。〇さばきの寶座 王は審判者なり母下十五〇二王上三〇十六七。

〇ダビデの家のみくら 嗣王の座をいふ。六節 平安の原語はシヤラムにして榮の原語はシヤルザハなりエル

サレムの音と相近し。

此六節以下は全く利己的にあらずして最も高尚なる氣力あり其の兄弟國民神を思ふこと實に至れり盡せりといふべし。

教訓

共に神を讚美す

悪人は自ら悪を行ふのみならず之を行ふ者をも愛する也此の如く義人は自ら義を行ふのみならず之を行ふ者をも愛する也。されば敬虔神を愛する者の己自ら神に事ふることを喜ぶのみならず同信の徒と共にエホバの御前に出で感謝の祭を奉るは如何に心に喜悅を感ずる者ぞ。かくて壯嚴なる稜威を仰ぎ不朽の榮光を頌へ平安多福なる神の城に永遠限りなく神と共に住まんとすることを切望するは蓋し敬神者普通の人情なり。あゝ來れ神の子等いざ共に神を讚美せん。

ウオルフガング、シュツフなる者あり、ロライン新教派の牧師なりき、其の救拯は唯だ神の自由なる慈愛にして、其子イエスキリストを信ず

シュツフ

るにありのみと確守せしを以て、遂にナンシーに於て焚殺せられたり
き其宣告を聽けるや乃ち神の都に上る歌なる、此百二十二篇を歌ひ、其
の刑場に到るや、五十一篇を唱しつゝ、炎々たる猛火と渦巻きたる黒煙
に呑み込まれたりき。蓋し其の残れる所は神國にて唱ひ繼ぎしなるべ
し。

第百二十五篇 みやこまうでの歌

緒言

預言者亦

猶太人の
墮落

幸にバビロンの俘囚より赦されて歸り來りしと雖も、更に新なる危難
はイスラエルに落ち來りぬ。管だにサマリヤを始め近隣の敵より、間斷
なく、神殿および石垣の修繕を妨害せられしのみならず、内部には兄弟
牆に鬩ぐの憂ひありき。當時エヅラは俘囚より還りし猶太人の異邦人
と相互に嫁娶して、神の撰民の血漬れ、殊に民の牧伯等其張本人として
罪を犯せしを聽き、唯だ呆然として失望するばかりなりき。喇九〇一以
下を見るべし。後子ヘミヤは石垣を再築するに方りて其の工を爲すま
で祭司及び貴人等を信認せざりき。尼二〇十六、六〇十七。

預言者等すら敵と共に彼に反對して、其の踵をあげたりき。テラヤの子

シマヤは敵なるトビヤ及びサンバラテ等に好餌を食ませられ、又女預言者ノアデヤ並びに他の預言者等も、反きて彼を脅嚇し、其の工を妨碍せり(尼六〇十||十八)此等の反逆及び妨碍は本篇三節及び五節に暗示せらるゝ也、然れども一方に於て詩人の信仰は、嶄然として是等危難の上、に超越し、堅信不拔、確實なる唯一の守護を、恃みて猶ほシオン山の永遠に動かざるが如く、又山々に圍繞せられたるエルサレムの如くなりき。

- 一 エホバに依頼むものはシオンの山のうごかさるゝことなくして永遠にあるが如し
- 二 エルサレムを山の圍めるが如くエホバも今より永遠に其の民をかこみたまはん
- 三 惡の杖はたゞしき者の所領にとゞまることなかるべし、斯くてたゞ

しきものは其の手を不義にのぶることあらじ
 四 エホバよねがはくは善人と心直き者どに福祉をほどこしたまへ
 五 されどエホバは轉りて己が曲れる道に入る者を惡きわざをなす者と共に去らしめたまはん、平安はイスラエルの上にあれ

註釋

一、二節 神に倚賴する者に二種の形容あり、一は山の如く動かざること、二は山に圍まるゝが如き是れ也。○其の民をかこみたまはん エホバ言ひたまふ、我其の四周にて火の垣となり、其中にて榮光とならん

(亞二〇五)
 三節 本節の最初に蓋はの字あるべし、乃ち前節の意を受けて、神の聖

き保護ある所なれば則ち悪人は其の間に足を留むること能はざるの
 心を顯はせるものなり。○悪の杖。ペルシアの支配を受けつゝある
 ことなれば、かくは言へるなり。○たいしき者の所領。神の約束の地
 なり、十六篇の五六節を見るべし。
 四、五節。祈禱と希望なり、此の二者共に神の義を信するより來るもの
 なり。

教訓

誠意、正心、敬虔の至情を以て、エホバを信奉する者は、這般の堅信なかる
 可らず、動けば即ち疾風の野火を驅りて、枯草の上を走るが如く、靜なれ
 ば即ち泰然動かざること、應さに神のシオンの山の如くなるべし。抑々

エヅラは熱誠敬神の人なり。ペルシヤ王クロスの勅許を被ぶり、バビロ
 ンの俘囚より本國に還ることを得たりしが、其の途次アハワの河畔に
 於て同國人を糾合し、之れに斷食を宣傳し、エホバの前に身を卑くし、其
 の前途について、深く天佑を熱求したり。而して彼は遂に其の許す所と
 なり、子ヘミヤと共に亡國の殘壘を堅くし、異邦人に瀆されたる神殿を
 聖め、四面皆敵の裏にありて、且つ戦ひ、且つ働き、危急存亡の危機に周旋
 して、終にイスラエルてふ神聖なる王國を恢復中興するの功を收めた
 りき、其の自ら信じ、自ら任ずる所の精神は、彰々として本篇に明かなり。
 ある敗餘の教會を守る兄弟よ、吾人若し天佑を確信し、勇進敢爲、外は
 壘を高くし、溝を深くして敵に備へ、内は神民を奨勵誘掖し、神の至聖所
 を聖め、以て戦へば天下何事か成らざらん、吾人が勝利期して待つ可き
 なり。吾儂今筆を驅つて茲に至り、大に感慨する所なくんばあらざる也。

願くは主イエスよ來りたまへ。

又本篇は讚美歌となして、蘇格士蘭宗教改革の時危難に際會し、數々唱はれたりき。之と同調なる者に『セント、アンドリュウ』有り是れ亦路易十四世が佛國新教徒を虐殺せし比、聖徒が數々歌ひたりし者なりき。此の如き事情に際會して、作られたること其の一句一言に徴して明白なり。

第二百二十七篇 ソロモンがよめる京までの歌

緒言

テール

著作の時代

本篇及び次篇は、社會的及び家族的生涯並びに神を畏るゝ者の家族は、神の攝理によりて、多福多幸なる現象を、最と美しくも形容せし者なり。アイザック、テール曰く、是等の形象は温和にして、清輝なるものなり。最良の意味に於て、人情を教訓する者なり。彼等はバラダイス(樂園)の確實なる要素を保有し、尙ほ更に族長的生涯の、缺乏しつゝある所の愛國及び中央歸一を加へて、族長時代の要素を含有する者なり、云々。兩篇共に其の成りし時代を審みせず。古來多くは俘囚より歸りし後の作となせり。乃ち一節の建築又四五節の人民の増加は、愛國者なる希伯來人の眼には、殊に肝要なる事なりしなり。

性質

然れども一節の建築は、神殿にあらざして、普通の家屋なり。デ、ウエットが観するが如くに家を建て、市を守るは、放逐より歸來せし當時に必要なりしが如く、常に於けるも亦然りとす。イスラエル人は何時の歴史に於ても大なる家族を以て、幸福の主要なる者の一とせり。段落の過渡に一致なく、又連續あらず、然れども敢て理由あるにあらず。初めは室家と城壁のことをいひ、次に室家の強大と喜樂なる子女のことも述べ、又都の髣々たる人の事をいへり。要するに社會的にも、ホーム的にも、共に神の攝理と仁慈とに依頼せざる可らざることをいふに在り。

一 エホバ家をたてたまふにあらずば、建つる者の勤勞はむなし、エホバ城をまもりたまふにあらずば、衛士のさめをるは徒勞なり
 二 なんぢら早くおき遅くいねて、辛苦の糧をくらふはむなしきなり、か

くてエホバ其の愛しみたまふ者に寝りをあたへたまふ
 三 みよ子輩はエホバのあたへたまふ嗣業にして、胎の實は其の報のためものなり
 四年 壯きころほひの子はますらをの手にある矢の如し
 五 矢のみちたる箠をもつ人はさいはひなり、かれら門にありて仇どものいふとき耻づることあらじ

註釋

一節 凡ての成功は神より來ること、確實にして復た疑ふ可らざるの眞理なり、然れども實際に最も多數の人の忘れ易き所なり。讀者善く思ふべし。

二節 夙に起き夜半に寝ぬ、孜孜營々、辛苦の糧を食ふとも、エホバに頼りて爲さるる所は、凡て空なり、空の空なり。エホバは其の愛みたまふ者に、平安なる寝りを與へたまふ、茲に於てか起臥寢食皆な悉く感謝の生涯に涯たるなり。

三節 室家團欒の和樂はエホバの祝福したまふ所なり。○嗣業 廣き意味にして、所有のことなり。

四節 ソロモン曰く、爾の少き時の妻を樂め、彼は愛き塵の如く、美しき鹿の如し、箴五〇十八、九と、マラキ預言者亦曰く、エホバ爾と爾の若き時の妻の間に入りて、證をなしたまふ、馬二〇十四と、父老いて助力を要するに方り、子すでに長じて之を助く。

五節 かれら、或は子なりといひ、或は父子なりといひ、又父といふものありて定かならず。○門 邑の出入口なり、重に士師の居る所なり。

教訓

神 ホームも

天地は神の充ちたまふ所なるが如く、室家も亦神の充ち玉ふ所ならざる可らず、萬物の時を得て美はしきが如く、ホームも亦神の美によりて裝飾せられざるべからず、神の安全なる眷顧保護の下に在りて、感謝の生活をなしつゝある者は福なる哉。

見よ、人家數萬炊烟十里に連なる所、城壁千丈丘山起伏するの邊、美は則ち美ならざるにあらず、險は則ち險ならざるにあらず、然れどもエホバ之を守り、之を建て玉ふにあらずんば、則ち猶ほ白骨の累々たるが如く、狐狸晝寝りて、曠昔の榮華を吊するに任ずるのみ、亦悲しからずや。

第二百二十八篇 京まうでのうた

緒言

本篇は神を畏れ、聖き生涯を送りつゝある者の家族的福祉のパノラマなりといふべし。

ルーテル

ルーテル曰く前篇に於て預言者は生涯の二種類詳言せば國民的生涯及び家族的生涯の二種に付て論ぜり本篇に於ても殆ど同一なり然れども多少異なる所なきにしもあらず茲にまた共に彼の二種を一致し又神の祝福平和を望めるも尙ほ彼詩人は家族の支配と結婚を説けり蓋は民法支配の根本なればなり蓋は吾人が室家を養育教訓する所の子女等は他日國家の治者となるべきものなればなり蓋は家及家族より市邑成り市邑より州成り州より王國成なればなり故に家内の支配

分段

は道理上政治および政治上の支配の根原なりと稱すべき也蓋は爾れし一を破壊せば則ち他は存在すること能はざればなり人或は本篇を以つて婚姻を祝するの歌となすものあり分つて二とす、

(一) 一四 幸福なる生涯

(二) 五、六 幸福なる生涯に入りし者に向つての希望と約束

一 エホバを畏れ其の道をあゆむものは皆さいはひなり

二 そはなんぢ己が手の勤勞をくらぶべければなりなんぢは福祉をえ

また安處を得ん

三 なんぢの妻は家の奥にをりて多くの實をむすぶ葡萄の樹の如く爾

の子輩はなんぢの筵に圓居してかれらの若樹の如し

四 視よ、エホバを畏るゝ者はかく福祉をえん

五 エホバはシオンより恵をなんぢに賜はん、なんぢ世にあらん限りエ
ルサレムの福祉をみん
六 なんぢ己が子輩の子をみるべし、平安はイスラエルの上に在り

註 釋

二節 手の勤勞 是れ幸福の第一なり、地方に在る農夫、收穫の前に敵
の爲めに剽略せらるゝことなく、家畜も安全にして、其の塔に安ずるこ
と、實に天恵の大なる者なりといふべし。
三節 家の奥 婦人其の閨房に居ることなり、かく隠れ居ることは東
邦の習慣なり、エダヤにては、貧かに少き方なれども、猶ほ此のことあり
き、麼六〇十。○葡萄 主として豊饒なることに喩へたり、されど亦た

美はしく、且つ助けを要することの譬喩なり。○若樹 勇ましく健か
にして、又喜びのことに喩ふ。

五節 美はしき家族的生涯を見て、詩人は家族の父を敬重すべきこと、
又詩人のすでにかくの如き熱心なる意味にて語りし所の福祉を、彼に
望まんとてなり。○シオンより云云 神の寶座の在る所、聖所として
凡ての祝福は、茲より出づるなり、百二十四篇三、廿篇二を見るべし。
次ぎに誠なる愛國的感情、乃ちエルサレムの隆運を見んこと、望み、又
子孫を見得る程、永く生くること、望みなり、家族の福祉も國家の福祉
も共に分つべからざる一躰の者となるなり。

教 訓

夫れ睦じうして一塊の乾けるパンあるは争ひありて宰れる畜の盈ちたる家に愈れり。况んや吾が勤勞の糧は安じて之を食ふべし。吾が畜は心に任せて之を宰るべし。庸租吾に迫らず坐して屋漏の憂ひなきに於てをや。更に况んや吾が美はしく榮え吾が子輩は健かにして多きに於てをや。此の福祉は實に人生に於ける至大なる者にあらずや。然れども記臆せよ。是等の福祉はエホバを畏るゝ者にのみ與へらるゝ特權なることを。

第三百三十三篇

ダビデがよめる京まうでの歌

緒言

此の巧妙なる短歌に付て、ヘルデルは曰く、是れ即ち美麗なる薔薇花の馥郁たるものなり。と眞に一心同躰なる兄弟として、眞正なる一致の性質を、斯くの如く眞實に記述し、又美妙に説明したる者他にあらざるなり。本篇に云へるが如く、眞正の一致は實に聖き事にして聖き膏の如く、又價貴き香料の如し。頭より髻まで髻より衣の裾にまで流れて、全身を聖むる物なり。

端書にはダビデの作となせり。故に人説をなして、イスラエルに八年の亂あり、十二の支族起ちて共に相闘ぎ合ひしが、遂に支族は咸くダビデにヘブロンに來りて、いへらく、視よ、我儕は爾の骨肉也。前にサウルが我

儕の王たりし時にも爾はイスラエルを率ゐて出入らす者なりき然
 してエホバは爾に爾わが民イスラエルを牧養はん爾イスラエルの君
 長とならんといひたまへりとかくしてイスラエルの長老等はダビデと
 契約して膏を澆ぎて其の王となせしことに推論す當時此の國民が一
 致せる光景は歴代記畧尙ほ之を詳かにせり是等の行伍を守る軍人等
 眞實の心を懷きてヘブロンに來りダビデを以てイスラエル全國の王
 となさんとせり其の餘のイスラエル人も亦心を一にしてダビデを王
 となさんとせり彼ら彼處に三日居りてダビデと共に食ひ且つ飲めり
 蓋は其の兄弟等これがために備へをなしたればなりまた近所の者よ
 りイツサカルゼブルンおよびナフタリの者に至るまでパンと麥粉の
 食物と乾葡萄と乾無花果と酒と油等を驢馬駱駝牛馬に載せ來り且つ
 牛羊を多く携へ到れり是れイスラエル皆よろこびたればなり(上十二

又説

章三十八 四十

又説を爲す者あり以爲へらくバレスタインの各地方各部落より國の
 大節會のためにエルサレムに上り來りし多數の群を目撃して作れる
 者なりと
 尙ほ更に説を爲す者あり過半の註釋者は之に同する者なり即ち放逐
 より歸り來りし後最早王國の分裂もなく支族相互の嫉妬も止みて全
 く歸一の國家となりし時の作なり而して國民の間に精神思想を全く
 一致せしことはエヅラテヘミヤの談によりて明白なり例へば喇三〇
 一にイスラエルの子孫かく其の邑々に住み居りしが七月に至りて民
 一人の如くにエルサレムに集れりといひ又尼八〇一に茲に民みな一
 人の如くになりて水の門の前なる廣場に集り學士エヅラに請ひてモ
 ーセの律法の書を携へ來らんことを求めたり是れ乃ち此の説の據る

性質

所なり。
然れども其の年代に關しては明白に知る可らず。期る一致の福なることの幻影は國民の歴史にて何時にても詩人の心情を喜ばしめ又詩人の歌を啓發せし者なり而して其の言は縱令創意的に國家に適用せんと企てられたることは疑ふべからずといへども亦等しく更に狭少なる區域乃ち家族及び支族にも眞實なること也。
一視よ同胞相睦みてともに居るは如何に善くいかに樂きかな
二首にそゝがれたる貴きあぶら鬚にながれアロンの鬚にながれ其の衣のすそにまで流れ滴るゝが如く
三またヘルモンの露くだりてシオンの山にながるゝがごとしそはエホバ彼處に福祉をくだし窮りなき生命をさへあたへたまへり

註釋

一節 視よ 必要なる眞理に注意を惹かんがためなり。○相睦 一
 軀となり同一なる精神同一なる幹枝同情を以て同一なる目的を求むることなり。
 二節 祭司長の膏を以つて聖別せらるゝことは出廿九〇七利八〇十
 二廿一〇十等に見ゆ今此の喩は膏の貴きこと又芳香をいふにあらざ然れども其の膏は蜜だにそゝがれたる耳に止らずして遂に流れて鬚
 鬚に及び衣の裾にまで及びて全部同一なる惠福に與かるの義なり哥
 前十二章を參照すべし。又或る人は之を解して國家と家族との一致の
 精神が治者と被治者との間に行はるゝことなりといふ。又或る人はい
 ふ。一致は神聖にして聖き膏の如し。又香膏の如く芳芬馥郁たる義なり

と然れども是れ單に外部の附屬物たるに過ぎず。ルーテル曰く彼の首よりと云ひしことに於いて彼は眞の一致の性質を現はせり膏の祭司長なるアロンの首より其の鬚に流れ、又衣の裾に迄滴りしが如く、教理及び兄弟の愛に於て眞に一致することは猶ほ貴き膏の如く、靈の一致は祭司長、教會の首長なる基督より、其の凡ての會員に迄流れ及ぶなり。鬚と衣の端によりて彼は教會の達する丈遙かに教會の首長なる基督より流るゝ所の一致の擴がることを示すなり。○アロン 祭司として膏を灌がるゝ者を代表す。

三節・兄弟の一致は次ぎに露に比して説かれたり猶ほ夫の膏の首より衣の裾まで流るゝが如くに、露の高く天霄に秀でたるヘルモンより低き峯なるシオンにも、一様に結ぶをいふ。又云ふ、ヘルモンは北にありシオンは南に在り、故に南北の種族共に一致することなり。ルーテル

曰く遙かに仰ぎ望む者には、巍々たる高山恰も天に接するが如し。天より來る露は高山より其の下なる丘陵山岳に下るが如く見ゆるなり。故に彼はヘルモンよりシオンの山に下るといひし也。按ずるに前の喩へは教會に關するが如く、是の句は政治上の一致に關するなり。何となれば神は平和と一致によりて共和國、又王國をして盛昌ならしめ玉へばなり。夫れ種子も、灌木も、樹木も、朝露によりて新鮮に繁茂する者なり。平和の初めは王公より來ることヘルモンの如し、是れより凡ての特別なる人及び全共和國に流るなり、而して是によりて新鮮になる也。一老巡禮者曰ふ、毎朝日の出づるとき、少量の露ヘルモンの頂より流れ來りて自ら聖マリア教會に下る、クリスチアンの醫師之を集め、各種の疾病の特治劑として使用す、即ちダビデが預言的に本詩にて言ひし露是れなり。是は固より信ぜべき言にあらす。

○かしこに 此の兄弟の一致の結果は、重にシオンに於て待たるゝものなり、蓋はエホバは自ら之をして凡ての福恵及び凡ての生涯の中心たらしめたまふなり。本節はエルサレムの大祭に方り、支族の集會にて歌はれたる者なりと想はる、詩百廿八〇五、百三十四〇三。

教訓

北極遠征隊

一千八百八十一年アメリカの北極遠征隊あり、北極無人の境に在りて、永遠の過去より堆積し來れる冰雪の間に、四ヶ月半唯だ夜なる生涯を送りしことなりしが、其の最初の安息日に方り、司令長は本篇を讀み一隊に諭して互に兄弟の感情を懷き、親密なる精神を以つて此の危難に當らんことを陳述せり。されば一隊は數ヶ月間光線なく、温氣なく、飲用

水に缺乏し、衣食防寒の具の事足らざるにも拘らず、勇氣、信仰、希望を以つて、遂に打ち勝てりといふ。

第三百三十七篇

緒言

懐舊の涙

本篇は嘗て一度俘囚となりしも、後赦免せられて、歸り來りし者の感情を吐露したるものなること、疑ふべくもあらず。エルサレム陥り、神殿も亦破壊せらるゝや、テブカドテザルの軍に牽かれ、後ベルシヤ王クロスの勅令發布せらるゝや、否や先づエルエレムに歸り來りし、利未人の一人の作なること、殆ど確實なりといふべし。彼今や其の愛慕せし故國にあり、其の目に觸るゝ所、一として疇昔の知己ならざるはなし。夫の丘陵や山谷や、牧場や、田園や、彼が親しく幼時にありて、友侶と共に相驅逐せし所なり。然りと雖も、就いて之を視れば、則ち家は掠奪者の栖む所となり、田園は空しく荒敗して、嘗て葡萄無花果の豊かなりし所、今は唯だ荆

荒れし都

棘の茂るに任せ、夫の莊嚴神聖なりし神殿は、人の之に奉事する者なく、夕陽徒らに狐狸の影を照すのみ。夫の徳大寺實定が、古き都を來て見れば、淺茅が原とぞ成りにける。月の光はくまなくて、秋風のみぞ身には入む。

親しき琴

と歌ひし舊都の感慨も斯くもありしなるべし。低回沈吟誰かよく之に堪えんや、况んや慷慨身を以て國に許せる神民に於てをや。乃ち詩人は俘囚の伴侶たりし、又嘗て幸福なりし舊時の記念物なる其の琴を操り出でたり。是れ即ちベビロンの河畔にて、夷人が酒興を助けんが爲めに、とて、彼に彈奏を迫りし時、彼は昂然として之れに應ぜざりし愛物にあらざや。今や彼は躊躇しつゝある手を以て、先づ悲哀沈鬱なる低音にて、絃を拂ひ、然して後荒き烈しき音を以て、荒き烈しき句に答へつゝ、其の敵に復讐の高調を愈高めぬ。

詩人は感動すべき佳美なる言語を以て、其の俘囚の談を始めぬ。先づ其の自國の山里に異なりて、ユフラテ河にて土地の潤ふこと運河によりて横斷せられたる其の岸頭には、柳の並樹あり、其邊は廣原にして、紫鬱幽谷人目を攪醒するが如きものなき様を描寫せり。而して殆ど其の生命の如く愛せし、此の聖き曲にても慰藉を發見し得ざる程深き憂苦なる情緒を描きて、二節を歌ひ出でたりき。次に敵の嘲弄せし様を説きて『シオンの歌一を歌へど』而し一悲一傲、其の信仰や堅牢、其の愛國心や犯すべからず、曰く『われら外邦に在りて如何でエホバの歌をうたはんや』と意氣頗る軒昂當る可らざるものあり。

斯て過去を回想し、自家の惡を精思し、其の四周を敗壞蹂躪せる敵の足跡を目撃し、憤然として激怒せしこと、固より奇むに足らざる也。而して彼が宗教的熱心と、又是れより出づる所の敬虔なる愛國心を以て、扼腕

慷慨忿怒せしこと亦當然なり。是に於てか詩人は曩日にエルサレムの陥没するに方りて、寧ろ是と生死すべき者の却て其滅亡を喜びたる者及びバビロンの敵を痛く詛ひたり。

噫、詩人が舌は三十三珊瑚の巨砲よりも猶ほ劇甚にして、其の琴は三尺の寶刀よりも如何に恐るべき哉。彼は『實に惡みの惡み、嘲りの嘲り、愛の愛を以て飾りたる者なりけり』。

一 我等バビロンの河のほとりにすわり、シオンをおもひ出で、涙をながしぬ

二 われら其のあたりの柳にわが琴をかけたなり

三 蓋はわれらを膚にせしもの我等に歌をもとめたり、われらを苦むる者われらにおのれを歡ばせんとてレオンの歌一つうたへといへり

四 われら外邦にありて如何でエホバの歌をうたはんや

五 エルサレムよ若し我なんぢをわすれなば、わが右の手に其の巧をわすれしめたまへ

六 もしわれ汝をおもひいでず、もしわれエルサレムをわがすべての歡喜の極みとなさずば、わが舌をわが腮につかしめたまへ

七 エホバよ願くはエルサレムの日にエドムの子輩がこれを掃除け、その基までも掃ひ除りといへるを聖意にとめたまへ

七 ほろぼさるべきバビロンの女よ、汝がわれらに作し、ごとく汝にむくゆる人は福なるべし

九 汝の嬰兒をとりて岩の上になげうつ者は福なるべし

註釋

一節 楚囚敵地に在りて、故山の天地を愛慕するの感慨察するに餘りあり、况んや詩人は宗教的愛國心の鬱勃として蟠屈しつゝあるに於てをや

二節 詩人は華を以て夷に事ふるが如き者にあらず、彼が決意は確として犯すべきにあらず

五節 節を破りて夷に事へんよりは寧ろ其の巧妙なる腕を切斷せんとの意氣なり

六節 亦五節と同義なり

七節 エルサレムの敗るゝに方りて、エドムは敵に阿りて之に謳歌したり、是れ詩人が復讐的精神の因つて起る所以なり

八節 一度は我を辱めたるバビロンも、遂にエホバの義しき審判に堪ゆべきにあらず、視よ其の終りや近し、是れ亦復讐的の咀ひなり、今茲

にベピロンの女といふ、ベピロンを代表したる言にして、打ちつけに女性を指示せしにはあらず。
九節 恐るべき慣りの表言なり。

教訓

クルシー

クルシーは大東洋學者の一人にして、舊約聖書を伊太利語に翻譯せし者なり、又彼は法王政治に反對して、伊太利と自由とのために左袒せし舊教僧侶中有數の人物なり。一千八百八十三年羅馬の大集會の席上に於て演説し、彼が本篇を特別に愛讀することを説明せり。其の中に云へらく、本篇は神と國とを共に結合せる、最初なる且つ最も莊嚴偉大なる愛國の歌にして、實に空前の作なり。葡萄牙の國民的詩人カメンスは本

葡萄牙詩人カメンス

ハイチ

篇を以て敬虔なる愛國的記念の詩篇となし、之を註釋したり、云云。
ハイチは獨逸の憂鬱屈なる詩人なり、然れども亦纏綿たる情緒の應に掬すべきものなきにしもあらず。嘗て猶太人なる一友に書を裁し、中に言へることあり、余は「われらベピロンの河のほとりにすわり」云々の詩篇は爾の愛物なるを記憶せり、且つ又余は此詩篇より外に於て、好んで涕泣せんと欲する程に、爾は斯く美はしくかく貴く、かく感ずべく之を暗誦せり云云。又一千八百三十年ヘリゴランドよりの書信の中にいふ、昨日は日曜日にして、而かも重き憂鬱は全島に横はり、殆どわが心情を壓殺せんとせり、時に余は絶望に於て聖書を繙きぬ。而して余は告白するが如く、己が暗黒界に在りしに拘らず、其書は余を常に善く慰藉せしのみならず、實に深く余を教訓啓迪したり。如何なる書籍！創造の深淵に根柢を置き、而して天の蒼々たる秘密の外に高ま

民聖書の人

りつゝある世界の如く茫漠廣大なるもの！日の出沒約束及び其の成就、死生、人情全般のドラマ（活劇）等一切此の書中に在り。是れ億萬巻中の書籍なり。猶太人はエルサレム神殿契約の櫃及びソロモンの金皿寶器を喪ひしことのために容易に彼等自身を慰藉し得べきものなり。斯る損失は彼等が救ひ出したる所の敗滅す可からざる聖書を比ぶべきこと無用なり。余若し謬らざれば猶太人を稱して「聖書の人民」といひけんは、マホメットなりき。實に此の名稱は世上今日に至る其の名を存して深く其の性質を代表せし者といふ可きなり。其の書は彼等の本國なり。彼等は此の書の境域の間に栖息す。此處に彼等は其の移し難き市人の權利を實行す。此處に彼等は決して迫害侮辱せられ能はざるなり。此の書を研究したるがために彼等は世上彼等の上に通過する各種の變故の小なるを觀察するなり。凡ての國民は一興一亡し、凡ての國家は朝に

日ハイ子又

盛んにして夕に衰へ、革命は颶風の如く荒れ回りて、海より海に及べり、然れども彼等は其の書の上に己を置き、彼等の頭上を經過しつゝある所の時代の殘虐なる騷擾に付いては何をも觀察せざりけり。可憐なるハイ子は聖書の精神より負かに離れて、思想と感情の多種なる變形を通じて行きしが、ヘリゴランドよりの書翰の後數年、佛京パリより一友人に書を贈りぬ。當時其身軀すでに墳墓の門に迫りしかども、其の心情は破壊し居らざりき。曰く余が教化は全く且つ單純に一書を閱讀することに歸すべし。一書を？然り、是れ舊き親しき一書なり。吾人を暖むる太陽の如く、吾人を養ふパンの如く、自然なる外貌を有する一書なり。其の愛する顛動ひつゝある唇頭を以て之を讀む所の老母の如く、愛と祝福とに充てる一書なり。是れ其の書物（ダス、ブツ）或ひはゼ、アツク）なり。聖書なり。之を稱して聖き書籍といふ、實に宜なり。其の神

ダスブツ

第百三十七篇 教訓

二百三十七

を失ひし者は再び此書にて彼を發見し得べく、彼を未だ知らざりし者は茲に神聖なる言葉の息によりて打たるゝなり、と。

天のエルサレム

本篇は此の地上の國を愛するよりは、更に高尚なる觀察を以て、上なるエルサレムの歌の本原として考ふべし、是れ乃ち各時代の教會に於て、退放より復かに終極のホーム(室家)に向つて仰ぎ望む所の意義なりとす。

第三百三十九篇

俗長に歌はしめたるダビデの歌

緒言

神の性質

神の全能、全知、無所不在、普く何處にも存在し玉ふこと等の性質につき、本篇の如く著較なる者、他にあらざる也。又人の四周は全く神に圍繞せられ、聖靈によりて貫かれ、尺進寸退たりとも、其の支配の區域外に出づること能はざる事實を、斯く明晰に言明せしもの亦他にあらざる也。而かも亦神明に呑み込まれず、特異なる者として人の「ヘルソナリチー」を、之に勝りて尙ほ明確に證明するもの他にあらざる也。

祈禱

是れ決して感情的空想にはあらざる也。抑人は神の工人にして、其の審判者たる神の眼下に立つ者也。而して良心の能力、罪惡と義務等を善く感得承認し、かくて祈禱は常に審判者たるのみならず、亦友たる神に捧

エヅラ

作者

分段

げらるゝ也。思想の高尙なる言語の佳美なる等しく共に卓越したるものにして、アベン、エヅラが詩篇中の冕冠なりと稱せしも、決して溢美にはあらざる也。

希伯來の原書及び七十人譯には本篇を以てダビデの作なりとせり。篇中アラマイク語の強き彩色あるを觀れば、放逐前よりは寧ろ其後なりと想はるゝなり。韻脚は全く井然として序あり、別つて四段となし、各段六節より成立す。前の三段は本篇適當の旨趣にして、後の一段は個人的の感情を説明したるものなり。

(一) 一六 神は人心の最も深奥なる思想と隱微なる行動とを知悉し玉ふ、而して作者は其の全知の裏に住めること。

(二) 七 十二 神は無所不在にして、宇宙の極より極に到るまで、凡て神の現在せる前ならざるはなし、物として悉く其の眼睛より隠れ得るものなきこと。

(三) 十三 十八 詩人の心裏に充ち溢るゝ前段の眞理を、深く確信するの理由を説く。抑も神の斯く人を知悉したまふは、固より怪むに足らず。蓋は人は神の造り玉ひし物にして、何人も追蹤し得ざる、其の生涯の起原を造り、又之れに秩序を賦與したまふものなれば也。

(四) 十九 廿四 今や詩人は最後に臨みて、卒然惡人を嫌惡することに向つて其言を轉じぬ。蓋は前述の如く、神及び其の性質につき、默想に由りて深く感得する所ありければなり。而して終に彼自ら其の衷心に於て己を求め、又己を知り、其の手を己の上に置き玉ひし神と共に正しくあり、又神によりて永遠の途に導かれんことを祈りて局を結

びぬ。

- 一 エホバよ爾は、我をさぐり我を知りたまへり
- 二 なんぢはわが坐るをも立つをも知り、又遠くよりわが念をわきまへたまふ
- 三 なんぢはわが歩むをも、わが臥すをもさぐりいだし、わがもろくの途をことごとく知りたまへり
- 四 そはわが舌に一言ありとも、視よエホバよなんぢことごとく知りたまふ
- 五 なんぢは前より後よりわれをかこみ、わが上に其の手をおきたまへり
- 六 かゝる知識はいとくすしくして我にすぐ、また高くして及ぶことあたはず

- 七 我いづこにゆきてなんぢの聖靈よりはなれんや、われいづこに往きてなんぢの前をのがれんや
- 八 われ天にのぼるどもなんぢ彼處にいまし、われわが榻を陰府にまうくるとも、視よなんぢ彼處にいます
- 九 我あけぼの、翼をかりて海のはてにすむとも
- 一〇 かしこにて尙なんぢの手われを導き、なんぢのみぎの手われをたもちたまはん
- 一一 暗は必ず我をおほひ、我をかこめる光は夜とならんと我いふとも
- 一二 なんぢのみまへには暗きものをかくすことなく、夜もひるの如くに輝けり、なんぢにはくらきも光も異なることなし
- 一三 なんぢはわが腸をつくり、又わが母の胎にわれを組成たまひたり
- 一四 われなんぢに感謝す、われは畏るべく奇しくつくられたり、なんぢ

の事跡はことごとく奇し、わが靈魂はいとつばらに之を知れり
 一五 われ隠れたるところにてつくられ、地の底所にて妙につくりあは
 されしとき、わが骨なんぢにかくるゝことなかりき
 一六 わが骸いまだ全からざるに、なんぢの目は早くより之を見、日々か
 たちつぐられしわが百骸の一だにあらざりし時に、ことごとくなん
 ぢの冊にしるされたり
 一七 神よなんぢのもろくの思念はわれに貴きこといかばかりぞや、
 そのみおもひの總計はいかに多きかな
 一八 われ之を算へんとすれども、其のかずは沙よりもおほし、われ眼さ
 むるときも、尙ほなんぢともにもにをる
 一九 神よなんぢは必ず悪者をころしたまはん、されば血をながすもの
 よ我をはなれされ

二〇 かれらはあしき企圖をもて爾にさからひて言ふ、なんぢの仇はみ
 だりに聖名をととなふるなり

二一 エホバよわれはなんぢを悪む者をにくむにあらずや、なんぢに逆
 ひておこりたつものを厭ふにあらずや

二二 われ甚く彼等をにくみてわが仇とす

二三 神よねがはくは我をさぐりてわが心を知り我をこゝろみてわが
 もろくの思念をしりたまへ

二四 ねがはくは我によこしまなる途のありやなしやを見て、われを永
 遠のみちに導きたまへ

註 釋

五節 その手をあきたまへり 神の攝理の手は常に人の上に在り故に人の自由を實行するは神の深謀と先見との定めたる所を成就するに過ぎざる也、パウロ嘗てアテナス人に説きて曰く、我儕は彼神に頼りて生き、又動き、又存ることを得る也、爾曹の詩人たちも我儕は其の裔なりといひしが如し、是れ亦此の謂なり。

六節 是れ亦パウロが羅馬人に向つて、あゝ神の智と識の富は深い哉、其の法度は測りがたく、其の踪跡は索ねがたし、といへるに同じきものなり。

ナ | カルガイ

七節 カルガイ曰く、此處に言へる聖靈なる語は普通聖書にて用ゐらるゝが如くに、單に神の力に代へられたるにあらず、其の心を理解に代へたるものなり、蓋し靈は人に於て理解の座なり、詩人今之を神に移せしなり、此の前なる語は知る、又見るの代りなり。

ナ | 預言者ヨ

昔者預言者ヨナニ子ニ往きて預言すべきの神命を受けながら、エホバの面をさけてタルシムに逃れんとせり、然れども無所不在の御手の下を脱却し得ざりしなり。

八節 ヨブ亦之れを美しく説明せり、曰く、彼の御前には陰府も顯露なり、滅亡の坑も蔽ひ匿す所なし、彼は北の天を虚空に張り、地物なき所に懸けたまふ、水を濃き雲の中に包みたまふて、其の下の雲裂けず、御寶座の面をかくして雲を其の上に展ぶ云々。

九節 あけぼのの翼 日の翼あることは馬拉基四章二節に見ゆ、曰く、我が名をおそるゝ、爾曹には義の日出で、昇らん、其の翼には醫す能をそなへん云云。

十三節 わが腸 骨は身軀の構造を示すが如く、腸は知覺及び感情を意味す。

十五六節 人は初めよりエホバの攝理の裏に在り。
 十七節 十四節の前半の如く、驚歎と尊敬と感謝なり。
 十八節(後半) 數々眼覺むる時に再び神の前にあり再び神を思ひてあり再び神の仁と知とを驚き且つ貴びて默想するなり。
 十九節 茲に到りて卒然に變遷せり。作者は深く人生の神に秘密なる關係あるを悟り、神より離れたる悪人を深く心に嫌惡するの感情あり故に茲に至りて俄然噴火山の如く爆發せしならん。
 二十三節 一節にも既にエホバよなんぢは我をさぐり我をしりたまへりといへり。而して今復た斯く言ふ、按ふに罪惡を惡むの情甚しきものにして、單其の罪の外に顯著なる時のみならず、其の裏に潜める時にも、使徒の如く噫われ困苦める人なる哉、と同意にて祈れるものなることを知るべき也。

カルヴァイン

カルヴァイン曰く、神の義しき審判の精細なる事に己を斯く捧ぐる者は稀なる信仰を有すべき人なり、と。

教訓

ヴァイルメーン

ヴァイルメーンは有名なる佛蘭西の批評家なり、ピンドル(希臘の詩人にして紀元前五百二十二年に生れる有名なる人なり)の天才を論評せし中に、本篇につき言へりしことあり、曰く、余はプラトーンが神の無所不在と攝理とを論證せし言を閱讀せしとき、始めて尊敬の情を以て之を迎へたりき。其の語にいふ「爾たどひ地の最も深き洞窟に隠るゝとも爾たどひ羽翼を取りて蒼天の高きに翱翔するとも、爾たどひ地獄の底に降下するとも、神聖き攝理は乃ち尙ほ爾に近し」と、是れ即ち彼のホーメル

此作者と
ホーメル

が地の極々に至るまで、三階級にて神々の運動することを記載せしに比較し來れば、則ち更に高尚なるものなり。然れども今彼を以つて此詩人が『我いつこにゆきて爾の聖靈をはなれんや、われいづこに往きてなんぢの前をのがれんや、われ天に昇るとも爾かしこにいまし、われわが榻を陰府にまうくとも視よなんぢは彼處にいます。我あけほの、翼をかりて海のはてにすむとも、かしこにて尙なんぢの手われをみちびき爾のみぎの手われをたもちたまはん。』といへる比較せよ。若し此の詩を以て人間の作なりとせば、則ち猶ほ夫のモーセがシナイの山巔より彼が目撃せし所の光榮を以つて其の面の輝きしが如く、神聖なる恩寵によりて變貌せられたる靈魂より來りし者なり。

第四百四十四篇 ダビデの歌

緒言

性質

本篇は編纂して一篇となしたる者なり。前半十一節までは殆ど全く前代の詩より引用せるものなり。而して其の間の眞の連絡は詳かに知り難し。十二節より十五節の後半は全く創作なり。但し終節は三十三篇十に出づるものなり。要するに是れ他詩を編纂せる者なりといふも不可なし。殊にダビデの時代並びにソロモンの初代最も隆盛なりし國民の祥福と殷富とを説く所の詩の斷篇を轉載せりといふも可ならん。詩人の目的は要するに俘囚より歸りて後、神に従ひし過去に於て當時神は如何に之に充分なる報酬を賜ひしやを想起し、之れによりて其の國民の希望を復活せしめたるに在るが如し。

詩人の目的

作者

本篇を以つてダビデの作となすキムキ一は、母下五〇にあるが如く、ダビデイスラエルの王として各支族の間に承認せられ二節故に及ぶ、ベリシテを従へ平和隆盛の支配をなせしなりといふ。
 又七十人譯の或る寫本にはダビデのゴリアテに勝利を獲しを祝せるものとなしぬ乃ち十節の禍の劔とはゴリアテの劔なりと。
 或は云ふ(母下二〇十三)アブテル或はアブサロンに對して言へるものなりと。

テヲドレット以爲へらく、バピロンより歸りて後隣りの民等より攻められし時の作なりと。其の他異説尙ほ少しとせず。
 然れども一節乃至四節及び十節の語は王者及び國民の有力にして其の權能を承認せられし治者の口より出づべきものなり、故に普通平凡の作にあらざることば明白なり。

事情

詩人は過去の榮光ある勝利を想起し國民の異邦蠻人に圍繞せられ國歩艱難にして神の約束は失せ去りたるが如く爲めに救ひを祈り平和と豊饒の黄金時代の再び復歸せんことを求めたり。

一 戦することをわが手にをしへ闘ふことをわが指にをしへたまふわが磐エホバはほむべきかな

二 エホバはわが仁慈わが城なりわがたかき櫓われをすくひたまふ者なりわが盾わが依頼むものなりエホバはわが民を己れにしたがはせたまふ

三 エホバよ人はいかなる者なれば之を知り人の子はいかなる者なれば之をみこころに記めたまふや

四 人は氣息にことならず其の存らふる日はすぎゆく影にひとし
 五 エホバよ願くは爾の天をたれてくだり手を山につけて煙をたし

めたまへ

六 電光をうちいだして彼等をちらし、なんぢの矢をはなちてかれらを
敗りたまへ

七 上より手をのべ我をすくひて大水より外人の手よりたすけいだし
たまへ

八 かれらの口はむなしき言をいひ、その右の手はいつはりのみぎの手
なり

九 神よわれ爾にむかひて新しき歌をうたひ十絃の琴にあはせて爾を
ほめうたはん

一〇 なんぢは王たちに救をあたへ、僕ダビデをわざはひの劔よりすく
ひたまふ神なり

一一 ねがはくば我をすくひて外人の手よりたすけいだしたまへ、かれ

らの口はむなしき言をいひ、その右の手はいつはりのみぎの手なり

一二 われらの男子はどしわかきとき育ちたる草木のごとし、われらの

女子は宮のふりにならひて刻み出せし隅の石の如くならん

一三 われらの倉はみちたらひてさまゝのものをそなへ、われらの羊

は野にて千萬の子をうみ

一四 われらの牡牛はよく物をおひ、われらの衢にはせめいることなく、

またおしいづることなく叫ぶこともなからん

一五 かゝる状の民はさいはひなり、エホバをおのが神とする民はさい

はひなり

註 釋

一、二節 十八篇の二、四十六、三十五諸節に同主意なり。
 三節 八篇の四節に在り。
 四節 三十九篇の五、六、八〇、九、十四〇二に等し。
 五節 神の祐助によりて敵に勝たんことを祈念す、十八篇の九節より借り來れり。○手を山につけ云云 埃十九〇十八、同廿〇十八に暗合せり、又詩百四〇三十二を參照すべし。
 六節 十八〇十四を見るべし。
 八節 右の手 誓約をなす時に方り、右の手を擧ぐるを例とす。
 九節 前に救ひを求め、次ぎに感謝す。
 十一節 七八節を反覆す。
 十二節 勢よきこと、美はしき事をいふ。
 十三節 財産の豊かなるをいふ。

十四節 攻め來る所の敵もなく、又己の城より遁れ出づることもなく、又戦争の呐喊もなく、悲哀の叫聲もなく、全く平和なることの形容なり。
 十五節 世に於ける隆運は、神の恩恵なりとの考へは、舊約時代の自然の事なり。
 要するに十二節以下は、全く隆盛多福なる平和の光景なりとす。

教訓

本篇は今を去ること二百餘年前、乃ち紀元一千六百四十二年一月三十日、愛蘭内亂の最中に方りて、其日課の詩として、監督ビデル氏の説教したるものなるが、實に當時の境遇に的中したるものなりき、曰く「戦することをおわが手にをしへ、闘ふことをわが指にをしへたまふ、わが磐エホ

ル監督ビテ

ばはほむべきかな、エホバはわが仁慈、わが城なり、わがたかき櫓、われを
 すくひたまふ者なり、わが盾、わが依頼むものなり。……かゝる状の民は
 さいはひなり、エホバを己が神とする民は福なり。』
 抑もヒテルは愛蘭監督中の有数なる人物にして、當時宗教改革のため
 大に努力し、獻身の生涯を送りしが若し其の例證に従ひ、一般に響應せ
 しならば、則ち改革の事業をして、尙ほ更に偉大強盛なる結果を奏せし
 めしなるべし。然れども不幸にして氏は時忌に觸れ、囹圄に呻吟するの
 身となりしこそ悲しけれ。又氏は畢生の力を盡して聖書を愛語に翻譯
 したり。然して蘇格士蘭の高原地方に流布せしが、愛蘭の内地にて一般
 に弘布せられしは、今世紀の初めの頃なりき。かくて氏は本篇を以て説
 教せし後、數日にして信仰の勝利を完うし、永遠の安息に入り、嘗てキル
 モーア墓地の一角に、自ら裁せし、無花果樹の蔭濃かなる所に其骸を納

められたり。

第四百四十七篇

緒言

民及自然
界に於ける
讚美

本篇はバビロンの俘囚より歸國後第二神殿を築造せしが爾來の禮拜式に用ゐられしや疑ふべからず乃ち神の大能と其の民および自然界に慈愛の支配をなし玉ふことを讚頌せし者なり然れども亦神の其の選民を俘囚より放還しエルサレムの城を再築せしめ給ふ特別異數の記念をも混入せり乃ち二三、十三、十四諸節に於て之を知るべし而して其作られたる時はエルサレムの神に献ずるの際なりと想はる乃ち尼十二〇二十七は之を證明するものにはあらざる歟曰くエルサレムの石垣の落成せし節會に當りてレビ人を其の一切の處より招きてエルサレムに來らせ感謝と歌と鏡鍍と瑟と琴をもて歡喜を盡して其の

ヘンクス
テンベル
ヒ

落成の節會を行はんとす。按ふにヘンクステンベルヒが論斷するが如くに當だに本篇のみならず以下第五百十篇まで凡て同一の場合に於てものせられたること眞實なるが如し抑も此の城を再築せし事業は尋常普通の困難失望にてはあらざりき(尼二〇十七||四〇廿三)。故に感謝歡喜讚頌も亦た尋常普通にてはあらざりき尙ほ尼十二〇廿七四十三を看るべし。

分段

『七十人譯』には分つて二段となし前段は十一節に終る。

- 一 エホバをほめたへよわれらの神をほめうたふは善きことなり樂しきことなり稱へまつるはよろしきに適へり
- 二 エホバはエルサレムをきづきイスラエルのさすらへる者をあつめたまふ
- 三 エホバは心のくだけたるものを醫しその傷をつくみたまふ

四エホバはもろくの星の數をかぞへてすべて之れに名をあたへたまふ

五われらの主はおほいなり其の能力もまた大なりその智慧はきはまりなし

六エホバは柔和なるものをさし、悪きものを地にひきおとしたまふ

七エホバに感謝してうたへ、琴にあはせてわれらの神をほめうたへ

八エホバは雲をもて天をおほひ、地のために雨をそなへ、もろくの山に草をはえしめ

九くひものを獸にあたへ、並なく小鴉にあたへたまふ

一〇エホバは馬のちからを喜びたまはず、人の足をよみしたまはず

一一エホバは己を畏るゝ者と己の憐憫をのぞむものを好したまふ

一二エルサレムよエホバをほめたゝへよ、シオンよ爾の神をほめ稱へ

よ

一三エホバはなんちの門の關木をかたらし、爾のうちなる子輩をさきはひたまひたればなり

一四エホバは爾のすべての境にやはらぎをあたへ、いと嘉麥をもてなんぢをあかしめたまふ

一五エホバはそのいましめを地にくだしたまふ、その聖言はいとすみやかにはしる

一六エホバは雪を羊の毛の如く降らせ、霜を灰のごとくにまきたまふ

一七エホバは氷をつちくれのごとくに擲ちたまふ、たれか其の寒冷に堪ふることをえんや

一八エホバ聖言をくだしてこれを消かし、その風をふかしめたまへば、もろくの氷はながる

一九エホバは其のみことばをヤコブに示し、そのもろくの律法とそ
の審判とをイスラエルにしめしたまふ

二〇エホバはいづれの國をも如此あしらひたまひしにあらざ、エホバ
のもろくの審判をかれらは知らざるなり、エホバをほめたへよ

註 釋

一節 九十二〇一、三十三〇一を参照すべし。

二節 きづき 百二十二〇三の如く再築なり。〇さすらへる者 賽

十一〇十二、同五十六〇八の「逐ひやられたる者」と同字なり。

三節 詩五十一〇十七、賽五十七〇十五、六十一〇一、路四〇十八等を參
照すべし

四節 星の數 神は全知と全能なり、されば其民の慰藉の原因となる
こと固より知るべきなり。〇名をあたふ 神は常に其の數をかぞへ

知るのみに止らずして、牧者の其の群羊に於けるが如く、最も親く之を
知り、且つ最も注意して守りたまふことを示せり、本節の論鋒は賽四十

〇廿六、廿九に同じ。

五節 賽四十〇廿六、羅十一〇三十三を合せ見るべし。

六節 無限の能力と、不可測の智慧とを以て、天體を支配するの主は、乃
ち人類をも亦支配したまふなり。夫れ世界の歴史は神の愛と其の義憤

との龜鑑なり、其の支配と秩序とは、人の無制度と不秩序との矯正なり。

七節 神を讚美すべし、其の慈愛は禽獸にまで及ぶなり。

十節 エホバ曰く、われは弓劍戰爭、馬騎兵などによりて救ふことをせ

じ(何一〇七)と。

十二節 城の再築は成りたり是れより國民の隆運再び起り來るべきこと、直接に關係す。

十三節 門の關木 フーアエルドが言ふ如く都城の安全なることは相違なきも直接には尼七〇一四の如し。○爾のうちなる子輩

以下は賽六十〇十七八に於ける約束に比見すべし。

十四節 平和と豊年とを世界に賜ふなり。

十五節 異邦人の神々の空妄なることは、俘囚の後益明白になりたればエホバの大能と其の全宇宙を統治したまふこと、は決して疑ふべからざるなり。又三十三〇九を對比すべし。

十六節 神は最も大なる物を以て最も小なる物の如くなす、是れ最も容易なる業なり。

十九節 自然界に於ける神の働きは萬人のためなり、太五〇四十五に

いふが如し、然れども神の選民に附せし特權あり、彼等は神の活ける言を受けたりき(羅三〇一)。

教訓

美なる宇

偉なる哉宇宙美なる哉乾坤春花の艶麗なる、秋月の清澄たる、小禽も走獸も其所を得、匠山も田園も其の産を全うする、是れ大に關心すべきことにあらずや、就中人其の間にありて、其の生を養ふ朝に夕に、起臥に進退に、一に至聖者の統治にあらざるはなし、吾人試みに四面間として聲なき山莊の夕、滿目浩蕩として、涯なき海屋の朝、閑雲の徐ろに遊ぶ所、急湍の轟地に走る所、黃鳥の囀ずる所、野花の笑ふ所、小兒の嬉戯する所、親子の懐しむ所、伉儷の親む所、烈士の奮ふ所、義人の怒る所、野人の耕す所

樵夫の伐る所、民の隆替する所、國の興敗する所を觀察せよ、一としてエホバの知能、稜威の顯現する所にあらざるはなし。是に於てか慨然として跪きて其罪惡を懷ふと同時に、また大に皇天上帝の徳化を讃せずんばあらざるなり。噫我實にエホバの我が側に在すを見たり。テ一偉なる哉宇宙！美なる哉乾坤！あゝ神の智と識の富は深い哉、其の法度は測り難く、其の踪跡は索ねがたし。孰か主の心を知りし、孰か彼と共に議ることを爲せしや。

友愛の詩

因にいふ、本篇は亦百三十三篇と等しく友愛の詩といふべし。嘗て蘇克士蘭にて教會聯合の際、再び唱謠せられたることありき。第一次は乃ち一千八百二十年分離せし教派の再び合併せし時、第二次は乃ち一千八百四十七年二教派の一致長老教會を組織せし時なりき。

第四百四十八篇

緒言

讚美

分段

詩人は此の光彩陸離たる讚美歌に於て、エホバを頌するや、希伯來の思想に従ひ、天地の二大部に分ち、全宇宙の創造に向つて呼び掛けたり。凡そ生命ある物も、生命なき物も、情あるものも、情なきものも、靈性ある物も、靈性なき物も、此の大合奏に一致すべき爲めに糾合せられたり。抑も本篇は最も高尚なる敬虔、信念の説明にして、又同時に受造物と造物主との關係の最も濶大なる觀察を包含せり。

- (一) 一―六 天に於ける讚美
- (二) 七―十二 地に於ける讚美是れ也。

- 一 エホバをほめたゝへよ、もろくの天よりエホバをほめたゝへよ、もろくの高山にてエホバをほめたゝへよ
- 二 その天使よみなエホバをほめたゝへよ、その萬軍よみなエホバをほめたゝへよ
- 三 日月よエホバをほめたゝへよ、ひかりの星よみなエホバをほめたゝへよ
- 四 もろくの天の天よ、天の上なる水よ、エホバをほめたゝへよ
- 五 これらはみなエホバの聖名をほめたまふべし、そはエホバ命じたまひたれば彼等は造られたり
- 六 エホバまた此等をいや遠ながに立たまひたり、またすぎうすまじき詔命をくだしたまへり
- 七 龍よ、すべての淵よ、地よりエホバをほめたゝへよ

- 八 火よ、霰よ、雪よ、霧よ、みことばにしたがふ狂風よ
- 九 もろくの山、もろくのをか實をむすぶ樹、すべての香柏よ
- 一〇 獣もろくの牲畜、はふもの翼ある鳥よ
- 一一 地の王たち、もろくのたみ地の諸侯よ、地のもろくの審士よ
- 一二 少きをのこ、若きをみな、老たる人、おさなきものよ
- 一三 みなエホバの聖名をほめたゝふべし、その聖名はたかくして類なくその榮光は地よりも天よりも上にあればなり
- 一四 エホバはその民のために一の角をあげたまへり、こはそのもろくの聖徒のほまれ、エホバにちかき民なるイスラエルの子輩のほまれなり、エホバをほめたまへよ

註釋

一節 もろくの天より 單に天使のみをいふにあらざして、日も月も凡ての天軀に向つて言へるなり。

二節 萬軍 上の天使と並行にして反覆したるなり。

四節 天の天 最高級にして、希伯來の常套の筆すさびなり、最高の天をいふ、哥後十二〇二、申十〇十四、王上八〇廿七。○天の上なる水 創一〇七の如し、普通の雲をいふ。

七節 龍 創一〇廿一に巨魚の事見ゆるが如く、階級の底に在る物として先づ之れに及びぬ。

八節 火 十八〇十二 光輝とあり。○霧 むしろ煙なり、以つて火に對す。

十一、二節 凡ての物の冕冠の如く終りに人のことを言へり。

十三節 五節の聖名をほめたふべきことを反覆せり、而して其の理由として、神の聖名の貴きことをいへり。

十四節 角 力の徽號なり、詩七十五〇五、同十を見るべし。○エホバにちかき民 申四〇七、利十〇三、聖き民として神に近き也。

教訓

クレイアポアの聖バルナード、其の兄弟ゲラードの死につき、云へることあり、曰く誰か彼が爲せしが如く、予を愛せし者ぞ。彼は血肉に於ては一の兄弟たり、されど信仰に於ては更に遙かなる者なりき。余は爾を喪ひしにあらすして、爾は唯だ余の前より去りしのみなることを神は許

し玉ふなり、如何となれば確實に爾は其の地上の最後の夜に於て、凡て
 の人々の驚きしが如く、卒然清明なる顔容と歡喜に満ちたる聲音を以
 て『エホバをほめたゝへよ、もろくの天よりエホバをほめたゝへよ、
 もろくの高所にてエホバをほめたゝへよ、其の天使よみなエホバを
 ほめたゝへよ、その萬軍よ、みなエホバをほめたゝへよ』と詩を唱ひつゝ、
 共にエホバを讃頌せんことを勧め、其の人々に一致したればなり。其の
 瞬間、噫吾が兄弟よ、當時我等の爲めには暗夜なりしとはいへども、日は
 爾のうへに明け渡りたり、爾に迄の夜は全き光明に満ちたりき。余は彼
 の側に達せし時、恰も彼が『父よ我が靈魂を爾の手に托く』と、基督の語を
 聲高に唱せしを聞きぬ。かくて再び其の語を反覆し、父よ、父よ、と呼びて
 其の語に留りつゝ、余の方へ向き微笑しつゝ、『噫神は人の父たること、如
 何に深き恩恵ぞや、又其の子たることは人のために如何に貴きことぞ

や』をさひび。

第四百十九篇

緒言

性質

パピロンより還りし後の時代の特質を帯び、大喜と熱望の精神、躍如として目前に見るが如し、堅信不拔にして宗教的の熱心に富み、且つ愛國の精神隆々たる者は乃ち人民の故國に歸り來りし其の事實に於て神の愛の實證は全く國民の爲めに用意し、榮光ある將來の質として、唯だ尊敬するの外なき程明白に知るべきことを感得すべき也。第三百十七篇に於けるが如く、始めて其の壓制者の手より遁れ歸りし時、其の感情は極めて劇甚にして、不義を嫌惡し、恐るべき復讐の目的は、速かに世界の諸國民を征服し、宇宙的王國を建設するの希望に變せり。今説く所亦此の希望なり。神の國民の舊時代及び舊士氣は復活せり。神は其の王(一

宇宙的王

節にして國民は口には讚美を唱し、手には劍を揮て戦争に臨むの勇士なりき。抑も小國にして而かも四面強敵の間に介立すれば、則ち今や兇暴の如く見ゆる精神、復讐的の如き想念も、實は自然の傾向なるのみならず、亦必要なりしなり。舊約時代を觀察せんには、此の點に留心するを要す。されば六節乃至九節の言の如きは、今や基督の教會に於て同一なる精神の發表を要せざるなり。

デーリツチユ

デーリツチユ曰く、言葉の精神的變性なくして、此の如き祈禱を用ゐ得べしとする夢想は、乃ち之をして教會が嘗て批難せし、最大罪惡の或るものに向つての表號たらしむるものなり。カスパル、ユシピアスは墨を以てせず、血を以て書けりと名づけられたる、其の著「神聖なる戦争の相圖の喇叭」に於て、天主教國の諸王を、三十年戦争(一千六百十八年より四十八年に亘りし、長き戦争にて日耳曼其の中心となり、全歐洲の大争亂

を惹き起して、有名なる北方の獅子アドルフス、グスターフス王が新教徒を助け勝利の後遂に戦没せしどきのことなり。煽動教唆せしは、此の詩興つて大に力ありたりといへり。又新教社會に於てトマス、ミエツエルが農民の戦争に於ける氣餒を煽動せしも、亦本篇に因りしなり。吾人は彼此の例證によりて、此の如き詩篇を解釋せんには、教會は使徒が「我儕が戦ひの器は肉に屬する者にあらず」(哥後十〇四)と言へるを忘却せしを觀るなり。教會は嘗て永くの間、其の外に進歩せし舊約の土臺乃ちユダヤ人すら自ら敢て保守せんとは企てざる土臺に再び墮落せり、蓋は彼等は基督教に於て夜明けとなり、又復讐を好む精神を破滅する所の光の感化より、全く自己を呼び反すこと能はざればなり。エホバの民として同時に聖き戦争をなすべく、召喚せられし舊約の教會は此の詩の如き意味に於て、是にまで約束せられたる宇宙的勝利と、王國と

の希望を説明すべき權を有せり。然れどもエルサレムすでに陥没し、舊約禮拜の座もすでに倒れし後は、教會の國民的情態も、亦永久共に破片となり了んぬ。基督の教會は諸國民の間に、又其の外に建設せられたり。然れども教會は國民にあらず、又一國民は教會にあらざる也。故にクリスチアンは本篇の文字を、新約の精神に變性せざるべからざるなり。

一 エホバをほめたへ、エホバに對ひてあたらしき歌をうたへ、聖徒のつどひにてエホバの頌美をうたへ

二 イスラエルはあのを造りたまひしものをよろこび、シオンの子輩はあのが王のゆゑによりて樂しむべし

三 かれらをどりつゝ、其の聖名をほめたへ、琴鼓にてエホバをほめうたふべし

四 エホバはあのが民をよろこび救にて柔和なる者を美しくしたまへ

ばなり

五 聖徒は榮光の故によりてよろこび、其の寢床にてよろこび歌ふべし

六 その口に神をほむる歌あり、その手にもろはの劔あり

七 こはもろくの國に仇をかへし、もろくの民をつみなひ

八 かれらの王たちを鏈にてかれらの貴人をくろがねの械にていまし

め

九 録したる審判をかれらに行ふべきためなり、斯るほまれは其のもろ

くの聖徒にあり、エホバをほめたへよ

註釋

一節 あたらしき歌 新紀元の新希望及び新歡喜國民の新振興新生

命に爆裂したる教會の新元氣等を説明する所の新しき歌なり。○聖徒 五節及び九節に反覆せり、蓋しエホバを讚美するは聖徒に適はし

きことなればなり。

二節 ちのが王 イスラエルは大王ダビデの位に坐すべき王者を有

せざるに方り、神は彼等の王として要求せられ玉へり、斯る王は其國民

を外國人の權下に放任し去る者にあらず、必ず各の頸より其の械を取

り去り玉ふべきなり。

四節 ちのが民をよろこび 賽五十四〇七八を參照すべし。○美し

くしたまへばなり 『灰にかへ冠をたまひて、シオンの中になしむ者

にあたへ、悲哀にかへて歡喜のあぶらと與へ、うれひの心にかへて讚美

の衣をあたへしめたまふなり、かれらは義の樹、エホバの植たまふもの、

其の榮光をあらはす者と稱へられん』賽六十一章三、又同五十五〇五六

十〇七、九を看るべし。

六節 國民古代の武士風復活し來りしことなり。彼等は一方には神を讚美しつゝ、他方にては敵を防禦せしなり。彼等はマホメットが此のコーラン(回教の聖書)を受けよ、然らば此の劍を受けよ、と人に迫りしが如きにはあらざりき。尼四〇十七の如き例を見るべし。

九節 録したる審判 律法に録されたる審判を意味するものにて、先づ(一)には義の復讐の凡ての將來の行動の摸型として、カナン人を滅ぼすこと、(二)には或は申三十二〇四十二〇四十三に記するが如き審判是れなりと云ふ者あり。賽四十五〇十四、結廿五〇十四、三十八〇、三十九〇、亞九〇。然れどもカナン人の剪滅は摸型的の例證として論ず可からず、蓋は猶太人は他國民を滅ぼすがためにとて遣はされし者にあらず、又茲に今斯ることは更に暗示せられず、或は録したるといふによりて、之を

律法に前記せることなりと解せんか。されど申三十二〇四十二〇四十四の暗示あらず、蓋はイスラエルの敵に復讐することは、是等の引用する所に於て命ぜられたるにあらずして、之を實行する者は乃ち神御自身なり。故に他の者は之を解して、自家の利己、および感情に反對して、聖書に録されたるが如き聖意と一致する者の義なりとす。カルヴァインも亦此の説に左袒す。然れども最良なりと思はるゝ説は、定められたる審判即ち永久不變の性質を示すものとして、神自らによりて録されたる者と解することなり。乃ち賽六十五〇六に曰く、視よ此の事わが前にあるされたり、我黙さずして報いかへすべし、必ずかれらの懷中に報いかへすべし、と。〇斯るほまれ 前節の如く、世界の服従することなり。然れども恐らくは之を神に歸して『彼は凡ての者に榮光なり』とする方可ならん。詳言せば(一)彼の榮光と威嚴とは其の民の中に反射せらるゝなり。

二百八十四
(二)彼は彼等の榮光の創造者及び本原なり(三)彼は彼等の讚美の榮光ある目的なり。

教訓

族に諭すの歌

久方の天の戸ひらき、高千穂の岳にありし、すめろぎの神の御代より、はじ弓を手に、ぎり持たし、まかご箭を、手ばさみそへて、大久米のますらたけを、茂さきにたて、ゆぎどり負せ、山河を、岩根さくみて、ふりとほり、國まぎしつゝ、千早振神を、事むけ、まつろはぬ、人をも和し、きよめ、つかへまつりて、秋津洲……

劔太刀いよゝどぐべし古へ從

さやけくおひて來にし其の名ぞ、

武士道

是れ其ち大伴家持が族にさとせしものにして、我が神州武士道の代表的摸型にあらざや、百鍊鍛へ來りし腰間の秋水は、彼等武士が生命にして、一度君の馬前に立ちしからには、斃して止むか、將又斃れて止むかの外、あらざるなり。大和武士が、意氣軒昂氣を以て起ち己を以て君主の命令に全任し、進退生死唯命是れ從ひ、毫末も其の間に私意を挿まざりしは、則ち如何に人間の花なりしぞ。又

ものゝふの臣のをとこは、大君の任のまに、くきくといふものぞ。

と歌へるも、決して畜金村其人のみの私言にあらざして、實に古代武士等が、腸を代表せしに外ならざりしなり。

山ゆかば、草むす屍、海ゆかば、水づく屍、大君の邊にこそ死なめと歌ひしも、亦然り。

神聖なる
武士道

世界列國

戦
アクリスチ
アの義

今や希伯來詩人が「其の口に神をほむる歌あり、その手に兩刃の劔あり」と歌ひしも亦忠義一片の聖き武士道を代表せしものに外ならざるなり。然りと雖も神の僕が歌へる武士道は世の所謂武士道の如き卑淺なるものにはあらずるなり、彼は朽つべき王國を建設せんとし、此は永遠なる王國を建設せんとす。彼は其の劔を以て、人を屠らんとし、此は其の劔を以て、民を濟はんとす。一死身を以て命に殉せんとするは相肖たりと雖も、其の理想の高卑は天壤も畜ならざるものなり。

今や世界列國互に相睥睨し、相猜忌し、専ら堅甲利兵の術を講じて、以て敵の虚に乗せんとす。彼等は乃ち螻の相互に吞噬せんとするに異ならず。然りと雖も吾人基督に臣事するものは、須らく大能の上帝を讃頌しつゝ、正義仁愛の劔をとつて以て平和の義戦をなし、天の理、人の道を炳然たらしめざるべからざるなり。而して期する所は王の玉圭の主たる

基督を頭にいたし、ける宇宙的王國を建設せざるべからざるなり。然るに動もすれば則ち一身の利達窮通に營々として勞役し、此の大義名分を忽せにせんとするは抑も何の心ぞ。是等は乃ち世の所謂武士道にすら猶ほ且つ遠きものたり。安んぞよく神の武士道を完うし得んや。請ふらくは、吾人をして日々平和の義戦をなさしめよ。其の寢床に入りて而して後にも彼所にて喜びうたふものたらしめよ。

基督曰く、日々其の十字架を負ふて、我に従はざる者は乃ち我にかなはざるものなりと。

希伯來詩心の緒琴(下卷)終

明治廿九年七月廿二日印刷
全 年七月廿五日發行

著作者

下谷區御徒士町三丁目六十一番地
湯谷 磋一郎

發行者

京橋區銀座四丁目二番地寄留
清水 俊藏

印刷者

京橋區西紺屋町廿六七番地
高田 乙三

發行所

京橋區銀座四丁目二番地
教文 館

印刷所

京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 秀英 舍

